
なのはに恋愛要素があったら？

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはに恋愛要素があつたら？

【Nコード】

N9032U

【作者名】

MRZ

【あらすじ】

ユーノ・スクライアがある日受けた一通のメール。それがそもそも始まりだった。それから少しずつ変化を始めるユーノとなのは達の関係。さて、彼はどうするのか？

Arcadiaで投稿しているものです。

フェイトが電気ネズミになったらしい(前書き)

キャラ視点は初めてですので、その練習も兼ねています。未熟ですが、ご理解頂けると幸いです。

フェイトが電気ネズミになったらしい

その日、仕事を終えた僕の携帯に一通のメールが届いていた。

「誰だろ？」

珍しい訳じゃないが、それでも時間を考えるとあまりメールが届く時間ではなかった。時刻は深夜一時半。今日も徹夜を覚悟した資料請求が、予想以上に早く片付いたのだ。そのため、僕は五日ぶりに自宅へ帰ろうと意気揚々としていたのだが……

「フェイト？ しかも……ついさっきじゃないか」

差出人は幼馴染の一人であるフェイト・T・ハラオウンだった。金髪の美人で執務官。しかも、ナイスバディで性格はやや天然という多くの男性が彼女にしたいと思う女性だったりする。

一部には同性愛者との噂を流されているが、フェイトがノーマルなのは僕が一番良く知ってる。何度それ関係の悩みや愚痴を聞いた事だろう。その度に励まし、慰めたのだから。

「用件は……僕にしか相談出来ない事がある、か」

しかも今すぐにとある。フェイトは基本人に頼み事をする時、あまり押し付けたりはしない。それが、今すぐと書くという事は只事じゃない。そう判断し、僕は帰宅を諦めて一路フェイトの家まで向かう。

少し前までフェイトはなのはやヴィヴィオと一緒に住んでいたのだが、最近一人暮らしを始めた。何でもクロノがさすがに口を出したらしい。親友だから寮のルームシェアまでは理解出来るが、家で

同居するのは違つたろう。そう告げたのだ。その裏には、フェイトとなのはの関係を勘繰る噂を断ち切ろうと思う義兄心があるのは、僕にも分かる。

それをフェイトも感じ取つたのだらう。なのはとヴィヴィオに惜しまれつつ、引越したのだ……近所のマンションに。それも、歩いて五分ぐらいの位置関係。これにはもうクロノも何も言えなかった。

フェイトは、言われた通り引越したよ、と満面の笑みで告げたそう。ちなみに、引越してもなのはの家へは足繁く通っていて、周囲からは通い妻ならぬ通い女と呼ばれているとかいないとか。

あ、気付けばもうフェイトのマンションが見えてきてるや。実は、今ちよつとした違法行為をしていたりする。そう、無許可での飛行魔法使用。本当はいけないんだけど、フェイトのためだ。後で僕が謝罪して違反料を払って、始末書書けば済む事だし。

「えつと……フェイトの部屋は……」

フェイトの部屋番号を入力し、返事を待つ。まずはマンションの中へ入れてもらわないとね。だけど、何かおかしい。いつもならすぐにフェイトが出て、あっさり開けてくれるのに、今日は一向にモニターに顔が映らない。

それを不思議に思っていると、静かに玄関の扉が開いていく。どうもフェイトが開けてくれたみたいだけど……何でモニターに顔を出してくれなかったんだろ？

「まあ、行けば分かるか」

自分を納得させて、エレベーターに乗りフェイトの住む階を目指

す。フェイトはマンションの最上階から数えて四階下に住んでいる。本当は最上階が良かったらしいのだが、非常時に階段を下りるのが大変だと思って少し下げたらしい。

それを聞いて、僕もなのはも微妙な顔をしたのは言うまでもない。ただ、ヴィヴィオはそれに深く頷いていたから賛同出来たのだろう。やはり、あの子はなのはとフェイトの子だよ。

そんな事を思い出している内に、エレベーターは止まり、フェイトの住む階を示していた。僕は少し急いでフェイトの部屋を目指す。そして、インターホンを押し、待つ数秒で静かにドアが開いた。そこにいるのは、優しい笑みを浮かべるフェイト。ではなく非常に困った表情の黄色いネズミのような格好をしたフェイトだった……

「……成程、押収したロストログアだね」

フェイトが言うには、つい先日押収した違法ロストログアを保管していたケースを、明日引き渡すために色々と点検していたらすっかり落としてしまい、鍵が開いていたために中身が暴走。

結果、今の姿になってしまったとか。それでも助けと呼ぼうとしたのだが、なのはは長期の教導のために無理。はやては捜査官として別世界に主張。守護騎士達もそれぞれに忙しく、スバルはレスキューで疲れているだろうから却下。ティアナは相も変わらず凶悪事件のため忙しい。

エリオやキャロには頼れない。そんな風に色々考えて、駄目元で僕にメールを送ったらしい。無限書庫は年中無休フル稼働。故に休みなど早々取れるはずもないだろうし、取れてもそんな都合良くは

無理。そう考えたときフェイトは言った。

でも、実はなのはと同じで真つ先に浮かんだと聞いて、少しだけ嬉しかったりする。ロストログアの知識なら自分の知っている中で一番信頼出来るから。そんな風に言われてやる気にならない男はいない。いないのだが……

「ピカ。ピカピカ、ピカッチュウ……」

【そうなんだよ。念話を使う事は出来るんだけど、それ以外が何も出来なくて……】

現状のフェイトはこれである。しかも、念話を使おうとするとどうしても声が出てしまうらしい。おかげで電話も使えず、クロノにも恥ずかしくて頼れなかったそうだ。僕は平気なのと聞くと、ユーノなら笑ったりしないだろうからの事。

……うん、それだけでもやる気が沸くよ。でも、実際見て思うのは……

「……フェイト、それ妙に似合ってるね」

「ピ、ピッカ！ ピカピカチュウ！」

【も、もう！ 何言ってるの、ユーノ！】

僕の言った事に軽く怒ったのか、フェイトの体から電撃が発生した。うわ……これ、ちょっと言動に気をつけないと黒コゲにされるかも……

「ゴメン。でも、可愛いなって思ってたさ」

「ピ、ピカチユ？」

【ほ、ホント？】

「うん。本当なら綺麗って言われる方が嬉しいんだろうけど、可愛
いって方がしっくりくるよ」

偽らざる本音だ。フェイトの顔や体を覆っている黄色の服とでも
言えばいいのだろうか。それは、少しファンシーな印象がある。そ
れを大人のフェイトが着ているというのは、どことなく違和感もあ
るけど似合わないって訳じゃない。

でも……何だろう。何かいかがわしいお店とかで同じような格好
とかしてたら、完全に問題があるとは思う。少なくとも、これを着
て外は出歩いて欲しくはないかな。何せ、体のライン結構出てるし

……

「ピカ？」

【ユーノ？】

僕が黙ってフェイトを観察するものだから、フェイトがそれに不
思議そうに小首を傾げた。うわ、それ反則ってぐらい可愛いよ。き
つとクロノ辺りが見たら変な葛藤をするぐらいに。

あ、こっちに迫ってくる。不味い不味い！ って、さっきは気付
かなかったけど、歩く度にキュッキュツって音がしてる！？ 見た
目は完全に着ぐるみを着た金髪女性。でも、ちゃんと出る所は出て
るし、女性らしい線はむしろ普段より強調されて……って、違うだ
ろ！

「ちょ、ちょっと待ってフェイト」

「ピカ？」

【どうしたの？】

「えっと……僕は元に戻す方法を考えればいいんだね？」

そう、当初の目的を思い出そう。フェイトを元に戻す方法を見つ
けるんだ。一つは時間で戻る可能性がある。でも、これは確実じゃ
ないし、どれだけ時間が必要かも分からない以上、これは最後の手
段かな。

次は効果を解除する事。でも、これはその現物を調べる必要があ
るし、時間も掛かる。確実ではないが、可能性は高いかな。でも、
フェイトの事を考えるとあまりオススメ出来ない。何せ、明日
つまり今日の朝にはこれを本局に届けるのだから。

見ればフェイトもそれを考えたのか、やや暗い顔をしている。も
し、これで本局に行こうものなら、フェイトの噂は一気に変わる。
同性愛者から一転軽い痴女扱いに。それは絶対させない。これ以上
フェイトの心を苦しめてなるものか。

そう思っていると、何故かフェイトがこちらを見て心なしか頬を
染めている。何か僕の顔についてるのか？ そう思っ
て視線を向けると、フェイトが慌てて視線を逸らした。何だろ？ ま、いいか。

「……とりあえず、そのロストロギアを見てもいい？」

「ピカ〜……」

【どうだよ……】

僕までこうなる事を心配してるんだろう。相変わらず優しいなあ。そう思つて、フェイトへ大丈夫だからと笑顔で告げる。それに、もしそうならフェイトも寂しくないでしょ？ そう軽く笑つて言うと、フェイトがどこか嬉しそうに頷いた。

良かった。やっといつもみたいに笑つてくれた。工作中や考え事をしている時の凛々しい表情も素敵だけど、やっぱりフェイトにはこういう優しい表情が一番似合ってるや。そんな風に思いつつ、僕はフェイトが指し示したケースを手取る。これは……

「……フェイト、これなら大丈夫だ。昔、僕が調べた事があるロストロギアにそっくりだから」

「ピカチュウ？」

【そうなの？】

どこか意外そうな表情のフェイトに、僕は力強く頷いてみせる。それにフェイトは安堵の息を吐いた。実は僕も安堵していた。これは発動させた対象の魔力の質に依じて、その姿を変える変身系のロストロギア。

どうも古代の魔導師はこれを使って自分の魔力変換資質を調べていたらしいのだ。ちなみにこれの解除は簡単。そう、もう一度発動させればいい。そう説明し、フェイトへロストロギアを手渡す。そして、フェイトがそれに自分の魔力を流した瞬間、眩しい光が室内を満たした。

「くっ！」

「ピッカチュウ！」

【あの時と一緒にだ！】

その光が僕らを包む。そして、目を開けた時には、もう黄色い格好のフェイトではなくなっていた。

「……戻った」

自分の格好を見て、どこか不思議そうな表情をするフェイト。それに僕はほっと一息。もし、これで戻らなかつたらどうしようかと思つたのだ。そんな僕にフェイトが視線を向け、喜びを前面に表した笑みを見せた。

それに僕は、心から力になれてよかつたと思つた。その気持ちを込めて、僕も笑顔を返す。すると、フェイトが妙に視線を合わせなくなつた。あれ？ どこか変な顔をしたのかな？ ちゃんと笑つたつもりだつたんだけど……

とにかく、これで用件も片付いた。そう思つた瞬間、忘れていた疲れが一気に押し寄せてきた。あ……これ不味い。このところの疲れが全部出た感じがする。久しぶりに家に帰れると思つて油断したからかな。フェイトが何か言ってるけど、もう何も聞こえないや。

もつ……無理。ごめんね、フェイト。少しだけ……寝かせて……

「うつん……」

寝返りを打つたら、何かが手に当たつた感触がした。何だろう……柔らかいな、これ。つい触り心地が良くて、僕はそれを何度も触つた。

「んっ……ふぁ……やぁ……」

それと同時に聞こえる艶やかな声。あれ……？ でも、どこかで聞き覚えがあるような……？ そこまでぼんやりと考え、僕は眠い目を擦り、体を起こす。そして、周囲を確認して景色がぼやけている事に気付く。ああ、眼鏡を外してるんだ。しかし、外した覚えないんだけどなあ……

そんな事を思い出しながら、僕は枕元にあった眼鏡を手に取り、やっといつものクリアな景色になった事に頷いた。そして、そこが自分の部屋ではない事に気付いた瞬間、眠る前までの事と目覚める前の事がフラッシュバックした。

「まさか……僕がさっき触ったのは……」

恐る恐る視線を先程の手を置いていた位置へ向ける。そこには安らかな寝顔のフェイトがいた。そして、先程の手があった位置。それは言うまでもないフェイトの体のある場所の位置だ。それを認識し、僕は無言でフェイトに何度も謝った。

決して悪気は無かった。出来心だったんだ。なんて事をひたすら心の中で言いながら。そして、自分がいる場所がフェイトのベッドだと気付いた時は色々と後悔した。一つは、自分をフェイトがベッドまで運んでくれただろ？ 事の情けなさ。二つは、無論フェイトの……ねえ、アレを触ってしまった事の申し訳なさ。そして最後は、自分がフェイトに男として見られていない事の空しさだ。

いくら寝入ったとはいえ、年頃の男がいるにも関わらず、一つ屋根の下で寝る事に躊躇いも持たない事は有り得ない。それが意味するのは僕はフェイトから男として見られていないという事だ。いや、別にフェイトとそういう関係になりたいって訳じゃないけど、それでも一応僕にだって男としての自尊心はある。

それを軽く傷付けられたようなものだ。でも、フェイトには悪気はないんだろうし、これはあくまで僕の勝手な感情だ。だから、これをフェイトに言う気もないし、これを理由にフェイトを責める気にもならない。ただ、もつと男らしくならないと駄目だなあと思う。

とりあえず、フェイトを起こさないようにしてっつと……

”お帰りですか？”

「バルディツシュカ。うん。フェイトには、これからは気をつけてって伝えておいて」

”承りました”

相変わらず丁寧だな。そんな風に思いながら、転送魔法陣を展開して自宅へと向かう。最後に眠るフェイトへ一言だけ告げて。

いい夢を。

そんな言葉を残してユーノは去った。それを聞いて、静かにフェイトは目を覚ます。いや、正確には目を開けただろう。何せ、彼女はユーノが眼鏡を掛けた後から起きていたのだから。

ユーノが寝ていた自分に何かしたのは、その反応から察した。でも、それが何なのかまでは分からない。それでも、フェイトはユーノが先程までいた場所を見つめ、悲しげに笑う。そして、小さくだが、はつきりと呟いた。

いい夢見て欲しいなら、まだ居てくれればいいのに……

なのはが一緒に過ごしてくれるらしい

「メール？ 誰だろ？」

時刻は早朝六時。つい先程フェイトの家から自宅について、軽くシャワーを浴びたところだ。バスタオルで髪を拭きながら、メールの送り主を確認する。どこか嫌な予感がするけど、仕方ない。

「……あれ？ フェイトじゃないのか」

実はどこかで、バルディッシュが僕の行動を見てたんじゃないかとヒヤヒヤしてたんだよね。フェイトが僕のした事を聞いて、呼び出しメールを送ってきたんじゃないのかって。

でも、違った。送ってきたのはなのは。どうもフェイトからの連絡に気付かず、つい先程メールを確認したらしい。それでどうして僕に、と思ったんだけど、どうも文面にロストログアのせいであったようだ。それで僕に何か情報をもって考えたんだろう。

「それならもう僕が解決したよっと……」

返信する。これで安心するだろう。長期の教導だから、きつと行きたくても行けないんだろうし、心配だったんだろう。フェイトに対するなのはの気遣いは、正直少し度を過ぎてる部分がある。でも、仕方ない。初めて出来た魔法絡みの親友なんだから。

ん？ またメールだ。何々……さっすがユーノ君！ 相変わらず頼りになるね！ ……あれ、どうしたんだろ？ これだけで僕は涙が出るんだけど。六課の頃はなのは達が大変なのに手助け出来なかったし、撃墜事件の時だって、僕がそれを知ったのはなのはの無事が確定してからだった。

「……頼りに……してくれてるんだ」

さっきの文章。あれが闇の書事件の時に言われた言葉だって、僕は覚えてる。あの時は、その後が分かり易いだったけど、ね。そっか。あの頃からなのは僕への評価は変わってないんだ。

そう考えたからだな、この涙は。バスタオルで顔を拭く。情けないけど、こういう所があるから僕はまだ男らしくないんだろっな。そんな風に思いながら、僕は何度も顔を拭いた。

落ち着いた時を見計らったように、再びメールが届いた。うん、やっぱりなのはだ。内容は……え？ 教導は今日で終わりなんだ。フェイトは長期だって……もしかして、日程を勘違いしたのか？ フェイトなら有り得る。そう思いながら、僕はその内容に了解と返しておく。二度寝しようと思ったけど、どうやらそれは無理らしい。そう、なのはが久しぶりに一緒に食事でもどう？ なんて誘ってくれたからだ。フェイトを助けた事へのお礼って所がなのらしい。

「さて、着替えるか」

取り様によつてはデートとも言えない事もない。そんな風に考え、僕は一人上機嫌だった。何を食べよう。そんな事まで考えながら……

時刻は午前十時。今日もクラナガンは大賑わい。レールウェイの駅前で待ち合わせ。時間丁度になのが到着。僕はそれを笑って迎える。

「ごめん、ユーノ君。えっと、待った？」

「大丈夫。僕も今来たようなものだから」

「そうなんだ。よかつたあゝ、待たせたのかと思つたよ」

なのはがそう言つて笑う。まさに恋人同士のような会話だ。それに内心小さく喜んで僕がいる。とそこで、なのはの格好に気が付いた。てつきり管理局の制服で来ると思つたのに私服になつてるのは、やっぱり一度帰つたんだらうか？

そう思つてなのはに問いかけると、何故か少し嬉しそうに頷いた。制服だと仕事の気分になりそうだから。そんな風に言つて、なのははやや上目遣いで僕を見る。

「ど、どうかな？ 変じゃない？」

「へ、変じゃないよ！ すごく……似合ってる」

なのはの格好は薄い緑のブラウスに同じ色のスカート。なのはには色合いの選択が妙だけど、でもおかしくはない。色の選択だけは少し気になったから、どうしてその色に選んだら、なのはが急に視線を逸らして、どこか恥ずかしそうに何となくとだけ答えた。

うゝん……なのははって緑が好きだったかな？ 今度はやてにでも聞いてみよう。ここでフェイトに聞かないのは、フェイトにこの手の話題を振ると、それに付随して多くのなのは話をされるから。一度聞いてもう懲りた。恋人の惚気に近いものがあるとはクロノの話。

そんな事を思い出していると、なのはが僕の顔を覗きこむように顔を近づけてきた。近い！ 近いって！

「どうしたの？ ユーノ君。ボ〜っとして」

「な、なのは……顔が近いよ」

「あ〜、ユーノ君照れてる？ 顔赤いよ〜？」

そういうなのはも赤いけどね！ そう思うも、言えるはずもなく。僕に出来たのは、やや早足で歩き出す事だけ。それになのはもついでくる。ただクスクスと笑っているので、少しはやり返さないと気が済まない。

なので、僕は急に立ち止って振り返る。なのははそれに気付かず衝突しそうになるが、何とか止まった。どこか驚くなのはへ、僕はえいままよと思っつてその顔ぎりぎりまで自分の顔を近づける。

見つめ合う僕となのは。互いの顔は真っ赤だ。心臓の鼓動が煩いぐらいだけど、言わないとお返しにならない。

「なのは、顔真っ赤だよ？ 照れてるの？」

よし。これでいい。ただ、なのはは少し赤いぐらいだったけど、僕は茹蛸みたいになってるので敗北したようなものかも。でも、一矢報いた。そう考えて僕はなのはから顔を離す。その時、微かになのはから「あつ……」って聞こえたような気がした。

呆気に取られたんだろうな。僕が離れた事で我に返ったんだと思う。でも、もう僕にはそれを気遣う余裕がない。なので、少し歩いてなのはへ告げる。早くしないと朝食兼昼食が完全な昼食になるよつて。それになのはが苦笑しながら動き出す。

「も〜、それでもいいよ。と言いますか、私は最初からそのつもり

です」

「そうなの？ 僕、朝食べてないんだけど」

「駄目だよ、ちゃんと食べないと。あ、ならどこかで軽く食べる？」

「えっと、それじゃこの時間の目的が終わる気が……」

「にゃ?! ち、違うよ! 軽くだから食事にはカウントされませ
ん! 食事って言うのは、ちゃんとしつかり食べるものを指すん
です」

僕の指摘に何故か慌てて説明をするなのは。何でそんなに必死そ
うなんだ? とりあえず、どうもなのはが言うには、食事とは軽食
を含まないそうだ。なので、僕は近くの喫茶店に入る事にした。

店に入ると、なのはの目が少し変わる。軽く店内を見渡して、中
々の雰囲気だねと呟いた。そういえば、なのはの家は喫茶店を経営
してたっけ。同業者の娘としては、やはり気になるんだろうか?

でも、その後はいつもの雰囲気に戻ったので、どうも無意識の行
動みたいだ。でも、何となしに気になったので聞いてみる。

「なのはは局員を辞めたら、海鳴に帰るの?」

そう、あのゆりかごでの戦いでやった無茶。それがなのはの体を
深く傷付けたのは、僕も知ってる。だからこそ、余計にあの時は無
力感を感じたんだ。せめて内部構造をつて、それぐらいしか僕には
出来なかったのも関係してる。

全てが終わって、やっと休みを取ってなのはに会いに行った時、
それを聞かされてしばらく言葉が無かった。僕がなのはを魔法に巻

き込んだ。それをなのはは気にしてないって言うし、むしろ感謝してるとさえ言ってくれる。でも……でもね、なのは。僕は、未だに悔やむ時があるんだ。

あのジュエルシードを巡って起きた事件。最初から僕がしっかりと危険性を管理局に伝えて、嚴重に輸送してもらえば。そんな風に考えた事は一度や二度じゃない。フェイトやはやてとの出会いも魔法が取り持った部分はある。それでも、それでも僕はこう思わずにはいられないんだ。

僕と出会わなければ、なのははもつと安全で幸せに暮らせたんじゃないかって。確かに今考えれば、なのはがいたから好転した事は沢山ある。それでも、なのはは自分をボロボロにする事で手に入れたものが多い。

「そうだなあ……ユーノ君はどうして欲しい？」

「えっ？」

そんな事を考えながらなのはの答えを待つ。すると、なのはは何故か僕に問いかけてきた。

「ユーノ君は……私にミッドに居て欲しいかな？」

なのはは真剣な眼差しで僕を見る。これは冗談とかで済ませる雰囲気じゃない。なら、僕の偽らざる気持ちを言わないと……

「僕はね……なのはが幸せならそれでいい」

「え……っ？」

「なのはがどこかで生きてて、笑顔で暮らしてくればそれでいい。居る場所なんてどこでもいい。ただ、幸せに過ごしてくれるだけで……」

僕はそう言い切って、なのはに笑顔を向けてこう締め括る。例えそれが僕の知らない場所でもね、って。そう言った瞬間、なのはが僕の目を見つめてこう返してきたんだ。自分は僕の知らない場所になんて行く気はないって。

それが何か嬉しくて、僕は心から笑みを返す事が出来た。なのはは相変わらずどこか男らしい気がする。そんな風に軽い冗談交じりに言えるぐらいに。それになのはも少し拗ねたように表情を変える。そこへきつと様子を窺っていたんだらう店員がやってきた。

そして、注文を聞かれ僕となのはは揃ってアイステイーを頼む。それと僕は厚切りトーストも加えて。それを店員は再確認し、一礼して立ち去った。するとなのはがトーストだけでいいのと聞いてきた。

この後ちゃんと食べるんだから、軽めでいいだろう。そう思っただけの注文だったんだけど、なのははそれを聞いてお昼にするつもりだからもう一時間は食べられないとからかうように告げる。えっ、聞いてないよ。

「じゃ……この後どうするの?」

「それは……どうしよっか?」

質問に質問で返すのはどうかと思うよ、なのは。でも、その表情が可愛かったからよしとする。……僕って、やっぱり単純だ。そこから二人でこれからの事を話す。時間に関しても、ヴィヴィオは学校に行っているから問題ない。でも、なのはは帰りに何か買って帰

ると言った。

それに付随するように、僕もヴィヴィオに是非読んでもらいたい本があった事を思い出し、それを渡そうと決めた。ただ、それは家にあるので一旦帰らないといけない。そう告げると、なのはが少し考えて僕の家に行こうとなった。

「よく考えたら、別に外で食べなくてもいいんだしね。私が腕振るっちゃうよ」

「なのはが……僕の家で？」

嘘じゃないよね？ 死んでもいいかな？ なのはが僕の家で料理を作ってくれるって。しかも、僕だけのために。今日は本当にいい日だ。そう思っていると、店員が注文の品を運んできた。一先ずこれを食べて、その後食材の買い物をしてから僕の家に行く事で話がまとまった。

正直、僕はその時食べたトーストの味を覚えていない。なのはが僕の家で料理を作ってくれる。その一点だけで、既に色々なものがブラスター3してたんだから……

僕の家は、クラナガンの中心部から離れた住宅街にある。一軒家にしてはよかつたんだけど、一人暮らしでそれはないと思って、結局独身局員がよく辿るように、それなりのマンションになった。アパートもあつたのだが、そちらは色々と不便な事も多かつたので止めた。

今時風呂無しトイレ共同ってどう？ 更に、そこは男性専用らしく女人禁制とまであつた。それが僕の止めた理由。ヴィヴィオは結構僕から本を借りたり、また話を聞きに来る。それが駄目となるの

はヴィヴィオに悪い。

……ま、家賃が給料の二十分の一だったのは確かに魅力ではあつたけど。無限書庫の司書の中にもそこで暮らしてる人がいる。話を聞くと、結構住人同士の仲はいいらしく、快適だと言っていた。醤油の貸し借りとか、多く作った時はおすそ分けされるとか、聞いていると暖かさそうでいいなあとは思っただけだね。

そんな事を思い出している間に、我が家に到着。なのはは久しぶりだねと言つて笑っている。最後になのはが僕の家に来たのは……六課解散直前か。もうかなり前の事だ。

「さ、じゃあ早速作り始めるから」

「うん。僕に何か手伝える事は？」

「うーん……じゃあ……」

なのははどこか楽しそうに指示を出す。僕もそれにつられて笑顔になる。なのはが冷蔵庫の中身を見て、もつとちゃんと自炊しないと駄目だと注意したり、僕の手際が意外と良かったのか感心するよくな反応を見せたりと、恋人みたいな雰囲気を感じさせた。

僕もなのはの料理の腕前を見て、ちゃんとお母さんしてるんだと告げた。それになのはは、出来れば先にお嫁さんをしたかったと苦笑混じりに告げる。だから、僕はそれに乗っかるように言っただ。じゃ、僕のお嫁においでって。でも、それを言った途端、なのはが動きを止めた。

しかも、一瞬とかじゃなく、完全停止。あれ？ なのはが冗談めかして言ったのに合わせて、僕も言っただつもりなんだけど……？

「なのは？ どうしたの？」

「……ふえ?! う、うん! 大丈夫だよっ! い、いつでも……お嫁に行くからね」

駄目だ。まだ混乱してる。なのはの反応がいつもと違う。目を潤ませて僕の方を見るけど、きつと何か勘違いしてる。いや、そりゃなのはがお嫁さんに来てくれるなら、僕は歓迎どころか、感激して無限書庫の仕事を一晩で無くせるぐらいの力を発揮出来るさ。

でも、なのはの相手に僕はなれない。いや、資格がない。なのはが魔法に出会って好きになった空。そこを飛び続ける事さえ、僕は支えてあげられなかった。そんな僕には、なのはを幸せにするだけの力がないんだから。

「なのは、今は……」

冗談だよって、そう言おうとした瞬間、鍋が噴いた。それになのはの意識が向いて、僕の言葉は言えずじまい。結局、そのまま僕も手伝いとかをしている内に、それを訂正するのを忘れてしまった。その後、僕はなのはの手料理を味わい、感謝を告げてなのはを苦笑させた。

こんな事でよければ、また作りに来るとさえ言ってもらえ、僕は心からなのはの優しさに感謝した。そして帰るなのはを送って行くと言ったのだけど、ヴィヴィオへのお土産を選ぶし、少しフェイトも気になるからと断られた。

こうして、なのはは帰って行った。僕はその後姿が見えなくなるまで見送った。途中なのはも一度振り返って手を振ってくれたのが、僕には無性に嬉しかった……

「……あ、フェイトちゃん？ ……え？ 違うよ。今日で教導はお
終い」

ユーノの家を出て少し歩いて、なのはは携帯を取り出した。そして、フェイトの番号をコールする。すると、三コールもしないでフェイトが出た。それに楽しそうに声を出すなのは。

電話越しに疑問符を浮かべているだろう親友へ、なのはは苦笑しながら告げる。大体の事をユーノから聞き、メールの案件とその顛末を知った今、なのははフェイトの天然さに少し不安を覚えていた。だが、なのはが外にいる事を音から察したのだろう。フェイトが現在位置を訪ねてきた。

「今？ 今はね……」

そこで一度なのはは振り返る。まだユーノはそこにいた。何となく嬉しくなったのか、手を振るなのは。それにユーノも振り返し、それになのはの笑みが深くなる。その表情のまま、なのはは何故かこう言ってしまった。

素直にユーノの家の近くと言えば良かった。だが、何となく言いなくなかった。二人だけの秘密にしたい。そう思ったから。

ヴィヴィオのおやつを用意しようと思って、街をぶらぶらしてるところだよ。

それにフェイトは納得し、自分が今度の休みにケーキでも買って行くと告げた。それになのはもそう伝えておくと返し、電話を切る。何故か少しだけ胸の奥が痛んだ気がした。でも、それでもいいとなのはは思った。

はやてが色々と世話を焼いてくれるらしい

ここは本局内にある休憩室。そこで僕はある女性を待っていた。そろそろ時間になるけど……あ、来た来た。

「ごめんな、ユーノ君。ちょう遅れてしもた」

「ううん、時間内だよはやて。こっちこそ急に呼び出す形になってゴメン」

慌しく現れたのは、関西訛りのショートヘアが似合う美人というよりは愛らしいがしっくりくる女性。そう、僕の幼馴染の一人である八神はやてだ。今日僕がはやてと待ち合わせしたのは、他でもないなのはの事を相談するためだ。

あの時着ていた服の色。その理由が知りたかった。はやてにその話をしたら、詳しくと言われたため、こうして直接会って話をする事になったんだけど……

「ええよええよ。わたしが直接聞きたい言ったんやし」

「でも、わざわざ休みに呼び出す形になったしさ」

そう、はやては貴重な休みを使って、僕のために本局まで来てくれたんだ。本当なら、家族達と過ごしたいだろうに。そう思って、僕がどこか申し訳なさそうに言うと、はやてがやや苦笑してみた。自分が好きでした事だから気にしないで欲しい。そうはやては告げて、僕に悲しそうな視線を向けた。だからそんな顔をされると逆に気分が悪くなるからと。それを聞いて、僕は謝った。下手に気を遣い過ぎるのは良くない。はやてはそういう事を一番嫌う子だった。

「ゴメン。そうだね。もう気にしない事にする」

「うん、それでええ。で、ユーノ君。早速例の話を……」

僕の言葉に嬉しそうに笑みを返すはやて。やっぱりはやても可愛
いよなあ。これで彼氏がいないんだから、世の中って本当に不思議
だ。でも、そんな感想も最初だけ。途中から芸能リポーター並の表
情で僕に迫るのは、あまり女性らしくない。

はやて、君に彼氏が出来ない理由が何となく分かった気がするよ
……ま、とにかく僕はあの日見たなのは服装とその答え、そして
反応を詳しくはやてに伝える。それを聞いて、はやてがどんどん妙
な表情になっていくのに気付かずに……

話終えて、はやては少し呆れたようにため息を吐くと、僕へこう
問いかけた。

「な、なのはちゃんの服の色って、淡い緑やったんよな？」

「うん。そうだよ」

「……それ、誰かさんのイメージちゃう？」

「誰かさん？ ……一体」

誰？ そう言おうとして、僕は気付いた。淡い緑。それは僕のイ
メージカラーだ。昔着ていた民族衣装も、基調となっているのはど
ことなくそんな色だし、魔力光もそれに近い。そうか、だからなの

はが僕から視線を逸らしたんだ。

僕がそれに気付いたのを察したんだろう。はやてはもう一度ため息を吐いて、僕へ告げる。分かり易いアピールや。その一言に込められた鈍感というメッセージは、僕にも伝わった。うん、確かにこう考えると分かり易い。

でも、はやてはそう言った後、何故か僕の方をじっと見つめた。それに僕は戸惑いながら、はやての方を見つめ返すしか出来ない。交差する視線。そんな事をどれぐらいやっていただろう。はやてが急に顔を逸らして、何かを呟いていた。

ん？ 今、やっぱり無理とか聞こえたような？ そう考えていると、はやてが僕に相談があると持ちかけてきた。それに僕は躊躇う事無く乗るよと答えた。だって、今さっきまで僕の相談事に乗ってもらったんだし、はやては僕からしても大切な人だ。力になれるならなりたい。そう思った。

でも、その旨を伝えたら何故かはやてがいつも以上に嬉しそうだった。いや、嬉しく思ってくれるのはいいんだけど、どうしてそれを何度も言わせるの？ 特に大切な人の部分。言われて嬉しかったからって、はやてはそう言ってたけど……何だろ？ これ、僕は凄まじく危ない橋を渡ったんじゃないかな……？

「……で、相談なんやけどな」

「うん」

場所を本局から僕の家に移しての、相談タイム。はやてがあまり人に聞かれたくないって言うからね、僕の家にしようかって提案し

たんだ。そうしたら、はやてがすぐにそうして欲しいって返してき
たんだ。

だから、こうして二人きりで話してるんだけど……何気にはやて
と二人きりって初めてだな。なのはやフェイトは時々あったけど、
はやては中々時間や接点がなかったせいかな、会う時は大抵誰かがい
たなあ。

そんな事を考えながら、はやての言葉を待つ僕。すると、はやて
は顔をやや赤めてこう告げた。

「あのなら……胸、大きくするマッサージして欲しいんよ」

ああ、何だそんな……え？

「はやて……今何て？」

「やから……胸を大きくするマッサージして欲しいんよ」

うん。聞き間違いじゃない。はやてはいつもと違って、心なしか
小さく見える。胸を大きくって、はやてが若干それを気にしているの
は気付いてたけど、それをよりにもよって僕に頼む？ マッサージ
してくれて……せめて同性のなのはやフェイトにしなよ。

そう思っってはやてに言ったんだけど、それにはやてはこう返した。
聞いた話だと、異性の方が効果が高いらしいのだと。でもなあ……
胸というか乳房は脂肪だから、マッサージなんか下手にしたら余計
小さくなっちゃうと思うんだけど……

そんな事を考えていると、はやてがその事を知っているのだろう。
僕へこう言った。確かに信じられないかもしれないが、僕に頼むの
は乳腺を刺激するものだから大丈夫だと。まあ、確かにそれなら分

からないでもない。

乳腺が刺激される事で、妊婦さんは胸が大きくなるんだからね。
ん？ はて？ 確かそれは胸を大きくするものじゃなくて、乳の出
をよくするものじゃなかったかな？ それに、それだったら相手は
異性である必要がないんじゃない？

「はやて、それなら別に……」

「ユーノ君、なのはちゃんやフェイトちゃんの胸見てどう思う？」

僕の言葉を遮るように、はやてはやや焦り気味にそう切り出した。
どう思うって……いや、なのはもフェイトも中々立派な……って違
う！ 無言で僕は自分に突っ込みを入れる。はやてが僕の答えを待
っているから、それにこう答えた。女性的だと思っよって。そう、
そうさ。僕は決してやましい気持ちで見たりは……

「しとらんの？」

お願いですはやてさん。僕の考えを読まないでください。そう思
いつつ、僕はそのはやての言葉に無言で頭を下げる。いや、だって
ね。それは……えっと、すみません。確かに物凄くしました。特
にフェイトに限っては、あの日の事があってから思い出す度に……
ねえ。感触をしっかりと覚えている自分が悲しい。

でも、それって普通だよ？ 決して間違ってないよね？ 成人
男性として健全な反応だと僕は思うんだ！ でも、それをはやてに
言っつもりはないけどね。いや、軽蔑されるとかを懸念してるんじ
ゃない。何故かはやてならそれに同意して、熱く胸について語り出
しそうだったからだ。

ともあれ、僕がそんな風に申し訳なさそうにしているのを見て、

はやては少し寂しそうに語り出した。自分も魅力的に見られたい。局内の人気もなのはやフェイトは高いのに、同期で幼馴染の自分はどこかぱっとしない。

タヌキ娘と陰口を叩かれ、地味だと言われ、最終的に某所では、地味との別名にハイパーがついてしまったらしい。しかも、様付けまでされているようで、はやてはそれに影ながら涙を流したとか。

……いいけど、それを君はどこで知ったの？ しかも、ハイパー地味様って。どうしてだろうね。それを言うなら僕も言いたい事が一杯あるよ。というか、はやてでハイパー地味なら、僕なんか何もないじゃないか。

そうか、僕は話題にする価値もないアウトオブ眼中か。話題のデイスるって奴だね。さしずめ、僕はハイパーデイスか！ ……少しカッコイイと思っただ僕は死んでいい……

「もうな……わたしは嫌や。地味様とか、タヌキとか言われるのはどうしてなのはちゃんやフェイトちゃんもてはやされるのに、わたしだけ扱い酷いん？ な？ わたし、可愛くないかな？」

そう言っただけで軽く涙目のはやて。うん……可愛くない訳ないじゃないか。そんな表情で迫られたら、男なら誰もがそう断言出来るよ。僕はそう心からはやてに告げた。それを聞いて、はやては一瞬呆気に取られたけど、すぐに満面の笑みを返してくれた。

……はっ！ 意識が飛びそうになるぐらい衝撃が凄い。はやて、今なら君はなのはやフェイトにも勝てるよ。少なくとも僕の意識は持っていかれたんだし。

「えっと……自信ついた？」

「うん。おおきにな、ユーノ君。これでわたしは、どんな事にも平

「気平気のへっちゃんやさんや」

「それなら良かった」

「でも、その……もしまた落ち込んだ時は、ユーノ君……わたしを可愛いつて言うてくれる？」

もじもじしながらはやてがそう言ってきた。それに僕は、反射的に当たり前だよって返した。いや、後悔はしないけど、反省はしよう。何故だがちらりと、目の辺りが影で見えなくなつたのはとフエイトの姿が見えたんだ。

しかも、二人揃つて「少し、頭冷やそうか？」って……幻覚だな。うん、そうだ。そうに決まつてる。僕は二人に怒られるような事は何もしてない。むしろ誉められるぐらいだ。二人の親友を励ましたんだからね。

「？ どないした、ユーノ君？」

「う、うん。ちょっとだけ嫌な想像しただけだよ。大丈夫」

「ならええけど……あ、そや」

僕の顔色が悪かつたんだろう。はやては心配そうに僕を見つめて、何かを思いついたのかポンって手を叩いた。あれ？ それでどうして僕の方に顔を近づけてくるんだろう……？

「これは、お礼や」

「お礼つて……」

そう僕が問い質そうとした時には、はやての唇が僕の頬に触れていた。間近で感じるはやての鼓動。女性特有の甘い香り。それを強く感じて、僕は頭が真っ白になった。そんな僕に、頬を朱に込めたはやてがやや恥ずかしがるように視線を向ける。

「どや？ これで嫌な想像も吹っ飛んだやろ」

嫌な想像どころか、色んなものが吹き飛んだよ。でも、理性は飛ばさない。これで飛ぶほどやわな精神してないんだよ、僕は。

「……なら、試してみるか」

嘘です。ギリギリです。だから意気揚々と迫らないでください。というか、僕の思考を読まないで。それと、どうして試すって言った次の瞬間には服に手をかけてるんですか、はやてさん。それはもう試すと言うより試合開始の行為です。

僕の理性がどれだけ頑強だとしても、さすがに無防備な状態のはやてなんかぶら下げられたら、一瞬だって耐える自信はない。でも、それよりもはやてには言う事がある。

「はやて……」

「ん？」

「もっと自分を大事にして。君の体を委ねるのは、心から愛する人だけにすべきだよ」

僕がそう言うと、はやては何故か少し拗ねるような顔をした。その理由が分からず、僕は困惑する一方だ。でも、はやてはそんな僕を見て何か満足したのか嬉しそうに笑った。そして、小さくこっぴどく

いた。

ま、なのはちゃんにちゃんと言わんと卑怯やしな。

一体何を言わないと卑怯なんだ？ それを僕が聞いてもはやては笑うだけで教えてくれない。知りたかったら、少しは女心を勉強するように。そんな風にお姉さんぶってはやては笑った。それがとても可愛くて、僕も思わず笑顔を返す。

その後、はやてが例のマッサージを強要しようとしたから、僕が少しふざけて軽く触っただけど、はやては驚いたものの平然ともっとしっかり触ってくれないと困るって返してきたんだ。

……うん、無理。理性が持たない可能性しか見えない。そう思っ
て、はやてに降参しますって言ったら、意気地無しって言われた。
あれ？ それは何か違うよ、はやて。そこは密かに安堵するところ
じゃないの？

そんな事を言ったら、だから僕は女心が分かってないらしい。そ
んな事から始まるはやてによる女の子講座。いや、勉強になるけど
……何となくそれ全部はやての事だよね。大抵の例えが君にしか思
えないんですけど？

「あ、もうこんな時間だ」

「お、ほんまやね。ギリギリお昼時や」

そんな講座も一段落して、僕は時計へ目をやり、少し意外な表情
をする。それにはやても視線を動かして同じ顔。まさか二時間近く
もはやての講座を聞く事になるとは思わなかった。と言うか、そん
なに話してたんだね。

「そうだね。あゝ、そう考えたらお腹空いてきたかも」

「やね。あ、ならわたしが何か作るわ」

はやてがどこかイキイキした顔でそう告げて、冷蔵庫向かって歩き出す。一瞬悪いから止めようとも思ってたんだけど、はやてがあまりにも楽しそうだったから、つい僕も甘えてしまった。それに、はやての料理は本当に美味しいんだよね。ヴィータ曰くギガウマだから。

はやては冷蔵庫を開け、中を見て軽く感心。結構ちゃんとした物を買って自炊してとるんやね、だって。なのはがそうしないと駄目って言ったし、僕も確かにそうだなって思った事もあって、今の僕は結構足繁く買い物に行っている。週一ぐらいでなのはの料理も食べられるしね。ま、その時は冷蔵庫チエックがあるので、油断が出来ないうつていうのもあるんだけど……

そんな事ははやてに話すと、どこか納得して何かを考え込む。そして、少し真剣な表情になったかと思うと、僕の方へ視線を向けてこんな事を提案してきた。

「な、ユーノ君。あまり料理詳しくないやろ？」

「え？ うん、まあ……」

「そこでや、わたしが今後もちよいちよい来て、簡単に出来て美味しいレシピを教えたい。どう？」

はやての提案は、僕には結構嬉しいものだった。なのはからも少し教えてもらったりするけど、それはあくまでコッ。一から十までとはいかないんだよね。だから、はやての申し出はすごく有難いし

歓迎なんだけど……

「でも、はやてに悪いよ。あまり休みだつてないし、時間も取れないだろうし……」

そうなんだ。はやては捜査官。色々な世界や部署を巡って仕事をしているに近い。そんなタイトなはやての貴重な時間を、僕なんかに割いてもらう訳にはいかないよ。そう思うからこそ、僕はその申し出を断ろうと思った。

でも、はやてはそんな僕へはつきり言った。心配はいらないと。現場の捜査官をするのも、もう少ししたら止めるつもりだから。そう告げただ。それが意味する事を考え、僕は驚いた。だって、それは……

「まさか、また部隊を運営するつもり？」

「ちゃうよ。ま、それも一つの手やな。もっと簡単なお仕事があるやんか」

「……えっと、それって僕の家家政婦とかじゃ痛い！ 痛いよ、はやて！」

言い終わらない内に、はやてが無言で僕の腕を抓った。痛い！ 地味に痛いっ！ おかしいな。僕の……ってところまでは嬉しそうだったのに。家のつて言った辺りで疑問符を浮かべて、家政婦って言った時には笑顔で僕の腕を掴んでいたもんなあ。

はやては不機嫌な表情でぶつぶつと何か言っている。どうしてこう……とか、わたしを家政婦扱いは酷いとか呟いてる。僕は腕を軽く擦りながら、それを聞いて申し訳なく思った。確かに家政婦は言い方がよくなかった。

「ゴメンはやて。でも、ならどんな仕事？」

「……ヒントは永久就職。後は自分で考える事」

うわ、突き放された。永久就職？ そんな職場ってそうそうないと思うんだけど……？ しかも簡単な仕事って言ってるし、僕の知ってる仕事の中で簡単なものをいくつか考えるけど、やっぱり該当するものがない。

あ、そういえば地球じゃ専業主婦がそんな風に例えられていたっけ。でも、家事は大変だし、簡単じゃないもんな。うっん……駄目だ。分からない。はやてに僕の知る中にはないですと言おう。

そう伝えると、はやてはムっつと顔を膨れさせた。あ、それちょっと可愛い。そう言ったら、何故かはやてがどこか照れた。？ どうしたんだろ？

「はやて？」

「もうええわ。ユーノ君がまさかここまで強敵とは思わなかった」

「えっと……よく分からないけどゴメン」

「あはは、ええよ。その方がユーノ君らしいと思う。さ、じゃあご飯作るか」

「あ、僕も手伝うよ」

こうしてはやてと僕の料理教室が始まった。なのはもそうだったけど、はやても僕の手際を見て感心してた。これなら成長が期待出

来るなつて。でもはやて、そこですぐにシヤマルの名前を引き合いに出すのはどうかと思うよ。

聞いたら、本人絶対落ち込むだろうし。でも、はやての言い方も冗談めいてたから、悪意はないだろう。そう思っ僕もそれに乗る。そんな感じで楽しく時間が過ぎていく。小さく僕のお腹が鳴ったのを聞いて、はやてが苦笑しながら味見を頼んだり、出来上がった料理は美味しくて、それを僕が告げるとはやてがとっても嬉しそうに笑ったりと、本当に楽しい時間だった。

後片付けをして、少し談笑してたら、時刻はもう夕方になるうとしてた。さすがにはやてももう帰ると言ったから、僕は送って行くって言ったんだけど、なのは時と一緒に断られる結果に終わった。今日ははやてが休み。なので、夕食を作るつもりだから買い物をして帰ると。そう言われては、僕も無理についていく訳にはいかない。残念だけどって言って諦める事にした。はやてはそれにどこか嬉しそうだったな。苦笑する僕の顔が笑えたんだろうか？

「じゃ、また今度」

「うん。また今度」

互いに手を上げて笑い合う。歩き出すはやて。その背中を見送る僕。心無しか、はやての背中が楽しそうに見えた。きっと久しぶりに家族達と食事を共に出来るからだろうな。そんな風に思いながら、僕ははやてが見えなくなるまでそこにいた。

振り返る事は無かったけど、曲がり角で一瞬だけはやてがこっちを見て手を振ってくれた。それに僕も手を振り返して、この日は終わってたんだ……

ユーノへ手を振り返し、はやては携帯を取り出した。メールにしようとも思ったのか、最初その画面を開いて　それを閉じる。代わりに電話帳を起動させ、なのはの番号を押す。

ややコールが鳴り、なのはが出た。それにはやては謝りを入れる。仕事が終わった直後だったからだ。それになのはは気にしなくていいと返し、用件を尋ねた。それにはやてはやや緊張したような声で告げる。

あのな、わたしユーノ君が好きなんよ。

電話の向こうでなのはが息を呑んだのが分かった。それに構わず、はやては続けた。

譲る気はないし、負けんへんから。

その声はなのはが知るはやてのものだった。だが、どこか今まで聞いた事のないような声。それを感じ取ってなのはも答える。

いいよ。なら、正々堂々勝負だね。

さすがなのはちゃんや。どっちが勝っても恨みつこ無しな。

互いに浮かべるは笑み。それは勝ち誇るものでも、余裕からのものでもない。相手が自分の予想通りの言葉を返してくれた事への喜びだ。そして、どちらからともなくこう言って会話は終わる。

どうなっても、絆は消えないと。

その声だけは、あの頃からよく知る自分達の声だった……

ユーノの覚悟は無駄になつたらしい

いつものように仕事を終えた僕。時刻は……あ、今日は早いや。まだ午前二時だよ。そして、いつものように携帯をと……

「あ、メールが来てる。なのはと……はやてか」

最近この二人からのメール頻度が急激に上がった気がする。いや、理由は僕の料理関係なだけどね。なのはは何を食べたいかの希望や要望。はやては何を使った物がいいかの意見調査。

でも、最近「元気にしてる？」とか「次の休みはいつぐらいに取れそう？」とかが多い。恋人みたいだねって、そう思つて二人にメールを送つたら、見事に返事が同じだった時は驚いたなあ。何せ……

気分は恋人なだけど？

本当になのはもはやても仲が良いよね。示し合わせた訳でもないのに返事が一緒なんだからさ。当然僕はその答えに嬉しく思つてお礼を返した。でも、二人が冗談めいたのに合わせて……

ありがとう。嬉しいよ。

そう送つたんだ。それ以来、何故か二人が会う度に積極的なんだよね。この前なのはなんか腕を組んで歩こうとするし、はやてはご飯を食べさせようとしてきたし。それが僕へのからかいつて分かるから、こつちとしても負けてなるかつて受けて立つてはいるんだけど……正直厳しい戦いだ。

なのはやはやては平気なんだろうけど、僕は本当に二人が彼女み

たいに思えてきて、どうしても耐え切れない。二人の本当の恋人でもないのに、それを気取るなんてね。だから、最近はそのような事があってもやんわりと断ろうと思ってる。

「あ、二人して休みが同じ日に取れるんだ。じゃ、久しぶりに三人で会えるなあ」

メールの内容は概ねこんな感じ。次の休みが僕と合わせられるから、僕の家でゆっくり話でもしながら食事をしよう。それに僕は三人で過ごせるねって返事を送ろうとして、ちよつとしたどつきりを仕掛けるつもりで、二人にこう返した。

了解。なら、楽しみに待ってるね。

そう、お互いが来る事は伏せておいたんだ。なのはとはやても中々会ってないだろうからね。僕からのサプライズってやつだ。いつも驚かされるばかりだから、偶にはお返ししないと。

そう考えて、少し悪い笑みを浮かべながら僕は帰宅の途に着いた。でも、すぐにフェイトからもメールが来て、もし起きてたら会いたかって書いてあったから気になって会いに行った。だって時間が時間だし、もしもがあったら問題だしね。

結局行ってみたら何の事はない事だった。ラブストーリーだと思っただけ。借りた映画がホラー系で、怖くなったから朝まで傍に居て欲しかったらしい。でもタイミングいいなあ。この前もだけど、基本僕が仕事終わったのを知ってるかのような時にフェイトから連絡が来るんだよね。

ただ、休みは次元航行艦付きの執務官だから合わないんだけど。まあ、その反面フェイトは任務が終わると長期休暇になるから、その間は無限書庫によく顔を出しに来る。司書のみんなにも、事件資

料とかで世話になってるからって差し入れを持って来てくれるし。僕は偶にでいいのって言うんだけど、フェイトは手ぶら来るのは忍びないらしく、中々聞いてくれない。

「……ゴメンね、ユーノ」

「いいよ。もし何だったら寝てもいいから。大丈夫、何もしないよ」

僕に軽く寄りかかるようにフェイトが座っている。その温もりに内心嬉しさを感じるけど、邪な考えはしない。フェイトの弱みに付け込むような真似は出来る訳ないからね。だから安心させるように笑みを浮かべて告げた。

でも、何故かフェイトはそれに少しだけ悲しそうな表情を見せる。気のせいかな？ 小さく「して欲しいのに……」って聞こえた気が……？ いや、そんなはずはない。きっと僕の中の邪心がそう聞こえた気にさせたんだ。そう自分に言い聞かせて、僕はフェイトの手を握った。

「えっ？ ユーノ？」

「フェイトが安心出来るようにこうしてるから」

「……うん」

そう言って微笑むと、フェイトが僕に完全に寄りかかってくれた。それが信頼の証に思えて、僕は嬉しかった。そのまま、僕は朝日が昇るまでフェイトといた。その日差しでフェイトが目を覚ました後、お礼と一緒に朝食をって言われたから近くのファミリーレストランに行つて、談笑してから帰宅。そして、シャワーを浴びてすぐに寝た。

結局、この日僕が起きたのは、もう日も暮れた頃だった。ちなみに起きた理由はヴィヴィオ。借りた本を返しに来たんだ。そのインターホンを鳴らす音で目覚めたって訳。

ユ一ノさん、ちゃんと寝てますか？

そうやって本気で心配してくれるから、余計に申し訳なかった。なのはには言わないでって言ったなら、苦笑して頷いてくれた。本当に良い子だよ。こうしてこの日は終わった。そして、次の休みの日。それがまさかあんな事になるとは思わなかった……

「邪魔するな」

「邪魔するなら帰って」

「しゃくない。邪魔せんから入れて」

「仕方ないな。どうぞ」

はやてとの最近のお決まりだ。だからお互い笑っていたりする。時刻は午前九時半を少し過ぎたところ。はやての方が先に現れた。なのはは……まだだろうな、きつと。

はやては早速とばかりに部屋へ上がってキッチンへ。そう、なのはだけじゃなく、はやても冷蔵庫チェックをするようになったんだ。しかも、はやての場合はそれだけじゃなくて……

「うっ……また無い」

「だから、そういう物は買わないって言ってるじゃないか」

「ユーノ君、ほんまに……男？」

「うん、僕は怒っていいよね？」

そう、はやては僕のベッドルームまでチェックする。要するに男の宝物が無いかを探しにくるんだ。残念ながら僕はそういう物を買わないんだ。いや、興味はあるさ。でも、ヴィヴィオが来るんだよ、ここには。

それなのに、教育上よろしくない物を置いておく訳ないじゃないか。そう言ってるんだけど、はやてはその度に、どこかに隠してる！ 絶対あるに決まっとる！ って言ってる聞かないんだ。本当なのに……

「きゃ〜、ユーノ君がわたしに暴力振るってくる〜」

「……楽しそうだね、はやて」

「あれ？ 何や、ほんまに怒っとる？」

いや、そういう訳じゃないけど。と言うか、はやての表情見てたら殴る気も失せるよ。だって凄く楽しそうなんだから。そう告げると、はやては自慢げに胸を張った。大したもんやろ、だって。

うん、確かにそうだね。でも、何となく悔しいから無言でそのほつぺたを摘んだ。そして軽く引つ張る。あ、意外と伸びるんだ……

はやてが軽く文句を言ってるけど、ほつぺたを引つ張っているせいで何て言ってるか分からない。はやて、残念だけど僕には何も分からないよ……って言ったら念話を使ってきた。それは反則でしょ？

そう言ったら視線で放して欲しいって訴えてきた。うっ、その方が反則かも。だってやや困った表情で涙目の上目遣い。でも、ほったを引っ張ってるせいで、どこか面白い顔になってるんだけどね。

「あゝ、痛かった。ユーノ君、女の子を何やと思っとる」

「女の子は優しく守らないといけない存在。でも、はやては僕の幼馴染だから女の子扱いしないよ」

「……普通それなら扱い良くなるはずや」

「そうだよ。だからこうして家に呼んで気遣い無く接してる」

そう言ってウインク一つ。うん、決まった。はやても中々言うなと少し悔しそうだ。でも嬉しそうだし、僕の言いたい事は伝わったみたいだ。そんな会話をして、さてどうしようかと思った時だ。来客を告げるインターホンが鳴った。

僕はどこか自然に誰だろうなんて言いつつ玄関へ。はやてにはリビングで待っててと告げて、ね。はやてはそれに頷き、セールスか宅配便だろうと笑っている。その笑い、いつまで続くかな？ そう思いながら、僕ははやての靴をこっそりと靴箱の中へ隠す。やるなら徹底的にね。準備万端、ドアを開ける。そこには予想通りなのはの姿。小さく笑って僕へ挨拶した。

「ゴメン、少し遅くなっちゃった」

「いいよ。さ、上がって」

「うん、お邪魔するね」

靴を脱いで歩き出すのは。向かうは当然リビング。僕はその後起こるだろう出来事に小さく笑みを浮かべつつ、はやての靴を元に戻した。さ、そろそろ二人が出会って……………おかしいな？ 何にも聞こえてこない。驚く声も僕への文句も一切ない。

逆に怖いんだけど……………もしかしてあまりに驚き過ぎて言葉がないのかな？ そう思いつつ、僕もリビングへ。そこには、互いを見つめ合うのははやてがいた。良かった。表情は驚きを前面に出してるものだ。

「……………はやてちゃんも……………来てたんだ」

「そういうのはちゃんも……………来るとは思わなかったわ」

そう言つて笑みを見せる二人。あれ？ でも、何故かそれは挑戦的な風にも見える。気のせいか、二人の間に火花が散っているようにも見えるし……………どうして？

そんな風に僕が戸惑っていると、二人揃ってこちらへ視線を向けた。同時に、これはどういう事が説明して欲しいって聞いてきた。うっ、二人から笑顔の重圧感が……………

「実は……………」

僕は全部話した。二人を驚かせようと思った事を。いつも自分がやり込められてばかりだから、少しお返しをしようと思ったって。それを聞いて二人は呆れるやら笑うやら。でも、最後まで話して謝ったら笑って許してくれた。

でも、もう二度としないようにと厳命された。うん、了解。僕も今後のために気をつけるよ。それから、三人で久しぶりの再会を祝して乾杯する事になった。さすがに朝からアルコールは不味い。そう思つて冷蔵庫から何か取り出そうとしてたら……………はやてが何かを

出そうと戸棚を開けてる。何を勝手に出そうとしているの？ と言うか、完全に僕の家物の物の配置とか把握してるよね？ そこには、僕がクロノとエイミーさんから貰った結構値の張るベルカワインがあるんだ。

「あれ？ ワインなんてあるんだ。ね？ どうしてこんなのがユーノ君の家にあるの？」

僕がはやてを止めようとしてると、なのはも来てそんな事を聞いてきた。なので、二人に話す。結婚記念日にクロノとエイミーさんを二人で過ごさせようって、そうフェイトが考えてね。そのための準備として、僕とフェイトの二人で互いの欲しい物を聞き出して、それを伝え合ってたって訳。それのお礼なんだよ、これは。で、いつかフェイトと二人で飲も……いい話だと思ってくれるのはいいけど、ならどうしてコルクを取ろうとするのさ、はやて。

なのはも止め……え？ そんなに良い物ならみんなまで飲んじゃおうって……いや、これフェイトと約束し……駄目だ。なのはにもはやてにも聞こえてないみたいだ。二人してワインとグラスを手に行ってしまった。

「かんぱい」

「……かんぱい」

結局ワインは開けられた。仕方ない。同じワインを今度買っておこう。そして、家じゃなくて司書長室にでも隠そうかな。それならもう安全だし。それにしても、いいのかなあ。朝からワインなんて飲んじゃって。まあ、今日は外に出る事もないし、一日買い物しなくてもいいぐらいの食料はあるけどね。

なのはとはやてが美味しそうにワインを飲んでいく。僕も少し口

にする。うわあ……さすがに高いだけあるよ。今まで僕も何度かワインを飲んだ事あるけど、そこまで好きになれなかった。でも、これなら好きになるかもしれない。そう思うぐらい飲み口が軽いし、後味が嫌味じゃない。

そんなワインだもんだから、あれよあれよという間に無くなった。僕が二杯しか飲んでいないと言えば、二人がどれだけ飲んだかは言うまでもないよね。

でも、なのはにはヴィヴィオがいるからちょっと心配。なのは、帰ったらヴィヴィオの世話もあるけど大丈夫？ そう思って尋ねたら、なのははちょっと赤くなった頬でこう答えてきた。

「平気だよ。今日、ヴィヴィオはお友達の家にお泊りだから」

「お、そうなんか」

確かにそれなら安心だ。聞けば、今日はアイナさんに来てもらったらしいし、おそらくヴィヴィオはアイナさんが居る間に出かけるんだろう。そこまで言って、なのはが少しだけ僕へ意味ありげな視線を向けた。何だろうって思って視線を返す。

「だから……今日は帰らなくてもいいんだよ？」

「……あ、わたしシグナム達に伝えなあかん事あったわ」

なのはがそう言った瞬間、はやてがそう言って立ち上がった。そして携帯片手に玄関へ。何か聞かれたくない事でもあったんだろうか？ ともなく、今はなのはの言葉に対応しよう。帰らなくてもいいって、それはつまり酔い潰れます宣言だよな？

駄目だよ、なのは。僕を信頼してくれるのは嬉しいけど、やっぱり

りそういうのは……って言おうとしたら、玄関の方からはやてが戻って来た。何故かやや表情が緊張気味だ。

「な、ユーノ君。明日は何時出勤やったっけ？」

「え？ ……午後からだよ。明日の午前中は買い物に行こうって考えてる」

「そか。うん、了解や」

はやてはそう言って小さく頷いた。何でこのタイミングでそんな事を聞くんだろう？ って、なのはの事を解決しないと……あれ？

「なのは？ どうしたの？」

「……ユーノ君、確認したい事があるんだ」

いつになく真剣な表情なのは。それを感じ取って、僕も姿勢を正す。はやても同じように姿勢を直してる。一体何を確認する気なんだろう。僕には心当たりがない。最近なのはとした会話にもそれらしい事は無かったはずだし。

そんな事を考えながら、僕は黙ってなのはを見つめる。すると、なのはは一度深呼吸をしてこう尋ねてきた。僕はそれにあの日の事を思い出す事になる。あの時、訂正出来なかった一言を。

お嫁さんにしてくれるんだよね？

その言葉に僕は頭が真っ白になった。見れば僕だけじゃなくはやても驚いている。その視線がなのはから僕へ向いた時、僕はまた何も言えなくなつた。はやての表情は驚愕の色に染まっていたからだ。

本当なのか？ そう目が言っていた。僕はそれにどう答えればいいのか、すぐに浮かんでこなかった。確かになのはをお嫁さんにすると言った。でも、それは本心であって本心じゃない。なのはを奥さんにしたい。でも、出来ない。その資格が僕にはないんだから。

そう告げるべきだ。そう思って、僕はなのはの顔を見つめた。

「なのは、僕は確かにそう言ったよ。でも……」

「ユーノ君、私はその言葉がどれだけ嬉しかったか知ってる？ あの日、帰った後ずっと上機嫌だったんだよ？ ヴィヴィオに何があったのって聞かれるぐらい」

なのははそう言っただけに笑い掛ける。でも、その目からは涙が流れていた。それが嬉し涙だって気付いたのは、なのはの声が悲しさを少しも感じさせなかったから。その言葉に僕の決意が揺らぐ。資格なんて自分が決めるものじゃない。相手が望めばそれで十分じゃないか。

そんな声が聞こえてくる。すると、はやてが僕の手を握り締めてきた。それに僕の意識が向く。同時に視線も。はやては泣いていた。それはなのはと違い悲しい涙。ここにきてその理由が分からない程、僕は馬鹿じゃない。

「はやて……まさか君は」

「そや。わたしもユーノ君が好き。なのはちゃんに負けんぐらいに好き。ううん、なのはちゃんに勝つとるはずや」

そう言っただけではやては僕を見つめる。なのはも僕を見つめる。その視線はどちらも同じ。答えを聞かせて。そう僕に言っている。それ

に僕は正直応える事が出来なかった。なのはの想いは嬉しいし、はやての想いも嬉しい。でも、なのはへはやはり負い目があるし、それだからはやてに言うのも違う。

大切な人だからこそ、応えられない。応えちゃいけない。なのはの方が好きとかはやての方が好きとかじゃない。どっちも大切に、どっちも愛しいから応えない。これが今の僕の答えだ。

「……なのは、はやて、はっきり言うよ。僕は……」

好きだと、叫びたい。なのはにもはやてにも、想いを告げたい。でも、それは一番最低の選択肢。なのはとはやての優しさに甘えるだけの、もっとも忌むべき答え。どっちも選べない？ ならどうする。簡単だ。どっちも選ばなければいい。でもそれは、どっちも付き合うんじゃない。どっちも断る事だ。

風習や文化の違いはあるけど基本ミッドは一夫一妻だ。なら、相手を一人に出来ない奴は選ぶ権利はない。女性は、決して男の飾りじゃない。好意を寄せられてるからって、好きにしている訳じゃない。絶対の自信を持って、この人って言えるまで捜し続けるんだ。必要なのは少しの勇気だ。

「僕は、なのはともはやてとも恋人として付き合うつつもりはないし、結婚も出来ない」

告げる。なのはとはやての顔が驚きに変わる。

「僕は、なのはもはやても幸せに出来る自信がない」

告げる。驚きが深くなった。それにどうしてと疑問を浮かべる二人へ、僕は言った。なのはには、あの撃墜事件の時に感じた無力感と罪悪感にゆりかごでの戦いを支える事が出来なかった事を。

はやてには、リインフォースを助ける情報を見つけ出せなかった事。実はあの数年後、夜天の書の復元法に使える情報が出てきたんだ。それを見つけた時、僕はどれだけ自分の不甲斐無さを呪ったか。それらを告げ、僕は続けた。

「僕は君達を守れなかった。助ける事も出来なかった。だから僕は、選ぶなんて権利はないし、選ぶ気もない」

告げる。驚きは悲しみに変わっていた。それでも、僕は表情を変えない。変えたら、二人が迷ってしまうかもしれない。僕を諦めて、もつといい相手を捜す事を。その選択肢への気持ち。それを鈍らせないためにも。

なのは、はやて、よく聞いて。女の子はね、好きな人と結婚するより、自分を好きでいてくれる人と結婚した方が幸せになれるんだよ。男なんて単純で馬鹿な生き物だから、ただ好きな子が笑って暮らしていれば、それで幸せになるんだ。

そう告げると、二人が揃って目を閉じた。そこから涙が流れてくる。止めどなく、流れていく。僕の言葉は、紛れもない僕の本心だ。二人には幸せになって欲しい。いつも笑顔を見せていて欲しい。

(……例え、その相手が自分じゃなくても、ね……)

でも、それは伝ええない。言えば、二人に気付かれてしまうから。僕が、本当はどうしたいのかを。だから、言わない。二人はしばらくそこで泣いていた。でも、やがてどちらともなく立ち上がった。

僕はてっきり帰るものだと思った。でも、二人は何事も無かったかのようにキッチンへ向かって、料理を始めたんだ。表情は笑顔ではなかったけど、どこかすっきりしたように見えた。僕はそんな二人を呆然と見つめる事しか出来なかった。

やがて料理が終わり、僕の前にそれが並べられた。戸惑う僕へ、二人はこう言った。

「ユーノ君の気持ちは分かったよ。だから、もうお嫁さんにしてなんて言わない」

「わたしも分かった。ユーノ君がどんな気持ちで答えを出してくれたのかも」

そこまで言って、二人はどちらともなく 笑顔になった。

「でも、諦めないから」

「えっ……？」

どうして？ 僕は明確に拒否したんだ。なのに、諦めないって…
…僕の気持ちが揺らぐって思ってるの？ でも、僕がそんな事を考えているのを知っているのか、二人は口々に告げた。

「ユーノ君、知ってる？ 女の子はね、好きな人のためならどこまでだって強くなれるんだよ」

「しかも、性質の悪い事に一度好きになると中々諦めつかんのやわ」

そう言う二人は本当に嬉しそうな笑顔だ。僕はそんな二人に言葉がない。都合が良すぎるよ、こんなの。普通、僕が断ったら、二人も諦めて別の恋を探すもんじゃないか。何でこんな答えになるんだ。僕に変な希望を与えないでよ、二人共。これじゃ、いつか両手に花になりそうだ。でも、それは現実には有り得ない。だって、それ

で痛い目見るのは二人の方なんだから。お願いだから考え直して。そう言おうとしたところで、僕は気付いてしまった。言っても無駄だって、そう分かってしまったんだ。

なのはもはやても、これまで色々な事件や問題を不屈の心で乗り越えてきたんだ。今更、僕の言葉ぐらいで諦めるはずがなかったんだよ。それをすっかり忘れていた僕の方が考え直さないといけなかったんだ。

どうすれば二人が僕以外の相手を捜すようになるかって。今更突き放したって、二人はきつと気付いてしまう。いつそ行方を眩ますっていうのも考えたけど、駄目だ。何故だろうか、なのは達ならどこに行っても見つけ出しそうだよ。

あれ？ これってもう最初っから手詰まり？ なのは達に好意を抱かれた時点で、僕はもう打つ手が無かったって事？ そんな風に思っていると、なのはとはやてが楽しそうに笑みを浮かべて僕を見る。

「さ、今日は覚悟してねユーノ君」

「せや。逃がさへんよ」

……もう、勝手にしてよ。なのはもはやても僕よりも男らしい気がする。はあく、これじゃ僕の決意や覚悟って一体何さ？ そう思いつつ、きつと僕は笑ってる。だって、目の前の二人が嬉しそうに笑ってるんだ。それを見て笑顔にならない訳がない。

こうして、三人で昼食を食べてそのまま色々と談笑を始めたんだけど……

「「これ、なぐんだ？」」

食事が終わり、後片付けをした後、そう言っ二人が取り出したのは、とあるロストロギア。とは言え、安全性は確認されていて、しかも簡単に量産出来る物。そう、あのフェイトが押収した奴だ。実はあれを誰かが調べ尽くして販売したんだよね。

実物と違っ格好を想像した通りに変えられるアイテムになっ、小さな子供から大人まで結構人気だったりする。子供はなりきり道具として、大人は……察して欲しい。かなり売れてる層がカップルとか夫婦って辺りでね。

ちなみに僕は持っない。ヴィヴィオにはプレゼントしたけど、これ、バリアジャケットと違っ防御力はないけど、発動に大気中の魔力を使っただけだから、自分の魔力がいらなっって点も凄く受ける理由。

えっ、確か形状とサブ機能から付いた名前は……

「あ、マジカルフォンだね」

「そうなんだよ。意外と品薄でね」

「結構売り切れとるもんな」

いや、僕としては二人が自分用に買った事が驚きなんだけど……

「で、それでどうするつもり？」

「どうするっ……な」

「決まってるよ……ね」

分には無理なので……

なのはとはやてがいる事に、フェイトが気付いたらしい

「前にね、スバルに言われたんだ。私はリスっぽいわ」

「へえ、そうなんだ……」

なのはがそう言って笑う。確かにリスっぽいかも。なのはが両手でクルミを持ち、それをカリカリと齧る姿を想像し、そのあまりの違和感のなさに僕は納得。ちなみにそんな話になった背景には、スバルが犬みたいだとティアナが言った事がある。それになのはが同意したら、そうスバルに言い返されたんだって。

ティアナはそれに賛成もせず、かと言って否定もしなかったらしい。なのははそれを咎める事はしなかった。自分はそれに納得したからだそうだ。僕はそれを聞きながら、視線を出来るだけなのはの目に合わせていた。

何せ、なのはの格好は結構露出が多い。意図的にそうしたんだとは思っただけど、胸元が結構開いてるし、お腹も見えてる。後ろは分からないけど、大きなリスの尻尾があって、頭にはリス耳もあるので凄くファンシーです。

「ええなあ。わたしのは完全負のイメージからやもん」

そう言うってはやては少し肩を落とす。そんなはやての格好も露出が多い。なのはと同じで胸元は開き気味で、お腹も見えている。後ろには大きなタヌキの尻尾。頭にはタヌキ耳があるのも同じ。はやてもかなり可愛いなあ……

僕は今ある意味現実逃避中。なのはとはやては酔ってこんな事を

したんだって、そうさつきから言い聞かせてる。これを素面でやってたとしたら……駄目だ駄目だ！ 暴走しそうになる欲望にしっかりとバンドを施し、崩れそうになる理性を守るべくプロテクション。現在、二人は僕の向かいに座っている。それで談笑をしてるんだけど、正直僕は困り果てていた。さつきの真面目な状況とは違った意味で逃げ出したい。お酒が入った事でなのはもはやてもどこか行動が大胆だ。最初なんて、二人して僕の両隣を占領しようとしたんだ。

……さすがにそれは勘弁してもらった。だって、絶対に腕に体を押し当ててくるって分かったから。はやての目の輝きがそれを如実に物語っていたんだよ。なのはどうか分からないけど、はやてがそうしたら対抗してそうするだろうと思ったし。

なので、今のような形で話している。そんな格好で寒くないかなって思ったんだけど、今の季節は春。そこまで寒くはないし、室内ならこれでも寒くないだろう。そう納得し、それを聞く事はしなかった。

「……それで、どうしてそんな格好に？」

そう、それが一番聞きたい事だった。何で二人してイメージキャラクターみたいなものに変身したの？ そう思って聞いたんだ。でも、それになのはとはやてが揃って答えた。予想外の言葉を。

「フェイトちゃんの格好を可愛いつて言ったから（や）」「

「は……？」

呆気に取られる僕へ、二人は説明してくれた。いつかあったフェイトのロストロギア失敗談。それを二人も知っている。なのはには

僕が直接、はやてにはなのはが話したから。まあ、はやては結局僕へ詳しい話を聞いてきたんだけどね。

まあ、なのはは心配からだっただけ、はやては当然ながら完全に興味本位だった。でも、一応話を聞かせたんだ。食事時の他愛もない会話。そんな感じで。しかしよく覚えてるなあ。僕がフエイトの格好を見て可愛いつて思った事。確かさらっと一回ぐらいしか言わなかったのに。

そう思っていると、ふと僕は気付いた。僕が”フエイトを”可愛いつて言ったからだ。好きな相手が別の相手を可愛いつて言った。それを二人が忘れるはずはない。そう結論付け、僕は頭を抱えた。

「……まさか、それに対抗してその格好を？」

それに無言で頷く二人。その目はこの格好はどう？ って聞いてきている。

「えっと、月並みだけど可愛いよ。それに……かなり魅力的だと思っ」

それになのはとはやてが嬉しそうに笑う。正直、これでどちらかと二人きりだったら、理性が持たなかったかもしれない。そんな事を強く感じるぐらい、今の二人は魅力的だった。さっきの宣言も影響してるんだろっけど、僕はもう二人にどうすればいいのか分からないんだ。

もう強く拒否出来ないし、だからといって受け入れる事も出来ない。本当に反応に困ってるんだ。まさかこんな状況になるなんて想像もなかったし。誰が出来る？ こんな都合の良すぎる展開なんて。

「でも、本当に今日一日それであるつもり？」

「モチロン！」

「あ、でもユーノ君がやめて言うならやめるな」

……僕は最高に幸せな男だよ。こんな風に言ってもらえるんだからさ。ありがとう、なのは。ありがとう、はやて。僕は最低かもしれないけど、今日だけはその気持ちに甘えさせてもらおうね。

「なら……そのままでもいいもらえる？ 記憶に焼き付けるから」

「おっ、ユーノ君も男やな。ええよ。なら、しっかり記憶にほ・ぞん・し・て」

「は、はやてちゃん?! だからってそんな事までしなくても!」

うん、なのはの言う通りです。はやて、即刻その挑発的な姿勢を止めなさい。僕を上目遣いに見上げたりしないで。胸元が嫌でも視界に入るでしょ! ……と言いつつ、視線は吸い寄せられるように……男って悲しい。

「ええやんか。わたしは……ユーノ君相手やから、な？」

うっ! そんな風に言われたら、僕はもう強く言えないじゃないか。でも、あまりこんなのは良くないし、現に僕の理性がガリガリと削られてる。情けないけど、なのはに頼ろう。そう思ってなのはへ視線を向ける。

でも、それが間違いだった。そう思った時には遅かった。視線を向けた先のなのは、はやての言葉に僕が躊躇ったのを理解したん

だろう。負けるものかと、両腕を組んで胸を持ち上げるようにしていた。

「こ、こうかな……？　つて、ユーノ君?!」

きつと自分なりに魅惑的な姿勢を試してみたんだろう。そこを僕がすっかり見てしまったという訳だ。だって、僕と視線があった瞬間、なのははその腕を元に戻したんだから。その際、胸が揺れたのを僕は見逃さなかった。男の習性つてやつだよ。本気で僕は死んだ方がいい。

なのはを見て、はやては悔しそうな表情をしていた。その視線が胸にいつてたから、理由はもうすぐに分かった。気にしなくてもいいよ、はやて。僕は女性を胸なんかで判断しない。というか、どうしてそこで判断するんだろうね？　僕には理解出来ないよ。

そんな関係ない事を考える事で邪念を散らす。でも、まだ足りない。無限書庫の今年の目標を思い出す。目指せ！　年間休日九十日！　……あ、違う意味で泣けてくる。気を取り直して、今月の目標を。減らそう、思いやり残業！　……駄目だ、涙しか出てこないよ。しかも、考えたらその目標って僕が発案してるんだよね。しかし、これが僕だけじゃなくて、無限書庫全体に言える事だから恐ろしい。毎年人手不足が叫ばれる管理局。その中でも無限書庫は慢性的な人手不足だ。年々資料請求は増える一方。だけど、司書の数は現状維持か下手すると減少する。激務についていけず、辞める人も少ないんだ。

そんな事を思い出し、僕は完全に二人の事を忘れていた。邪念を振り払うのには最適だったんだけど、あまりに深刻に考える問題過ぎて忘れちゃいけない事まで忘れてしまったんだ。だから、二人が接近してる事にも気付かなかった。

それに僕が気付いたのは、両腕に感じる柔らかい感触があったから。それに没頭していた思考が現実に戻される。そして、その感触は何だろうと確かめようと思っただら、視界の中になのはとやのの不機嫌な顔があった。

「あ、やっと気付いた」

「ユーノ君、ちょう今は酷いわ」

「えっ……あ、ごめん」

二人を完全に忘れていた事に気付いて、僕は謝った。でも、冷静にいられたのもそこまで。すぐに今の自分の状況を把握し、僕は顔を真っ赤にした。いや、だって二人がいつの間にか横にいて、腕をしっかりと確保してる。

……あ、ソウカ。コレハフタリノムネノカンシヨクカ……じやないっ！ これに飲まれちゃ駄目だ！ 消えかかる自制心にロードカートリッジ。ACSに移行しようとする欲望をモードリリース。僕の理性はまだ死んじやいない。

「ね、ユーノ君。今日……泊まってもいいかな？」

「……え？」

「あ、ズル！ な、ユーノ君、わたしも泊まってええかな？」

「ええっ?!」

一度目は聞き返すように、二度目は本気で言ってるの。そんな意味合いで僕は声を出した。なのははさっき今日は帰る必要がないっ

て言っただけ、はやては駄目でしょ！ 僕はついそう言った。でも、それにはやてはにやりと笑った。

凄く嫌な予感しかしません、はやてさん。なのはは、はやてのその反応だけで何かを察したのか、小さく納得するように頷いた。僕は理解出来ない、はやての言葉を待つ。ある種の死刑宣告を受けられる気分だ。

「もうシグナム達に、今日は帰らんって言うてあるから平気や」

ああ……やっぱりそうなんだ。いや、そういえば何となく思い出したんだ。なのはが帰らなくてもいい発言をした後、玄関へ携帯片手に消えた事を。あの時、既にそんな事を企てたんだね、はやては。なのははそれにもう気付いたんだ。さすがというか、何と云うか……今の二人はもしかして結構発想が似てるのかな？ そんな風に考える僕に、二人が容赦なく視線を向けて現実へと引き戻す。うん、やっぱり今日の二人は似てるよ、思考が。

「何かな？」

「何かな？ やないよ」

「答えを聞きたいんだけど？」

「……僕の家にはベッドが一つしかないんだ。だから、無理。それに、いくら何でも男の部屋に泊まるなんて駄目だよ」

僕は正論を告げた。好きな相手だろうと、やっぱり段階を踏むべきだし、そもそも僕らは付き合っただけじゃない。だから止めたんだけど、それに二人は不満顔をするかと思いきや、予想以上に満足げだ。どうしてだろう？

「うん、さっすがユーノ君。まっじめ」

「それでこそユーノ君や。安心したわ」

何故か誉められている。いや、嬉しいんだけど、どこか納得出来ないというか。何だろう、この安心感の無い納得のされ方は。それでも、誉められたから言葉を返しておこう。

「あ、ありがとう」

「絶対変な事しないよね？」

「勿論」

「絶対酷い事せんよな？」

「当たり前だよ」

あれ、何故だろう。僕が答える度に二人の笑みが深くなっていく。そして、同時に僕の額に変な汗が流れてくるんだけど……？

「「じゃあ、いいよね？」」

……そうくるか。それとこれとは別問題。そう僕は言った。でも、それに二人はやや楽しそうな笑みを浮かべて僕を見る。

「あれあれ？ ユーノ君は自信ないの〜？」

「さっきはあないに強く言い切ったやんか〜」

「……二人共？」

何かおかしい。いくら僕へ想いを告げたからって、なのはもはやてもこんな感じの事を言う性格じゃない。僕はそう思って、ある事を思い出した。そう、二人は僕より多くワインを飲んだ。きっとその酔いが完全に回ったんだ。

だから変に気が強くなって、言動が大胆になってきたんだ。そう判断して、僕は呆れよりも可愛さが湧き上がった。まずは二人を落ち着かせよう。そう思って、とりあえず二人を連れてキッチンへ。足取りが少しおぼつかないので、僕が二人の手を取って。

「二人共、まずは水でも飲んで」

「え、どうして？」

「ほんまや。理由を教えて」

うん、完全に酔っ払ってる。無理矢理にでもその手に水の入ったグラスを持たせる。でも、中々二人共それを口にしようとしなない。

「ほら、飲んで二人共。結構長く喋って喉も渴いたでしょ？」

「うん……そう言われると」

「そないな気もする」

「ね？ ほら、喉を潤そう。それからまた話そうよ」

「はい」

……軽く子供の相手してる気分になってきた。なのはやはやての酒癖は知らないけど、酔うと幼児化するのかも。そして、かなり言動が大胆になるって覚えておこう。もう、次回は二人へあまりアルコールを取らせないようにね。

……今の二人を可愛いつて思ったのは、仕方ないかな。二人はグラスを口に付け、水を飲み干していく。結構な勢いで飲んでるところを見ると、本当に喉が渴いてたんだろうな。あ、なのはもはやてもグラスをそんなに傾けると……

「あゝ、駄目だよ。水が軽く零れてる」

「んくっ……んくっ……ん？」

なのはが僕の言葉に反応して、視線を向けた。ああ、水が喉元を伝って……ゴクリ……って、違う！ とにかく、タオルを手渡す。それで濡れた場所を拭いて。そう言うと、なのはは頷いてくれた。でも、グラスの水を飲み干すまでは拭く気がないみたいだ。

仕方ないので、はやての方へ視線を移す。はやても同じように喉元を伝って水が、その……胸元へ落ちていく。そこへ向かう視線を何とか食い止め、はやてにもタオルを手渡す。

「はい。後でこれを使って濡れた場所拭いてね」

「……はゝ。おおきにな、ユーノ君」

笑顔でタオルを受け取るはやて。あ、良かった。軽くいつもの感じに戻った気がする。そう思った瞬間だった。

「これはお礼や」

「へ？」

はやてが自然に僕の頬へキスをした。されるのは二回目だけど、今回ののは前回と違って軽いものじゃない。いや、時間は同じなんだけど、顔を離れた後のはやての表情がその……艶かしかったんだ。

「……どう？」

「あ……その……」

初めて見るはやての女の顔に、僕は言葉がない。心臓の鼓動が速い。聞こえるんじゃないかって思うぐらい煩い。顔が熱い。耳まで真っ赤だ。すると、それを見たのはが素早い動きで僕の頬へ顔を近づけた。

はやてとは逆の位置へ、その唇が当たる。それが意味する事はたった一つ。でも、僕は自分を抑えるために深呼吸。正直心臓はバクバクしてるし、顔は真っ赤。だけど、それに身を委ねる事はしない。なのはもはやても大切な人。だったら、こんな酔ってる状態の行動で自分を失っちゃいけない。

「なのは、はやて、少し頭冷やしてきて」

そう言ったら、二人がキョトンとした。僕はそんな二人に軽くため息を吐いて、バスルームを指差した。

「冷たいシャワーでも浴びて、酔いをさましてきなさい。じゃないと、僕はもう二人の相手しないから」

そう言ったら、二人は凄く驚いて互いの顔を見合わせる。そして、

僕へ視線を戻して軽く戸惑うような表情でこう聞いてきたんだ。

シャワーを浴びたら、相手をするの？

それに僕は頷いた。だってこのままだと二人の暴走が酷くなる一方だし、最悪の事態にもなりかねないからね。そう思ったからこそ、僕は二人へ言ったんだ。でも、この時僕は気付くべきだったんだ。僕が言った言葉。それが妙な意味合いを持ってしまった事に。

でも、この時僕は正直二人の行動に疲れていたし、酔いが軽く回っていたんだ。どこかで思考が鈍かった。だから、本当なら僕が頭を冷やして冷静になるべきだったんだと、後から気付いたんだよ……全てが終わった後にね。

僕が頷いたのを見て、二人は何かを決意したようにバスルームへ向かう。僕はその背に向かってタオルの位置と、着替え代わりにしてもいいと思ってYシャツなどの場所を教えた。そして、僕はやや疲れたのと水分を欲して水を飲んだ。

やがて、微かに水音が聞こえてきたので、二人が言った通りにしてくれと思ってホッとした。これで二人も少しは冷静になる。そこへ携帯の着信があった。フェイトからだ。当然、僕はそれに出る。

「どうしたの、フェイト？ 今日にはリンデイさんと買い物だったんじゃない……」

『そうだったんだけど、お昼から母さんに予定が入っちゃって……ユーノ、今暇？』

もし、これが今日の朝だったらと思うとゾっとする。僕はこれに暇と答え、フェイトまでこの状況に……あれ？ 待てよ？ フェイトが居れば、二人を何とかしてくれるんじゃない……

そんな風に思いながら僕はソファに座り、フェイトへ返事をしようと思った。勿論、今日は忙しいって言って断るために。考えたんだけど、フェイトが居ても意味はないんだよね。もう二人は覚悟完了してるし、これは僕の問題だ。フェイトを巻き込む訳にはいかない。

でも、そこに思わぬ声が響いた。

ユーノ君、ちょっといい？

バスルームから顔だけ出して、なのはがそう尋ねてきた。その声が聞こえた瞬間、電話の向こうのフェイトが小さく何かを呟いた。そして、僕へこう尋ねてきたんだ。

ユーノ、今、部屋になのはがいるの？

その声は不気味な程優しく、でもどこか凄く怖くて。そう感じた僕は返事が出来なかった。更にそこへ追い打ちのように……

ユーノ君、悪いんやけどボディーソープの換えないか？

はやてまで顔を出して声を出す。フェイトはそれにはつきり聞こえる声で告げた。はやてもいるんだねって。その声はいつものフェイトと同じ声。でも、何かが違う。それはそうだろう。親友二人が部屋に来ていて、しかもボディーソープの換えなんて聞いてきている。

そういう関係ではないと分かっている、おかしな状況には違いないのだから。フェイトはきっと僕に嫌悪感を抱いたんだろう。僕はそう感じて、視線を二人へ向けた。そこで二人は、僕が電話している事に気付いたんだろう。どこかしまったという顔をして、二人

ユーノの苦難はここから始まるらしい

「どうしてこんな事をしたの？」

開口一番、フェイトは僕にではなく、なのはとはやてにそう言った。その表情は珍しく怒っている。部屋に上がるなり僕から事情を聞き、それを理解したフェイトはすっかり酔いの醒めた二人へやや強い口調で問いかけたんだ。

対する二人はどこか戸惑うものの、フェイトへどう答えようかと考えているようだった。それを見て僕は正直不思議に思った。いや、自惚れている訳じゃないけど、僕が好きだから一緒に居たいと思っただけで言えばいいだけなのに……てね。

でも、二人は何かをフェイトから悟ったのか、躊躇いと戸惑いが強く見える。三人は九歳からの付き合い。だからだろう。僕には気付かないフェイトの何かに気付いたんだ。でも、このままだと二人が困る一方だと思って、僕は意を決してフェイトへ告げただ。

「フェイト、二人をあまり責めないで欲しい。お酒に酔ってたせいもあるんだ」

「……ユーノはやっぱ優しいね。でも、これはちよつと行き過ぎてるよ……大体シャワーなんて浴びてるし」

ん？ 今、後半が小さすぎて聞こえなかったけど、何かフェイトが呟いたみたいだ。フェイトはそのまま僕から視線を外し、なのはとはやてに告げた。子供じゃないのだから、あまり僕に迷惑を掛けないようにって。でも、それに二人が反論した。いや、指摘したかな。

表情は頭にきたって感じだ。その表情のまま、二人はフェイトへおそらく初めてだろう苛立ちを込めた声を出した。その内容に、僕は硬直する事になるとは知らずに、ね。

「フェイトちゃん、一ついいかな」

「えっと……何？」

「あんな、どうしてこれと無関係のフェイトちゃんにそこまで言われなあかんの」

「それは……」

うわ、はやて結構痛烈だ。無関係って……まあ、この問題に関してはそうだけど、よく言えるなあ。そんな風に女性の怖さを見せ付けられる僕。フェイトも二人の豹変振りにやや戸惑ってる。でも、気を取り直して反論しようとしたところへ、なのはが言葉を被せてきた。

フェイトちゃんと違って、私達はもう向かい合ったんだよ。

その言葉に僕とフェイトの二人が止まる。僕はその言葉の意味する内容に。フェイトはおそらくその言葉そのものに。なのはとはやてはフェイトへ視線を向けて告げた。言うつもりがないのなら、自分達の行動に口出ししないで……と。

それは、初めて聞くなのはとはやてのフェイトへの拒絶。フェイトはそんな言葉に絶句。それは僕も同じ。でも、僕の予想に反して、フェイトはすぐに立ち直ったんだ。少なくとも、その時はそう見えた。そして、驚きから黙り込む僕の方へ顔を向けて　　涙を流した。

私、二人に嫌われたみたい。

そんな事を言っただけでフェイトは僕へ泣き崩れる。それを受け止め、僕はやや戸惑いながらもその背中を優しく擦る。でも、そんなフェイトを見るのはとはやての表情はどこか険しい。どうしてなんだろう？ どうして、なのはとはやては互いを認め合うような感じだったのに、フェイトにはこんなに敵しいんだろう。

そんな風に僕が考えていると、なのはがフェイトへどこか悲しそうに告げた。いつまで自分を押し殺す気なのか、って。それに泣いていたはずのフェイトの声がピタリと止まる。はやてもなのはと同じような表情でフェイトを見つめている。

「フェイトちゃん、気持ちは分かる。嫌われたら、こんな風に過ごせんくなったらって、そんな風に躊躇うんは分かる。でもな、そこから一步踏み出さんと、何も変わらんのか」

「気付いてもらうなんて無理って、フェイトちゃんも分かっているでしょ？」

その言葉にフェイトが一瞬びくりと震える。僕はそんな反応からもうフェイトの気持ちに確信を持っていた。二人の告げた向かい合ったとの意味。それが間違っていないかつたんだと。僕は身じろき一つしなくなったフェイトの髪を優しく撫でた。

それは、特に何か意味があった訳じゃない。ただ、今のフェイトが見てられなかった。だって、どこかあのプレシアに突き放された時を思い起こさせたから……

フェイトは僕が髪を撫で終わると、ゆっくりと立ち上がった。そして、なのはとはやてへ視線を向ける。その表情は僕からは見えな

いけど、なのはとはやてが嬉しそうに頷いたから、きつと良い表情をしていたんだと思う。

二人が頷くと、フェイトも頷き返し、僕へ振り返った。その表情は僕が一番好きなフェイトの顔。心からの喜びや嬉しさを感じさせる笑顔だ。それに僕はつい顔が綻んでしまう。フェイトはそれに益々笑みを深くした。でも、何かを思い出したのか、深呼吸を始めたんだ。

そして、大きく息を吐いたかと僕へ向かってはつきりと告げた。

ユーノ、私と結婚を前提に付き合ってください。

大真面目な表情でフェイトはそう言い切った。それに僕はついおかしくて笑っちゃった。いや、だってね？ フェイトの言い方は、普通男がするものだったんだ。凛々しい表情と相まって、その違和感は凄いの何のって。

見れば、なのはとはやても笑ってる。それはさすがに女の子らしくないってなのはが言えば、でもフェイトちゃんらしいってはやてが続く。一方のフェイトは僕らが笑うもんだから、やや慌てた後、拗ねたような表情を浮かべた。

そんなフェイトにまた笑いが起きる。するとフェイトもその声に感化されたのか、小さく笑い出した。しばらく僕らの笑い声が部屋の中に響く。そうだよ、これだ、こんな雰囲気だ。僕らのよく知る雰囲気は、これなんだよ。

やがて誰ともなく笑うのを止め、なのは達の視線が僕へ注がれる。それを僕は受け止め、フェイトへはつきりと告げる。なのは達へ告げたのと同じ言葉を。でも、フェイトもやっぱり答えは同じだった。関係ない。そんな風に笑って返された。僕が応えないとしても構わない。応えてくれるまで頑張るだけだから。そう言っただけでフェイトは

輝く笑顔を見せたんだ。

フェイトが一途で諦めない性格なのは、僕もよく知ってる。アルフからちらりと聞いた幼少期。そこからフェイトの辛抱強さや純粋さが分かるってものだよ。だから僕もフェイトが答えた時は、きつとどこかで苦笑していたと思う。

なのはとはやてはフェイトの答えに嬉しそうに頷いていた。そして、三人で手を繋ぎ合って頑張りうって言い合うんだから、本当に仲が良い。どうも僕をその気にさせるまでは一致団結でもするみたいだ。はあく、勘弁してよ……って、そう思いつつも、どこかでそれを喜んでる僕がいる。

「じゃ、改めて……」

そうなのはが切り出す。うわ、この流れは一つしかないよね。でも、見ればなのは達が笑ってる。そこには僕の好きないつもの笑顔達がある。

「ユーノ、今日泊まってもいいよね？」

「何もしないんやろ？　なら、わたしらもそれ信じるから」

「それに、色々お話したい事があるし。四人で夜更かししよ」

なのはがそう締め括る。もう僕に拒否権はないよね、それ。いや、拒否出来ないというよりしたくない。だって、四人で話すのなんてどれぐらいぶりだろう。そんな事を考えたら、すごく楽しくなってきたんだ。

でも、表面上は仕方ないって感じて僕はため息を吐いた。それだけで三人が笑う。気付かれてる。でも、それでもいいさ。ここまで

きたら道化でも演じ切ってみせるよ。

「……じゃ、とりあえずもう少ししたら出かけよう。さすがに三人が寝られる程ベッドも大きくないし、お客さん用の寝具を買つとす
るよ」

「にはは、じゃあついでに日用品も買つちやおうか？」

「お、ええな。歯ブラシとか揃いのカップとか……」

「な、何なら私は家から持ってくるよ？」

そんな事を話し合う三人。完全に僕の家をもう一つの家にするつもりだね？ うん、それは阻止しよう。少しだけ想像して嬉しく思つたのは僕だけの秘密。まずは話題を変えよう。そのために、僕はワインの話をフェイトへする事にした。

案の定フェイトはそれを聞いて怒り出した。楽しみにしてたのに、そう言つてフェイトが怒ると、二人が頭を深々と下げた。それを見つめ、僕とフェイトは密かに苦笑。そう、話した時に念話で伝えたんだ。僕がまた同じ物を買うから、二人を許してあげて。フェイトはそれを受けて、ポーズとして二人へ怒つただけに過ぎない。でも、もしかしたら少しはやり返したかったのかも。

そして、フェイトが二人へ許しを告げると、なのはとはやてが安堵の息を吐いた。その後、少し落ち着いたところで僕らは買い物に出かけた。四人で買い物なんて初めてだから、僕らはみんな楽しくて仕方がない。

いつもなら素通りするようなお店や商品へ視線を向けては足と止め、それに意見し合つて時間を過ごす。まるでこんな時間さえ愛おしいと言うように。おかげで買い物を終える頃にはもう夕方になっ

ていたぐらいだ。

寝具は結局三人分買った。さすがにベッドは無理だから布団にした。元々は地球の日本の物だけど、ここミッドチルダではもうメジャーな場所として広まっている。そう、なのは達のおかげでね。なので、結構日本文化がミッドには浸透しつつある。

寝具もベッドしか知らないミッドの人からしたら珍しいってのもあって、意外と売れてるんだって。そうお店の人は教えてくれた。確かに布団には布団の良さがあるよね。洗って干せるとこも衛生的だし。

今、その寝具などは僕が持つてる。大きな袋が全部で三つだから、両手がそれで塞がってる。なのは達が、自分の分だから自分で持つて言ったんだけど、譲れない。僕は男だからね。こんなちっぽけな事でも力仕事は僕の領分さ。

それに、こう見えても筋力は意外とあるんだ。遺跡発掘や調査なんかでも結構力が要る作業が多い。最近はあまり行けないから鈍ってるだろうけど、それでも何もしてない人よりはある。あるんだけど……フェイトの方が力が強かったりしたら嫌だなあ。暇を見つけて鍛え直そう。

そんな決意を固める中、無事に帰宅。なのは達は早速とばかりに僕の手から荷物を受け取り、いそいそと部屋の中へ。そして洗面所に自分用の歯ブラシとかを置いている。

……いや、止めたんだよ。それは本当に勘弁してって。でも、なのは達は今日の歯磨き用だからって押し切ったんだ。そう言われて止められる僕じゃない。まさか、僕のを使えばいいなんて言えるよ。うな物じゃないし……

「でも、なのは達は大丈夫なの？ 僕は明日午後勤務だけど……」

そうだ。なのは達は今日は休みでも明日はそうじゃない。そう気付いて、僕は尋ねたんだ。夜更かしなんてして仕事に影響はないだろうかと。そうしたら、三人は揃って笑った。そして、こう言い返してきたんだ。徹夜なんて慣れてるから気にしなくてもいいって。

……色々と思う事はあるけど、了解した。つまり、もう何を言っても無駄だってね。最終確認はした。これで僕も気兼ねなく夜更かし相手になれる。そう思って、時計を見た。そろそろ夕食の時間だ。僕が視線を時計に向けたのに気付いて、三人も視線を動かす。

「あ、もうこんな時間だね」

「そうだね。なら、食事の準備しようか」

「よっしゃ。それとお風呂の準備もせな。という訳で役割分担しようか。わたしとなのはちゃんが食事作りで、フェイトちゃんはお風呂の支度お願い出来る？」

はやての言葉に頷くなのはとフェイト。それはいいんだけど、僕の割り当てがない。

「あの、僕は？」

そう尋ねると三人が揃って笑みを見せる。そして、見事に口を揃えて告げた。

「……ユーノ（君）はそこで休んでて（な）」

「……はい」

完全に戦力外通告。いや、この場合は過剰戦力だから控えていて
って事かな？ とにかく三人の好意に甘えて、静かに本でも読むと
しよう。えっと、ベッドルームに読みかけのものがあつたっけ……

穏やかな時間。聞こえてくるのは包丁の音や何かを焼いたり炒め
たりする音。そして鍋の沸騰する蒸気音に食器の立てる音。それと
共に交わされるのは達の会話。それをBGMに僕はのんびりと本
を読む。贅沢な時間だ。そう心から思う。

バスルームから戻ったフェイトも参加しての夕食準備。それは親
友同士の楽しい時間にしか見えない。そう、実はさつきから、僕は
何度も本から視線を外し、キッチンへ向けている。その光景がと
ても和むものだから。でも、それだけじゃない。尊く見えたんだ。
僕の未熟さが招いたあの事件。それがキツカケで今の光景があるっ
て、そう思ったら……ね。

後悔しているのは間違いない。でも、これを見ているとそれで良
かったとも思えてくるから不思議だよ。だって、フェイトはやて
と出会えないのはなんて、想像したくないから。なのはやはやて
と出会えないフェイトなんて、考えたくないから。なのはやフェイ
トと出会えないはやてなんて、有り得ないから。

だから思うんだ。僕のした事は正しくない。でも、間違ってもい
ないんじゃないかって。少なくとも、なのは達にとつては。そんな
事を考えたからだろうな。こみ上げてくるものがあつた。悲しみで
も喜びでもない感情。それが何かって明確には言えない。でも、強
いて例えるなら感謝。

ああ、僕のした事は許される事なんだ……

誰かと誰かを繋ぐ縁。それを僕が担った。確かにそれが悲劇を生んだかもしれないけど、でもそれを補って余りある奇跡がそこにあった。キツカケは、願いの寶石。始まりは、僕となのはの出会い。そこから全てが動き出した。

知らず次元世界を守る事になった僕ら。フェイトの時もはやての時もヴィヴィオの時もそう。でも、その目的は世界を助ける事じゃなく、ただ……

（助けたかった。フェイトを、はやてを、ヴィヴィオを。なのははそれだけを考えてたんだ。そして僕は、周りはそんなのを助けたいって思った）

大それた事は考えてない。ただ、自分達の出来る事をしようとした。助けたいと思った相手を助けよう。それだけしか考えてなかった。いつだって。今だって。そして、これからもそれは変わらない……

（そうか。僕はそれでいい。なのはにフェイト、はやてを助けたい。その想いだけでいいんだ。何も難しい言葉はいらない）

覚悟とか決意とか、無力感や罪悪感なんかも関係ない。ただ僕は三人を守りたい。助けたい。それだけでいいんだ。好きだから。そんな簡単で単純で、だけど一番強い想いさえあれば。

そう考えて、僕は思い出し笑い。そう、なのはとフェイトにはやてが僕へ告げた言葉を思い出したからだ。女の子は、好きな人のためならどこまでだって強くなれる。一度好きになったら中々諦められない。だから関係ない。

そっか。僕もそうだよ。好きな人のためならどこまでだって強くなれるさ。しかも性質の悪い事に、一度好きになったら中々諦める

∴ 自爆覚悟の三人ルートなどを予定。

ユーノがなのはと出会いの日に新たな誓いを立てるらしい

あの日からもう半年が過ぎようとしていた。僕は相も変わらず無限書庫で本や資料請求依頼と睨めっこ。それと同じぐらいの頻度で黒い奴とも睨めっこ。実は今もそう。いや、まあ……友人ではあるんだけど、やはり仕事になるとどこか言い争う仲だったりする。

なのは達も相変わらず仕事で忙しい。なのはは教導官、フェイトは執務官、はやては捜査官としてそれぞれの場所で動いている。実は、今の僕の家はちよつとした集会所みたいな扱いを受けているんだけど。何故って？……三人に合鍵を渡したからだよ。渡したくて渡したんじゃない。はやての策略に嵌った結果なんだ。

ユーノ君、今週ほとんど書庫に泊まりやる？ わたし、今週休みが二回あるから、一回は掃除とかしておこか？

ホント？ でも、何か悪いし……

ええつて。それに掃除とかしたらすぐ帰るし。やから鍵貸してくれる？

……迂闊だったとしか言いようがない。あまりにも自然な流れだったものだから、僕は深く考えずに鍵を渡したんだ。徹夜続きの状態だったのも大きい。はやてがそれを狙っていたのかは、今となっては分からないけど、それがキツカケではやてが合鍵を持った状態になったんだ。

僕に返そうと思ったけど、忙しいし今後と同じような事があると思うから。そう言って合鍵を作っていいかって。その時には、もう手遅れだったんだ。僕はもうはやてを止める事が出来なかった。だって、はやてが僕へ向けた視線は、一生の願いって感じのものだ

ったから。

そして、それがなのはとフェイトにばれた。原因はシャマルの天然。何でも三人で本局で会った時に食事を共にしたらいいんだけど、その時シャマルがはやてから家の鍵を借りに来たんだ。

どうも自分用の鍵を家に忘れたらしく、一番近くにいたはやてに借りに来たんだって。それではやてがしょうがないと苦笑して鍵を手渡したんだけど、当然そこには僕の家も鍵もある訳で……

あれ……はやてちゃん、この鍵は何の鍵なの？

それにはやてが一瞬だけ表情を変えたらしく、それを見たなのはとフェイトが、シャマルから鍵を半ば無理矢理（とはやては証言）に受け取り、それが僕の家も鍵と知って、はやてと同じように自分達にもって……

あ、思い出したらちよつと胃が痛くなってきた。あの時の二人の表情は絶対忘れない。とつても……その……… イイ笑顔だったから、ね。

『どうした、ユーノ？ 顔色が悪いぞ』

「気にしなくていいよ。君の最愛の義妹絡みだから」

そう返すとクロノが言葉に詰まった。否定すればフェイトが悲しむし、かと言って何も言わなければそれを肯定する事になる。でももうみんな知ってるよクロノ。君がフェイトを家族として愛してるのはね。

結局クロノはその言葉にそんな事よりと言って誤魔化した。ま、いいよ。照れてる時点で君の負けだ。今度フェイトに教えてあげよう。凄く喜ぶはずだ。そんな事を考えつつ、クロノからの依頼

と言う名の無茶へ色々と言句を返す。

そして、そんな皮肉と文句で飾られた会話を終えて、最後には互いに苦笑で締め括るのが僕らしい。

『じゃあ、早めに頼む』

「了解。元気な僕の最後を覚えてろ」

『ああ、きつちり覚えていてやる。次は死んだ顔を見れるだろうか
らな』

「言ってるよ。じゃ」

『ああ』

それで通信は切れる。ふと気付けば周りの司書達が苦笑している。ああっ！ だから嫌なんだ、クロノとの通信は！ 司書長室でいたいんだけど、そうすると変な噂を立てられるんだ。僕とクロノがそういう仲じゃないかって。

何でも僕が中世的な顔立ちをしてるから、そういう風に見えるらしい。とはいえ、そんな事を言ってるのは一部の女性司書さんだけだね。その内女装が趣味とか言われるんじゃないかと思って、密かに着ている物を似合わないと感じて男性的な物にしてるのはそのため。

と、ある事を思い出して時計へ視線を向ける。今日は久しぶりに定時で上がるうと思ってるんだ。理由は一つ。その……デートなんだよね。夕食を共にするだけの些細な内容だけど、ね。クロノの依頼は……明日から本気出す。

「あ、来た」

「ユーノく〜ん！」

現れたのはなのは。そう、今日でなのはは教導を終えて二日間休みになるんだ。だから一緒に夕食を食べに行こうって事になってる。ヴィヴィオは事情を察してるのか、今日はナカジマ家へ遊びに行ってる。スバルが休みで久しぶりに自宅に顔を出してるんだって。

実は、両家をご近所さんなんだって、最近知った。ナカジマ家には行った事がなかったからんだけどね。でも、言われて思い出ししてみれば確かに近いと言えるんだよ、その位置関係。

「お疲れなのは」

「ユーノ君もお疲れ」

笑みを見せ合う僕となのは。あの日以来友達以上恋人未満の僕達。そう思ってたんだけど、周囲はそう思っではないらしい。何せ、この前捜査資料を取りに来たティアナなんかは……

アタシも相手捜そうかな……

そんな風に呟いて、僕となのはを羨ましそうに見つめていたんだ。僕はそういう関係じゃないって言ったんだけど、生暖かい目を返されたんだ。それでも僕が否定しようとする、ティアナがそれにイラっときたのか怒鳴り声で……

嘘だっ！！

そう言い切つて書庫を出て行つたんだ。なのはも僕もそれを呆然と見送る事しか出来なかつたわけ。その後ティアナから、あの時はすみませんでしたって謝罪されたけど、僕はむしろティアナに謝り返したぐらいだった。

いや、あの「嘘だっ！」発言はかなり効いたんだ。おかげ僕はある結論を出す事が出来たんだからね。そのお礼も込めて言ったら、何かティアナが面食らつた。でも、最後には苦笑してお幸せにって言ってくれたからね。やっぱり彼女も優しい子だよ。

「ユーノ君？ どうしたの？」

「あ、何でもない。ちょっとだけ考え事をしてただけ」

「それならいいけど……今は私の事だけ考えて欲しいな、なんて」

そう言つて照れ笑いを浮かべるのは。うん、可愛い。そんな気持ちを含めた視線を向けると、なのはが益々照れる。あ、これってちょっと楽しいかも。そんな風に考えた瞬間、なのはが僕の手を掴んで動き出した。

早く行かないと時間無くなっちゃう。そう言つて急かすのは。僕はそれに手元の時計を見る。うわ、本当だ。予約の時間までそこまで余裕がない。とりあえず携帯を取り出しタクシーの手配。本局から移動した後の転送ポート前に一台ね。さすがに飛行魔法で移動する訳には行かないから。

こうして僕らは、司書達に微笑ましく見送られながら無限書庫を後にするのだった……

タクシーでクラナガンの街を走る事数分。一軒のレストランの前でタクシーは停車した。先になのはを降ろし、僕は代金を支払って降りる。そして、走り去って行くタクシーの音を聞きながら、僕となのははレストランの外観を眺めた。

そこは高級店ではないけど、それなりに名の通った店だった。でも、庶民的な店だと僕は知っているし、なのはも来た事があるのか表情はやや懐かしそうにも見える。

「来た事があるの？」

「うん、一度だけ。シグナムさんにヴァイス君とアルトなんかとね」

「へえ……意外な組み合わせだね」

「でしょ？ とは言っても、来たのはもう何年も前。まだ六課の設立に動いてた頃」

うわ、それはかなり昔だ。そんな事を話しながら僕らは店の中へ入っていく。中は想像以上に洒落っていて、なのはがあの頃とそのまま変わってない気がすると言っていた。

それに僕は相槌を返した所で店員が現れ、予約した事を告げ名前を名乗る。そして、案内されるままにテーブルへ向かう。すると、なのはがテーブルに着くなり小さく笑った。どうしたんだろ？ そう思って尋ねると、どうもここがその来た時使ったテーブルらしい。そんな偶然もあるんだねって僕が言つと、なのはも頷いて運命を感じるって答えた。

そしてメニューを見つめて、二人であれがいいこれがいいって意見を交わす。ワインは迷ったけど、赤ワインにした。なのはも白よりも赤が良かったらしく、素直に頷いてくれた。次のスープも意見

が一致してコンソメになった。

実はなのはが美味しいコンソメに挑戦中なんだ。理由はその……僕。久方ぶりに考古学者として出席したパーティー。そこで振舞われたコンソメが美味しくて。それを話したら、なのはが再現してみせるって意気込んでくれて……ね。

で、前菜はどうするって僕が聞いたら、なのははサラダにしてと返して、そこで少し意見調整。僕はサラダじゃなくほうれん草のバター炒めが良かったんだ。

結局なのはが、主采で重たい物を食べるんだから前菜は軽めの物がいいって言ったんだ。だから、僕はそれに従う事にした。さて、いよいよメインの選択だ。でも、これはもう二人の意見が決まっている。

「なのは、どれにする？」

「うーん……やっぱり牛がいいかなあ？」

「あゝ、それもいいね。でも、ハトも捨てがたいんだよね」

「ハトって、あの鳥の？ えゝつ、それは何か可哀想だよ」

そう、赤ワインだから肉料理。でも、なのはは僕の意見にやや嫌悪感を見せる。む、それは偏見だよ、なのは。

「なのは、牛もハトも同じ命だ。それを生きるために食べる事は同じ罪だよ。それを外見や行動で判断して区別するのは間違ってる」

そう、命は全て平等だ。生きるために他の命を食べるしかない以上、それについてあれこれ意見するのは間違ってる。誰だって何か

を食べないと生きていけないんだから。犠牲無くして自分の命は成り立たない。

僕はそう思ってるから、菜食主義者だろうがゲテモノ食いだろうが同じだと思ってる。ま、それに賛同してくれとは言わない。でも、植物も動物も生きてるんだ。それだけは忘れちゃいけない。なのはにもそう伝えたら、意外そんな表情を浮かべた後、少し反省するよな表情を見せた。

「そうだね。ハトも牛も同じ命だったよ。うん、もう何も言わないから」

「……無理しなくていいんだよ？ ハトやウサギを食べる事に抵抗がない人は多い訳じゃないし」

「もういいの。それに……美味しいんだよね？」

なのは？ さっきと別人に思えるぐらいどこか楽しみにしてるよね？ ま、いいか。ならハトにしよう。そう思って、決まったオーダーを伝えるために手を上げて店員を呼ぶ。ワインから主采まで告げたところで、店員がデザートはどうしますって聞いてきた。

それに僕もなのはも忘れてたって顔をした。なので、店員が気を利かせて「お任せも出来ませんが？」と言ってくれたので、思わず二人で「それで」と返した。それに店員が苦笑して「畏まりました」って告げて去って行った。

それを見送って僕となのはは、視線を互いに向けて照れ笑い。ふと視線を周囲へ向ければ、周囲も店員と同じで苦笑している人達が多い。それを確認し、次は恥ずかしく思えて二人で縮こまる。

でも、どこか表情は楽しそうだと思う。なのはがそんな感じだからだ。僕の方を見てそんな顔をしてるって事は、きっと僕も同じよ

うな顔をしてるはずだから。そんな風に思いながら、僕はなのはへ最近の事を話題に会話を始める。ヴィヴィオの事なんかも交えて……

「じゃあ……ユーノ君とのデートに」

「なら、なのはとの二人だけの時間に」

「乾杯」

ワインを注いだグラスを静かに合わせる。ガラス同士が重なる音が小さく響き、それに僕となのはの顔に笑みが浮かぶ。正直、フェイトやはやても大切だし、好きだ。でも、それとは違う感情がやはりなのはにはある。

初めて出会った時から、今まででなのはと過ごした時間は多い。その分だけ思い出がある。笑顔が、涙が、想いがある。きっと、それはなのはも同じだろうと思う。だから、何も言わず見つめ合うだけでこんなに満たされるんだ。

その後、次々と運ばれてくる料理に感想を言ったり、なのはが調味料から材料までを、正確に判別していったのには驚いた。味覚が鋭いとは思っていたけど、本当に凄い。何せ、それを主采を運んで来た店員へ告げて答え合わせをしたんだから。

……まさかシェフが直接会いに来て、笑顔で「そこまで分かってくれる方がいてくれて嬉しい」ってなのはに言ってくれるとは思わなかった。僕は呆気にとられたけど、その時のなのはがどこか嬉しそうだったのでよしとした。ちなみに、なのははちゃっかりとコンソメのレシピを教わっていた。うん、抜け目ない。

ちなみにハトは美味しかった。なのはもやや意外そうに思ったらしく、苦笑しながら「これからは、ハトを見て美味しそうって考えそうで困る」って言った。なのはならそんな事はないと思うけど、スバル辺りだと冗談抜きでそう考えそうで怖い。

そう言ったらなのはは笑った後、少し困った表情で有り得ない話じゃないから困るって返した。うん、僕も酷いけどなのはも酷い。今度スバルに会う事があったら言ってみよう。え？ 僕は……：ちょっとしたジョークって言って……：ゴメン。なのはの視線がやや鋭くなったので早めに謝罪。僕は既に対処が逃げ腰です。

最後のデザートは二色のシャーベットだった。色からして予想されるのは……：時期的に葡萄と梨かな？ 日本産の梨は、水分が多くて瑞々しいって大人気。持ち込んだ人は地球出身の先祖を持つ局員だったんだけど、あまりにも人気になったもんだから自分で栽培を始めたんだ。

今じゃかなりの規模になってるらしく、シーズン近くになると梨狩りなんかも出来るって家族連れの予約が凄いらしい。あ、今度ヴィヴィオを連れて行ってみようかな？ なのは、ヴィヴィオって梨は好き？ ……：果物で嫌いな物はない、ね。うん、ヴィヴィオらしいよ。

「でも、どうして梨？」

「ほら、セリカ農園って知ってる？」

「あゝ！ あの元武装隊の」

そうなんだよ。その人は元武装隊所属。しかもシグナムの同僚だったんだ。ロングヘアでややきつめの目つきをした知的な女性

だったんだって、昔は。今は農業のためか髪をばっさり切って

ショートになり、目つきもかなり柔らかくなったってシグナムが言っていた。

そう、シグナム繋がりで八神家はそこへ一度全員で遊びに行っただろう。二ヶ月前に会った時、シグナムがそう話してくれたんだ。どうも、昔目つきが鋭かった理由は周囲に負けたくないようになって思っていた事だったらしく、シグナムは参考にされていたらしいって言って苦笑していたっけ。

そんな事をなのはと話しながらシャーベットを口に入れる。うん、やっぱり予想通りだ。さらっと溶ける感覚。広がる甘味。思わず顔が綻ぶ。見ればなのはも同じ顔をしている。こんな時間もたまにはいいね。そう言ったら、なのはが毎週でもいいよって返してきた。そうしたいけど、お互い忙しいんだよね。そう軽く苦笑して言ったら、なのはが頷いた。そんな会話をしながら最後の一口を食べ、互いに少し落ち着くために談笑をする。そしてそんな良い雰囲気のまま会計を済ませ、店を出る。最後には是非また来てくださって言われたのは、何となく本音のような気がして、僕は揃って笑顔でまた来ますって返した。

「…………さ、じゃあこれでお開きだね」

「あのさ、なのは。もうちょっとだけいいかな？ 話があるんだ」

「ふえ？ いいけど…………？」

僕の申し出に不思議そうな顔を返すなのは。そうだよな。何を話すんだろって、そう思うよね。僕はそんな事を考えながら、ズボンのポケットに手を入れる。そこに感じる感触で気持ちを引き締め直すように。

そして僕は歩き出す。向かう先は特に決めてないけど、あまり

人の目がない場所がいいな。もしくは静かな場所。さっきのお店でもよかったんだけど、言い出すタイミングを見出せなくて頓挫したんだ。

「ね、話ってどんなの？」

「う、うん……かなり重要な話、かな」

鼓動が早くなる。口の中が乾き始める。歩みが自然と速度を増す。でも、なのはと合わせようとそれだけは何とか抑える。すると視界の隅にホテルが見えた。その喫茶スペースには人があまりいないのを見て、僕はここだと思った。

「なのは、ちょっとお茶でもどう？」

「そうだね。ワインの酔いも少し醒ましたいし……うん、行く」

内心で安堵の息を吐きながら僕らはホテルの中へと足を踏み入れる。そして迷う事無く喫茶スペースへ行き、その適当な場所へ腰掛ける。すぐに男性がやって来てもうラストオーダーですって言われたけど、僕にとっては都合がいい。

二人してホットミルクティーを注文。それを聞いて一礼し去っていく男性を見送り、僕はなのはへ告げた。話は注文の品が運ばれてからすると。それになのはも若干疑問符を浮かべたけど、頷いてくれた。

少ししてさっきの男性が二つのティーカップを持って来て、ごゆつくりと告げて去って行った。それに一度だけ口を付け、僕は小さく息を吐く。なのはの方を見れば、同じように一度だけ口を付けただけでカップを戻していた。その視線は僕へ向けられ、話は何？

って聞いている。

……よし、ここしかない。僕はそう決意し、なのはへ話を切り出した。それは、この半年で起きた僕の気持ちの変遷を教える事にもなったけど、構わない。

「あのね、僕はなのは達にごう言った。幸せにする事が出来ないって」

「……うん」

「それは今でも思うんだけど、あの頃と一つだけ変わった事があるんだ」

「変わった事？」

そうなんだよ。あの頃はただ幸せにする力がないって思うだけだった。けれど、今はそこに”でも”が続くんだ。そうなのはに言うのと、不思議そうに表情を変えて僕を見つめる。何が言いたいのか分からないんだろっね。

「……今は、でも僕が幸せになれるって思うようになったんだ」

「そう、なんだ」

「でね、その……凄く厚かましいし、身勝手なんだけど……」

深呼吸をする。なのはがどこか僕の言いたい事を悟ったのかまさかかって顔をしてる。うん、そのまさかだよ。

なのはが何か言う前に、僕は口を開いた。一度しか使えない今だけの、僕だけの”魔法”を成功させるために。それと同時にズボン

のポケットからある物を取り出す。その小箱を開いて、なのはに見せながら。

これからも幸せになっていいかな？　なのはの傍で。

その瞬間、なのはの目が見開かれた。そして、その目がゆっくりと閉じていく。流れるのはの涙。なのはを泣かせた。そんな風に思うけど、決して僕の心はうるたえない。ただ黙ってなのはの返事を待つ。

僕の手にあるのは指輪の入った小箱。その意味は言わなくても分かるはず。なのはは少しの間無言で涙を流して、小さく呟いた。でも、僕にも聞こえるぐらいだったから、きつと聞かせようとしたんだろう。

もう、普通それって女の子の台詞だよ……

そう呟いてから、なのはは軽く目元を拭う。そしてしっかりと目を開けて笑ってくれた。

「いいよ。じゃあ、ユーノ君が幸せになるように、私も幸せになるね」

「うん。僕も出来る限り頑張るから」

「にやはは、期待してるね」

プロポーズしたにも関わらず、どこかいつもと同じ雰囲気。でも、それがさっきよりも親密になったのは互いを感じてる。なのはの視線が指輪に向いたのを見て、僕はそれを静かに手に取った。

そして、なのはへそれを差し出して尋ねる。着けさせてもいい？

そう言つと、なのは嬉しそうに頷いた。それを受けて僕はその指に指輪をゆつくりと滑らせていく。それをなのはがどこか熱っぽく見つめる。

「…………どう？」

「……………うん。でも、よく指のサイズ分かったね？」

「ヴィヴィオから聞いたんだ」

「あ、成程ね。それでヴィヴィオが指のサイズなんて聞いてきたんだ」

なのははそう言つて小さく笑う。気付けば良かった。そんな風に言つて。ヴィヴィオが聞いてきた時、変な感じがしたんだけど、その後折り紙で出来た指輪を貰ったからそれで納得したんだって。うん、それは僕がお願いして渡してもらったんだ。

なのははに万が一にも気付かれなかったために、ね。ちなみに渡した理由はヴィヴィオの誕生日祝いのお返しにした。ヴィヴィオの誕生日は、彼女がゆりかごでなのはと戦った日になったんだ。あの日から高町ヴィヴィオとしての本当の人生が始まったからってね。

なのははしばらく指輪を見つめ続けていた。そして、ふと思いついたんだらう。僕へ心配そうに尋ねてきたんだ。フェイトとはやてはどうなのかって。それに僕ははっきりと告げた。二人も守りたいって思う相手に変わりはない。でも、ちゃんと恋愛対象としては絶対に見ないと告げるつもりだって。

それになのはは複雑な表情を一瞬だけ見せたけど、すぐにいつもの表情に戻して頷いた。きっと二人はそれを受け止めて歩き出せるだらうからって。僕もそれに頷いた。あの二人は強い。僕への想い

以上を抱ける相手を必ず見つけ出すはずだ。

「きつと二人なら、なのはが悔しがるような相手を見つけるよ」

僕がそう思ってたのはへ冗談めかして言っと、それになのはは小悪魔的な笑みを返して……

私には、ユーノ君以上の相手なんていないよ？

なんて答えてきたんだ。うわ……思考が止まる。その言葉だけで僕は無敵になれるよ。顔を真っ赤にしながら僕はそう告げた。それになのはが嬉しそうに、でも苦笑した。そして、残ったミルクティを飲み干して、なのはを送って行こうと思っ立ち上がったんだ。すると、なのはが外へ向かおうとする僕の手を掴んだ。何だろうと思っ振れ向くと、なのはが顔を赤くしながら潤んだ目で僕を見ていた。それに僕の鼓動が高鳴る。同時に邪な想像が浮かぶので、それを心の中で振り払った。

「ど、どうしたの？」

「……帰りたくない」

「え、でも……」

ヴィヴィオはどうするの？ そう言う事は出来なかった。なのはが突然僕の口を塞いできたからだ。そう、自分の口で。

「……ヴィヴィオはナカジマ三佐にお願いして泊めてもらうから。ユーノ君、悪いんだけどヴィヴィオへ電話してもらえる？」

それだけで僕はなのはが何を考えたか理解出来てしまった。どこかでヴィヴィオにごめんと思いながら、僕は携帯を取り出してヴィヴィオへ掛ける。ちよつと長めにコール音が鳴って、ヴィヴィオが出た。

僕はヴィヴィオに心から申し訳ないと思いながら嘘を吐いた。なのはが少し飲み過ぎてダウンしてしまつたつて。そして、その事でナカジマ三佐に頼みがあるから少し代わつて欲しい事を。それにヴィヴィオはなのはの心配をしながらも、ナカジマ三佐へ携帯を渡してくれた。

『おう、どうした？』

「あ、そのなのはがですね……」

僕がさつきヴィヴィオに言った嘘を告げ、そのためヴィヴィオを泊めてもらえないかと切り出した。すると、ナカジマ三佐はそれだけで何かを察したみたいで、苦笑しながら了承してくれた。

『そつか。高町の嬢ちゃんかな。いいぜ。今日はスバルが帰って来てるし、相手にも困らねえ』

「すみません」

『いって事さ。あ、それと……最初はどうしても張り切っちゃうからな。明日に響かない程度に抑えるよ？』

「っ！？」

『じゃあな』

そう言ってナカジマ三佐は電話を切った。完全に気付かれてる。僕はそう思って額に手を当てた。それを見てなのはが不思議そうにこっちを見つめてくるから、僕は簡単にさっきの会話の内容を伝えた。

それを聞いてなのはも顔真っ赤にした。うん、嘔吐いて男と泊まりをするってばれてるし、しかもそうなるの内容は一つしかない。それを悟られ、尚且つ人生の先輩として忠告までされたんだ。これはかなり恥ずかしい。

でも、もう止まれない。そう思ってるのは僕だけじゃない。なのはも同じだろうから。それから僕はホテルの空いてる部屋を取り、鍵を受け取ってエレベーターへ。その間、僕は一度も口を開かなかった。

でも、感じる空気感の一つ。気まずさよりも気恥ずかしさが勝るものだ。これから何をしようとしてるかを理解してる。それが変な緊張を与えてる。部屋の鍵を開け、室内へ足を踏み入れる。まず目についたのは言うまでもなくベッド。そう、ツインじゃなくダブルなんだ。

「……しゃ、シャワー浴びてくるね」

「う、うん……」

なのはが軽く緊張した声でそう言っバスルームへ向かう。僕はそれを見送り、倒れこむようにベッドに向かった。スプリングが小さく軋むような音が聞こえたけど、関係ない。今の僕の気持ちは例えようがない状態だ。

微かに聞こえる水音。それに否が応でも邪な想像が浮かぶ。でも、それを振り払う事が出来ない。なのはと一夜を共にする。それ自体は初めてじゃない。ジュエルシードを探していた頃にそれは経験済

み。でも、あの頃と今じゃ意味合いがまったく違う。

「僕は……今日、なのはと……」

そう呟くだけで僕の中で強烈な喜びと感動が沸き起こる。そして、強い欲求もまた同様に。それを何とか必死で抑え付け、僕はひたすらなのはを待った。なのはが出たら、僕がシャワーを浴びて少し冷静さを取り戻そうと思ったからだ。

やがてなのはがバスローブ姿へ戻ってきた。それを見て僕はやや慌て気味に立ち上がった。理性がそれでかなり危うくなったからだ。なのはへ自分もシャワーを浴びてくると告げて、僕は急いでバスルームへ向かったんだ……

今、僕はなのはとベッドに向かい合うように座っている。何故かお互い正座なのは、まあ緊張してるからなんだろうね。

「え、えっと……」

「う、うん……」

僕が切り出そうとするとなのはも緊張したような声を返す。それだけで僕の中の緊張が高まる。

「……大切にするよ、なのは」

「……うん」

そう言って僕はゆっくりなのはの方へ顔を近づける。なのはもそ

れに合わせて目を閉じた。重なる唇と唇。さつきは動転して分からなかったけど、なのはの温もりやその唇の感触を感じる。

そして、ゆっくりと僕となのはは顔を離して、互いを見つめ合う。なのはの目は潤んでいる。それが可愛くて、そして艶かしくて。僕の中の劣情がどんどん強くなっていくのを感じた。

「なのはっ!」

なのはを強く抱きしめる。それになのはが少し驚いたみたいだったけど、それに構ってられないとばかりに、僕はその体をそのまま押し倒した。そして、なのはの顔を見つめた。なのははそれだけで僕の気持ちを察してくれたのか、小さく頷いた。

僕はそんなのはを見て、自分を叱りつける事が出来た。なのはの顔には、若干の戸惑いと恐怖があったように見えたからだ。僕はそんな風になのはに思わせた事を反省し、優しくしようと自分にきつく言い聞かせた。

「……ごめんね、なのは。もう大丈夫。優しくするから」

「ユーノ君……」

もう一度安心させるようにキスをする。それでなのはの体から力が抜けるのが分かった。僕はそのままなのはの体を隠すバスローブの結び目を解いていく。それになのはが気付くも、それを止めるような事はしない。

そして、僕はなのはの胸へと手を伸ばす。細心の注意を払ってそこを触る。それになのはが小さく震えた。でも、その反応は拒否じゃない。それを確かめるように、僕は優しく胸を、首筋を、聞いた事のある感じる場所と言われる部分を触っていった。

それに、なのは息が少しだけ艶めいていく。それに僕も興奮していくのを感じていた。もういいよ……ね？

そう思い、僕は完全になのはからバスローブを取り去った。そして露わになるなのはの体。正直、それを見た時、僕は欲望なんてものが綺麗に吹き飛んだ。それだけの何かがその光景にはあったんだ。僕が無言で見つめ続けたからだろう。なのはがさすがに我慢出来なくなつて、僕へ戸惑いがちに声を掛けてきた。

「は、恥ずかしいんだけどなあ」

そこでやっと僕は正気に戻った。そして、なのはに「ごめんと謝る。それになのはが苦笑して、雰囲気緩和した。それから、僕となのはは互いの体温を感じるぐらいに触れ合い続けた。躊躇いや戸惑いもあつたし、気恥ずかしさや若干の気まずさを体験しながら、いよいよその時がやってきた。

「じゃあ……いくよ」

「うん……来て」

その言葉を受けて、僕はなのはと一つになった。それから後の事は……いや、止めよう。思い出すだけでかなり悶えたくなる。嬉しさと恥ずかしさと情けなさと、とにかく色々なものが思い出される結果に終わったとだけ言える。

そして、それから僕となのはは本当に恋人として歩き出した。周囲からは、やっとかと言われたけど、僕となのはの気持ちとしては、遂に感じてくれたんだ。

ヴィヴィオは、僕がなのはの指の大きさを聞いて欲しいって頼んだ時から「いつパパになってくれるのかなって、待ってたんです」

と言われ、結婚前にも関らず、僕はパパと呼ばれている。気持ちとしては、かなりの光栄と少しの照れかな。

「……それで？　いつまでその惚気を聞かせるつもりだ。もうこれで五回目だぞ？」

「君だって、エイミイさんと結婚した当初はこんなものだったよ」

「うっ……新婚と恋人は……」

「違う。それに、僕となのはは婚約してご両親に許可までもらったんだ。気分はもう新婚みたいなものさ」

クロノの言葉を遮って、僕はそう言い切った。それにはクロノも反論出来ないのか黙った。ま、本音はこれ以上何を言っても無駄だっと思って思ってたんだろう。既にあれから半年近くが経過しようとしている。

季節が巡り、また春が来ていた。今、僕は海鳴にいる。クロノと久しぶりに話そうってなって、男二人で居酒屋で話してるって訳だ。僕がここに居るのは、なのはのご両親へ挨拶に来たためだ。

その時は色々と驚いた。なのはのお父さんがかなり娘を溺愛してるとは思ってた。でも、まさか本当に話をした後、僕に向かってあんな事を言うなんて……

分かった。なのはの選んだ相手だ。だが、だが一発だけ君を殴らせる。

それに僕は迷う事無く頷いて、その拳を受けた。おかげで今も片方の頬が痛むんだけどね。魔法で治す事も出来た。でも、敢えてそ

れはしないと決めた。この痛みは、なのはのお父さん
んからの許しの証なんだから。 土郎さ

母親である桃子さんは、無茶をする子だから支えてやって欲しい
と言ってくれた。それになのはが苦笑いし、僕は力強く頷いた。な
のはは今、ヴィヴィオと一緒に高町家にいる。結婚式は、迷ったけ
どミッドで挙げようと思ってる。

なのはも僕も気が早いかもしれないけど、場所だけはもう決めよ
うってね。ミッドにしたのは、関係者が集まるのに適しているから。
すずかやアリサ、高町家の人達も来る事は簡単に出来るんだ。

だから、ミッドになった。日取りまでは決まってるけど、きつ
と来年になると思う。理由は……なのはにしか分からない。桜の時
期がいいって言ってたから。物事の始まりに合わせたいんじゃない
かなって思う。

「にしても、フェイトもはやても遅しいな」

「……だね」

そう、二人はそれぞれ僕がなのはと付き合おうと告げた後、笑顔で
こう言った。

そうなんだ。じゃ、なのはを絶対幸せにしてね、ユーノ。私
もきつと幸せになるから。

そっか。なら、なのはちゃんを今度こそ守ってあげてな。わ
たしも、わたしだけを守ってくれる人捜すから。

その言葉の通り、現在二人はリンディさんやレティさんからの
見合い話を吟味し、精力的に出会いを求めている。どうも、僕が後

悔するぐらいの女になって、悔しがらせるんだって息巻いてるらしい。

「いつになるか知らないが、なのはが同員を辞める時が来る。その時、お前はどつする？」

「決まってるさ。首になるまで無限書庫に残るよ」

そこで思い出すのは、なのはのあの日の言葉。

私は、ユーノ君が知らない場所になんて行かないから！

そして、あの時の自分の言葉。

これからも幸せになっていいかな？ なのはの傍で。

僕らは互いの傍にいる。それは何があっても変わらない。それに最近なのはがこんな事を言い出したんだ。魔法が使えなくなって、空を飛べなくなったら、翠屋の手伝いをしながら跡を継ぐ準備でもしようかなってね。

ヴィヴィオが独り立ちするまではミッド暮らしだけど、ヴィヴィオが立派に自分の道を歩き出したらそうしようかなって、結構本気で考えてる。僕はそれを応援する事にした。実際、無限書庫への通勤は転送魔法へ切り替えれば出来ない話じゃない。

そんな事をクロノへ告げたら、呆れた顔をした後に苦笑した。確かに僕ならやりそうだってさ。君だって出来る事ならそうしたいくせに。次元航行艦の艦長職、かなり辛く思ってるらしいね？ そう言ったら、クロノは痛い所を突かれたので黙りこんだ。

そう、クロノは今頑張ってる昇進しようとしている。やはり、たま

に帰ってきてても、子供達にお客さん扱いされるのが相当効いているらしい。でも、現場も好きなものだから中々後方に下がる事も出来ないの、本人はかなり困ってる。

「……お前もヴィヴィオ以外に子供が出来たら、一度長期で家を空けてみればいい。僕の気持ちじゃ嫌って程分かる」

「そうか。なら、遺跡関係の仕事があったら引き受けてみるよ……あ、でも駄目だ。僕が長期でないと無限書庫が立ち行かなくなる。残念だなあ」

「お前、本当にいい性格してるな」

「君程じゃないよ」

そう言ってお互いにお酒を煽る。そして、互いに視線を向け合い、小さく笑う。

結婚が決まってからが始まりだから……気を抜くなよ。

分かってるさ。でも、忠告感謝。

こうして僕とクロノは手を上げて別れた。それが婚約後にクロノと飲んだ最初の機会だった……

そして、遂にその日が来た。桜舞う季節。場所は、ミッドチルダはベルカ自治区の聖王教会。神前って形式も考えたんだけど、なのはがそれは写真だけでもいいって言ったので、式自体には着ない事

になった。

ちなみに、後日写真撮影のために白無垢姿になったのは、とても綺麗だった。何しろ、その写真を見た女性陣が一樣にため息を吐く程に。

現在僕は新郎側の控え室をうろろろしている。その様子を見て正装のエリオとヴァイスさんが苦笑いをしてる。仕方ないじゃないかなのはの方へ行きたいのに、呼ぶまで着ちゃ駄目だって言われてるんだからさ。

エリオとヴァイスさんはそのための見張りだったりする。くそ、二人共覚えてる。知ってるんだ。君らにも結婚するだろう相手がいる事は。エリオはまだかなり先だろうけど、ヴァイスさんは違う。何せ相手が……ねえ。

「なんすか。俺の顔見て不気味に笑って」

「いや、シグナムにティアナ、アルトさんだっけ？ 三者三様の美人だよねえ」

「……あ、僕ちよつとなのはさん達の様子を……」

僕が挙げた名前にヴァイスさんが呻いたのを聞いて、エリオがそそくさと動き出すけど逃がさない。ストラグルバインド！ 見事エリオの動きを封じ込める。悪いけど、サポート系魔法なら僕はまだまだ現役レベルだよ。

エリオは自分がバインドされた事に驚いたみたいだったけど、それでも諦めずにバインドブレイクをしようとするところが若い。でも、少しでも時間が出来ればこっちのもの。

「エリオ、君は家庭的な子と知性的な子とどっちが好み？」

「な、何でキャラとルーみたいな例えなんですか!？」

僕の例えに即座に返すエリオ。うん、それだけで君が二人を意識してるって分かるってもんだよ。そう言っただけであげると、エリオが小さく「あつ……」と呟いて何も言わなくなった。

「……エリオ、やっぱりお前まだ若えな」

ヴァイスさんはそんなエリオへ噛み締めるように告げる。それに完全にエリオが沈黙。しかし、その顔は真っ赤だ。僕がかつて通った道。それを彼らも歩くのだろうか。だとしたら、僕から言える事はただ一つ。

「二人共、諦めが肝心だよ。女の子は恋をすると無敵だから」

その言葉に二人が揃って苦笑し、項垂れた。以前の僕の状況を知っているんだろう。そんな二人を見て僕が少し溜飲を下げていると、そこへクロノとロツサが現れた。当然ながら二人も正装姿だ。

僕はなんだろうと思って視線を向けると、それに二人が小さく笑みを浮かべて告げた。

「色男、許しが出たぞ」

「さ、異性で一番最初に見る権利を行使してください」

それに僕は頷く事も忘れて走り出した。やや慌てて二人がドアから動く。僕は一言ゴメンと告げてそのまま走る。控え室自体はそこまで離れていない。でも、僕にはそれが凄く遠く感じられた。

視線の先に見えてきた新婦側の控え室のドア。その前にはフェイ

ト達が勢揃いしている。表情は一様に苦笑しているけど、今の僕にはそれに鎌っている余裕がない。フェイト達に目もくれず、ノブを掴んで急いでドアを開けた。すると、そこには……

「な、なのは……？」

「もう、少し慌て過ぎだよ？」

純白のドレスに身を包んだ天使がいた。本当にそう見えたんだ。

でも、そんな呆ける僕へなのはが告げた言葉がそんな幻覚を振り払う。僕はもう一度落ち着いてなのはの姿を見つめた。

そのドレス姿は色が同じだからだろうか、どこかバリアジャケットを思い出させる。でも僕は、だからこそなのはに似合うんだなと思った。なのはのイメージカラーはホワイトかピンク。そう、バリアジャケットの色が魔力光の色だ。

「……綺麗だ。それしか言葉が出てこないよ」

「にゃはは……ありがとう、ユーノ君」

そして、なのはは僕のタキシード姿を見て、カッコイイよと返してきた。そんなやり取りをしていると、後ろから多くの咳払いが聞こえた。それに僕となのはが視線を向けると、そこにはフェイト達があった。

「イチャつくのは程々に」

「まだ式始まってへんからな」

「私達は先に式場に行ってるからね」

「アンタ達、少しは自重しなさいよ」

フェイト、はやて、すずか、アリサが口々にそう言って去って行く。

「じゃ、ヴィヴィオも先に行ってます。パパ、ママ、また後で」

ヴィヴィオが笑顔で手を振りながら歩き出す。それに僕らも手を振り返して見送って、僕らは苦笑した。まだ夫婦にもなっていないのに、パパにママと呼ばれる事に慣れていく事がおかしく思えたんだ。式が始まるまでもう少し時間がある。そう思って僕はなのはへ気になった事を聞く事にした。どうして結婚の日取りを今日にしたのかと。何か意味はあるのだろうか。何せ、なのはは絶対今日じゃないと嫌だとまで言ったのだから。

すると、僕の問いかけになのはが少し怒りを見せる。本当に今日が何の日か分からない？ そんな風に聞かれたのだ。それに僕は必死に思い出していく。なのはとの日々を細かく。でも、特に何かあった時期じゃなかったと思うし……

そんな風に思った時だ。僕の中にもしかしたらという出来事があった。でも、自信はない。それでも、万が一の可能性に賭けようと思っただけなのにはへ意を決して告げた。

僕らが始めて出会った日？

正解。私の運命の人との出会いの日だよ。

そう告げると、なのはは静かに涙を流した。そして、僕へゆっくりと近づく。僕はそんなのはを見つめ、何も言わない。なのはの

涙は決して悲しい涙じゃない。そう分かったから。だけど、幸せな式の前に涙は似合わないと思って、その涙を優しく指で拭う。

「ユーノ君、私と出会ってくれてありがとう。ユーノ君が私に多くのモノをくれたんだよ」

「それなら僕も。なのは、僕と出会ってくれてありがとう。なのはの笑顔が、気持ちがこの僕を作ってくれた」

そう言い合って、どちらともなく顔を近付け合う。だが、その時視界の隅に入った時計を見て、僕は慌てた。式の開始時刻がもうすぐまで迫っていたからだ。

「なのは、時間！」

「ふえ？ …… あっ！」

揃って急ぎ出す。でも、なのははドレスだ。走る訳にはいかない。そう思った瞬間、僕はある行動に出た。

「なのは、ちょっとゴメン！」

「え？ わわっ！？」

なのはの体を抱き抱えて、僕は走り出す。お姫様抱っこって奴だ。なのはは僕の首に腕を回し、しっかりと捕まってくれている。その顔が赤いのは、きつとお互い様だろう。そう思って僕は何も言わない。

やがて式場への扉が見えてきた。教会の人が僕らの姿を見て軽く驚くも、微笑みながらその扉を開けてくれる。それにありがとうと

告げ、僕はそのまま式場へと走り込んだ。それと同時に聞こえてくる多くの歓声。男性は拍手喝采で。女性は羨望の眼差しと共に。

それを聞きながら、僕はなのはへ告げた。

どう？ 少しは男らしいでしょ。

それはいいけど、恥ずかしいよぉ……

なのはの言葉にその場の全員が声を上げて笑う。僕も笑った。なのは最初こそ恥ずかしがっていたけど、最後には一緒になって笑った。これが、僕となのはの結婚式の始まり。

後は、最後のブーケトスマまで何も問題なく進んでいった。誓いの口付けも指輪の交換も周囲の反応はあったけど、つつがなく終わっただ。でも、最後のそれだけは異様な殺気が感じられる状態だった。

フェイト達は言うに及ばず、シグナムやシャルさえ意気込んでいるし、キャロやルーテシアなんかもやる気だった。ヴィヴィオはそんな周囲に疑問符を浮かべて、桃子さんに理由を聞いていたりする。

なのはも親友や仲間達の様子にやや困惑していたが、意を決して手にしたブーケを投げ放つ。それは掴もうとする多くの手を逃げるようにある人物の手に落ちた。

「あ”？」

ヴィータは、急に振ってきたそれに心から理解出来ないと言った声を出す。だが、そんな彼女に周囲の女性から非難の声が上がる。ヴィータには相手がいないのだから受け取っても仕方ないって。そ

れにヴィータは馬鹿にされたと捉えたのだろう。

自分にも相手ぐらい居るって反論し、更なる反論を防ぐためにだろうけど、周囲を見渡して一人の人物を掴んだ。でも、それは当然ながら相手にとっては予想外でしかなく……

「な、エリオ！」

「え？ ……ええええええつ!？」

そんなエリオにキャロとルーテシアがどういう事なのかと詰め寄り、ヴィータが六課の頃から色々と世話焼いてたら、そんな関係になったと告げるとスバルだけが成程と頷いていた。まあ、即座にエリオに突っ込まれていたけど。

そんな大騒ぎする友人知人達を眺め、僕となのはは笑う。結婚しても変わって欲しくない事は、何も変わらない。そんな風に思えたからだ。そして、周囲がエリオとヴィータを中心に盛り上がる中、僕らは静かに誓い合った。

愛してるよ、なのは。これまでも、そしてこれからも。

愛してるよ、ユーノ君。いつまでも、ずっとずっとね。

.....

なのはエンド。ルートじゃなくてエンドになってしまった。

次回はフェイトエンドを予定。でも、同じような展開にしか出来な
い気がして不安だったり

ユーノはフェイトの本音を聞きたいらしい

「ただいま……」

実に四日ぶりに我が家に到着だ。あの黒い奴め、覚えてる。今度通信してきたら、エイミーさんから聞いたあの呼び方で呼んでやる。それは、あいつの愛する子供達が、休暇になって帰ってきたあいつに呼びかけるもの。

「絶対お客さんって呼んでやる」

「ゆ、ユーノ？ いきなりどうしたの？」

僕がかなり不敵に笑っていると、それを聞いてエプロンを付けたフェイトが少し不気味に思ったのか、やや困惑気味にそう声を掛けてきた。あゝ、今は君がいるんだったね、フェイト。

つい最近長期任務を終えたフェイトは、僕の代わりに家の事をやってくれている。というか、実はもう半ば同棲に近い。フェイトと僕がこうなったのは、あの日から一月半後。原因は言うまでもなくあの黒い奴。

僕があいつからの資料請求で机に突っ伏してばかりだった頃だ。それをあいつから聞いたフェイトが僕へ言ってきたんだ。

お義兄ちゃんのせいでユーノに負担かかっているから、私がお詫びをするよ！

そう言ってフェイトは僕の家を鍵を借り、掃除に洗濯などをやってくれたんだ。長期休暇の間だけではあったけど。それ以来、フ

エイトは休暇になる度に、こうして僕の家に来てくれる。正直、なのはやても同じような事をしようとしたんだ。

でも、それは辞退して頂いた。だって、フェイトは長期の間の数回。でも、なのは達はたまの休みを潰す。この差は大きいと思ったんだ。なので、こうして家の鍵はフェイトだけが所持する形となっている。いや、問題があるとは思ってるよ。でも、今更返せとは言えないんだ。

「何でもない。ごめんね、変な事言って」

「ならいいけど……あ、ご飯出来てるよ。お風呂も沸かしてあるし……どうする？」

そう、これだ。疲れて帰ってきて、誰かが出迎えてくれて、しかも食事やお風呂が準備されている。このコンボを味わってしまった以上、僕はこれを手放す気にはならないんだ。

あ、フェイト、ご飯が先でお願い。それと、ありがとう。休暇の度にこうしてくれて。そう僕が言うと、フェイトは照れながらも微笑んで首を横に振った。

「ううん、私が好きでしてる事だし。それに……ゆ、ユーノが喜んでくれるだけで十分だよ」

……これでどうして言い寄る男が現れないんだろう？ そう思わせるには十分過ぎる程の可愛さだ。疲れもあるからだろうけど、一瞬我を忘れて押し倒しそうになったのは仕方ないよね？ とりあえず、まずは服を着替えよう。楽な格好になりたい。

そう思っ僕はよろよろとベッドルームへ。それを見てフェイトが小さく苦笑。でも、それがどこか楽しそうに聞こえるから、僕は何も言わないで歩いた。そして、無事にベッドルームへ到着。まず

は上着を……

「ユーノ、もう食べられるからね」

「ありがとう」

キッチンから聞こえてくるフェイトの声に返事をし、僕は部屋着に着替えていく。それと共に気分も寛ぎモードへ切り替わる。うん、やっぱりこうじゃないと。先程まであった張り詰めた感じが消え、全体的に気だるさを感じるけど、それでも心地良い怠惰感だ。

でも、キッチンからの匂いで僕の足が動く。なのはやはりやて程じゃないけど、フェイトも家事をある程度する。一人暮らして培った部分が多いらしいけど、元々リニスって人に料理は軽く教わったらしい。その話を僕へ聞かせてくれたフェイトは、どこか懐かしそうに悲しそうだったのをよく覚えている。

キッチンに到着。そして、すぐにテーブルへ着く。すると、即座にフェイトが僕の目の前へご飯を運んでくれる。海鳴暮らしが長かったフェイトは、実は基本が和洋食の献立で、比率としてはやや和食が多い。理由はリンディさんなのは間違いない。

あの人、変に日本好きなんだもんなあ。さすがに食事にはあの奇妙な味覚は発動しなかったようで、そこだけは安心してあるんだね。フェイトは僕がそんな事を言ったら、非常に困った顔を返したのをよく覚えてる。反論したいけど、出来ない。でも、しないままなのもよくない。そんな風に葛藤していたのが手に取るように理解出来たから。

そんな事を思い出してる内にフェイトもテーブルに着いて、後は夕食開始の言葉を待つだけになっていた。うん、僕が言う事になってるから。フェイトは僕の向かいでその言葉を待っている。どこか

お預けをされた犬を思わせるかも。

「どうしたの？」

「何でもないよ。じゃあ、いただきます」

「いただきます」

うん、すっかり僕も日本慣れしてる。二人揃って両手を合わせて
そう言つて、箸を手にして食事を開始。フェイトは最近料理の腕を
磨くべく、料理本を片手に練習中。その出来た物は大抵僕が食べる
いや、嬉しいんだよ？ フェイトが僕のためにつけてくれるの
は。

でも、たまにやらかすミスが凄い。この前はベタだけど塩と砂糖
を間違えて、煮魚が恐ろしい味になった。でも、フェイトはそれを
僕に出したりはしなかった。味見をして気付いたからだ。でも、僕
はせっかくフェイトが作ったんだからって、それを半ば強引に食べ
た。甘辛いのではなく、塩辛いだっただけでご飯のおかずと考えれば
そう思つて食べたんだ。

さすがに塩分過多な気がしたフェイトが、半身だけしか食べさせ
てくれなかったけど。でも、それ以外は特に問題がなかった。フ
ェイトは天然かもしれないけど、決して残念ではないんだ。僕はそ
うはつきりとこの一月半で知つた。

「そういえばユーノ。今度のお休みはどうする？」

「むぐ……うん、特に決めてないけど……」

「じゃ、買い物に行きたいな。そろそろ洗剤とお米が無くなりそう

なんだ」

「了解。あ、ついでに本も買いたいな。新刊も出てるだろうし……
どう？」

「賛成。じゃあ……」

こんな風に会話していると、時々本当に夫婦になったみたいな錯角を覚える。フェイトは僕と過ごす事が多くなったからか、よく本を読むようになった。次元航行艦付きの執務官だと中々娯楽もないから読書が一番最適なんだって。

ただ、以前はどんな本がいいか分からなくて手を出しかねていたらしいんだけど、僕が仕事柄色々な種類の本を読むからね。簡単に読めて面白いものがある程度紹介してあげたんだ。そうしたら、見事に本の虫の完成という訳。

たまの休みは二人で黙々と本を読んで、昼食時や夕食時に感想を言い合ったり、たまには意見の食い違いから喧嘩みたいになる時もある。でも、それさえ僕らには楽しい時間の過ごし方になってきているんだ。

そう、僕の中の気持ちをゆっくりと変化させるぐらいに、ね。そして、決め手はある噂。フェイトが僕の家に入りしている事をどこかで知ったのか、流れ出したそれ。きっとフェイトも知っている。でも、それを僕に言った事は無い。

フェイト執務官は、スクライア司書長と同棲しているらしい。

それは世間体を考えれば、結構悪印象を与えるものだ。実際、それが流れ出してからフェイトの評判が若干下がったと聞いている。それを聞いて、僕は決めただ。そんな噂を吹き飛ばす事を。きっと

とフェイトはそんな噂を気にしていないと思う。でも、このままにはしておけないんだ。

「そうだフェイト。この前の本はどうだった？」

「あ、凄い面白かったよ。一巻も面白かったけど、二巻はもっと凄い急展開ばかりだったし。予想を何度も裏切られて、思わず唸っちゃったんだから」

僕とフェイトが話してるのは、とある法廷物の小説。何でもこの管理外世界で発売したゲームを基にしてるらしく、タイトルは”逆転法廷”って言うって、かなりの人気作。最初フェイトは、執務官という職業上そういふ物はちよつと……って言うってただけど、執務官は判決を下す訳じゃない。それに、基は作り物だからって言うって読ませたんだ。

結果はご覧の通りで、見事にお気に入りとなった。既に五巻も発売されていて、全巻僕の家にある。そうそう、番外編の”逆転判決”が発売されたなあ。そう思い出して、フェイトにその話をしてみたら身乗り出してきた。

「それって、主役が検事側の？」

「そうだよ。今までの弁護側じゃなく、検事側に焦点当てた話さ」

「そっか……私はどちらかと言えばそっちだから、結構楽しみなな」

フェイトはこの小説を読んで、いかに真実を求める事が難しく、そして尊いかを思い知ったと言っていた。自分もかつて裁判を受けた身だ。色々と思う事もあるんだと思う。その後も僕らは食事しながら本の話に終始した。

後片付けを終えて、一時間程静かに二人で本を読む。その間会話はない。それでも、何故か僕もフェイトも満足だった。心地良い沈黙。そんな表現がしっくりくるような感覚。それを感じていたからだ。

やがて夜も深くなったところでフェイトが立ち上がる。僕もそれに気付いて視線を動かす。フェイトはバスルームへ向かおうとした。

「じゅっくり」

「うん。覗いてもいいよ？」

「フェイトっ!？」

「ふふっ、冗談だよ。でも、ユーノなら許すからね」

馬鹿な事言っていないで、早く行くように。そう言つと、フェイトは笑いながらバスルームへと消えた。まったく、フェイトは時々あやつて僕を挑発してくるんだ。はやてとかならもう慣れてるからいいんだけど、フェイトはどうしても身構えていても動揺してしまふ。

しかも、そういう時のフェイトは大体妖艶なんだ。僕の理性をぐらぐらと揺らすぐらいにね。参ったな。もう完全にフェイトに翻弄されてるかも。でも、そう思いながらもどこか嫌じゃない。

そんな事を考えながら、僕は静かに読書へ戻る。今日、僕はある事をフェイトへ告げようと思っていた。そのために、なのはやはやてにはもうある事を告げている。退路を絶つたって訳じゃないけど、フェイトに僕の気持ちを引きつりぶつけるために。

そう、二人にはこう告げた。僕は、完全になのはもはやても異性として見ないって。それに二人は微かに悲しみを見せたけど、それでも最後には僕の決断を支持してくれた。お幸せに。そう悲しそうな笑顔で言われたんだ。でも、僕はもう後悔しない。そう誓ったんだ。

あの時のような思いは、もうさせない……

思い出すのは、フェイトが完全に自分を見失った時の事。なのはが立ち直らせたけど、僕は何となく気付いている。フェイトはまだどこかであの事を乗り越えられていない。今は乗り越えたと思いついでるだけ。

その証拠に、フェイトは必ず誰かに依存する傾向がある。まずはなのは、次はエリオとキャロ、そして僕だ。本人にその気はないのだろうけど、そんな気がするんだ。捨てられる事を危惧している。だから優しくする。ヴィヴィオへの対処で、なのはとフェイトが軽く意見がぶつかった時からそれぞれが分かる。

フェイトは甘い。優しさとも言えるのだろうけど、どこかそれは自分のためにも見える時がある。なのはは僕へそう言っていた。エリオに、キャロに、なのはに、そして僕に。大切な人に嫌われたくなくて、優しくしてるんじゃないか。

僕はその意見を聞いた時、そう思った。だから決意した。僕はフェイトを支えようって。なのはにはヴィヴィオが、はやてにはヴォルケンリッターがいる。でも、フェイトにはいない。エリオもキャロも既に自分の道を歩き出しているからだ。

「……フェイトに、同情したのかって言われるかもしれないけど、ね」

その時はその時だ。なつてから考えよう。そんな事を思いながら、僕は手にした本の頁を捲る。内容はさつきから少しも入ってこなかった……

フェイトが湯気を出しながらリビングに戻ってきたのを見て、僕は本を閉じて視線を向けた。フェイトはバスタオルでその長い髪を拭いていて、その格好は最近お決まりのYシャツとハーフパンツだけ。以前はハーフパンツじゃなくて下着だけだったから、完全に誘ってるよねって言ったたら、フェイトは少しだけ顔を赤くして消え入るようにうんって返した。

なので、僕が言ったんだ。さすがにそれは勘弁してくれって。なので、今はこの格好になつてる。いや、それでも十分そるものがあるんだけどね。

「フェイト、ちょっといいかな？」

「何？」

髪を拭きながらフェイトはそう平然と声を返してきた。うん、今の僕には何も不安はない。なら、いいかな。そう思っ僕はフェイトへ座るように促して、呼吸を整える。

「……率直に言う。フェイト、僕と一緒に暮らそう」

フェイトの表情が変わる。嬉しさと同時に何故急にっという疑問を浮かべている。当然だろうね。だから、こつ続ける。ただし、今のままでは暮らせないと。それにフェイトが更に疑問符を浮かべる。

「えっと、色々と混乱してるんだけど……今のままじゃどうして駄目なの？」

「フェイトが僕と本音で向き合ってくれないからだよ」

その言葉にフェイトが困惑した。自分は本音を僕へ言っている。そう断言した。でも、その瞳がどこか不安そうに揺れているのを、僕は見逃さない。

「……本当にそうなら、どうして今まで、一度として不満も文句も言ってくれないの？」

「それは、ユーノに不満も文句も……」

ない。そう言おうとしたんだろうね。でも、僕はそれを遮る形で口を挟む。

知ってる？ 君はこの一月余り、ある状況では一度も反論しなかった。僕が少し強く意見を言うだけで、ね。

それにフェイトは驚愕した。そう、フェイトは僕が強く意見を通そうとすると、必ず折れるんだ。「冗談めかすように渋々とか、まるで僕の意見の方が正しいと納得したかのように。それらの内、いくつかは本当にそうだったんだと思う。でも、全てそうとは思えない。僕がそう思っている事をフェイトも感じ取ったのだろう。だからこそ驚愕しているんだ。僕の視線はフェイトを責めるものではなく、理由を尋ねるものだ。でも、それは本心じゃない。もう僕はフェイトがどうしてそうしていたかの答えを持っている。これは、それをフェイト自身の口から聞きだすためだ。

フェイトはしばらく黙っていたけど、観念したみたいに語り出した。それは、大方僕の予想通りだった。怖かった。意見を否定する事で嫌われるんじゃないかと。もう自分の相手をしてくれなくなるんじゃないか。フェイト自身、そんな簡単に僕がそんな事をしないと分かっている。でも、どこかでそう思っただけで不安になるんだって、そう涙混じりに告げた。

自分が我慢すればいい。そうすれば笑っていられる。いつまでも傍で笑ってくれる。ずっと、一緒に居てくれるって。そう思ったとフェイトは語った。僕はそれを聞いて、フェイトの心に刻まれた傷跡はやはり深かった事を知った。

フェイトが恐れているのは、間違いなくあのプレシアから受けた扱い。自分を殺したように殺せずに、どこかでプレシアの笑顔を求めたフェイト。それ故にプレシアに疎まれ、最後には完全に拒絶された。

それを恐れるあまり、フェイトは他者とのコミュニケーションにおいて、最後の最後に自分を殺す事を覚えてしまった。相手を愛すれば愛する程、大切に思えば思う程自分を抑えるように。

「……私、嫌だったんだ。ユーノが私へ笑ってくれなくなるのが、見てくれなくなるのが、相手をしてくれなくなるのが……怖かったっ！」

「フェイト……」

「本音で向き合おうって、あの時思ったはずなのに。それがユーノの部屋の鍵を貰ってから、どんどん消えていくのが自分でも分かった。この幸せを壊したくない。今のままでいいって」

フェイトは涙を流しながら、僕へ今までの思いの全てを吐き出し

ていく。なのはやはやてに励まされ、気付かされて抱いた勇氣。それが僕との仲が親密になるにつれて、徐々に弱々しくなっていた事。もうこのまま特別な関係にならなくてもいいから、傍にいたいと思いはじめていた事。

それらをフェイトは話して、深く息を吐いた。僕はそんなフェイトへ静かに近付き、その肩に手を置いた。フェイトがそれに微かに震えるけど、それを無視して僕はフェイトへ告げた。

やっと本音を聞かせてくれたね。

それにフェイトが驚いて視線を僕へ向けた。僕はそれに笑顔を返す。それにフェイトは信じられないといった表情を浮かべたけど、段々それが喜びへと変わっていく。僕はそんなフェイトの変化に嬉しく思つて頷いてみせる。

それにフェイトが再び泣いた。でも、それはさっきまでのとは違う。それは嬉し涙だ。どこかで不安だった思い。本音を言ったら僕が離れていくんじゃないかとの懸念。それが今やっと確信を持つてたんだ。

ユーノは……やっぱり優しいね。

そんな事ないよ。でも、出来るだけそうあるうとは思ってる。

目元を拭いながら告げるフェイトへ、僕はそう微笑んで返す。そして、フェイトへ尋ねた。一緒に暮らしてくれるかって。それにフェイトは一瞬の躊躇いもなく頷いてくれた。

こうして、僕とフェイトは初めて心から本音を良い合える仲間になったんだ……

「あつ……ユーノ、それ私の読みかけだよ」

「そんな事言っただって、栞が挟まってなかったんだ。だから、フェイトが悪い」

「そんな事ない！ 大体私の場所に置いてあったでしょ！」

「いつから寝室はフェイトの場所になったのさ！」

「右の本棚は私の領土です！」

朝からそんな事を言い争うのは、僕と妻のフェイト・T・スクライアだ。最初、テストロツサかハラオウンのどちらを残すか迷っていたフェイトだったけど、リンデイさんやクロノが言ったんだ。苗字が無くては絆は残るからって。それでフェイトはテストロツサを残したんだ。プレシアとの絆はそれでは残せないからって。

で、今日は久しぶりに二人揃っての休日。でも、ご覧の通り喧嘩の真っ最中。あれ以来、フェイトはどんな事にも意見を述べるようになって、僕としても嬉しかったんだけど……

「共同で使おうって言ったじゃないか？！」

「でも、ユーノが二つあるから個人用にしようって言ったよ！」

……何と言うか、今までの反動なのか結構喧嘩が多くなった。でも、それは決して悪い事じゃなくて……

「……そうだった。ごめん、僕が悪かった」

「えっと……私もちゃんと菜を挟んでおけば良かったんだし、その……ごめんなさい」

そう言っただけで僕らはどちらともなく笑い出す。そう、喧嘩するようになってからのほうが、もっとお互いの事を知る事が出来たんだ。どんな事を考えてるのか。何が好きで何が嫌いなのか。色々な事が分かってくるんだ。趣味や嗜好、それに傾向までね。

ちなみに結婚自体はつい最近だけど、婚約はあの次の日にしたので共同生活は長い。おかげでフェイトの同性愛者疑惑も同棲の噂も綺麗に消し飛んだ。現金なもんだよ、婚約したら同棲が結婚準備のため片付けられるんだからさ。

笑いながら、フェイトはエプロンを手に朝食の支度へ戻り、僕は本を置いてその手伝いへ向かう。僕らの今の住まいは、クラナガンの中心から結構離れた住宅街。その庭付き二階建ての一軒家だ。通勤面でちよつと苦労はあるけど、庭も家庭菜園が作れる程広いし、ローンも二人なら余裕で払えるからここにしたい。それに、何と云ってもここは静かだ。少し風があるような過ごし易い日は、庭に作ったベンチで二人で読書するのがちよつとした楽しみなんだ。

……まだした事は一回だけだけどね。一人でもう二回ぐらいはある。でも、二人ってなると中々、ね。

「ユーノ、コシヨウ取って」

「それと塩も、だね」

「ありがとう」

僕から塩とコシヨウを受け取り、フェイトは嬉しそうに笑みを返す。それに僕も同じような笑みを返した。今日のメニューは……ハムエッグにトースト、そしてトマトサラダかな？ あ、野菜スープもあった。

僕はとりあえずスープを皿に注いで、テーブルへと運んでいく。それを横目で見て、フェイトが小さく笑う。すごく綺麗な笑みで。僕はそれに目を奪われそうになるけど、ある事に気付きやや苦笑気味に告げた。

「フェイト、焦げるよ？」

「え？ あっ！」

慌ててフライパンからハムエッグを皿へ移すフェイト。油断するとドジをしそうなのは相変わらずなんだ、これが。ともあれ、どうやら黒コゲのメインディッシュは回避出来たようだし、一安心かな？ そう思っていると、フェイトが僕へ視線を向けて少し拗ねたような声でこう言った。軽く焦げたのは僕の分にするって。ちよつと、それはどうしてさ？ 僕は何も悪くないよ。でも、フェイトはそんな僕へ小さく呟いた。

今、絶対ドジだなって思ったでしょ？

うん、そんなフェイトが僕は大好きだからね。

僕の反撃にフェイトが真っ赤になって沈黙。一見すると僕の勝利。でも、そうじゃない。何せ、言った僕も真っ赤だからね。いや、どうしてロツサは照れずにこういう事が言えるんだろう？ 僕は本心からの言葉なのに照れるんだけど……

そんな感じで朝食準備も終わり、二人でテーブルに着いて食事開始。このところ、無限書庫にもやっと春が来た。そう、新人司書が何と二人も来たんだ。とは言っても、一人はこれまでよりも大目の手伝ってくれるってだけ。何せ、昔からある意味で司書だったんだ。そう、ヴィヴィオの事。

ヴィヴィオは学校の長期休暇を使って、臨時司書として働いてくれている。本格的にそうなったのは、去年からだけど。実は、魔法学院に入学して初めての夏休みに、する事がないって言って無限書庫に入り浸るから、僕がちょっとした気紛れに教えた検索魔法を見事にマスターしてね。

そこから影で小さな司書長って呼ばれるぐらいの存在になるまでが……いやあ、実に早かった。なので、今や無限書庫の欠かせない戦力となりつつあるかな？　なのは、将来無限書庫司書で武装隊所属になりそうって苦笑いしてたっけ。僕としては是非このまま司書長になって欲しいとこなんだけどなあ。

そんな事を考えていると、フェイトが僕へ相談事があるって真剣な表情で切り出した。その急な申し出に僕は目が点になった。でも、フェイトの表情から只事ではないと思い、小さく咳払いをして姿勢を正す。

「あのね……」

「うん」

「私が子供好きなのは知ってるでしょ？」

それに僕は頷いた。フェイトは幼い頃の反動か、子供がかなり好きだ。今でも孤児院などに寄付などを欠かさない。出来る事なら引

き取りたいけど、次元航行艦付きの執務官では中々面倒が見れないため、それが出来ずにいる。

昔はそれでも、リンディさん達の協力もあつて出来ただけど、今は僕との夫婦生活のためにそれも無理だからだ。その関連の話かな。そう思つて僕はフェイトの話の続きを待つ。

「でね……その……」

でも、フェイトがそこから先を中々言わない。何か戸惑っているようにも躊躇っているようにも見える。

「どうしたの？」

「……そろそろ自分の子供が欲しいな、つて」

その言葉だけで僕は強い衝撃を受けた。そう、フェイトは仕事の事を考えて、する時は常に出来ないようにと細心の注意を払っていたんだ。僕もフェイトが望まない以上、無理に作る気もなかった。やっぱり望まれて生まれてくるのが一番だからね。

「えっと、じゃあ仕事の方は？」

「う、うん。出来たら、産休つて事になる。クロノ……お義兄ちゃんも理解してくれるし」

「そ、そうなんだ……」

そう返して、僕は手元のカップに手を伸ばす。ちよつと喉が渴いてきたな。そんな僕へ目もくれず、フェイトは顔を赤くしながら爆弾発言をした。

「それでね？ えっと……実は今日が良い日で」

っ！？ 危なく口に含んだ物を吐き出すところだった。フェイト、いくら何でも夫婦だからってそれは……

「ふえ、フェイト!？」

「駄目、かな？」

フェイトへ注意しようとしていた僕の中の何かが、それだけで完全に沈黙した。時間を見る。まだ九時前だ。今日は休みだったから朝食も遅めに取っただけ、まだ日が高いな。それでも、僕は無言で立ち上がる。それにフェイトがどこか不思議そうに見つめてくる。

僕は窓へ近付き、カーテンを閉める。それで部屋の中が結構暗くなった。それでフェイトも、僕が何を考えて動いているかを理解したんだろう。いそいそと立ち上がって、寝室へと歩き出す。

クロノ、お前に今度会ったら言わなきゃいけない事が出来た。きっと僕は今日、君の大切なフェイトを少し乱暴に扱ってしまう。だから、次に会ったら心の中で謝っておくよ。ごめんって……

そんな事を考えながら、僕も寝室へと向かう。そこには、既に一糸纏わぬ姿のフェイトがいて、シーツで体を隠すようにしながら僕を見上げていた。

ゆ、ユーノ。その……優しくしてね？

うん、ごめん。それは多分無理。

ユーノとはやてが祝福されるらしい

カーテン越しに差し込む柔らかな日差し。それを感じ、僕はゆっくりと目を開けた。えっと、まず眼鏡を……あつた。ぼやける視界をはっきりしたものにへ変えてくれる物を手に取り、鈍い頭のままですそれをかける。

うん、見慣れた僕の部屋だ。そう認識すると同時に隣で何かが動いた。それに構わず、僕は視線を時計へ向ける。あ、もう八時過ぎてる。ま、今日は休日だからいいんだけど、彼女はとうだったかな？ 昨日、寝る前に確か聞いたんだけど、忘れちゃったなあ。

「はやて、朝だよ」

「ん……もう五時間」

「長いよ。というか、起きてるよね？」

「……そこは、せめて五分だろって突っ込んでくれんと」

そうやや拗ねたような声で僕に文句を言いながら、隣のはやては目を開けた。そう、はやてと僕は平然と一夜を共にしている。そこに至るまでの理由には、ある問題があつた。ヴォルケンリッターだ。なのはやフェイトからも想いを寄せられてる。それを知っていたシグナム達は、僕がはやての事だけを考えられない限り、僕との交際は認めないってはやてに告げた。無論、それにははやては反発。僕は決して三人を天秤に掛けてはいないと、ね。正直、それだけでも僕は嬉しかった。

何とそこから喧嘩に発展し、初めてはやてが家出した。いきなり

無限書庫へ来て、僕の家にはばらく住まわせて欲しいってね。最初は仲直りを薦めた。でも、はやての意思は固かった。

みんながわたしの事を思ってくれとるのは分かる。でも、わたしが好きになったユーノ君を、まるで最低男みたいに言ったんは許せん。

しばらく頭を冷やさせる必要があるって思った僕は、次はなのかフェイトの家を薦めた。でも、はやてはそこだとすぐにシグナム達がやって来るし、最悪なのは達が説得されたりするかもしれないからと言って、僕の家がいいって聞かなかった。

結局僕ははやての事を考え、家の鍵を渡した。下手に断って、ホテル住まいとかにするのもどうかと思っただ。はやては結構な役職に就いてるけど、ホテル住まいをいつまでも続けられる程の余裕はないはずだから。

なので、現在ははやては僕と同居中。いや、過ちは犯してないよ。はやてがそういう事を誘ったりする事は何度かあったけどね。なのはやフェイトには教えてはいる。でも、二人には事情を説明して理解はしてもらった。

決してシグナム達へ教えないでとは言わなかった。きっとシグナム達も、まさかははやてが家出するとは思ってなかったはずだから。実際何度か無限書庫に守護騎士達は現れて、僕にははやての事を尋ねてきたんだし。僕ははやての言い分をそのまま伝えた。それにシグナム達も思う事があつたんだろうと思う。僕へしばらく面倒を掛けるって言うてきたんだから。

そんな事を思い出していると、はやては起き上がって伸びをしていた。本当はベッドルームをはやてに使ってもらって、僕はリビングでって思ってたんだけど、それを止められたんだよね。はやては、

ここは僕の家だし、自分のわがままを聞いてもらってるんだから、そこまでは出来ないって。

で、ベッドルームに以前の布団を敷いて寝る事になったんだけど……現状からも分かるように、はやてはたった一週間で僕のベッドへもぐり込んだんだ。理由は寂しいから。同じ部屋にいるのに同じ場所で寝られないのが嫌だって。いや、勿論僕は言った。そういう問題じゃないよって。でも……

あのな、わたし、ヴィータと一緒に寝る事多かったんよ。やから……その……

つまり、あまりにも長期間一人で寝ていると、あの孤独だった頃を思い出してしまうんだって。そう言っってはやては僕へ言ったんだ。たまにでいいから一緒に寝て欲しいって。そこまで言われて僕が突き放せる訳ない。色々と葛藤はあったけど、はやてと一緒に寝る事にしたんだ。

そう決めたのが、もう今から二週間前。はやてが同居するようになって、もう一月が経った事になる。シグナム達は、まさかここまで長引くと思っていなかったらしい。それは僕もだけどね。で、はやての気持ちを甘く見ていたって言って、現在密かに僕と相談中。はやても最近よくシグナム達の事をそれとなく聞いてくるので、そろそろ和解も近いと僕は思ってる。

「ん？ 何？ わたしの顔じつと見たりして」

「あ、うん……可愛いなってね」

「そうやる？ 自慢してもええよ」

「何てはやてを自慢するのさ？」

「そこは、僕の可愛いフィアンセです……っとな」

「はいはい……」

こんなやり取りも既に慣れた。あ、はやて、今日は……休みだったかを聞こうと思って、僕は気付いた。休みじゃないのなら、はやてがこの時間でここまで落ち着いてないって。なので、その質問はなし。

代わりに違う事を聞く事にする。そう、この後の事だ。朝食を二人で作って、買い物ぐらいは予想出来る。でも、その先が思いつかない。お昼以降はどうするんだろう？ そう考え、はやてへその旨を尋ねる。すると……

「そやな………あ」

「何か思いついた？」

「……うん。海鳴に行ってもええ？ ちょう行きたいところあるんよ」

はやてはそう言って僕に笑みを見せる。でも、何だろう。その笑みはどこか悲しそうで、それでいて懐かしそうで。何か複雑な印象を与える笑みだった。とにかく、そういう事なら早く着替えないと。そう思っ僕は着替えを手にベッドルームを出ようとする。はやても着替えないといけないからね。

そんな僕へはやてが普段と同じ感じの声でこう告げた。別に一緒でもええよって。毎回の事なんだけど、性質が悪いのは、はやてにこの手の事を言われて僕がそれに乗ると、はやては意外と受け止めてしまうんだよね。なので、こういつ手の言葉には……

「それは初夜まで楽しみに取っておくよ」

「なっ!?!」

こつ返す。そう、はやてが言われてびっくりするようなのを、ね。僕はそのままベッドルームを後にし、ドアを閉めた。だから聞こえなかったんだ。僕の言った言葉に、はやてが噛み締めるように呟いた言葉なんかは。

初夜、な。本気ならめっちゃ嬉しいんやけど……

湖畔のコテージ。海鳴にある転送ポートの一つだ。何でも以前六課での出張任務の際、なのは達はここを使ったんだって。はやて達はすずかの家の庭を使ったらしいけど。今回ここにした理由は簡単。人様の庭に無断で現れるのは、あまりよくないと判断したから。

しかし、久しぶりの海鳴の地だよ。僕は本当に久しぶりだ。はやて達は故郷だけど、僕にとっては思い出の場所っただけ。だから、来る理由はないからね。まずはどこへ行くのかな。そう思っってはやてへ視線を向けた。でも、はやては何かを思い出しているのか、ただ黙っているだけだ。

「……はやて?」

「ん。ちよつな、昔の事を思い出したんよ」

「ああ、そうなんだ。そうだよ。はやてにとっては故郷だし、色々思う事もあって当然だよ」

その言葉にはやては頷いて、僕の手を握って視線を向けた。それに僕が視線を返すと、行こうと言って歩き出した。僕はそれに頷いて歩き出したんだけど、気付いた事があったんだ。はやての表情がどこか思い詰めてるって。

でも、それを聞く事はしなかった。きつとその理由ははやてから話してくれるだろうって思ったから。それまで待とう。そう考えたんだ。はやてにつれられるように僕は歩く。見覚えのある街並みが見えた頃には、もうはやてはいつもはやてに戻っていた。

「さて、まずは翠屋やる」

「だと思った」

「で、美由希さん達に報告や」

「成程ね。つまり……」

そこで僕とはやての目が合う。互いに浮かべるのは軽く悪戯めいた笑み。

「僕（わたし）達、結婚します」

綺麗に揃って同じ内容の言葉を告げる。そして、一瞬の間を置いて二人して笑い出す。楽しくてしょうがないって、そんな笑い声を出して。でも、はやても僕も今の言葉を冗談として言ったんだろうか。少なくとも、僕は完全に冗談って訳じゃない。

シグナム達が僕と相談している背景には、それが関係してる。言われたんだ、シグナム達に。いくらのはやて達が構わないと言っても、僕が三人を同じように想っているとしても、外から見る者達には分からないし理解されないと。

そして、それで一番問題にされるのは、他でもないはやてだとも。闇の書事件の関係者からは理解を得ているはやて。でも、かつての被害者や局員の中には、当然ながらはやての事を悪く言う人がある。はやてはそれを甘んじて受け入れてるけど、守護騎士達からすれば居た堪れない。

自分達が犯した過去の罪。そのせいで最後の主であるはやてが悪く思われる事に。だから、シグナム達は僕へ言ってきたんだ。本当にはやての事も大切に想うのなら、潔く決断を下して欲しいと。それは、僕がはやてへの想いを捨ててしまうか、はやてだけを受け入れるしかない。実は、もう一つ選択肢がない訳じゃないけど、それは色々と問題が多すぎて話にならなかつたので除外。

勿論、僕には即答出来る問題じゃなかつた。でも、その答えは確かに出さなきゃいけないものだと思いつた。それにね、はやてとの日々で僕にも色々と思う事もあった。だから、答えを出す時期になってきたんじゃないかなとは思う。

あの三人から想いを伝えられた日から二ヶ月近く経過した。まだ二ヶ月近くなのか、それとも、もう二ヶ月近くなのか。どちらにする、このままでいい訳じゃない。それだけは分かつた。

「あゝっ、笑ったわ。ユーノ君もわたしの考え分かってくれるようになってきたなあ」

「まあ、もう一ヶ月も一緒に暮らしてるしね」

「あはは、そやった。じゃ、行こ」

「うん」

僕がそう言って歩き出そうとすると、はやてがにやりと笑って腕を絡めてきた。それに僕はため息を吐く。でも、そのまま同じような笑みを返して平然と歩みを再開した。それにははやてが若干驚きを見せるけど、一瞬だけ嬉しそうに笑ってから悔しそうに表情を変える。

むぐ、ユーノ君に抵抗力ついた。

おかげさまでね。なんなら肩も抱こうか？

おー、言っちゃないか。あ、どうせならキスして。

公共の場でそういう事を大っぴらに言うんじゃないの。

そんな会話をしながら僕らは歩く。心なしか互いの距離が二つの意味で縮まった気がした……

「いや、楽しかったな」

「……僕は疲れたよ」

翠屋から出た僕らは対照的な表情だった。はやては声からも分かる通り笑顔だ。対して僕は疲れ切った顔をしてるはずだ。原因はなのお父さんである土郎さん。親を亡くしていたはやての事も実の娘のように思っていたらしく、結構色々と言われたのだ。

泣かせないように。これはまだ予想の範囲内。浮気しないように。これも理解出来る。でも、他の女性に色目を使わないように言った時、何故か土郎さんが一瞬だけ桃子さんを見たんだ。まるで、

それをしてら後が怖いぞと僕へ警告するかのよう。

他にも色々と言われたけど、なのはとフェイトの事は教えてなかったから短く終わった。でも、これがもし知られていたら……僕は生きてあの場所を出る事は出来なかつたはずだ。はやてだったから優しいお父さんらしい言葉だったけど、なのは絡みならおそろくもつと厳しい人になっていたはずだ。

何せ、本人が冗談めかしてそう言ったんだよ。これがなのはとだつたらもつと色々あるんだけどな。なのはが愛されてるのはよく分かつたけど、一体何をされるんだろうね、その場合。土郎さんが、なのはが結婚出来ない理由の一つにならないといいけど……

「な、ユーノ君」

「何？」

「ちような……もう一箇所、行きたい場所があるんよ」

そう言つてはやてが視線を向けたのは、小高い丘だった。そこに何があるんだろう？ でも、はやてが行きたいって言っているのなら。そう思つて僕は頷き返す。それにははやてが小さく「おおきに」つて言つて歩き出す。僕の腕と自分の腕を絡ませるのは、もう自然になつていた。

僕も特に何も言わない。気にならないし、むしろ嬉しく思っていたからだ。でも、それをはやてに伝える事はしない。何故つて？ はやてが変な気を起こすから……つて言いたいけど、違う。本当はその逆。はやてが気後れすると思うからだ。

はやては普段から、よくからかいやちよつかいを出す。でも、それが一定以上になるとどこかで身を退いていると、僕は感じた。そ

れを強く思うようになったのは、やはり共に過ごすようになってから。

その中でも、はやては僕へ挑発的行為を仕掛けてくるんだけど、それに僕がたまに本気になりかかる時があるんだ。いや、はやての言動があまりにも酷い時は痛い目を少しは見せないと、って思ってるね。でも、そうなった瞬間、はやてに一瞬だけ恐怖が見えるんだ。

まるで、そんな展開は嫌だっけって言うような……そんな表情。それを見る度に僕は踏み止まって、はやてはそんな僕に疑問符を浮かべるんだけど、それを追求しようとはしなかった。きつと、どこかで気付いてるんじゃないかな？ 僕がどうしてそんな反応を見せるのかに。

「ね、はやて」

「ん？」

「今から行く場所は思い出の場所なの？」

僕は何となく話題が欲しくて言ったんだけど、それがどうも当たりだったらしく、はやてが小さく驚きを見せて頷いた。忘れられない思い出が眠る場所なんだって、はやては教えてくれた。でも、その内容までは着いてからだって言って教えてくれなかった。

周囲はもう日も暮れ始めて、夕日色に染まり出していた。やがて、海鳴の街を軽く一望出来る場所が見えてきた。そこに辿り着くと、はやてが僕から腕を離して、その中央へ歩み寄った。

元気にしとるか、リインフォース。

そこで空を見上げて、はやては確かにそう言った。それで僕も分

かった。初代リインフォース。はやてが名付けた夜天の魔導書の別名である”祝福の風”の名を受けた最初の存在。彼女の最後はなのは達から聞いた。

そうか、この場所から彼女は旅立ったのか。僕がそんな事に気づき、納得したように頷いたのと同時に、はやてがこちらへ振り向いた。そして、僕へ手招きをしてくるので、不思議に思いながらもはやての傍へ。

「紹介するな、リインフォース。わたしの彼氏のユーノ君や」

「いつの間に僕は彼氏になったの？」

「今だけでもええやんか」

「なら、今だけ夫にもなるよ」

「お、言うたな。聞いたか、リインフォース。ユーノ君は旦那様へランクアップや」

「あと数分後には、自然にただの幼馴染へランクダウンするだろうけど」

そんなやり取りを空を見上げてする僕ら。はやてがどうしてここに来たのかは分からなかったけど、でもきつと何か意味はあるんだろう。そう思いながら、僕ははやての言葉を聞く。

はやては空に向かって楽しそうに話しかける。それは、遠い旅の空にいるリインフォースへ届けと思って告げているんだろう。そこに悲しみはない。今の自分の暮らしや最近の出来事などを楽しそうに話していくはやて。でも、それがあつた瞬間、鈍くなる。

シグナム達は……そのな……

家族であるシグナム達。それを話題にしたのは、やはりそれも聞かせないといけないと思ったからだろうね。でも、一ヶ月以上も会っていない。話もしていない。伝えられる事が……今のはやてにはない。

その原因を話す事が、出来ない。言えるはずがないよ。リインフォースは、はやてとシグナム達が仲良く家族として暮らしてると思ってるはず。それを喧嘩して家出しているなんて。でも、隠すのもどうか。そう思った僕は、中々言葉を紡ぐ事が出来ないはやてに代わって、こう告げた。

ちよつとした喧嘩をしたんだ。でも、大丈夫。日本じゃ、喧嘩する程仲が良いって言うからね。その内仲直りして、今以上の絆を取り戻すよ。

それにははやてが驚きを前面に出した表情で僕を見た。それに僕は視線を向けて、小さく笑う。そうだよ。そう言っただよ。それにははやてが言葉に詰まる。でも、頷いて顔を空へ向けた。その横顔は、見た事のないくらい清々しく、そして美しい笑顔だ。

「心配せんでもええよ、リインフォース。ユーノ君の言った通りや。わたしもシグナム達も絶対仲直りするから」

「それに、もしかた喧嘩するようなら、僕が君の代わりにきつく言っておくよ。どうして互いの気持ちを汲んでやれないのかってね」

「っ……そ、そうらしいわ。まあ、何やな。うん……そんな感じなんよ」

はやてはどこか涙ぐんだ声でそう言って、こつ締め括った。

頼りになる旦那様やろ、ほんま。

それに僕は頷くのも、声を返すのでもなく、黙ってはやての肩を抱き寄せた。はやてが驚くけど、そんなの関係ない。そして、空に向かって告げる。ここで言おう。そうだ。僕の決意を聞いてもらう相手として、リインフォースは申し分ない。

「よく聞いて欲しいんだ、リインフォース。君が最初の証人だから」
その言葉にはやてが理解出来ないと小首を傾げる。そんなはやてへ僕は顔を向け、はっきりと、力強く告げる。

「はやて、僕も家族にして欲しい」

「えっ……それって……」

「そして、家族みんなで暮らそう。」九人”で」

僕の言った人数にはやてが目を見開いた。そう、八神家は現在はやてにシグナム達守護騎士四人にリインとアギトの二人を加えた計七人。そこに僕を加えたとしても、八人。じゃ、残りの一人は？
それをはやては察した。察してくれた。

だから、その目から涙が流れていく。表情が歪んでいく。僕はそれに笑みを返すだけ。それにはやてが涙ながらに頷いて、僕の胸に顔を埋める。

リインフォースは、いつも傍にいるよ。はやてとその家族の傍に、ね。

僕がそう呟くと、はやてが小さく頷いた。そう、彼女は旅立った。でも、その心は、想いは、遠く離れた訳じゃない。それは、いつでも確かにあったんだ。目には見えなくても、感じる事も出来なくても、そう信じる事で彼女は生きてる。

はやては、僕の言葉からそう感じ取ってくれたんだと思う。しばらく僕の胸で泣いて、目元を拭って顔を上げた時には、もうはやては元気なはやてに戻っていた。僕の、一番好きなあの笑顔を浮かべるはやてに。

「なのはちゃんとフェイトちゃんにはどう言っの?」

「立ち直り早々それを聞く?」

「気になるもん」

「まあ、確かにそうだろうね。ご心配なく。ちゃんと僕が納得させるから」

「うん、信じとる」

僕の言葉に合格点だと言わんばかりに頷き、はやては笑う。僕はそれに苦笑を返し、一度だけ深呼吸。それにはやてが不思議顔。そうだろうね。何を思ってそんな事をするのか分からないだろうし。対する僕は心臓が高鳴ってる。こういう事をするのは初めてだし、緊張もする。でも、それをはやてに悟られる訳にはいかない。さっきのプロポーズよりも、ある意味ではこっちの方が重要だ。

「で、はやてにお願いがあるんだ」

「何や？」

「二人と向き合う勇気をくれないかな？」

「勇気？ ええけど、どなっ！？」

はやての言葉が不意に途切れる。僕がその口を封じたからだ。自分の口を使って、ね。最初は驚きで体を固まらせたはやてだったが、ゆっくりと状況を理解して、静かに力を抜いて僕へ委ねてくれた。

僕ははやての気持ち嬉しくて、それを込めてキスを続けた。でも、やはりどこかぎこちないのはご愛嬌。優しいキスを目指したけど、経験もない僕にそんな事が出来るはずはないよね。

多分、そのまま四十秒ぐらいはしてた。そしてゆっくりとはやてから顔を離し、その目を見て告げた。勇気、確かにもらったから。そう言うと、はやてが照れながら頷いてこう返した。

しっかり納得させてきてな。あなた。

その言葉だけで僕はもう敵無しだよ、はやて。そして、僕らはそのままそこを立ち去ろうと歩き出した。勿論、腕を組んで。すると、何故か声が聞こえてきたんだ。

主を頼む。

その声には僕は思わず足を止める。でも、はやてには聞こえなかったのか、そんな僕へ疑問を浮かべた。

「どないした？」

「いや、何でもないよ」

その答えに、はやては何か腑に落ちないようだったけど、僕があつさりしてるから聞く程でもないかと思つたみたいだ。そのまま何も言わず歩みを再開する。僕もそれに応じて歩き出す。でも、密かに念話を送る。相手は、届く可能性がないはずの女性。

何言ってるのさ。君も支えてくれないと困るよ。”家族”だろ？

その念話に返事はない。でも、その瞬間僕とはやてを撫でるように優しい風が吹いた。まるで、僕とはやての未来を祝福するかのよう。そして、僕の言葉に答えるように。僕がそんな事を思つて笑みを浮かべる。それに気付いたはやても笑みを見せる。

「今夜は、君の家に行こうか。ね、はやて」

「そうやな。そろそろ帰らんと部屋の埃が凄そうや」

そんな会話をしながら僕らは行く。でも、一度だけ僕は後ろを振り返つた。そこには、当然誰もいない。だけど、だからこそ小さく心の中で呟く。

(君も早くおいでリインフォース。置いてくよ?)

そう心の声を掛けると、また風が吹く。それは僕らを後ろから追いつ越して行つた。すると、はやてが小さく微笑みながら呟いた。

旅はもう終わったらしいわ。

それに僕は驚きを見せる事もなく頷いた。僕と同じ事を考えていたんだ、はやても。それが嬉しくて、僕は笑顔でその風呼びかけようとして、視線をはやてに向ける。すると、はやても僕に視線を向けていた。

そこに込めた気持ちが同じだと思い、僕らは揃って笑みを返して頷いた。そして、息を吸い込んで大声を出した。

お帰り！ リンフォース！！

その後、はやてとシグナム達は和解した。僕がはやてを選んだのも大きいけど、やっぱり互いの気持ちを感じ取ったのが一番の要因だ。はやてが好きになった相手を侮辱した事にシグナム達が頭を下げれば、はやては自分を案じてくれた気持ちを素直受け取れなかった事へ頭を下げた。

そして僕の決断をはやてから聞いて、シグナム達が安堵するのと同時に、ヴィータ、シグナムの順に模擬戦をする事になった。どこかで覚悟はしてたけど、やっぱりだったよ。結果は言うまでもなく僕の敗北。有効な攻撃方法がない時点で勝ちはないからね。でも、僕がそれを承知で受けた事に免じて許しはもらえた。

ザフィーラとシャマルははやてが選んだ相手だし、僕の事もよく知ってるからそんな事はする必要がないって言ってくれた。リンとアギトは元々文句は無かったらしく、シグナムとヴィータにやられた僕に簡単な回復魔法を使ってくれた。

その日は、そのまま八神家で泊まった。寝る場所ははやての部屋になった。とはいえ、二人で寝る訳じゃなく、はやてはヴィータの

部屋で一緒に寝る事になったんだけどね。で、その日の深夜に珍しい誘いがあった……

「主に伴侶が出来た時には、一度共に酒を酌み交わそうと思っ
た」

「ザフィーラ……」

「付き合ってくれるか？」

八神家の男二人、静かにリビングで酒を交わした。ザフィーラはここ数年前から、はやての事を守る役目を夫になる人に託そうと思っ
ていたんだって、そこで初めて知った。

はやてを夫に任せ、自分は他の家族達を守るう。そんな風に考
えていたんだって。だから、サポートが得意な僕がはやての相手と知
った時は、内心で喜んでくれたらしい。

「……いつか主とお前の間に子が出来たとして、その守りを俺はや
らん」

「どうして？」

「子を守るのは親の役目だ。俺は家族だが、親ではない。ユーノ・
スクライア、お前が守れ。主も、子も、お前だけが守れると心得ろ」

ザフィーラの言葉に僕は一瞬呆気に取られるけど、その言葉に込
められた想いを察して確かに頷いた。それにザフィーラも頷き返し
てくれた。きつと、ザフィーラはこう言いたかったんだと思う。

いつも傍にいられる訳じゃないし、自分達に何かあるかも分から
ない。そうなった時、はやてを支えられるのは僕だけだ。そうザフ

イーラは伝えたかったんじゃないかな。

ザフィーラとはその日以来僕を認めてくれたのか、色々な事を教えてくれるようになった。そう、守るための術だ。幾多もの戦場を生き抜いた守護獣の教え。それは、何にも勝る最高の指南書だ。僕はたまの休みや早く帰れた日はザフィーラから教えを受けるのが常になっていったぐらいに。

「これからは、主をお前が支えてくれ」

「あたしにも支えるけどよ、お前が一番傍にいられるだろうしな」

「その代わりに、何でも相談に乗るから」

シグナムやヴィータ、シャマルにもザフィーラと同じような事を言われた。家族であるけど、伴侶ではない。だから自分達では支えきれない部分も出てくる。そこは、僕だけしか守れない。

そう言って三人は僕へ頭を下げた。はやてをよろしく頼むって。僕はそれに頷いたけど、三人に頭を上げてもらった。そして、今度は僕が頭を下げる。僕はまだまだ未熟だし、三人程はやてと共に過ごしていた訳じゃない。だから、こちらこそよろしくお願いしますってね。

そう言ったら、三人が苦笑した。それに僕が不思議そうに思っていると、その理由を教えてくれた。どうやら、主であるはやての伴侶になる事から、僕への扱いをそれと同等にしようと考えていたらしい。

でも、僕が今みたいな風に言ったもんだから、その必要はなさそうと思ったんだってさ。僕はそれに頷いた。そうさ。だって僕らは家族なんだから。そう言うと、三人が揃って目を点にしてから笑い

出した。

「さすがは主が選んだだけはあるな、スクライア」

「ああ、ホントだ。頼りにするかな、ユーノ」

「これからは安心して任せるわね、ユーノ君」

そんな三人からの信任の言葉に、僕は嬉しく思った。精一杯頑張ると誓うと、三人もそれに笑顔で頷いてくれた。ラインとアギトは特に何もないらしく、仲良くしていこうって言われただけだった。僕は妹のように二人に接しよう決めて、その旨を伝えると二人は揃って照れくさそうにだけど、頷いてくれた。

「じゃ、よろしくですよ、お兄ちゃん」

「よろしく頼むな、兄貴」

その笑顔に僕も頷き返す。こうして、僕は完全に八神家に受け入れられた。でも、ここからが苦勞の始まり。なのはとフェイトを納得させ、ロツサにからかわれ、カリムさんとシャツハさんには初対面にも関わらず、是非聖王教会で式をつて迫られるし、ゲンヤさんには、式の時はやてとバージンロードを歩いてもらうように頼みに行く事になった。

そんなこんなで色々あったけど、僕もはやても、そして家族達も元気だ。僕はこの日から少しして、住んでいたマンションを引き払い、八神家へ移り住んだ。部屋ははやてと同室。はやてがそうしたって強行した。ま、もうシグナム達もご自由について感じだったけどね。

「どないした？　ため息なんか吐いて」

「ちよつとね。今までを思い出してブルーになったんだ」

「ほく、ならその気持ちをわたしが吹き飛ばしたる」

「それが他のものまで吹き飛ばしそうだからパス」

今、僕とはやては一つのベッドに横になりながら話してる。はやては、結婚を機に局員を辞める決断を下した。でも、局員になったのには贖罪の意味合いがあったんじゃないかって、そう僕が聞いたらはやてはそれに苦笑した。

そう考えていたのは自分だけだったって。周囲はそんな事だと思っっていない。なら、もうそれに付き合う必要はない。贖罪にならないし、下手すると余計に遺族感情を刺激しかねないなら、ここが潮時だろうからって。そんな風に考えたと言って、はやては笑った。

そして、その後は専業主婦になるって、もう僕に宣言した。そう、あの時の答えは専業主婦で合ってたんだ。収入面も僕だけじゃなくシグナム達の分もある。ラインははやてから離れ、ヴィータの傍付きにするらしい。

「でも、不思議やな。明日はわたしは花嫁さんや」

「それを言うなら、僕は八神ユーノになるよ」

「改めて聞くと、帰化した外国人みたいな名前やな」

「実際似た様なものだと思う」

「いつそ、フェイトちゃんみたいにユーノ・S・八神とか……」

「はやてと同じように名乗りたいんだ」

はやての言葉を遮るようにそう言つと、はやてが赤面した。それが堪らなく愛しく見えて、僕は無意識にその体を抱き寄せる。近づく体と体。見つめ合う視線と視線。僕ははやてに少しからかうように告げる。

それに、明日にはもう一つ大きな楽しみがあるしね。

ユーノ君、結構我慢強いなあ。わたしは、てっきり婚前交渉される思つとつたのに……

そう、僕らはまだ関係を持っていない。初夜まで待つて決めたんだ。はやてはそれを破らせようと色々手を出してきたけど、僕はそれを全て退けた。でも、それは決して意思が固いだけじゃない。ある理由があるんだ。それを今、はやてに言つておこつ。明日の本番になってからだと動揺するだけだろうからね。それだけの衝撃が僕の理由にはある。だから、笑つていられるのは今だけだよ、はやて。

「はやて、明日のそれについてなんだけど……」

「えっと、何？」

僕の表情が少し怖くなつてたんだろうね。はやてはやや怯えるように声を返す。うん、その反応は正しいよ。何せ、かなりの内容だからね、ある意味。そう思つて、僕はとびきりの笑顔で断言した。

今までの分を全てぶつけるからそのつもりで。きつと、色々
と凄いだろうから。

な、なんやてええええつ?!

そのはやての声は家中に響いた。でも、僕が前もって施しておいた結界のため、近所迷惑にはならない。まあ、シグナム達がどたどたと動き出したのは聞こえる。さて、困るのは僕じゃなくてはやてだ。

どう説明するんだろう? 楽しみだな。そんな風に考え、僕は口笛を吹く。それにはやてが恨めしそうな視線を送るけど、僕はそれに知らんぷり。さ、部屋の前のドアに大勢の気配。はやてはまだ慌ててる。

【覚えとき、ユーノ君!】

【覚えておくよ。今のはやての可愛さも一緒にね】

軽く涙目でシグナム達に言い訳を始めるはやてを見ながら、僕は念話にそう返す。そして、僕はふとある事を思っ立ち上がり、窓を開けて空を見上げる。そこには星空が広がっていた。

明日の式には、君も来てくれるよね? リインフォース……

その僕の小さい声に、静かに夜風が優しく吹いたのを感じて、笑み
みが浮かぶ。明日はきつと良い日になる。祝福の風吹く、そんな日
に……

なのはとフェイトにはやてがユーノと家族になるらしい

あの後、夕食を食べてから僕らはずっと思い出話に夢中になっていた。それでも、シャワーは浴び、ベッドルームに布団などを敷いたりはした。まあ、それから時間は忘れて話し続けてるんだけど。時刻はもうすぐ日が変わろうとしている頃。僕達はそんな事も知らず、お喋りに興じていた。なのはと僕との出会いから始まったそれは、もう僕が知る頃を通り過ぎ、今は進学した頃の話をしていた。

「それでアリサちゃんがさ……」

「あ、そうそう、そうだったね。で、すずかに……」

「そやったっけ？ うーん、ちょっと思い出せんわ」

楽しみに話すなのは達。僕はそれを聞いて頷いたり、質問したりと忙しい。やはり海鳴を離れた後の話は知らない事ばかりだ。でも、それを聞くだけになっても退屈じゃない。聞いているだけで、その情景が浮かんでくるんだ。

なのはやフェイトにはやてだけじゃなく、すずかにアリサを始めとする多くの人達。僕も知っている人達ばかりだから、想像もし易い。三人は僕が時折分かるようにと説明や注釈をしてくれる。でも、懐かしいなあ。すずかにアリサって、僕を未だにフェレットだと思ってるんだろうか？

「ね、すずかとアリサって、僕をまだフェレットだと思ってるのかな？」

そう僕が尋ねると三人が予想外の質問だったのか、軽く驚いた顔

をした。そして、三人共に考え込む。あ、これは多分三人も僕の事を話してないな。一度海鳴へ行って、二人に真実を話そう。僕は密かにそう決意した。

すると、なのはがこう言った。多分、そう思っではないんじゃないかって。その理由は、魔法の事を教えた後に僕の事も簡単に話したからだそうだ。大切な友人だと、そう話したからきつとフェレットだとは思ってないはず。でも、なのはのその言葉を聞いて、僕は一抹の不安を感じた。

「なのは。それってすずかとアリサは、ユーノがなのはの友人って思ったかもしれないけど、人間だって思うのとは別じゃないかな？」

僕の抱いた感想をフェイトも抱いたようだ。それなのはが少し疑問を感じ、やや考えて申し訳なさそうに頷いた。はやてがそんなのはに苦笑する。

「いや、なのはちゃんらしいわ。でも、そうなると一度二人にも、ユーノ君の事をきちんと説明しておくべきか」

「そうしてくれるかな？　いつまでも動物だと思われるのは、ちょっとね……」

「分かったよ。なら、近い内に会いに行こう」

僕の告げた言葉になのはが名案とばかりに言った内容に、僕は思わず声が出た。

「え？」

「お、それええな。じゃ、日取りは四人の休みを合わせる事にしよ

か」

「となると……少し先だね」

僕の声には誰も答えようとしなない。ちよつと、何で僕の意見は聞いてくれないのさ？ いや、まあ確かにさ、僕自身が行くのが一番いいのは分かるんだけどね。でも、少しくらい僕の意見をさ……

「ユーノ君は行きたくないんか？」

うん、はやては相変わらず僕の思考を読むのが得意だね。て、あれ？ 見れば、なのはとフェイトも同じような表情を僕に向けてる。あ、そうなんだ。今の僕の心境ってそんなに読まれ易かったんだ。

そう思つて、僕は若干悲しくなつてため息一つ。それに三人がクスクスと笑い、それにつられて僕も笑う。何だかんだでこんなやり取りが楽しいと思う時点で、僕はかなり駄目みたいだ。結局なのは達から離れられないんだからさ。

そこから話は変わつて、今度は僕が話題を提供する事になった。とは言え、僕が三人に話せる事はあまりないんだよなあ。そう思つてこれまでの事を思い出そうとしたら、三人がこう言った。自分達が知らない話が聞きたいって。

それは、つまり僕が三人と離れて本局は無限書庫で働き出した頃の話だ。僕はそれをあまり面白いとは思えなかったから、前もつて三人へ告げた。飽きたら、いつでも言つて欲しいと。何せ、これは結構な苦勞話だ。聞いている方が精神的に参っちゃうはず。

「じゃ、まず僕が本格的に無限書庫入りした頃からね。えつと……」

今とは別世界のような魔窟を思い出し、僕は語り出す。最初はと

にかく整理ばかりの日々。検索魔法を使い、棚毎に本をしまう。それを延々繰り返した。クロノからたまに頼まれる資料請求に応えながらね。あの頃は、まだ量が良心的だったなあ……と、まあこれがざっと半年ぐらいかな？ 今にして思えば楽しい時間だったよ。一日中整理だけで済んだんだから。

そして、それが少し落ち着きだした頃、僕へ一定の裁量権と共に責任が与えられた。人を雇い、無限書庫を機能させるようにって。それを僕は嬉しく思いながら仕事に励んだ。いや、認められたって感じたんだ。どうも、僕がした事をクロノが上層部に報告して、もっと人と資金をって言うてくれたんだって。

「でも、中々人を雇ってすぐに効果が出る訳じゃない。まあ、遣り甲斐は出たよ。徹夜も増えたけどさ」

軽く笑って、僕は話を続ける。人材育成に時間を取られると、代わりに僕の休みを減らす。そうしないと資料請求に応えられないからね。そんな事を続けて、たった四ヶ月で今の初期型ぐらいになったんだよ。いや、あの時は嬉しかったな。僕、これで二週間に一度は一日休みに出来るって思ったんだ。

その後からは、その繰り返しだ。新しく入る人を育て、徹夜で時間を作って資料請求を処理。でも、以前と違って人がいるから整理が進む進む。僕はほとんど資料請求だけで済むから楽だったんだ。

それでね、僕が本格的に働き出して二年ぐらいで……あれ？ 何故かなのは達が僕の手を握ってる。もういいからって、どうしたの？ まだ話は半分もしてないんだ。だけど、話を続けようとする僕を三人が激しく揺さぶる。

「ユーノ君！ もうええ！ もうええからっ！」

「正気に戻ってユーノ！」

「お願いだから、こっちを見て！」

三人が必死に呼びかけてくれたおかげで、僕は意識を切り替える事が出来た。どうも話している内に、どんどん目が遠くなっていったらしく、なのは達は止めようとしてくれたらしい。僕は反省の意を示し、三人へ深々と頭を下げる。

いや、どこかで自分もこうなるんじゃないかと思っていたんだ。無限書庫がここまで至る道は、苦難なんて言葉で片付けちゃいけないものがある。クロノは無限書庫にいる時の僕の天敵だけど、あいつがいなきゃ今もない事を知っている。

(クロノが……無限書庫をここまでする土壌を作らせてくれた)

そうさ。そう思っているんだ、僕は。だから表向きは喧嘩しても、あいつからの請求は、出来るだけ一番に応えるようにしてる。周囲からえこひいきだと言われても、僕はきつとこう言うだろう。

それがどうした。

クロノのした事がどれだけの局員を、命を、未来を守ったと思ってるんだ。それに、あいつだっていつも自分を最優先にしろとは言わないし、僕だって絶対にそうする訳じゃない。優先度を考え、クロノを一番にしてもいい時だけそうするだけだ。

と、そこまで考えたところで、ふと気付く。三人が僕から少し距離を置いて何か相談してるんだ。その内容は聞こえないけど、時々きとらを見るから、僕絡みなんだとは思う。でも、何の話をしてるんだろう……？ あ、終わった。

「ユーノ君、ちょっといいかな？」

「何？」

「あの、ね。ユーノは私達を選べないって言ったよね？」

「選べないと言うか、選ぶつもりはないよ」

「そうやったな。で、それを前提に聞きたいんやけど……」

「うん、もう分かった」

僕がそう言うと、三人して楽しそうに笑った。悪戯を成功させた子供みたいだ。僕はそんな三人に小さくため息。でも、内心では苦笑していたりする。三人が僕に聞きたい事は簡単だ。それでも選ぶとしたら誰がいい？ こう聞きたいんだろう。

どうしても僕を困らせたんだね、君達は。そう思って、僕は正直に答えた。勿論、前置きにどうしても選ぶとなったらとつけて。それに三人が若干息を呑んだ。

「僕は……」

微かになのは達三人が頷く。先を促すように。それに僕は不敵に笑い、言い切った。三人の期待を裏切るために。

「三人全員を選ぶよ」

どうだ。これは予想出来ただろうけど、本当に言うとは思えない。見れば、三人も軽く驚きを見せている。どこかで誰かを選ぶはず。

そんな風に期待してたんだろうけど、そんな罨にかかる訳にはいかないんだ。

だって、誰を選んでも気まずいだろうし、じゃあどうして選んでくれないの？　なんて言われるのがオチなんだ。まあ、僕の中での答えがあの時と少し変わったけど、それを三人に言うつもりはない。きつと、これでこんな質問をしてこなくなるだろう。

そう思って僕は高をくくっていた。でも、これって良く考えたら、自爆してるよね。そう気付いて、「冗談だよって言おうとした時には、もう全てが遅かったんだ。三人は凄く嬉しそうな表情で僕に迫ってきていたんだ。

「ユーノ君、三人って言うと……」

「この状況だよね……？」

「欲張りさんやな、ユーノ君は」

「え、えつと……三人共少し怖いんだけど……」

今の僕の状態って、日本で言う所の”墓穴を掘る”だろうね。と、ちよつと待った。はやて、服のボタンに手をかけるのを止めなさい。フェイトはそれに感化されて、真似しないで。あつ！　なのは、勢い良く頷いちゃ駄目！　何をする気かが分かる三人へ、僕はある決断を下す。

仕方ない。ここは三人にバインドを……って思った時には僕がバインド。あれ？　これって、普通逆だよな？　バインドブレイクをしようにも、なのはにフェイトとはやての合同バインドだ。ミッド式にベル力式のバインドの複合をすぐに解除出来る程、僕は器用じゃない。

そうこうしてる間に三人が動き出す。行動は一緒。まず上着のボタンを一つずつ外していく。

「何か恥ずかしいね」

「き、緊張します」

「いや、やっぱり照れるな」

そんな事を言いながら、三人の手は止まりません。僕は、目を閉じようとすると理性とここまでできたら覚悟を決めると囁く欲望、そして純粹に目をそらしたくないと訴える本能に苛まれていた。一つ目はまだセーフ。少し胸元が露わになっただくらい。

二つ目は結構際どい。それぞれの谷間が……ゴクリ。て、駄目だ駄目だ！ どうして諦めるんだ、そこで！ 周りの事を思えよ！ 僕だって、こんな三重バインドの中を、男の誇りを賭けて頑張ってるんだから！ 自分の流されかかる気持ちを奮い立たせ、僕はもう一度バインドを解除しようとした。

「……あ……」

丁度その瞬間、三人が一斉に声を出した。それに僕は視線を向けそうになりながら、現状を推測してそれを中止。でも、何となくだけど三人が声を出した原因は本人達じゃない気がする。その根拠は、何故か僕への視線を感じるからだ。

と、そこまで考えたところで、何となく僕は気付いてしまった。三人が思わず声を出し、尚且つ僕へ視線を向ける理由に。だが、それを認めるのは正直辛い。何故って？ 言うまでもないだろう。好きな女性の前で、欲情している事があからさまになるっていうのは、

やはり認めたくないものがあるよ。

(……死にたい)

心の底からそう思った。ちらりと視線を自分の下へ向ければ、そこには僅かにはあるが、主張を始めた存在がある。それに三人は気付いたんだろう。僕はそう理解した瞬間、先程までであった気持ち が全て萎えていくのを感じた。

そして、今日程寝間着のズボンの薄さを恨んだ事はないだろう。通気性を良くして快適な寝心地を約束する代わりに、僕の心にまで通気性を発揮しなくても良かったんだ……

「あ、あれがユーノ君の？」

「そ、そうだと思う」

「少し大きくなっとな」

そこ、興味津々で話をしない。年頃の女性が揃いも揃って、頬を染めて男性の象徴の部分を見ながら会話をしないで。僕はもう先程の衝撃で、俯いていた。それに呼応するように主張も俯き、三人の視線も外れている。

でも、意識までは逸れていない。そう感じ取って、僕はつい心の中で叫んだ。クロノがかつてプレシアへ向かって告げたあの言葉を。

いつだって世界は、こんなはずじゃない事ばかりだっ……!!

内心滂沱の涙を流し、僕はそう心から思った。そんな僕の背中に暖かさが触れる。いや、背中だけじゃない。両腕にもだ。

「ユーノ君、元気出して。私達、嬉しかったんだよ」

「だって、ユーノが私達で興奮してくれたって分かったから」

「それにな、女の子のああいう場面を見て、男が反応するんは当然や」

「なのは……フェイト……はやて」

背中からなのはの、右腕からはフェイト、左腕からははやての声が聞こえる。その言葉を聞いて、僕はどうして嫌気が差したかを理解した。三人に嫌われたと思ったんだ。嫌われても関係ないって思っただけなのに、どこかで嫌われたくなかった。

その思いがさっきの気持ちに繋がったんだ。自分が三人へ劣情を抱いた。それを知られて嫌悪感を抱かれたんじゃないかって。それが怖かったんだ。そう判断し、僕は小さく呟く。

やっぱり僕は情けないや。

そんな呟きを聞いて、三人が小さく言葉を返した。それは、言い方は違えど同じ思いが込められたもの。

それでも、ユーノ君は前に進むって信じてるから。

そうやって認める事が出来るユーノだから、私は好きなんだよ。

情けなくてもええよ。わたしが支えたるから。

視界が滲む。胸が熱くなる。三人の思いは同じ。僕への好意。そ

れを感じ取り、心が暖かくなる。何も怖くない。僕は僕のままであればいい。そんな風に思う事が出来るぐらいに。だから、僕はその思いを込めて感謝を告げようとした。

その旨を告げて俯けた顔を上げ、三人にバインドを解いてもらい、一度向き直らせてもらっ たところで僕は現状を思い出した。なのは達がボタンを外していた事を。僕の視界に飛び込んだのは、上着に若干隠れた見事な二つの半円だったんだから。

僕がそれに硬直したのを見て、三人も自分達の格好を思い出したんだろう。大きく慌てはしなかったけど、少し恥ずかしそうにしながら僕を見た。

「えっと……どう？」

なのは、ここでそれを聞く？ 答えは一つしかないんだよ、それ。更に軽く小首を傾げる仕草が可愛いし……

「そ、そそるかな？」

フェイト、君も分かってて言ってるよね？ 後、その照れながらの上目遣いは禁止します。僕の理性が息絶えそうだ……

「覚悟は……完了しとるよ？」

はやて、どうしてとどめを刺しにくるかな？ 潤んだ瞳がとても魅力的だ。うん、これは公平じゃない。そう僕は思った。

だから、僕は上着を脱ぎ始める。それに三人が驚きを見せるけど、関係ない。いや、三人が脱ごうとしてるんなら、僕も脱がなきゃ公平じゃないからね。

決して余りの光景に思考が混乱した訳じゃない。それに、何となく暑いよね、この部屋。僕が上着を脱ぎ去ると、三人が揃って意外そうな表情を見せた。どうしてだろう？ そう考えた瞬間、なのは声で答えが聞こえてきた。

ユーノ君、意外としっかりした体してるね。

そう、遺跡関係の仕事をしていたせいもあって、体はただ痩せ細っているだけじゃない。筋肉だつてちゃんと付いてるんだ。まあ、ここ数年は無限書庫での仕事ばかりだったから鈍ってるとは思っただ。

それに、無限書庫は無重力だから長時間いると、体が弱くなる。そのリハビリじゃないけど、暇を見つけて最低限のトレーニングはしてるんだ。そのおかげか、そこまで心配されるような体つきではないんだよ。

と、そんな事を話していたのもそこまで。はやてが僕の体を触りながら、にやりと笑ってこう言った瞬間、空気が完全に変わったんだ。

男の人も胸は感じるらしいな、ユーノ君？

そこから僕の胸を執拗に触りだすはやて。僕は止めてくれって言っただけけど、その瞬間はやてが変な事をしたせいで声が裏返って、なのはとフェイトが顔を赤くした。もう、その後の事はよく覚えていない。

必死にはやてを止めてる内に、その脱げ掛かった上着が徐々にずり落ち、その肌を晒したのを境に、僕は考えるのを止めた。そこから先は、もう察して欲しいとしか言えない。一つだけ言える事は、翌朝僕はかなり複雑な思いでシーツを洗濯し、なのは達はどこか嬉

しそうではあるけど、歩き辛そうに仕事に出かけたぐらいだ……

結局、あの日に全てが決まった。あの後、僕は時間を作り、三人への想いを全て打ち明けた。そして、恥を承知でこう告げた。三人全員を守らせて欲しいと。

それに三人は驚きもせず、ただどうやってそれを可能にするのかと心配してきた。僕は、それを可能とする手段を探した。とはいえ、ある程度の知識はあったから、比較的簡単に見つけ出せたんだけど。

ミッドチルダは、基本的に一夫一妻。でも、基本的にはだ。文化や風習の違う場所がある。そう、一番分かり易いのがベルカ自治区。あそこはベルカの伝統を守っている場所。その決まりは古代ベルカの空気を濃く受け継いでいる。

その中には、婚姻関係もある。重婚が許されているんだ。一人の男が複数の女性と結婚する事やその逆を認めている。後者はここ数十年で加えられた内容だけど、前者はベルカ時代の事を考えれば納得がいく。

戦乱の世であれば、戦って散るのは男が多い。なら、必然的に男女比は男が少なくなっていく。しかし、一夫一妻では子供の数が限られる。それがもたらす人口減少を阻止する意味合いもあつたんじゃないかってね。

それに、優秀な騎士はそれだけ多く子を残すようにしていたらしい。なので、ベルカ自治区では双方の合意があつた場合、重婚が出来るんだ。まあ、その場合は式自体が古代ベルカ式になっちゃっただけ。

「合法的に夫婦になるには、現状これしか手がないんだけど……」

僕が三人へそう伝えると、予想通りそのまま考え込む。でも、話し合われる内容が僕の想像とは違った。

「ドレスって一般的な物を着れるのかな？」

「はやて、その辺りは？」

「確かそうやわ。ただ、色々と作法があったような……」

「あ、儀式に近いんだ」

「そうなんよ。儀礼的なもんになるし、結構堅苦しいはず」

「でも、それ以外はどんなの？ 普通と変わらない？」

女性三人で色々話し合う。その内容が全てこれを受けるか否かじゃなく、受ける事前提で式の内容について話してるんだから、僕としては少々拍子抜けした感がある。受け入れられるとは思っていただけ、そこまで簡単にはいかないと思っていたんだ。

だから、説得出来るように結構調べてきてるんだけど……必要無かったみたい。僕を置いて、三人だけでどんどん話を進めているし。こうして、あれよあれよと言う間に話が纏まり、僕らは結婚式の打ち合わせをする事になる。

はやての友人である騎士カリムを通して行なわれたそれでは、式自体が何十年振りのものになる事に加え、管理局の有名エース達が揃って結婚する事もあり、かなりの混乱が予想された。出来るだけ内輪でやりたいと思っていたから、僕らは何とかならないかとカリムさんに相談した。

マスコミに来られると色々と問題だ。そう言うと、カリムさんは苦笑しながら頷いて、はつきりと言いつつ切ってくれた。ここはベルカ自治区。そして、聖王教会だ。つまり、いざとなれば強権発動も辞さないと言ってくれたのだ。これには、僕も驚いた。そこまでしてくれるとは思わなかったからだ。

「ご心配なく。これは、皆さんのためではなく、ベルカの儀式を守るためです。厳かな式を邪魔されたくはないですからね」

「カリム……ほんまにおおきに」

暗にこちらへ気にする必要はないと言ってくれたカリムさんに、はやてが嬉しそうに笑顔を返した。僕もなのはもフェイトも感謝を述べる。それにカリムさんは優しい微笑みを返してくれた。これで、実務的な問題はほとんど無くなった。残るのは、周囲への理解を得る事だ。僕はそう考え、早速行動を起こした。

まずは高町家。土郎さんは、意外な程冷静に話を聞いてくれた。なのははついて来てくれたが、土郎さんとの話し合いには席を外してもらった。これは、僕と土郎さんだけじゃないと意味がないと思っただけからだ。

「……それで、君はなのははだけでなく、フェイトちゃんとはやてちやんも妻にすると?」

「はい」

「それがそつちの世界では許されている事で、なのは達も承知しているのは理解した。でも、それで本当に君はなのはを、三人を幸せに出来るのかい?」

怒りを殺してる訳ではなく、心から疑問を抱いたからこそ聞いている。そんな風に土郎さんの声は静かだった。僕はそれに膝上の手を握り締め、小さく息を吸う。ここで嘘などを吐く訳にはいかない。そう思い、僕は本心を告げた。

僕は三人を幸せにする事が出来ないと思った。でも、だからってそれを覆す努力を怠ってはいけないんだ。そう今は思っている。だからこそ、自信を持ってこう言った。

「分かりません。でも、そう出来るよう全力を尽くすだけです」

「分からないのに、君は三人もの女性をもらおうとしているのか？」

「お言葉ですが、土郎さんは奥さんと結婚する時、幸せに出来ると断言出来たんですか？」

僕の言葉に土郎さんが初めて言葉に詰まった。僕の問いかけがどれだけのいかは良く知ってる。断言出来るはずがない。幸せの定義なんて人それぞれだ。そこに絶対の正解はない。きっと、土郎さんも僕と同じで、分からないけど全力で幸せにしてみせると思ったはずだろうから。

僕は真剣な眼差しを土郎さんへ向け続けた。答えてもらおうとは思わない。だけど、結婚にも正解はないんだ。出来る事があると思えば、その絆を大切に、自分達が正解と思えるようにしていくだけだ。

「誰だつて、結婚相手を幸せにしたいくない訳ないじゃないですか。僕もそうです。断言出来ないけど、僕の全てを賭けて三人を幸せにしてみせようと思っっています。不幸にするかもしれない。苦しませるかもしれない。でも、今の僕はそんな負の可能性じゃなくて、明

るい可能性を信じてるんです」

「……それが君の答えか」

「はい」

甘いかもしれない。でも、これが僕の本心だ。土郎さんは僕の答えに頷くと、静かに立ち上がった。そして僕の横へと歩いてきて、真剣な表情で見下ろしながらこう告げた。

なら、その結末を見せてもらうよ。ユーノ・スクライアが出した答えの、ね。

それが意味する事を理解し、僕は心から驚いた。すると、そんな僕へ土郎さんが苦笑しながらこう言った。最初は優柔不断な奴だと思っていた。だから、その言葉にも迷いや悩み、そして根底に軽さが見えるだろうと踏んでいたんだって。

でも、僕が予想以上にしっかりと意見を告げ、迷いも悩みも乗り越えて答えを出したと感じたらしい。だから、信じる事にしたんだそう。なのはが選んだ僕を。

でも、この後結構な強さで僕は殴られる事になる。理由は、やはりなのはを妻にする事。ただし、目立つ場所だと後でなのはが煩いだろうから、お腹にしてもらった。土郎さんも僕がそう言ったら、何かを想像したのか怖がるように頷いてくれたんだから。

その後、なのはを高町家に残し、僕は別の場所へ向かった。余談だけど、僕がなのはの事を指摘した時の土郎さんを見て、僕は将来の自分を見た気がした……

「で、フェイトだけで飽き足らず、なのはとはやてまで嫁か。お前も相当だな」

「だと思っ」

同じく海鳴はハラウン家。クロノが久しぶりの休暇だったのを思い出し、ここにも訪問。腹部がまだ痛むけど、泣き言は言っていない。エイミーさんは雰囲気を感じてか、子供達を連れて公園へ出かけて行った。本当に空気を読むのが上手い人だよ。

「それで、フェイトに父はいないから……代わりに僕か」

「うん。リンディさんはフェイトが決めたのならって、実にあっさりしてたから」

「母さんめ……」

クロノがやや呆れるように呟く。気持ちは分かる。僕だってまさか、たった一言で済まされるとは思ってたんだ。でも、思えば当然かもしれない。リンディさんはフェイトの母親。つまり、その娘が選んだ道を後押ししてやりたいだけなんじゃないかな。

でも、父親や兄は男だから、そこに微かな嫉妬みたいなものが生まれる。例えるのなら、自分の愛する女性を他者に取られる感覚でも言えがいいのだろうか。きっとそれがあるから、結婚問題は大抵女性の男親の方が肝になるんだろうな。

僕がそんな事を考えてると、クロノは大きいため息を吐いた。だが、その表情はどこか呆れていて、視線は僕を見つめている。何か僕に呆れるような要因があったかな？ そう思って見つめ返す。す

ると、クロノはその表情のままこう言った。

好きにしろ。ただし、フェイトが泣くような事があれば黙ってないからな。

義兄バカ全開の台詞だ。そうは思うも、僕はそれに真剣な表情で頷いた。クロノがフェイトの事を大切に思ってるのはよく知ってる。エイミーさんがいなかったら、おそらくフェイトはクロノと愛し合っただんじやなかったって、そんな馬鹿な事を考えるぐらいにね。

その後、少しだけ軽い雑談をした。とは言え、式に関する事もあったから雑談ではないのかもしれないけど。話が終わり、僕はお暇しようと思つて玄関へ向かう。クロノは律儀に見送るためにそれについて来た。

「じゃ、お邪魔したね」

「今度来る時は義弟も同然か。妙な気分だ」

「それはこっちの台詞さ」

出会つてもう十年以上。口が裂けても親友なんて呼ばないけど、でもどこかで似たような存在とは思っている。義理の兄弟になるとしても、きつとこんなやり取りは変わらない。僕とクロノは、どうなつても僕とクロノだ。

そんな事を思い、僕は最後に不敵な笑みを見せてこう言った。じやあね、義兄さんと。それにクロノが同じような笑みを返し、またな、義弟と告げて互いに笑った。そして、無言で片手を上げ合い別れた。

「……義兄、か」

僕は孤児だった。親は幼い頃に亡くし、顔も覚えていない。だから、僕も家族というものに憧れがある。高町家やハラオウン家、八神家などの多くの家庭を知っているけど、僕はそれを見て羨ましいと思う事は無かった。

思えば、それは妬みに変わると思ったから。そんな僕が今、家族を得るような行動をしていて、親友と内心想っている相手が義理の兄となる。じわりと視界が滲む。心が熱くなる。

親友であり義兄。そんな都合のいい話があっただけなのか。そんな風にも思っけど、思考とは正反対に感情は喜びを示している。そう、そうなんだ。なのは達と夫婦になる事は、その家族達とも繋がりが強くなる事なんだ。

一人だった僕の心が、ゆっくりと他の誰かと繋がっていく。そんな感じがして、僕は知らず笑顔になっていた。足取りもどこか軽いがする。そして、僕は高町家に向かって歩き出す。途中なのは、これから戻ると念話をするのを忘れずに。

後は八神家か……

ある意味で一番の難関だろう名前を呟き、僕はため息を吐くのだ。た……

はやてに連れられ訪れた八神家。そこには、シグナム達が勢揃いしていた。当然だ。僕が無理を言って、何とか時間を空けてもらっただけだから。

「わざわざありがとう」

「いや、気にするな。こちらとしても、お前自身から直接聞きたかったのだ」

僕が頭を下げるとシグナムが代表してそう返した。既に簡単にはやてが重婚の事は伝えたい。それを伝えた上で、僕はシグナム達へもう一度説明をするつもりだった。そして三人への想いを告げ、結婚へ納得してもらえるようにと。

だが、当然ながらシグナム達の視線はやや鋭い。古代ベルカの時代を生きた彼女達だからこそ余計に、今回の事は思うものがあるのかもしれない。僕はそう思いながら、説明を始めた。

どうして現状に至ったのか。今、自分がどういう想いで動いているか。それだけを伝える。決して高町家とハラオウン家に許可をもらったとは言わない。それを言う事は、どこか嫌らしい気がしたからだ。

「……と言う訳なんだ」

「そうか。お前はお前なりに考えた末の結論という訳か」

シグナムがそう言って、視線を周囲へ向ける。すると、まずシャルが頷いて僕へ告げた。

「周囲からの視線には堪えられるなら、いいわ」

ベルカの法に従い、重婚するのはいい。でも、それを全ての人が受け止めてくれる訳ではない。それを承知し、どんな風に思われても言われても耐え忍ぶ事が出来るのなら、反対しない。そうシャルは説明した。

僕はそれに頷いた。ちゃんとなのはとフェイトにもそこは通告済みだ。僕ら四人はもう意志が決まっているんだから。それをシヤマルも聞き、ならばと視線を動かした。

「俺は、特に言うべき事はない。主を頼む」

ザフィーラはそう言い切って、僕へ視線を向けた。そこに込められた様々な想いを受け、僕は力強く頷いた。言葉ではなく、行動で示してみせる。そう返すと、ザフィーラはどこか嬉しそうに目を細めて頷いた。

それを見届けて、今度はラインとアギトが口を開いた。とは言え、どうも二人はそこまで重くは考えていないのか、それともはやてを信じてるのかあっさりところが告げただけだ。

「ラインは、はやてちゃんがしたいようにするのがいいと思います」

「アタシも。人生って、その人が悔いを残さないようにさせてやるべきだと思っし、さ」

そう告げるラインとアギト。でも、何故かアギトだけは何かを思いつ出したのか、少しだけ懐かしそうな表情だった。ラインとシグナムだけがそれに何かを感じ取ったのか、アギトへ視線を向けていた。その表情はどこか悲しそうにも見える。

そんな空気を変えるように、ヴィータが大きく咳払い。そして、僕を睨みつけるように視線を動かす。うっ、少し怖いかも。でも、ここで怯んだら駄目だと思ひ、何とかその視線を受け止める。

「あたしは反対だっ！ ……って、言いたかったんだけどよ」

そこでヴィータはやや困ったように頬を掻きながら告げる。アギ

トの言葉を聞いて、どんな結果になっても、はやてが選んだ道を行かせてやるべきかと思ってしまうらしい。それに、僕の覚悟も本物だと分かってくれたらしく、ならどれだけごねても無駄だと感じたんだった。

最後には、僕へやや拗ねながらも、一度言った事は曲げないと信じてやるからと言ってくれた。それに僕は約束すると返した。そして、最後は当然ながらシグナムが口を開く。

「では、これで全員の意思は揃ったな」

「え……」

「今のお前の心には芯がある。ならば、私は構わん。真面目なお前の事だ。ここまで来る間にかなり苦しんだはず。なら、その結論はかなりの重みを持っているからな」

シグナムはどうも僕の性格を考え、重婚を決めた時点で悩み苦しんだと理解していたらしい。だから、反対するつもりは最初から無かったとの事。僕はそれを聞いて若干肩透かしを喰らった気分になった。

それをどうして最初に言ってくれなかったんだろう。そう思ったけど、シグナムの立場を考えれば納得出来た。彼女はヴォルケンリッターの将。そのため、自分の意見が他のみんなへ与える影響を考え、最後まで黙っておく事にしたんだろうとね。

こうして八神家の許可も得た。大きな問題はこれで終わった。そう僕は思っていたんだ。でも、まだ残っていたんだ。そう、かなりの問題が……

「确实一軒家だね。しかも、かなりの大きさと部屋数がある」

そう、住居の問題だ。新居をどうするか。結婚式の前にそれを相談しないといけなかったんだ。何せ……

「そうなんだよ。私達四人にヴィヴィオ、後はシグナム達もいれるとかなりの人数になるし」

「いや、別にわたしは……」

フェイトが挙げた名前にはやてが何か言おうとするけど、それを遮ってなのはが口を開いた。

「駄目だよ。はやてちゃん達は一緒にいないと。みんな揃っての八神家なんだから」

「僕もそう思う。はやてと離れて暮らすなんて、シグナム達はきつと嫌だと思っし」

そうだ。新居は僕ら四人で暮らす訳じゃない。ヴィヴィオにシグナム達も家族として共に暮らさないと。最悪新居を現在の八神家の近くにする事で手を打たないといけないけど、出来る事ならシグナム達も一緒に家で暮らせるようにしたい。

金銭面の問題は心配ない。僕達四人だけでも結構な収入があるし、そこにシグナム達のもも加えればかなりのものがある。それを計算に入れれば、新築も可能だ。銀行の融資だって受ける事も出来るだろうしね。

はやては、僕らの言葉を聞いて感極まったのか少し俯いた。八神

家の中核は言うまでもなくはやて。そのはやてを抜いて、シグナム達が普通に暮らせる訳ない。それに、そんな八神家を僕らは見たくないんだ。

新婚生活にならないなんて、そんな気持ちは欠片もない。僕らは家族になるんだ。なら、それは共に生きる事。特に、はやては僕とは違った意味で家族に対する思いがあるはずだから。

「……ええのかな？」

「いいに決まってるよ。ね、ユーノ君」

「うん。むしろ、僕の方こそそうしてくれると助かるんだ。ヴィヴィオの事もあるし、家族が多ければ楽しい事は倍になって、嫌な事は半減出来るからね」

「そうだね。シグナム達と一緒に暮らすって考えたら、それだけで楽しくなるよ」

僕ら三人の言葉にはやては心からの笑顔を見せてくれた。そして、すぐにでもシグナム達へ伝えると言って携帯を取り出した。はやての嬉しそうな声を聞きながら、僕らは新居をどうするかを相談し始める。

将来の事も考え、三階建てにしようかとフェイトが言えば、バスルームは広い方がいいとなのはが言う。はやても電話を終わらせ、それに参加。意見としては予想通りキッチン関係。僕はそれらの意見を書き込みながら、ふと思った事があるので尋ねてみた。

「それで、僕らの寝室はどうするの？」

その言葉で三人が固まった。そして、それを見て僕は自分の迂闊

さを呪った。それでも、三人は顔を微かに赤めながら僕へ告げた。別々がいいならそうするけど、最終的な決断は任せるからって。それを聞いて、僕は躊躇いなく答えを出した。

四人で一部屋ってね。いや、決して邪な考えはないよ。少しでも部屋数を確保するためには、その方がいいなって判断したからだ。そりゃあ、最初の夜の出来事はかなり強烈だったけど、でもそれを意識した訳じゃ……

【ユーノ君、ちょうスケベな顔しとる】

はやて、念話で教えてくれてありがとう。でも、表情が悪戯っぽく笑ってる。そして、視線をこっちに向けてるから、なのはとフェイトが僕を見てるよ。これじゃ、結局意味無いじゃないか。ま、それが狙いなんだろうけどさ。

予想通りなのはとフェイトにもいやらしい顔をしてるって笑われた。仕方ないじゃないか。だって、あの夜の事を思い出したんだから。そう返すと、三人が少し照れた。初めての夜にしては、色々と内容が凄まじかった。でも恥ずかしくっていないみたいだし、三人はもうそれを良い思い出にしまったみたいだ。

「とにかく、基本は新築にしよう。で、僕は不動産関係を当たってみるよ」

「あ、ならわたしは内装関係」

「じゃ……私は建築関係かなあ？」

「私はどうしたらいいかな、ユーノ」

「じゃあ、フェイトは金銭関係をお願い。現状での僕らの資産がい

くらとか、どこまでなら融資を受けれるとかをはつきりさせておいてくれるかな？」

僕がそう言うと、フェイトは分かったと頷いてくれた。長期休暇があるフェイトなら、時間の掛かりそうな話も出来るだろう。こうして、僕らは動き出した。結婚とその後の事のために……

「パパ、どうしたの？　ボくっとして」

「うん、ちょっとね。昔の事を思い出してたんだ」

ヴィヴィオの声に僕は意識を現実へ引き戻した。あの結婚前のどたばた。今では遠い日の思い出になりつつある。式はそれはもう厳かだった。端から見っていたヴィヴィオ達が終わった後、息が詰まるかと思つたと告げる程に。

でも、そのおかげか重婚式なんて印象を吹き飛ばせたみたいだったけどね。新居はやはり新築となった。何せ、あの後家族全員から意見を求めたんだ。そうになると、希望を叶えるには自分達で建てるしかないってなってさ。

「昔の事？」

「そう。結婚する前の頃だよ」

「あー、あの頃かあ。懐かしいな」

そう言ってヴィヴィオは笑みを浮かべる。最初は、我が家の末っ子だったヴィヴィオ。だが、今はちゃんと姉として下の面倒を見て

いる頼れる長女だ。今日は学校が休み。卒業したら、本格的に管理局への進路を歩き出そうと考えている十二歳。

と、そこへなのはと同じ色の髪をした男の子が現れた。今年で四歳になる僕となのはの息子のマサヨシだ。名前の由来は日本語の”正義”。重い意味の名前かもしれない。でも、少し気が弱いけど優しく素直に育ってくれている。絶対、名前負けしない人になってくれるって僕は信じてる。

「パパ、ヴィヴィオお姉ちゃん、これ見て」

マサヨシが僕らへ見せたのは一枚の絵。そこには、家らしい物の前に並ぶ家族らしきものが描かれている。僕は……中心の人だろうか。ヴィヴィオは、どれが自分かを聞いている。

長男のユウキは次女のノゾミと外で遊んでいるんだろう。ちなみにマサヨシは次男で、ユウキとノゾミは二人共フェイトの子。そう、フェイトは双子を産んだんだ。あれは結構びっくりしたっけ。もう四年も前の事だ。

ふと意識を周囲へ向ければ、三女のミライがザフィーラの背に乗って、リインを肩に乗せ共に笑っている。あ、言っておくけど狼状態だよ。しかし、はやての娘だけあってやっぱり行動的だなあ。何せ一歳半にも関わらず、もう立つ事が出来るんだよ。はやては、自分が歩けない頃があつたから、その分まで早く成長してるんだろうって嬉しそうに笑ってたっけ。

でも、気になるのは立って歩く時、大抵何かを目指してるように見えるんだ。しかも、上を見上げてね。それだけがどうしても理解出来ないんだよ。はやてがいない場合によく起きるから、何か関係してるのかなあとは思ってるんだけど。

そんな事を考えながら、視線をキッチンへ向ける。そこでは、な

のはとシャルマルが楽しげに話しながら昼食の準備中。その手伝いとして、ヴィータがテーブルを拭く為に動いていた。今日は久しぶりに家族全員が揃う。フェイトが長期任務を終えて、出張中だったはやとと共に帰ってくるからね。シグナムは、その迎えに行っている。

「ただいま〜」

そんな事を思い返していたら、玄関から愛する妻達の声が聞こえてきた。それに子供達が一斉に反応した。マサヨシはヴィヴィオの手を掴んで、ユウキとノゾミは庭から玄関目指して走り出し、ミライはザフィーラを急かしてと慌しい。

でも、シグナムはどうしたんだろう。そう思っていると、双子と入れ代わりで庭の方からシグナムとアギトが現れた。どうも、二人に反応して子供達が殺到するだろうと思って、庭から家に入ろうと思っただっけさ。

「相変わらず母親が一番人気だな」

「父親は長女にも負ける時があるんだけどね」

「仕方ないって。子供はお母さんから生まれんだ。女の方が懐かれるのさ」

アギトの言葉に僕もシグナムも同意。互いに苦笑し、視線を子供達の声のする方へ向ける。フェイトは双子と楽しげに話し、はやてはマサヨシの絵を片手に持ち、嬉しそうに眺めながら、残る片手でミライを抱き抱えている。

ザフィーラはヴィヴィオから労を労われ、苦笑していた。多分、六課の頃のヴィヴィオを思い出してるんだろう。その頃も狼状態でヴィヴィオのお守りをしてたらしいから。

とりあえず、外で遊んでいた双子を連れて、フェイトは手を洗うべく洗面所へ。はやても絵をマサヨシへ返した後、ミライをなのへ託してその後を追う。ヴィヴィオはなのからはからミライを預かり、その頬を指で軽く突いている。

「……いいものだ」

「だな」

そんな光景を眺め、シグナムとアギトが噛み締めるように呟く。僕も声には出さないけど、同じ気持ちだ。そこへリインがヴィータと共に近付いてきた。その表情は共にやや不満そうにしている。

どうしてだろうと思っていると、二人はいつまでも和んでないで手伝えと言ってきた。それに僕は苦笑。シグナムとアギトは、小さくため息を吐いて動き出す。一度玄関へ戻るシグナム。アギトはそのままリインと共にヴィヴィオの傍へ向かい、ミライの相手。

「まったく、全員揃うと飯の支度だって大変だったのに」

「僕も手伝うよ」

「じゃ、マサヨシの相手頼む。ヴィヴィオの方が戦力になっから」

ヴィータはそう告げると、再びキッチンの方へ歩いていく。僕はその言い方に軽い無力感を感じるけど、それでもヴィヴィオの傍へ向かう。そこでミライだけでなく、マサヨシの相手をしているヴィオと交代するように二人の世話をする。

リインとアギトへ絵を見せてご満悦のマサヨシに、ザフィーラへもう一度乗ろうとするミライ。まずはミライから止めよう。そう思

つて、僕はミライを抱き抱える。そこへシグナムが姿を見せた。すると、即座にマサヨシがロックオン。絵を片手にシグナムへ。

「そうか、これが私か。なら、これはヴィータだな？」

「うん」

このまま向こうはシグナムに任せよう。僕はミライを抱えたまま、キッチンへ視線を向ける。

「後少しで終わるから」

「なら、さくつと終わらそか」

「私とシャルマルで食器とか準備しよう」

「そうね」

なのはとはやてが食事の支度を終わらせるために動き、フェイトとシャルマルが食器などを準備し始める。僕はそれを眺めていたんだけど、ミライが何かを見つけたように天井へ手を伸ばした。でも、そこには当然だけども何もない。

どうしたのかと思っていると、洗面所から戻ってきたユウキやノゾミもそこを見つめた。更にはマサヨシまでも。完全に僕は置いていかれたような心境のまま、そんな四人へ尋ねた。どうしたの？ そうすると、予想だにしない言葉が返ってきた。

銀髪の人がそこで笑ってるんだ。

その言葉は、ある事情を知らない人が聞けば、軽い恐怖だったろ

うね。でも、僕らにはその心当たりがあった。だから、こつ尋ねてみた。

ラインに似てる？

それに三人は揃って頷いた。ミライは頷きはしないが、嬉しそうに僕へ視線を向ける。そんな反応に、僕は言葉が無かった。でも、思い返してみれば、ユウキ達が生まれた頃から何度か聞いた事があつた。

はやてが家にいる時だけ、子供達がやけに何もない場所をじつと見つめたりする事があるつて。そこまで思い出し、僕はある事を確かめるべく、こつ問い掛けた。初めて見るのかい？ シグナム達もどこか緊張の色が見えた。

それにユウキが代表で答えた。何度もあるよ。それを肯定するよ。うにノゾミもマサヨシも頷いた。その瞬間、ラインが四人が見つめる方向へ近付いた。まるでそこに存在へ抱きつくように。シグナムもそこへ視線を向け、小さく呟く。噛み締めるように。

そうか。お前も主の傍にいたのだな、ラインフォース。

アギトはそれで察したのか、ザフィーラへ視線を向ける。ザフィーラはそれに頷き、僕を見た。

「子供達にしか見えんようだが、それでいいのかもしれない」

「どつして？」

「我らが見えては、色々と思う事が多くて心乱してしまつたろうが、子供達はラインフォースを知らん。なら、その姿を見ても動じる事

はない」

ザフィーラはそう答えた後、どこか嬉しそうに呟いた。それに、はやての傍にいと分かっただけでも意味があると。そこへ食事が出来たと呼ぶ声が出て、子供達が頷いてからそちらへ動き出す。

僕らもそれに続いて動き出したけど、リインだけが中々動こうとしない。理由は分かる。リインにとっては、お姉さんだからね。すると、そんなリインへノゾミがこう言った。

「リインお姉ちゃん、女の人困った顔してるよ」

「うん。テーブルの方を指差してる」

ノゾミに続いてユウキが告げた言葉にリインは驚いて、天井を見つめる。そして小さく頷くとテーブルへ向かって動き出した。一方、なのは達は子供達が何を言ってるのか分からないから困惑してた。なので、シグナムが説明をする。

それを聞いて、段々その表情が変化していく。特にはやてとヴィータ、シャマルは顕著だ。目を潤ませ、子供達から特徴を聞いていくはやて。それに周囲も影響されて少し涙目だ。そして、最後にはみんなでそちらに笑顔を向けた。

それから食事を終えて、僕らは子供達を頼りにリインフォースの居場所を特定した。どうもはやてが動くとき移動するようで、基本的にはその傍にいるようだ。でも、どうもユウキの話だと、ミライが生まれた後は、はやてが出かけている時はその傍にいるらしい。

それを聞いて、僕はミライの行動原因を知った。ミライはリインフォースを目指して歩いていたんだと。だから、いつもはやてがない時ばかり動いていたんだとね。

「そういえば、こんな話を聞いた事がある」

「どんな話？」

フェイトが切り出した話題に、なのはが問い返す。僕もはやてものとは同じく、その話に興味を示した。シグナム達も同様に。それにフェイトは思い出すように語り出した。幼い子供には、みな霊感が備わっていて、中でも物心つく前が一番強いらしい。

その話を聞いて、ヴィヴィオが靈感について尋ねてきたので、簡単にはやてが説明。幽霊を見る事が出来る力。そう言った途端、マサヨシが軽く怯えた。見えているのがお化けと知って、怖くなったらしい。でも即座になるのは、見えているのははやての大事な家族だと教えると、安堵の息を吐いて笑みを戻す。我が子ながら現金だなあ。

「……ホンマに傍におったんやな」

「お姉ちゃん……はやてちゃんの事をずっと見守ってたんですね」

八神家の中でも一番リインフォースへの想いが強い二人がしみじみと呟く。周囲も何もいない天井を見つめ、感慨深そうにしていた。僕は少ししんみりした空気を吹き飛ばすように手を叩き、ある提案をした。その内容にみんなが嬉しそうに頷き、準備を始める。そして……

ね、ノゾミちゃん。リインフォースはどっち指差してる？

えっと……右！

げっ！ 火事だってよ……って、どうしたユウキ？

うん、ヴィータお姉さんを見てリインフォースが苦笑してるんだ。

転職出来るが……どうするべきか。

シグナムお姉ちゃん、リインさんが首を横に振ってるよ。

家族全員でのボードゲーム。シャマル達は子供達からリインフォースの指示を教えてもらい、その通りに動かしている。文字通り全員参加の対決だ。時折、子供達からリインフォースの行動や表情を伝えてもらい、僕らはそれに反応を返す。

会話は出来なくても、意思疎通は出来る。子供達がいつか見えなくなるとしても、もう僕らは知っている。リインフォースも家族としてこの家に居ると。姿も見えず、声も聞こえなくてもここにいる。それだけで、僕らは嬉しいんだから。

そんな楽しい時間が過ぎていく。これもまた僕らの思い出となっていくんだ。ゲームを終えた僕らへ、子供達が揃ってこう言ってくれた。

今、すつごく嬉しそうに笑ってるよ！

それが誰かなんてすぐに分かった。そして、三人が指差す方へ僕らも顔を向けて笑顔を見せる。すると、一瞬だけリインフォースが微笑んでいるのが見えた気がして、僕は驚いた。しかも、見ればみんなそうだったみたいで、目を丸くしている。

見えた？ お前もか？ そんな声があちこちから起きる。こうして、僕らの不思議な体験の一部は終わる。え？ ここまでかって？ うん、これからも色々あるし、起きるだろうけど……それはまだ

ヴィヴィオがあのお出来事の裏を話すらしい

「え？ ママの指の大きさ？」

いつものように、ユーノさんに借りてた本を返しに来たある日、突然ユーノさんがそんな事を聞いてきた。ママの指の大きさなんて聞いた事もないや。でも、そんな事を知ってどうするんだろう？

そう思って聞き返したんだけど、ユーノはその理由を明確に答えてくれなかった。ただ、それを知らないと困る事になるって、そう答えるだけだった。だから、ヴィヴィオとしてはユーノさんを助けようと思った訳で……

「分かりました。じゃ、ママに聞いてみます」

「えっと、ならこうしてくれないかな？」

携帯電話を取り出そうとすると、ユーノさんはそれをやんわりと止めるようにそう言ってきた。そしてその内容を聞いて、何となくユーノさんの目的が分かった気がした。でも、それを言うとなんか重圧を掛けるかもしれない。そう思って、それを言うには止めたんだ。その後、ユーノさんと話し合って、ママを納得させるための行動を教えてもらい、その日は帰った。帰り道、ユーノさんがママへ何を渡そうとしているのかを考え、一人で小さく笑ったけど。

「パパって呼んだら、驚くかなあ」

言って、まだ早いと自分で指摘。せめて結婚するって決まらないとね。でも、ママがユーノさんの事を好きだって知ってるし、絶対上手くいくって思う。だから心構えだけはしておこう。そんな風に

考える私、高町ヴィヴィオです。

ある日の我が家。ママがお料理してるので、何気ない顔で作戦開始。ここで多少疑われても、後で解決出来るので少し強引にいこう。そう決意し、ママの後ろから声を掛ける。

「ね、ママ。教えて欲しい事があるんだけど……」

「いいよ。何？」

「ママの指の大きさと、どれくらい？」

その問いかけにママは不思議そうな眼差しを向けてきた。そして、当然だけどころ聞いてきた。そんな事を聞いてどうするのって。うん、だよ。でも、大丈夫。ここがヴィヴィオの腕の見せ所です。

「うっ、理由を教えたら意味な……」

「意味がない？」

「あっ……」

会心の演技！ つい口を滑らせちゃった。そんな風になると、ママはそこから何かを自分で理解してくれたみたい。小さく笑って教えてくれた。それを覚えて、慌てるように部屋へ移動。ママはきつとこれで理由を誤解してくれたよね？

えっと、すぐにユーノさんへメール送信。これで任務完了です。

あ、でもママへの贈り物を作らないと。折り紙で作る指輪。それを

ママに渡さないといけないんだよ。それを渡して、ママを納得させなきゃ。じゃないと、ユーノさんの作戦が失敗しちゃうよ。

それに、これはママがくれた誕生日プレゼントのお返しだし。簡単な作りじゃ、ママへのお礼にならないもん。そう思って、結構頑張って作ろうと意気込んだところでママの声。そうでした。ご飯の時間が近かったんだよね。

「製作は、戻ってきてからだね」

自分に言い聞かせるように言って、またリビングへと戻る。ママのご飯はホントに美味しい。はやてさんもお料理上手らしくて、ママは勝てないって言うてるけど、ヴィヴィオの一番はいつだってママなんだ。

アイナさんのご飯も美味しいけど、ママの作るご飯には勝てない。そんな事をユーノさんに話したら、きつとママのご飯には、ヴィヴィオにしか分からない愛情が溶けてるからだよって、そう苦笑して言うてたっけ。

ママと二人の食事。少し前まではフェイトママもいたんだけど、クロノさんに言われてお引越していったんだよねえ。でも、よく顔を出してくれるから、あまりいなくなっただって気がしない。フェイトママもユーノさんが好きみたいなんだけど、ごめんなさい。

やっぱりママを一番に応援したいんです。ユーノさんもママを一番って考えてるみたいだしね。フェイトママは……ユーノさんに任せます。ヴィヴィオは知らなかったを通そう。うん、それがいいよね。

「へえ、また本を借りたんだ」

「うん、ユーノさんのオススメ。ルーラーにも貸していいって聞いたら、いいよって言ってくれたし」

「さすがユーノ君。心が広い」

「ママの自慢の幼馴染だもんね」

そう言ったら、ママは少し照れくさそうに笑って頷いた。ホントは恋人って言いたいんだよね、ママ。ママとユーノさんが出会いを聞くと、少し懂れる部分がある。偶然出会ったママとユーノさん。それが、今の状況に繋がってるんだもん。

奇跡って言うんだよね、こういうの。凄いよなあ……いつかヴィイオもそんな運命の相手に出会いたいです。でも、男の人限定。女の子でもいいけど、恋人にはなれないもん。ママとフェイトママみたいな関係のお友達も欲しいけど、出来れば恋人が欲しいなんて思う年頃です。

「まだ恋人は早いよ。ボーイフレンドなら分かるけどね」

そんな事を話したら、ママにこう言われてしまいました。ボーイフレンドかぁ。確かにまずはそこからだよ。クラスのお友達で親しいのは、リオやコロナみたいな女の子ばかり。男の子もない訳じゃないけど、親しいとまでは言えないんだよ。

うん、まずはボーイフレンドを沢山作ろう。それで、もっと仲良くなっていこ。もしかしたら、運命の人に出会ってるけど、ヴィイオが気付いてないだけかもしれないし。あれ、そう考えたら少しくドキドキしてきた。あの子やあの子が運命の人かもしれないって考えたらね。

その後、食事を終えて部屋に戻ってから、いよいよ指輪の製作で

す。折り紙で基本の指輪を作って、中央にビーズをつけてそれらしく。そんなこんなで気がついたら、お風呂に入る時間です。なので、少し急いで部屋を出てお風呂場へ向かわないと。

ママはリビングでテレビを見てた。えっと……夜のニュース番組だね。ママへ先にお風呂に入るって言って、脱衣所へ。将来はママみたいなお仕事がしたいんだけど、少しユーノさんみたいな司書のお仕事も考えていたり。だって、本を読むの楽しいんだもん。

裸になってお風呂へゴー。まずは体を洗って、それから頭。前は一人じゃ出来なかったけど、最近出来るようになりました。ママに言ったら、凄いなって褒めてくれたし。ユーノさんは、これでまた少し成長したねって言ってくれた。

あれ？ こう考えると、やっぱりユーノさんってパパみたいな事言ってくれてる。うゝ、早くホントのパパになって欲しいな。そうになったら、もっと楽しくなるのに。

「ヴィヴィオ、バスタオル置いておくからね」

「あ、ありがとゝ」

頭を洗っていると、ママから声を掛けられた。あうゝ、忘れてた。ちゃんと用意しておかないとね。お礼を言つと、ママがどういたしましてって言って戻って行った。シャワーで頭の泡を流してつと。

少し頭を振って水を払う。犬みただけど、やりすぎるとクラクラするので注意が必要です。軽くタオルで頭を拭いて、湯船へ入る。気持ちいい温度になってるのが、ママの凄いとこ。いつも少し熱いぐらいなのです。

一緒に入る事もあるけど、最近は別々に入る事が増えてきてるんだよね。最近、ママと一緒に入ると思うのは、気のせいかもしれな

いけど昔よりも綺麗になつたなあって事。丁度、ヴィヴィオがこの前お泊りに行った日ぐらいからなんだけどね。

「何があつたのかな？ 聞いても教えてくれなかつたし……」

ただ、とつても楽しい事があつたつて言つてたなあ。ユーノさん関係つて事だけは分かるんだよね。ママの機嫌が凄く良い時つて、大抵そうだもん。そんな事をぼんやり考えてたら、少し頭がぼんやりしてきたのでお風呂から上がる。

体を拭いて、パジャマに着替えてリビングへ。あ、ママが電話してる。相手は……アリサさんみたいです。今度のお休みにユーノさん達と一緒に遊びに行くつて話してる。む、ヴィヴィオも行きたいです。よ、し……

「ヴィヴィオも行きたい！」

「ふえ？！ ヴィヴィオも行きたいつて……学校は？」

あ……そうか。ママ達のお休みつて平日になる事が多いのでした。どうもアリサさん達も、大学が終わる年だから卒業論文つて物を書くだけでいいらしく、その気になれば休みに出来るそうです。いいなあ、ヴィヴィオも行きたかつた。

「にははは、じゃあ……次はヴィヴィオがお休みの日に予定立てるね」

「うん！」

ママはやっぱ優しいです。アリサさんも今のやり取りが聞こえてたみたいで、ママに何か言つたみたい。ママがそれに苦笑してる

し。多分、ホントに親子だねって言われてるんだと思う。血が繋がってないヴィヴィオとママ。でも、不思議と似てるってよく言われる。

えっと、確かはやてさんがこう言ってたっけ。朱に交われれば赤くなるって。意味は、ママと一緒にいるから段々似てくるって事みたい。うん、そうだと思う。ママがヴィヴィオの目指す人。ママみたいに、強くて優しい人になるって決めてるんだもん。

電話が終わると、ママがお風呂へ。ヴィヴィオとしては、お風呂上りの飲み物は牛乳と決めてるのです。早く大きくなって、少しでも早く大人に近付きたいから。あ、ママの分も用意しよ。一人で牛乳を飲みながらぼんやりとテレビを眺めると、結婚式のCMが流れた。

白いドレスを着た女の人が嬉しそうに笑ってる。いつかママもあんな格好するのかな？ ユーノさん、頑張ってください。そう思った時、メールチェックをするのを忘れていたのを思い出した。ユーノさんから返事が来てるはず。そう思って、急いで部屋へ。

「えっと……あ、着てる着てる」

ユーノさんからは”ありがとう。今度何か美味しいお菓子でもご馳走するね”って書いてあった。何を食べさせてくれるのかな？ って、違う。それは……どうでもよくはないけど、置いておこう。きっと、いつかこれが役に立つとは思うけど、いつかな。出来るだけ早く役立てて欲しいです。パパって呼びたいし。でも、焦らせたらダメです。これは、ヴィヴィオの問題じゃなくてママとユーノさんの問題なんだから。

「ヴィヴィオ、牛乳が残ってるよ〜？」

「あ、それママのぶぐん！」

そんな事を考えていたら、ママの声があった。部屋を出てもう一度リビングへ。ママは牛乳が入ったコップを手に確認してきたので、説明した。お風呂上りに飲んでもらおうと思ってって。そう言つて、ママは嬉しそうに笑ってくれた。

「ありがとう。じゃ、もらうね」

「うん。ヴィヴィオはもう飲んだから」

「そっか。あ、なら歯磨きしておいで」

「はい」

ママに返事をして、洗面所へ。歯ブラシを用意して、歯磨き開始。えへへ、お気に入りのイチゴ味の歯磨き粉です。時々食べたくなるのが困り物ですが、そこはぐっと我慢我慢。前そう言ったら、ママに苦笑されました。

じゃあ、今度からは大人用のを使おうか。そう言われてしまったので、絶対にそれは出来ないのです。決意も新たに歯を磨いていると、ママもやってきて同じように歯磨きを始めました。しばらく二人の歯ブラシの音だけが、洗面所に響く。うがいをして、鏡で一度確認。うん、キレイです。

「じゃ、おやすみママ」

「うん、おやすみ」

それから少しお喋りして、ママへおやすみの挨拶。手を振って部

屋へ行き、ベッドに横になって目を閉じる。明日もいい日になるといいなあ。そんな風に思いながら、この日は終わったのでした……

「じゃ、行つてきます」

「行つてらっしゃい」

ママへ手を振り家を出る。向かう先はスバルさん家。今日はスバルさんと遊ぶ約束してるんだあ。ママはお休みで、今日はユーノさんとデート。夜には帰ってくるって言ってるけど、遅くなるかもしれないから、連絡するまでスバルさん家で待ってて。そうママは言ってたので、ヴィヴィオとしては今日がユーノさんの勝負になる気がしています。

てくてくと歩いてスバルさん家へ。今日は、スバルさんが久しぶりにお家に帰ってくるのに合わせて、ゲンヤさんもお休みです。二人に迎えられ、ちよつと恐縮しながらリビングへ。スバルさんとノヴェ達のお話をしながら、話題が段々ママの事へ。

「なのはさんは今日お休みなんだよね？」

「そうですね。でも、今日はユーノさんとデートなんです」

「デートかあ。私には相手がないからな」

スバルさんはそう言うけど、ヴィヴィオは知ってるんですよ？

結構スバルさんがあちこちから声を掛けられてるって。男性からの誘いも多くて、嬉しい反面少し困惑してるって、ティアナさんから

聞いてるんだ。

スバルさんの好みのタイプって誰なんです？ そう聞くと、スバルさんは少し照れくさそうにチラってゲンヤさんを見て、ぶっきらぼうだけど優しい人って答えてくれました。つまりゲンヤさんみたいな人なんだ。うん…… ヴィヴィオも最終的にはユーノさんみたいな人って思うのかな？

そんな風にお話をしていると、時間も遅くなってきたのでスバルさんがご飯を作ってくれる事に。スバルさん、実は家事が出来るんです。クイントさん　つまりスバルさんのママが亡くなった後、ギンガさんとスバルさんはゲンヤさんと三人で家事を頑張ってたんだって。

だから、今でも家事は結構出来るみたい。ギンガさんの方が得意だけどってスバルさんは笑ってたけどね。そんなスバルさんを手伝うゲンヤさん。親子でやってるのを見て、ヴィヴィオはお手伝いをするべきかどうか迷ってしまいます。でも、やっぱりお友達なので、すから、お手伝いしよう！

「えっと、ヴィヴィオも何か手伝います」

「ん？　じゃあ、テーブル拭いてくれるか？」

「それ終わったら、コップとか出してくれると嬉しいかな」

ゲンヤさんとスバルさんが少し嬉しそうに言ってくれたので、ヴィヴィオとしても一安心です。笑顔で頷いて、テーブルを拭くために台拭きをもらって、いざテーブルへ。将来、ここにノーヴェ達もいるようになるんだなあって思うと、少し楽しみ。

今はまだ施設にいるノーヴェ達。でも、いつかはこのナカジマ家に家族として住む事になるんだよね。その頃には、ヴィヴィオは少

しでもママに近付いてるのかなあ？ テーブルを拭きつつ、そんな事を考えるヴィヴィオなのでした。

テーブルを拭き終わり、台拭きを返してグラスの準備。スバルさんとゲンヤさんは、意外とって言った失礼かもしれないけど、息の合った感じでお料理をしてる。いいなあ。ヴィヴィオも大きくなったら、ママとあんな風にお料理出来るようになろう。

そんな風に決意し、配膳を終わらせる。そして、全てが終わったのでそれを二人へ報告してっ……

「スバルさん、ゲンヤさん、終わりました」

「ありがとう、ヴィヴィオ」

「すまねえな。後は座って待っててくれや」

「はい」

二人の言葉に甘えて、椅子に座ってお料理を待ちます。うゝ、良におゝい。お腹空いてると、匂いだけでも堪らないよ。あ、見ればスバルさんが涎をたらしそうになってる。で、ゲンヤさんに軽く頭を叩かれています。うん、何か家族って感じていいなあ。

そうしてテーブルにお料理が並べられ、三人揃っていたできます。ママも地球出身で日本人。スバルさんのご先祖様も同じなので、結構ナカジマ家とヴィヴィオは相性がいいのです。お料理の味付けも似てる気がするし、何よりもゲンヤさんがおじいちゃんみたいで和むんです。

ある時そう言ったら、ゲンヤさんは嬉しそうに笑ってくれました。ヴィヴィオみたいな孫が出来たって思うと嬉しいって。なので、気

持ちとしてはおじいちゃんと思ってます。

ママにそれを言ったら、土郎さんはそう思えないのって聞かれました。土郎さんと桃子さんは、何となくお祖父ちゃんとお祖母ちゃんって感じがしません。そう返すと、ママは何とも言えない顔をしてたのを思い出すなあ。

そんな事を思い出しながら、食事は終了。後片付けをスバルさんと一緒になってしている間、ゲンヤさんは新聞を読んでいた。何でも、朝は中々じっくり読む事が出来ないらしくて、こうして夕方にもう一度読み返すのが日課なんだそうです。

「ティアナさん、執務官試験に受かってから忙しいみたいですね」

「そうなんだよ。私も直接会ったのは、合格祝いの時だからね」

「ユーノさんは、たまに捜査資料とかの関係で会ったりするって言うてました」

「そっか。無限書庫ってそういう事もしてるもんね」

お皿を洗いながら、二人で会話。話題はティアナさんです。スバルさんとの話題で一番いいのは、ティアナさん。次にママか学校の事。スバルさんは魔法学校に行つてなかったから、すごく興味を持って聞いてくれるんだよね。

そして洗い物を片付けたら、リビングで引き続きお喋りしてたんだけど、ふとスバルさんがこんな事を聞いてきた。

格闘技の方はどう？

なので、正直に思った事を答えたんだ。

まあまあです！

そしてら、軽くシューティングアーツを教えてもらえる事になって、嬉しくなっちゃいました。早速庭に出て、軽い準備運動をした後から手合わせ開始です。

「行くよ？」

「はいっ！」

ヴィヴィオがやってる物とは違うのですが、シューティングアーツも知っていて損はないです。実はヴィヴィオ、格闘技やってます。ママと喧嘩しちゃったゆりかこの戦い。その時、ヴィヴィオは完全格闘技しか使ってなかったの、ママがヴィヴィオはそういう方向が向いてるんじゃないかなって。

なので、学校に上がってから護身術として身に着け始めたのですが、これが中々楽しいんです。体動かすの好きだし、少しずつ自分が強くなっていくのが分かった時は、もう言い表せないくらい嬉しいんです！

そんな風にスバルさんと軽い手合わせをしてみると、ゲンヤさんが携帯を持ってヴィヴィオへ呼びかけてきました。どうも着信のようです。うー、いい感じで体あつたまってきたのに。内心ぶつぶつ言いながら、相手の名前を見て軽く疑問です。

「ユーノさん？ どうしたんだろ？」

とりあえず、電話に出ます。すると、ユーノさんが申し訳なさそうに事情を話してくれました。ママがお酒を飲み過ぎてダウンしち

やった事を。なので、この後の事をゲンヤさんと相談したいって。それを聞いて、ヴィヴィオは直感で気付きました。ママは自分がお酒に弱い事を知っています。

だから、倒れる程は飲まないんです。でも、ユーノさんはそう言ってる。きつとママは、お酒を多く飲みたくなるような事があつたんです。ユーノさんから告白でもされたんだなって。

なので、ママを心配しながらもゲンヤさんへ携帯を渡します。簡単にユーノさんが話があるらしいって言ったら、ゲンヤさんは頷いて携帯を受け取ってくれました。ヴィヴィオは、スバルさんへお泊りをしたいって言いました。

だって、ママが寝ちゃったんじゃきつとお家に帰るのは無理だもんね。そんな事を話していると、ゲンヤさんがヴィヴィオの意見を受け入れてくれました。ママは、ユーノさんが責任を持って面倒を見てくれるんだって。でも、それを聞いた瞬間、スバルさんが顔を赤くしてました。どうして？

「あ、その……ヴィヴィオにはまだ早いから」

「意味が分からないんですけど？」

「うん、それでいいよ。その内、教えてもらえるだろうしね」

そう言うと、スバルさんは笑って構え直しました。そうだ。今は組み手の途中だった。なので、ヴィヴィオも再び構え直します。そんな風に結構動いて汗を掻いたので、スバルさんと二人でお風呂。でも、ずっとスバルさんはママとユーノさんの事を考えてるのか、ぶつぶつ言っていました。

大胆だなとか、いつか自分もとか。ヴィヴィオとしては、意味が分からないので気になって仕方ないです。でも、教えてくれないし

……あ、一つだけこう言われました。パパが出来るよって。ユーノさんがパパになるって事だと思って嬉しかったのですが、どうしてスバルさんはそれが分かったんだらう。

そんな感じでヴィヴィオはスバルさんと一緒に寝て、翌朝お家に戻りました。もうママが帰ってきていて、笑顔でお出迎えしてくれましたので、一安心。ママは心配させてゴメンって謝ってくれました。それと、ママの指に昨日は無かった物があつたのに気付いて、ヴィヴィオは確信しました。

ユーノさんがママへ告白して、指輪を渡したんだって。それを、もしかしたらスバルさんは知ったのかもしれない。ゲンヤさんがユーノさんから電話で聞いて、ヴィヴィオが軽く水分補給をしている時にスバルさんへ話したのかも。

「ママ、その指輪って……」

「あ、えっと……知ってるんだよね、ヴィヴィオは」

「ユーノさんからもらったんでしょ？ 結婚指輪？」

「ち、違うよ。これは……その……婚約指輪だよ」

ママはそう言うつと顔を真っ赤にして黙ってしまいました。嬉しいっていうのはすごく伝わったよ、ママ。そっかあ……これでヴィヴィオにもパパが出来るんだね。そう思って笑つてると、ママが手招きしてこんな事を教えてくれました。

ユーノ君の事、パパって呼んでもいいからね。

勿論ユーノさんの許可を取ってってママは言ったけど、絶対ユー

ノさんなら許してくれるはず。なので、もう呼べるのは確定しました。えへへ、きっと驚くだろうな、ユーノさん。

あ、そうだ。なら今日帰ってきたら無限書庫に行こう。そう決めて、学校の支度をする。あれ？ そういえばママが少し動き辛そうだけど、どうしたんだろう？ そう思ってたママにどこか具合でも悪いのって聞いたたら、顔を少し赤くなって何でもないから大丈夫って言われました。

……何かあまり聞いてはいけない気がします。なので、その事は深く考えないでご飯を食べよう。そんな感じでこの日は始まりました……

あれからもう三年以上が経ちました。今、私の前にはママとパパがいます。そして、ママの腕には、つい最近生まれたばかりの私の妹が抱かれてる。名前はまなみ。日本語で書くと”真菜実”なんだって。でもそれだと、ミッドじゃ浮いちゃうから平仮名にしたんだってママは言ってた。

二人が結婚してもう二年。私もお姉ちゃんになるからって、ヴィオオって言うのを止めました。最初は少し違和感あったけど、今では慣れてこの通り。ママは教導官を一時休職。パパはその代わりに無限書庫でお仕事を頑張ってます。理由は、クロノさん。何でもパパが昔、クロノさんに対してこう言ったそうです。

長期に家を空けてもいいけど、無限書庫が立ち行かなくなるってなので、クロノさんが無限書庫にずっと缶詰になるようにしてるみたい。まなみがパパの事を父親って認識出来ないようにって。それを知ったママは苦笑して、パパへ「自業自得です」って突き放しました。

なので、私は密かにパパを手伝って無限書庫に出入りしてます。司書の名は伊達じゃないんだから！ パパには、結構感謝されてます。教導官もいいけど、司書長もいいな。そんな風に思う今日この頃です。

「ヴィヴィオ、早くおいで」

「置いてくよ」

「はい！」

実は、今からまなみを連れて海鳴へ遊びに行くんです。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんにまなみを会わせるためにね。呼び方がこうなつたのは、ゲンヤさんの事をママがお祖父ちゃんに話したから。他人をお祖父ちゃんと思わせるぐらいなら、自分がそう呼ばれたって言い出したんだ。

私は別に気持ちの問題って言ったんだけど、どうしてもって言うからね。お祖母ちゃんはどうしようか正直迷ったけど、ママがコロナ達に写真を見せたんだ。そうしたら、すごく綺麗で若いお祖母ちゃんて羨ましいって言われた。それをママがお祖母ちゃんに話してみたいで、嬉しそうにお祖母ちゃんって呼んでいいって言われたんです。

「まなみ、翠屋のケーキ食べれるようになったら、意外と翠屋を継ぐって言うったりして」

私がまなみを軽く突きながらそう言うと、ママが微笑んで頷いた。パパも、それはきつとお祖母ちゃんも喜ぶだろうって笑ってた。私も実は少しだけ考えた事もあるんだよね。でも、やっぱりママのようになりたいって決めてるから、諦めた。

あれもこれもじゃ駄目だって、そうママとパパにも言われたし。なので、今の私の目標は空戦魔導師。目指せ、二代目エースオブエースなのです！

「お義父さん達、元気かな？」

「連絡した時は、いつも通りだったよ」

「美由希さん、例の人と上手くいつてるのかなあ？」

「ヴィヴィオ、その話題をあまり出さないように」

美由希さんは半年前ぐらい前に、翠屋に通う常連の人から告白されたんです。それからお付き合いをしてるらしく、ママは結構相談を受けたりしてるみたい。と言っても、パパからの意見を聞いてもらうためみたいだけど。

相手は美由希さんより年下。学生の頃から美由希さんが好きだったみたいで、一人前の社会人になるまではって、ずっと我慢してたって話をママから聞いた。それを聞いたパパがどこか遠い目をして、気持ちがすごい分かるって言ってたっけ。

もうお馴染みのなった湖畔のコテージ。海鳴への転送ポートの使用頻度はここが一番多いんです。すずかさんのお家は、やっぱり色々と考えると簡単に使えないから。ここからテクテク歩いてまずはお祖父ちゃん家を目指します。

「じゃ、行くつ。ママ、パパ」

「ヴィヴィオって、まだ少し甘えん坊だね」

「いいじゃないか。たまには、ね」

ママとパパの手を握って、私は歩く。ママは片腕でまなみを抱き抱えてる。パパはそれを見て、よければ代わるからって言ってます。穏やかな風が流れてく。海鳴の風。私のもう一つの故郷の風です。ママはミッドがそれ。

親子で故郷が二つあるって不思議。あ、パパは三つだけ。スクライアの部族が住む世界が一番目だから。まなみが楽しそうに笑ってる。視線の先には雲一つない青空。うん、確かに何か心がうきうきしてくるね。

今日もいい日でありますように……

私の眩きは、微かに香る海風に乗って空へと消えた。その願いを神様へ届けるように……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

なのはエンドのヴィヴィオ視点。とは言え、別物みたいになっているのは、ご愛嬌。

次回はユーノが覚悟を決めてからのIFルート。すずかとアリサルートの話です。

ユーノはすずかとアリサの誤解を解いたらしい

海鳴にある豪邸。その名も月村邸。僕は、今ここですずかとアリサと共に、小さな茶会の真っ最中。なのは達との思い出話で思い出した”フェレット疑惑”を解決するために、僕はここへ単身来ていた。

なのは達も一緒に来たいって言ってただけど休みを合わせる事が難しく、事前連絡だけをお願いして、僕一人で訪れたという訳だ。最初はメイドのファリンさんが僕を見て誰だろうと思っただけだ。けど、名乗ったら驚いた顔をして入れてくれたのを思い出す。

僕は、やはりフェレットって思われたんだと、そこで改めて感じたからね。でも、ファリンさんが僕の事を覚えていた事も意味してたから、少し嬉しくもあっただけだ。

「そう、なのは達は相変わらず忙しいのね」

「うん。特になのはは、お母さんとしての仕事もあるからね」

「そうだね。ヴィヴィオちゃんがいるもんね」

僕が話した内容にすずかが笑う。アリサもそれに軽い笑みを浮かべて頷いた。結婚前に子持ちになるってフェイトじゃあるまいし。そんな事まで言った。僕はそれを聞いて軽く注意。フェイトは子持ちになったんじゃないかって、身元引き受け人として引き取っただけ。

それに、エリオもキャロも六課の頃から既に自分達の道を歩き出してるから、子供扱いは出来ないってね。そう言うと、アリサが少し困った表情を返す。どうしたんだろう？ と、そんな風に考える僕へアリサはこう告げた。

こっちの感覚で考えるもんだから、ね。許してちょうだい。

成程。確かにアリサ達の場合、十歳から自分の道を決めて歩いてるって考えは出来ないか。

「ゴメン、僕も自分の常識だけで考えてた。世界が違っただから、そこを理解しないと駄目だったね」

「いいのよ。それはアタシもだし」

「そうだよ。ユーノ君は私達に、フェイトちゃんや周りの人の考えや捉え方を教えてくれたんだから」

僕が謝るとアリサとすずかが少し苦笑してそう言葉を返した。それに僕は笑顔を返して、ほっと息を吐く。でも、すずかの言った言葉は少し違う。フェイト自身は、きつとエリオとキャラを自分の子供のように考えているはず。

でも、それを訂正するつもりはない。だって、それは僕の勝手な推測だから。それにしても、なのは達もただ何でアリサとすずかも恋人がいらないんだ？こんなに美人で性格も……アリサは少し難があるかな。

「？ 何よ？ アタシの顔をじっと見たりして」

「あ、えっと……どうしてこんなに綺麗なのに、恋人が出来ないのかなって」

アリサを見ている事に気付かれ、僕は咄嗟にそう誤魔化した。すると、それにアリサが大きくため息を吐いた。見れば、すずかも同

じようにため息を吐いている。その雰囲気は、どこかで覚えのある感じがした。

僕はそう思い、二人の言葉を待つ。きっと、愚痴るはず。そう覚悟し、それを待った。すると、案の定アリサが口火を切るように話し出した。何でも、言い寄る男は多いらしい。でも、そういう相手の大半は軽そうな男なんだとか。

すずかも同じらしいけど、彼女の場合は真剣さは感じる事が出来るらしい。でも、すずかとしては中々受ける事が出来ないんだそうだ。何か家の事情があるって言って黙っちゃったけど、何なんだろう？ 僕で良ければ相談に乗りたい。

そう思って、真剣な表情で告げた。すずかの事情がどんなものかは知らない。でも、それが原因で相手の想いを断るしかないのは、優しいすずかには辛いだろうと思ったんだ。

「えっと……ユーノ君にも……あ、でも魔法とか知ってるし、色々な事に対して理解もしてくれそう……」

すずかはどうもかなり複雑な事情を抱えてるらしい。でも、僕なら話しても大丈夫かもって思えるぐらいではあるようだ。そんな風に迷ってるすずかと違い、アリサはすずかの事情云々は初めてだったらしく、軽く意外そうな表情をしていた。

「今までそんな話聞いた事無かったけど、どんな事なのよ、すずか」

「あの……その……」

「アリサ、今は待とう。すずかも僕らに話せるかどうかを考えてるし、個人の事情じゃなくて家の事情だと、簡単に話せるものじゃないだろうから」

アリサにその気はなかつたんだろうけど、すずかは問いかけに困っているように見えた。だから、僕はやりわりとアリサを止めに入って、すずかへ焦る必要はない事を告げる。家の事情ってなるとすずかだけじゃ判断出来ないだろう。すずかにはお姉さんがいたはずだから、その人と相談する必要があるはずだ。

アリサも僕の言った言葉ですずかを困らせたと思ったんだろう。少々バツが悪そうに頬を掻き、すずかへ謝った。それにすずかも謝り返し、これでこの事情云々の話は終わった。

そして、その後も雑談をしていたんだけど、アリサが一度席を立ったんだ。理由は、きつと生理現象だと思う。すると、すずかが僕へこんな事を言ってくれた。

さっきはありがとう。ユーノ君の言葉、嬉しかったよ。

どうも、昔から親友であるアリサに話さないといけないって思っていたらしい。でも、事情が事情らしく、下手をしたら嫌われる事とだけ僕に教えてくれた。だから、言い出すキツカケもなかったんだって。

だけど、今ここで言わないといけないのなんて考えて、でも嫌われたら怖いって思ってたかなり困惑したらしい。そうか、それで待ってみようって言われて助かったんだね、すずかは。

「……そっか。でも、すずか」

「何？」

「一つだけ言える事があるよ。嫌われるかもしれないって、そう思っても、すずか自身が隠し事は嫌だって思うのなら話した方がいい。

きつと、アリサもなのは達も嫌ったりしないさ」

「……そうかな？」

僕が言った言葉にすずかはどこか否定的な感情を見せる。そこま
で嫌われる可能性がある事情なんだろうか？ なら、なのはがかつ
てフェイトに言った言葉を借りよう。これに僕の偽らざる気持ちを
込めて。

そうだよ。それに、何があってもすずかはすずかだ。少なく
ても僕は、そう断言するよ。

そう真剣な眼差しで告げる。それにすずかが少し呆気に取られた
のを見て、僕は失敗したかなと思った。でも、これで少しはすずか
が前向きになってくれればと思い、笑顔で締め括る。そう、なのは
達へ抱く想いと同じく、すずかも守ってあげたいってそう考えて。

例え、世界中がそれを否定したとしても……ね。

なのは達三人を守るなら、その親友も守らないと。三人の笑顔は
三人を守るだけじゃ守れないかもしれないし。それに、すずかはア
リサと一緒にあって、僕をフェレットだと思ってた事に謝罪までし
てくれたんだ。

その優しさに応えるには、これぐらい言っても罰は当たらないよ
ね。そんな事を考えていると、すずかが驚いた顔をして、それから
照れくさそうに笑ってくれた。まるでプロポーズみたいだったと言
われた時、僕は自分の発言を思い出し、赤面。

「す、すずか……今のは、出来れば誰にも言わないでくれると……」

「うん、いいよ。絶対誰にも言わないから」

そう言っただけは笑みを浮かべた。それに僕は安堵の息を吐く。こんな事を言っただけでなのは達に聞かれたら、何を言われるか分かったもんじゃない。そう思ったんだ。でも、そんな僕にすずかが噛み締めるようにこっぴどい。

絶対、誰にも言わないから……

それに込められたのが喜びだと気付いて、僕はすずかを励ます事が出来たと思った。なのはがフェイトを立ち上がらせたように、僕もすずかを前向きに出来たんだって。丁度そこへアリサが戻ってきて、笑顔の僕らを見て何を話してたかを尋ねてきたけど、当然それを話す事はしない。

ただ、すずかが僕から勇気が出る魔法を聞いたって誤魔化した。まあ、それをアリサがどう思ったのかは知らない。でも、詳しく聞くことしなかったから、何かを感じ取ってはいたのかもしれないね。

で、夕方近くなって僕とアリサはお暇する事に。すずかに別れを告げ、僕は転送ポートである庭へ行こうとしたんだけど、アリサが少し話があるからって車に乗せられた。それでアリサの家が所有するコテージから帰る事になったんだけど、僕は正直困惑してた。

アリサに聞かれるような話なんてあったかなど。なのは達の話は今日大分したし、僕自身の話もある程度した。もう聞かれるような話題はなかったはずだから。そう思ったんだ。

そんな僕へ、アリサは運転しながらこう言ってきた。

あの時はありがと。おかげですずかを追い詰めずに済んだわ。

その言葉でアリサがしたかった話が完全に理解出来た。つまり、僕にお礼が言いたかったんだ。すずかがいなくなってからじゃないと言えないところに、アリサの可愛らしさがある気がして、僕は小さく笑って気にしなくていいって返す。

その僕の笑みが気に入らなかったのか、それともその理由に気付いたのか。とにかく、アリサはそれを横目で見てややムツとした顔をし、笑うなと返した。それが益々照れ隠しで可愛く見えて、僕は笑みが深くなる。

「ユーノ！ あんた、アタシからかつてるでしょ！」

「違うよ。アリサが可愛いから」

「っ！？ 笑いながら可愛いとか言っな！」

「え〜？ 真顔で言うのもおかしくないかな？」

「一々反論するな！ 後、可愛い禁止！」

「じゃ、愛おしいとか？」

「あ〜、もうっ！ なら喋るの禁止よ！！！」

こんな感じの会話をしてると、はやてがどうしてなのは達をからかうかが良く分かるよ。楽しくて仕方ないんだ。結局、そのまま何だかんだで話し続け、僕を降ろしたアリサは去り際に一言。

あんた、今度来る時は覚悟しなさい！

そんな捨て台詞を残し、車で去って行った。僕はそんなアリサを

笑顔で見送り、帰路に着いた。転送魔法を準備する間、ふとある事を思い出し、携帯を取り出す。電話帳を表示し、グループ表示に切り替えて幼馴染を選択。

そこには、なのはやフェイトにはやての名前。クロノは除外。あいつは別グループの”天敵”にいる。まあ、あいつしかいないんだけどね。今日、幼馴染に二つ名前が加わった。

すずかとアリサ、か。幼馴染って言えるかは微妙なところなんだけど……

でも、出会ったのはもう十年以上前。なら、それでもいいかなと思っただ。それに、なのは達三人と同じ場所にいる方がらしいと思っただ。そんな事を考えながら、転送魔法を展開させる。次に来る時はいつだろう。そんな事を思いながら、僕は海鳴の地を後にした……

「……って、思ってたんだよ」

「そうなんだ。じゃあ、まさか二週間ちよつとで来る事になるなんて思わないよね」

今、僕の目の前にはすずかがいる。あの日以来、すずかから相談メールが来るようになった。その内容は曖昧だったけど、要約すると自分の一族の生まれが少々特殊で、それがあまり良くない印象を受けるものらしい。

僕はそれを聞いて思い出したのは戦闘機人だった。スバル達も苦しんだ”普通”との違い。それをすずかは抱えているんだらうとね。だから、僕は名前は伏せてスバル達の話を教えた。それにすずかは

驚いたみたいだったけど、勇氣は得たみたいだった。

で、今日は午後休みに出来たからどうしようかなと考えてたんだ。すると、すずかからある決意をしたから聞いて欲しいってメールが来て、いつ会えるかって書いてあった。だから、こうして海鳴は月村家に来てたって訳。

「本当にね。で、決意したって言うのは……」

「うん。私の事をなのはちゃん達に話そうと思って」

「やっぱりね」

そんな事だとは思った。でも、どうしてそれを一番に僕へ伝えようとしたんだろう？ そう思って尋ねてみる。すずかはその問いかけにやや躊躇いながらも、答えてくれた。どうも、まだ不安が消えないらしく、僕へ聞かせて反応を見てからなのは達へと考えているみたい。

僕がそれで嫌ったりしたら？ そんな馬鹿な事は聞かなかった。何があってもすずかはすずか。その言葉を言った本人として、絶対すずかの心に傷は作るものか。そんな思いを新たにしていると、すずかはそんな僕の内心が分かったのか、どこか嬉しそうに笑ってありがとって言うてきた。その笑顔は、とても綺麗で力強く見えた。

実は、私は吸血鬼なの。

すずかが告げた内容。それは、僕の予想を超えていた。人種が違いうつもりはない。全ての話を聞くまでは判断しないと考えて、最後まですずかの話聞いた。

どうも吸血鬼と言っても、従来想像されるようなものではなく、基本的に血の摂取は輸血用の物で済ませているし、そんな衝動に駆られるのも月に一度ぐらいだそうだ。それだけで、僕はもう何も不安は要らないと言えた。

確かに個々に特殊な力を持つてるらしいけど、それだつて持ちたくて持つてる訳じゃない。それに悪用したりもしてないし、何よりもまずか自身がそんな自分の事をどこか嫌ってるように聞こえたしね。

「……どう?」

「うん。まずはお礼を言わせて。聞かせてくれてありがとう。すずかの秘密を初めて教えられた事は、光栄な事だと思うから」

僕がそう言うと、すずかは驚いた表情を一瞬見せるけど、すぐに照れくさそうに笑ってくれた。うん、まずは不安を無くせたね。でも、この後の言葉をちゃんと理解してもらわないと、意味がない。

「でも、同時に謝らないといけない。ごめん。少しでも君を怖いつて思った僕を許して欲しい」

それにすずかは怒るでも悲しむでもなく、純粹に苦笑した。別に言わなければ分からないのに。そんな風に言ってくれた。そうだとは思う。でも、言わないといけないって思ったんだ。すずかは僕を信じて話してくれた。その信頼を少しでも裏切った事に変わりはないんだから。

そう言うとすずかは少し声を失って、それから嬉しそうな微笑みを返してくれた。

「ふふっ、そんな風にユーノ君なら言ってくれるってどこかで思ったから、私は最初に話したかったのかも」

「そんな……でも、そうだとしたら嬉しいよ」

「なのはちゃん達も同じ事言ってくれるかな？」

「同じじゃないと思うな。きっとなのは達なら、僕よりもすずかを勇気付ける答えを聞かせてくれるよ」

僕はそう力強く断言した。それにすずかも頷き返してくれた。でもその時、すずかが小さく何かを呟いていた事に僕は気付けなかった。

でも、私はユーノ君の言葉が一番嬉しかったんだからね……

それから少しして、僕はアリサに呼び出された。そう、呼び出されたんだ。おかげで仕事を半ば無理矢理終わらせ、疲れた体に鞭打って海鳴へ。向かう先は湖畔のコテージ。以前アリサと別れた場所だ。

そこに着くと、アリサが仁王立ちで待っていた。でも、表情は満面の笑み。その姿勢との違和感に戸惑う僕へ、アリサはその表情のまままでこう告げた。

ユーノ、よくやったわ！ 褒めてあげるっ！

うん、益々分からない。と、僕が理由を聞こうとしたら、アリサが僕の方へ歩み寄ってきた。そして、僕へ事情を話してくれた。ど

うも、アリサもすずかの事情を教えてもらったらしい。しかも、昨日。なのは達はまだらしく、理由はすずかが直接会って話したいと考えてるからだそうだ。

で、話すキツカケになった僕との出来事を聞き、アリサとしてはそれに対してお礼をしたくなったらしい。すずかを勇気付けた事と前以上に明るくした事をだ。でも、それならすずかを主体にするのが普通だと思う。そう思ってアリサへ言つと……

「これはアタシがしたくてやる事なの。すずかはすずかでするかもしれないから、気長に待ちなさい」

「えっと、つまりアリサが個人で僕のした事のご褒美をくれるって事？」

「そうよ？」

自分の言った事が理解出来なかったのか。そんな風に言わんばかりのアリサの声。僕はそれに何かを言いそうになるが、それを何とか抑えた。そして、折角の好意を受け取らないのも失礼だと思って、有難くご褒美を頂く事にしたのだが……

「……これ、どうしたの？」

「どうしたのって……アタシが用意したのよ」

コテージの中に入ると、そこには大量の歪なおにぎりと具も何も入っていない澄まし汁があった。他には何も無い。もしかして、夕食を食べずに来いって言ったのは、これを食べさせるため？

僕はそう思い、どこか違って欲しいと思いつつもアリサへ問いかけた。ご褒美とはこれの事なのかと。それにアリサはやや恥

ずかしそうに顔を背け、頷いた。

「あ、アタシが自分で作ったの。ホントはもっと豪華な晚餐にしよ
うと思っただけけど、お金の力に頼るのは違うって思ったから……」

料理自体あまりした事がないから、アリサは結局簡単に出来そう
な物を作る事にしたらしい。ちなみに、手作り料理自体が初めてで、
お父さんさえ食べさせた事がないって教えてくれた。それを聞いて、
僕は確かに凄いが褒美だと思った。

そして、同時に本当にいいのかなとも思った。アリサの手料理を
一番最初に食べるのは、恋人がお父さんが相応しいと考えたからだ。
そう言くと、アリサは呆気に取られてから笑い出した。

別にそんな事を気にする必要はない。それに、そう思うのなら余
計光栄に思っただけで食べて欲しい。そんな事を言っただけで、アリサは最後に
咳払いを一つした。

「ま、まあ、そう言ってくれて嬉しかったわ。見てくれは悪いけど、
味はマシよ。ちゃんと味見はしたから」

「ありがとう、アリサ。じゃあ、遠慮なく頂くな」

「ええ。どうぞ」

その言葉に頷いて、僕が手を合わせていただきますと言うと、ア
リサがどこか面喰らったような表情を見せた。ああ、そうだよな。
日本人でもない僕がそんな風に食べるのは意外だろう。そう思いな
がら、僕は簡単に説明。

昔なのはの家に居候した時に食事風景は見ている。だから、こっ
ちの作法もちゃんと知ってるんだ。それを聞いてアリサも納得した。

さ、アリサの疑問を解消したところで早速おにぎりを……

「ど、どっ？」

「……うん、おにぎり自体は普通」

「そっ……って、普通！？」

「そっ、普通」

いや、別に不味くはないんだ。でも、取り立てて美味しいって訳でもない。だから普通。そう思ったからこそその返事だったんだけど、どうもアリサには気に入らなかつたらしい。やや拳をわなわなと震わせてるし、顔は俯いている。

これは爆発する予兆だな。そう考えて、僕は身構える。まだまともに話したのは二回だけど、その性格や言動などは理解してる。アリサは難しいように見えて、意外と素直なんだ。だから、その人格などを知る事が出来た。

「そこは嘘でも美味しいって言うもんでしょ！！」

「嘘言ってもアリサが喜ばないと思って」

予想通りのアリサの言葉に、僕は予め用意していた答えを告げる。思った通り、アリサはそれに言葉を詰まらせる。アリサはお世辞の類が嫌いだと、僕は確信していた。だから、正直に言ったんだ。

「そ、それは……そっだけど……」

「でしょ？ でも、出来れば僕の答えを最後まで聞いて欲しかった

な

「? どういう意味よ?」

アリサが僕の言葉に不思議そうに問い返す。そう、僕はあれだけで終わるつもりはなかったんだ。確かにおにぎりの味自体は普通だった。でも、それに対して思う事があったから、総合的な評価は違ってたんだよ。

おにぎりは普通だけど、アリサの気持ちさがこもってるからね。それ込みで考えて、じんわりと美味しいよ。

心からそう思うからこそその答えだ。おにぎりは普通でも、そこにアリサが込めてくれた気持ちは何にも勝る味付け。だから、僕はそう言いたかった。じんわりっていうのは、そういう事。アリサの気持ちを噛み締めて食べるからこそ、美味しいってものだから。

アリサは僕がそう言うと、それに嬉しそうな笑みを一瞬見せてすぐに顔を背けた。その反応に僕は苦笑。すると、アリサがそのまま怒鳴ってきた。

口説き文句みたいな事言ってるで、ちゃっちゃんと食べなさいよね!

その耳は真っ赤。でも、それを指摘すると怒るだろうから、僕は何も言わずにおにぎりを食べ続けた。ゆっくり味わうように食べる時に具が偏っていたり、或いは入れ忘れた物があったりしたけど、それもまた手作り感が感じられて良かった。

僕が食べる速度を遅くしていたから、途中からアリサがその様子を見てため息を吐いた。でも、それは呆れていても、どこか嬉しそうに聞こえたのは僕の気のせいじゃないはずだ。

「アリサも食べてよ。結構あるから、僕だけじゃ残しそうなんだ」

「そ、そうね。なら食べると思いますか」

隣り合っておにぎりを食べる僕ら。アリサは自分も食べて、僕が味わったようなおにぎりに当たったようで、時々微妙な顔をする。それでも、僕が何も言わないで食べてるから、きつと自分が当たった分しかないんだろうって思ったんだろうね。

そのまま特に何か言うでも聞くでもなく食べ続けた。澄まし汁も普通だった。強いて言うなら、少し塩味が薄いかな。でも、疲れてたからそう感じたんだろうと思う。アリサは飲んで小さく満足そうに「よし」って頷いてたし。

そんな感じで二人で食べ終えた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。アリサは車だから心配要らないけど、夜道は危ないから気をつけて欲しいな。そう思って、アリサへ注意を促した。対向車や脇から人が出てくるかもしれないからって。

それにアリサは苦笑して心配しすぎと返してきた。でも、その顔は嬉しそうだったからよしとしよう。こうして、僕はアリサが見送り返すと言ってきかなかったので、仕方なく先に帰る事にした。

ご馳走様。

お粗末様。

そんな言葉を交わして、僕はミッドへ戻った。勿論、家に着いた後にはアリサへメールを送る。内容はこんな感じ。

今日は本当にありがとう。今度があるなら、出来れば前もっ

ユーノがすずかとアリサと愚痴りあっているらしい

「最近すずかとアリサが良くメールをくれるんだ」

「悩みがあると言っていたから聞いてやれば、のっけから自慢か」

僕の話の切り出しにクロノはため息混じりに答えた。男二人だけの空間。今、僕とクロノは僕の家のリビングにいた。購入したアルコールとおつまみをテーブルに並べて、既に飲み会の様相を程しているがこれは僕の悩み相談だ。

僕の告げた名前をクロノも知っている。闇の書事件の終盤、なのは達と遭遇して魔法を知った二人。その名前はクロノにも強く刻まれているのだろう。そう思いながら、僕はやや呆れているクロノへ多少怒りを見せて反論した。

「違うよ。問題は二人からの内容さ。なのは達に良い人を紹介してやって欲しいって」

「……それは困ったな」

「だろ？」

三人が僕へ想いを寄せてくれている事をクロノは知らない。いや、言おうとは思ったんだ。でも、これはクロノの問題じゃなくて僕の問題だ。下手に巻き込むのは良くないと考えた結果、黙る事にした。クロノが困ったと言ったのは、三人が基本的に仕事人間だからだ。お見合いの話だって、今まで無かった訳じゃない。でも、駄目なんだ。どれだけ好条件でも三人は首を縦に振らなかったから。僕はその本当の理由をあの日まで知らなかったから、クロノもきつとこう

思ってるはずだ。

「三人して仕事が恋人だもんね」

「ああ、そうだな……困ったものなんだが」

「フェイトは一度お見合いしたんだっけ？」

「結果は申し訳ありませんが……になったがな」

リンデイさんがどうしても一度だけでもしてくれと言って、やっと受けたお見合い。相手は本局勤務の事務をしている男性。出世頭でも魔導師でもない相手だったのは、リンデイさんなりのフェイトへの願いだっただろう。

危険な場所に行く事もなく、安定した仕事をしていく相手と少しでも平和な家庭をつて。でも、フェイトは相手の事を最初から断る気で会っていたようで、礼儀的に三回程会って断った。それにリンデイさんはどこかで覚悟していたのか、あっさりと頷いていたらしい。

その後、クロノはなのは達の考える良い人を知る必要があると言い出した。酒がそれなりに回ってきたんだろう。何か聞いた事はないかと僕へ尋ねてきた。それに僕は当たり前障りのない答えしか返せない。

優しい人や頼りになる人などだ。さすがに僕ですとは言えないので、そう言うしかなかった。でも、クロノは当然ながら当たり前前の意見に満足しない。直接聞いてみるかと言い出したんだ。

「ちょよ、ちょっとクロノ。さすがにそれは直球過ぎるだろ！」

「あの三人には直球じゃないと通用しないぞ」

その反論に僕は沈黙。うん、よく知ってる。何せ、三人も僕に同じ事を言っただくらいだからね。そして、クロノはまずはフェイトへと電話。でもクロノ？ さすがに第一声が、好きな男のタイプはなんだってのはないよ。

フェイトもクロノのそんな問いかけに戸惑ってはいるらしく、クロノがないのかと聞いている。あ、何だろう……急に悪寒が……

「……そうか。いや、いいんだ。すまないな」

クロノは急に優しい声でそう告げて電話を切る。そして僕へ少しだけ鋭い視線を向けて、再び電話をかける。なのはかはやてだろうなあ。僕はこの後の展開を想像し、ただ黙って朝日が見れるようにと祈るだけだった……

「見事に三人の好みが共通していたぞ」

「そう……なんだ」

とてもイイ笑顔でクロノは僕へそう言った。今なら、その笑顔で人が殺せるんじゃないかってぐらいに。僕はそんなクロノへそう返すのが精一杯。あー、もう終わったかな。どうもフェイトだけじゃなく、なのはとはやても好みのある人物名で告げたらしい。

じゃないとクロノの表情の説明がつかない。例えば僕らしい特徴を挙げたとしたら、クロノはここまで露骨に僕へ殺気をぶつけない。確認を取るまではクロノは絶対に決め付けをしない奴だからだ。

「さて、どう落とし前をつける気だ？ この色男」

「えっと、それなんだけど……」

僕は自分の覚悟と決意をクロノへ明かした。決してなのは達には言わないで欲しいと告げて。クロノは内容次第だと言っていたけど、そう言った以上余程じゃない限り黙ってくれると僕は知っている。

そして、クロノは僕の話の話を聞き終わると静かに目を閉じて一言だけ呟いた。このバカ野郎って。うん、そうだよ。でもそれでいいんだ。僕は三人を守るって決めた。決して隣にいたいなんて思わない。いつか三人に別の好きな相手が出てくれる事を願ってるぐらいなんだ。そう言ったら、クロノに複雑な顔をされた。

「お前は意外と不器用だったんだな」

「君が言える？」

「……そう、だな。色恋に関してはお互い絶望的だ」

「それでも、クロノはクロノだけの答えと結果を掴んだ。僕もそうしようと思っただ」

僕の言葉にクロノが呆れたような表情を返す。それに僕は笑みを浮かべた。何を言うかが分かったからだ。

「かつこつけど」

「それでいい」

「誰も幸せにならない」

「それは分からない」

「……どうしてもか？」

「……ああ」

最後の問いかけには、かなり迷った。でも、答えた。この瞬間、僕は三人へのある種の決別を決めた。クロノもそれを悟ってくれたんだろう。何も言わず、黙って缶ビールを開けて僕の前に置いた。それが何故かとても嬉しくて、そしてとても悲しくて、僕は無言でそれを手に取る。そして、そのまま一気に飲み干した。苦味が口だけじゃなく体中に広がっていく。いつもよりも苦く感じるそれ。僕は、それを全て飲み込んだ。

なのはへの想い、フェイトへの想い、はやてへの想い。それらを全て押し流すような苦味と共に。僕はただ飲み干した。頬を流れるものへ気付かぬ振りをして。クロノは僕の方に背中を向けて静かに缶ビールを飲んでいた。

その心遣いが実に君らしいよ、クロノ。好きだからこそ突き放す愛もあるって、どこかで聞いた事がある。でも、それは自分勝手なわがままだ。いや、男の都合のいい言い訳だ。本当に愛しているのなら、何があっても傍で守る事が出来るはずだから。つまり僕は三人を愛していない。そう自分に言い聞かせる。

守ると言いながら、その想いに応えようとしない事がその証拠。それでも流れるこれは何だろうか。自分自身が情けないと思ってるのか、それとも……

「……今度、三人に直接会ってもう一度僕の決意を伝えるよ」

そう搾り出すように言うと、クロノは振り向かずにごう言った。

勝手にしろ……

なのはに泣かれ、フェイトに愕然とされ、はやてには怒鳴られた。あの時と同じ言葉だったけど、三人は理解してくれた。僕の気持ちを、その決断を。どこかで僕が残っていた甘さ。それが今回はまったくないって気付いたんだ。

どれだけ待ってももう変わらないと。変えようがないって、そう察してくれた。それでも、三人それぞれが僕へ考え直すように言ってくれた。僕はそれを嬉しく思いながらも首を横に振った。そして最後にこう言った。ありがとうって。僕へ想いを寄せてくれた事に対しての心からの感謝を告げた。

そして、すずかとアリサが三人が良い人と出会って欲しいと思ってる事を知ってもらおうと思った。だから、近い内に二人と話してみたいと告げる。それに三人は複雑な表情を見せた。僕が二人に何を言われたのが気になったのかもしれない。

僕は三人の事を心配していたとだけ言って、話を終えた。立ち去る時、絶対に振り向かないと言いつけて。僕の勝手な感傷だけだね。そんな事があって、現在の僕はどこか気が抜けたようになっていた。

仕事はしてる。ミスだつてない。でも、張り合いがない。なのは達は今も僕と友人だ。でも、以前のような雰囲気はない。どこか互いに変な意識をしているのか、色々ときこちないんだ。でも、僕がそれを引き起こしたんだから文句はない。

なのは達に悪い気がするけど、それで僕が何か言える事はない。そしてそれから二月としない内に、なのは達三人に相手が出来たらしいという事が聞こえてきた。なのはは教導先の教え子。フェイトは執務官補時代の上司。はやてはカリムさんの紹介の修道騎士。

「……そっか。なのはは幸せそうなんだね」

「はい。でも……ヴィヴィオとしては……」

「駄目だよ、ヴィヴィオ。君だって彼の事は好きなんだろ？ なら、それでいいじゃないか」

今、僕の部屋にはヴィヴィオがいる。こうしてなのはの話の話を聞かせてくれるのは、僕が心配しないようにとの思いからなのか、それとも僕に考え直すように仕向けているのかは分からない。でも、どちらでもいい。なのはもフェイトもはやても幸せならそれで。

ヴィヴィオもパパが出来るかもしれないんだ。僕へはお兄さんぐらいの感覚でいいよ。それでも十分過ぎる幸せなんだ。そう思うからヴィヴィオへその旨を伝える。それにヴィヴィオは少しだけ呆れたような表情を返す。あ、どこかなのはに似てるよ、その顔。

「ユーノさん、これはヴィヴィオからのお願いです」

「何？」

そう言っつて真剣な眼差しを向けてくるヴィヴィオ。それに僕も姿勢を正して見つめ返す。

ユーノさんも幸せになってください。じゃないと、ヴィヴィオが無理やりお嫁さんになりますよ。

その発言に僕は呆気に取られた。でも、その言葉に込められたものは伝わった。だから、感謝を込めて返事を述べる。ありがとう。僕なりに全力で幸せを掴んでみせるよ。そう言くとヴィヴィオは嬉しそうに頷いてくれた。

でも後半も本気らしく、ヴィヴィオが十六になっても独り身だったらもらってもらうとまで言われた。なのは達の色々言われたくないのなら、必死になって頑張れつてさ。結構きつい事言つよ、この子も。

そうして、僕は仕事だけじゃなくて……その、自分の幸せを探し始めた。そういう相手も含めてね。正直僕はずっと独り身を通そうかとも思っていた。でも、ヴィヴィオは絶対あの言葉を実現する。僕がどれだけ言つても決行する。

心から好きな相手と結ばれるように言つても、おそらくなのは達と同じ事を言ってくる。そして、僕がなのは達を拒んだ最大の理由がヴィヴィオには通用しない。だから、僕はヴィヴィオのためにもそういう相手を見つけようと思った。

その相談相手は、やはりあの二人しかいない。すずかとアリサだ。困った時は相談に乗ると言ってくれただけでなく、愚痴を言える相手も中々居ないんだよ。クロノは長期任務が多いし、ロツサはそんな事を言おうものなら面白半分で女性を紹介してきそうだしね。

女性にそんな愚痴を言うのは本当は気が引けるんだけど、しょうがない。と、そんな風に思っていたのは最初だけ。一度話してしまうとそこから先はもうそんな意識は吹き飛んだ。僕が愚痴るのと同じで二人も色々と愚痴があったからだ。

「で、結局アタシの財産目当て」

「それは酷い」

「アリサちゃんも？ 私もこの前誘ってきた人がそういう人だったんだよ」

「あー、それはご愁傷様」

「すずかも結構なお嬢様だもんね」

男の愚痴は女の立場からばつさり。女の愚痴は男の立場から謝罪。大抵がこんな感じ。ちなみにこの三人での愚痴の言い合いと言うか、宴会はアリサ所有の湖畔のコテージで行われる。

三人で簡単な料理を作り、持ち寄ったアルコールやおつまみなんかで他愛もない話や恋愛関係の愚痴や悩みなんかを言い合うんだ。すずかもアリサもなのは達と前後して積極的に相手を探し出した。理由は言うまでもなく三人が付き合い出したからだ。何せ……

本人達にその気はないかもしれないけど、かなり惚気られるのよ……

最初はいいんだけど、段々寂しくなってくるんだ……

二人してそう言っていたのを、今でもはつきり思い出せるのだから。で、僕はそんな二人へ中々言えない女性への不満を聞いてもらう。とはいえ、それは男の不満を散々言う二人への軽いお返しだ。

男も女も顔立ちでまず判別される。それがおかしいと思わないかって。だって、相手と一緒にいたいって思う要素って趣味や性格などの内面的な部分じゃないのかと思うんだ。それに人間誰だって欠点はある。そればかり見て良い所を探そうともしないのも間違ってる。僕は二人へいつもそう言っていた。

実際二人もそれには同意してくれるんだけど、中々実行が難しいらしい。どうしても欠点の方が目立つからね。でも、僕は欠点だらけの方が人間らしいって最近思うようになってきた。欠点を無くそうとする人は頑張りや。欠点を隠そうとする人は強かで、欠点を欠点として開き直るのは潔い。

良く取ればこんな風に考える事も出来る。まあ、逆は言わないでもないけどね。だから、僕は欠点を見つけるとすぐに良い所を探そうとする事にしている。その人を嫌いになるのではなく、好きになる部分を見つけようと思って。どうしても好きになるのが無理な相手でも、良い所はある。それを知っているだけでも若干嫌悪感が緩和されるってものだから。

「で、ユーノは好きな相手は出来たの？」

「それが中々。無限書庫の司書長は忙しくてね」

「出会い自体が少ないの？」

「と言うよりはゆっくり理解し合う暇がないってとこ。いいなって思う相手は出来ても、そこからが……。何せ、こっちもあっちも局員だからさ。それぞれの仕事や都合もあるんだ」

特に無限書庫の利用者は基本忙しい者達だ。ほんの気晴らしにと本を探しに来る人は少ない。なので僕が気になる相手を見つけたとしても、今度その人と会おうと思うところまでいかない。結局時間と共にその相手から意識は離れる。

一目惚れでもしない限り無理かもしれない。そう僕が言うと二人揃って深々と頷いた。理由を聞くと、どうやら相手の事を知れば知る程嫌になる状況が続いているらしい。なので、もういつそ一目惚

れぐらいの周りが見えない状態になりたいんだって。

「駄目なのよ。たまにいいとこまでいきそうでも、アタシの家の事を知ると大抵尻込みしちゃうか目の色変えるかだし」

「私もだなあ。月村って結構海鳴じゃあ有名だからね」

「……お嬢様は大変だ」

僕が苦笑してそう言うのと二人も同じような表情を返して頷いた。そして、三人揃ってため息を吐く。と、そこでちよつとした思い付きのようにアリサがこんな事を言い出した。

ねえユーノ、試しにアタシと付き合ってみない？

その言葉に僕とすずかは驚きを浮かべて視線を動かした。アリサはどこか悪戯めいた笑みを浮かべている。あー、これは完全にかうつもりだな。

「一応聞くよ。どうしてそんな事を？」

「簡単よ。あんたはアタシの家の事を聞いても何とも思っていないし、曲がりなりにもこれだけ愚痴を言い合ってるんだから互いの事も知ってる。条件としては十分でしょ？」

アリサのどうだと言わんばかりの言葉に僕は苦笑いを返す事しか出来ない。確かについて少し思ってしまったんだ。それにアリサと付き合ってみる事で女性の事をもっと知る事が出来るかもしれない。そんな風にも思った。

でも、僕がそれに反応を示す前にすずかがそれに待ったをかけた。

どうも、そんな軽い感じで付き合つのはどうかと思っ
ているらしい。それにアリサは何か思つたのか考え始めた。
そして、すずかへ名案とばかりにこう告げた。

「分かつた。なら、すずかもユーノと付き合えばいいのよ」

「「は？」」

「アタシ達に足りないのは、ズバリ異性と過ごす経験よ。で、擬似的に恋人らしくいれば、異性の事を知識でだけじゃなくて感覚的にも少しは理解出来るでしょ？」

アリサの説明に僕もすずかも成程と頷いた。この時、僕ら三人はアルコールのために正常な判断能力を失っていたんだろ。大人し
いすずかがアリサのともでも発言に笑顔で、さすがアリサちゃんな
んて言つてたぐらいだ。

こうして僕ら三人は、異性との交際体験と銘打つて擬似的な恋人
ごっこを始める事になった。決められたルールは、過ごす時は恋人
だと思つて接する事。あくまで擬似的な事を忘れず、普段は友人と
して意識を切り替える事。以上の二点だ。

「じゃ、基本ユーノの都合に合わせるわ。アタシ達はもう卒論だけ
だし」

「アリサちゃん、デートとかの予定はどうするの？」

「そうねえ……アタシ達が都合の悪い日をユーノへ教えておくから、
後はユーノがそれを見て決めるつてのでどう？」

「了解。じゃあ、なるべく交互に誘えるように調整するよ」

「すすかとユーノが本気になったらしい

「お待たせすすか」

「うっん。今来たところだよ」

僕が少し申し訳なさそうにそう言うと、すすかは柔らかな笑みと共にそう返事をしてくれた。それに僕も笑みを返し、すすかの手を握る。今僕らがいるのは月村家の庭にある転送ポート。ここからいつものようにミッドへ出かけるんだ。

既にあのアリサの提案から二ヶ月。僕は二人と恋人ごっここのデートを何度かした。最初こそ互いに違和感を感じたけど、でもそれも途中からは薄れていった。気付いたんだ。恋人になったとしても普段の自分達でいいんだってね。

で、今日はすすかとデート。これで五回目かな。そんな事を思い出しながら僕はすすかの手を握ったまま、転送魔法を再度展開。一瞬にして景色が月村家の庭からミッドの転送ポートへと変わる。

すすかはそれを確認するとすぐに歩き出す。しかも笑顔で僕の腕に体を寄せてきた。結構大胆な時があるんだよね、すすか。そう思っただけの時そう指摘すると、すすかは小悪魔的な笑みを浮かべてこっぴど返した。

だって、好きな人だもん。

その返しに僕は降参。デート中は恋人らしくを実践するかのような模範解答に脱帽するしかなかったんだ。しかし、すすかはどんな綺麗になってるなあ。アリサもそうだけど、僕とのこの疑似体験が女性としての自信でも与えてるんだろうか。

そういえば、二人とも最近言い寄られる事が増えて困ってるって言ってたっけ。そこから相手を探せばいいと言ったら、何故か二人してこう即答してきた。

い、今はユーノ君との疑似体験の方が大事だよ。

あ、アタシも、もっとユーノの事を知って自分に活かしたいのよ。

こんな感じでね。つまり二人して、しばらくは異性について理解を深める方が大事って思ってるんだろう。そんな事を思い出しながら、僕とすずかが向かうは最近の定番となった場所。僕にとっては見慣れた、すずかにとっては宝の山な空間だ。

「やっぱり壮観だなあ」

「僕はもう見慣れたけど、そうなんだよね」

読書家のすずかは無限書庫に来るといつもこう言う。そう、僕の職場である無限書庫。そこがここ最近のデートの場所だ。すずかは読書家だって知った僕は、ならばと無限書庫に案内した。すずかは聞いていた話から大きな図書館ぐらいを想像していたらしく、初めて来た時は絶句。

でも、すぐに目を輝かせてどこの棚がどんな本かを聞いてきたぐらい。まあ、ミッド文字が読めなくて少し残念そうにしたのが実のところ結構可愛かった。僕がすずかの読みたい本を検索し、二人で読む。僕が代読するんだけど、すずかはその内ミッド文字を読めるようになると考えてるみたい。

「ユーノ君、まずはこの前の本をお願いしていい？」

「了解」

無重力を楽しむように動きながら、すずかは僕へそう告げた。ここをデートコースにしたのは三回目から。以来、すずかとのデートはここで安定した。すずかがたまには違う場所をつて言わない限り、僕はここにする事にしてるから。

何だかんだで僕も読書は好きだし、その……すずかと一緒に読むのは結構楽しい。図書館デートなるものがあるらしいけど、僕らの場合は読書デートかもしれない。いつも隣り合って一冊の本を読む。同じ本のはずなのに、僕とすずかで捉え方が違ったりするのが面白いし。

僕はそんな事を考えながら、すずかの希望通り前回読みかけの本を手にとった。それは古代ベルカの御伽噺。と言うか、実在の人物を題材にした作り話の類。すずかは結構ファンタジーが好きらしく、こつという物を良く読まされる。僕自身はあまり好きではないんだけど、すずかと読むと苦にはならないから不思議。

「えっと、この前はどこまで読んだっけ？」

「確か……百五十三頁だったよ」

僕の疑問にすずかは思い出すように頁数を告げた。言われた通りに開くと確かにそこだ。読んだ覚えがある。僕がさすがって褒めるように言うと、どこか嬉しそうにすずかは笑みを返してくれた。そして、僕の隣ですずかは本を覗き込むようにする。

それが音読開始の合図だ。僕はあまり迷惑にならないように注意しながら、文章を声に出していく。すずかは、それを聞きながら物語の世界へと入っていくかのように、静かに目を閉じる。しばらく

そんな時間が流れる。周囲で仕事をしている司書達がそんな僕らをどこか微笑ましげに見てくるけど、それに構わず僕はさすがのため

に本の朗読に集中する。

やがて物語は終わり、さすがはゆつくりと目を開けた。あ、軽く潤んでる。まあ、無理も無いか。これの最後は悲しい結末だ。ヒロインと死に別れ、主人公はその亡骸を抱きしめて終わる。さすがにはそれが自分の事のように感じられたのかも。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。こういう話を読むところなるんだ」

「そうなんだ。さすがらしいよ」

「ふふつ、でも今は読むじゃなくて聞くだけだね」

僕の言葉に目を拭いながらすすかはその言って笑った。そして、次の本はって聞くと少し悩んでこう答えた。今のが悲しい話だったから、次は幸せそうな恋愛物がいいって。それは検索としてはちょっと難関かも。

条件に結末まで入れる事が出来ないから、ある意味で博打になる。それでも何とか希望する物を見つけ出そう。検索魔法陣展開。条件は現代ラブストーリーと人気作。これならずかの希望に添える物が出てくるはず。

検索の結果出た本を取りに行く。さすがは僕の手には掴まって移動別に待っててくれればいいのに。でも、そのいじらしさもまたさすがからしい。そう思って僕は嬉しく感じながら次々と棚を移動していく。

見つかったのは何と五冊。でも、これ現代って括りにしなかったらもつと多かつただろうな。すずかに本のタイトルを教え、その響きだけで決めてもらおう事にした。こういうのって直感だしね。

すずかが悩んで決めた物をその手に渡し、後はまた僕が戻していく。それにはさすがにすずかも大人しく待ってくれた。さて、戻し終えたしすずかの傍へと戻ろう。そう思ってすずかの隣へ戻ると、すずかは手にした本を開いて読んでるように見えた。

「読めるの？」

「少しだけなら。でも、やっぱりスラスラとはいかないね」

「そっか。でも、そこまで読めるようになったら少し寂しいな」

僕がそう言うтусずかがどこか嬉しそうな顔をした。まあ、今は偽らざる気持ちだ。そうなっても、僕と一緒に同じ物を読む事が出来るけど、二人で同時には無理。今のような過ごし方は出来なくなるだろうからね。

すずかはそんな僕的心情を読んだのか、笑顔のままこう言った。ならそうなっても、僕がいる時は僕に朗読してもらおうって。うん、それを言われると嬉しいけど、同時にすごく恥ずかしい。今は恋人らしくって事から言ってるのか、それとも本心から言ってるのかは知らないけどね。

「す、すずか、別にそこまでしなくても」

「ユーノ君に読んでもらうのって結構好きなんだ。それに、ユーノ君の読み方でそこをどんな風に思ってるのか分かるし」

「……そうなの？」

意外だ。すずかっつてそこまで聞いてるんだ。僕が軽い驚きを浮かべていると、それにすずかは小さく笑って頷いた。そしてこう言った。

私、ユーノ君の傍ですつと本を読んでいたいな。

僕はその言葉に思考停止。いや、意味は分かる。でも、それが意味する事が一つしかなくて。僕がそんな風に混乱していると、すずかは僕の耳元へ顔を寄せて囁いた。これは本気だよつて。

「すずか……それじゃあ……」

「うん。いつの間にか本当に好きになってたんだ。キツカケはユーノ君が私に言ってくれたあの言葉だよ」

「……もしかして悩みの話の時？」

「そう。あの時、ユーノ君は言ってくれたよね。私は私。それを僕は断言する。例え、世界中が否定してもつて」

すずかはそう言つて僕へこんな事を聞かせてきた。どうも彼女の一族は秘密を話した相手が異性の場合伴侶とする決まりがあるらしく、すずかはそれもあつて僕を意識していったんだけ。最初は僕の事を信頼して、伴侶なんかにしないで大丈夫つて思つてたけど、次第に別の意味で伴侶にしたくなつたと締め括つた。

「で、でもすずか……僕でいいの？」

「むしろそれは私の台詞だよ。ユーノ君ならもつと良い相手見つかるだろうし」

「すずかがどこか自嘲気味にそう言ったから、つい僕は反射的に叫んでしまった。」

「そんな事ないっ！」

「すずかや周囲がその声に驚くけど、僕は構わず続けた。だって、その言葉を告げた時のすずかの表情は、以前の悩みを抱えたままの頃だったんだ。せつかく払い除けた影。それをどうして自分から戻そうとするんだ。」

「僕はそう思いながら、すずかへ告げた。どれだけすずかが魅力的な女性かって。あの誤解を解いた日から今までで感じたすずかの事。それを僕は語った。穏やかだけど芯は強いすずか。そんな彼女が長年苦しんできた悩みを、一番に僕へ明かしてくれた事は本当に嬉しかったんだ。その気持ちも込めてすずかへ伝える。」

「気がついた時には、すずかが泣いていた。僕は何か悲しませるような事を言ったのかとも思ったけど、すぐに気付いた。それがそういう涙じゃないって。」

「ユーノ君、ありがとう。私、すごい幸せだよ」

「すずか……」

「あの悩みを全部話した時、ユーノ君が言ってくれた言葉が私は本当に嬉しかったんだよ」

「それは僕もだよ。光栄に思ったのは本心からだから」

そう言っただけで僕は見つめあった。ある程度そうしていると、周囲から一斉に咳払いが聞こえて僕らは我に返る。視線を動かすと司書達が苦笑いを浮かべていた。そこで僕らは揃って今まで自分達がどこで何をしていたのかを理解した。

もう恥ずかしいなんてもんじゃない。僕とすずかは逃げ出すように無限書庫を後にした。そのすずかの手には、さっき見つけた本が握られたままで……

気が動転してたからだろうか。僕は何を思ったのかすずかを連れて自宅へ来ていた。とりあえずすずかを中へ招いて、落ち着くために飲み物を用意する。僕がそんな事していると、すずかが何かに気付いて声を出した。

視線を向けるとすずかは申し訳なさそうに一冊の本を見せた。それがさっき見つけたラブストーリー物だと理解し、僕は苦笑した。すずかは無断で持ち出した事を気に病んでるんだろうけど、別にそこまで大きな問題じゃない。何せそれは市販されていた物なんだ。そう教えるとすずかは納得したのか安堵の息を吐いた。

「今度僕が持つて行くからいいよ」

「ごめんね、お願い」

すずかの前にアイスコーヒーを置き、傍にミルクとガムシロップを添える。それをすずかは両方使って簡易的カフェオレを作る。僕もブラックでは基本飲まないの、同じようにカフェオレにする。徹夜とかで眠気を飛ばす時はブラックで飲むだけだね。

そんな事をすずかへ話しながら僕はカフェオレを飲む。すずかも、

昔お姉さんが徹夜する時同じような事をしていたと思い出して笑っていた。そして雰囲気落ち着いたところで僕は仕切り直すように咳払いをした。

「すずか、さっきの言葉は……本気だから」

「……うん、私も同じだよ」

「じゃ、アリサに話をしないといけないかな」

「あ、それは私がしておくよ」

僕とすずかが本当の恋人になるなら、アリサに話をしておかないと。そう思ったんだけど、そう言うтусずかがどこか慌てたようにそう言うて携帯を取り出した。そしてそのままアリサへ電話をかけながら離れる。恥ずかしいから聞かれたくないんだろうか？

そんな事を思いながら、僕はその間にすずかが持ってきてしまった本を手取る。中身を軽く読みすずかの希望通りだったかを確認するためだ。えっと……うん、特に問題はないかな。流し読みだから詳しい展開までは把握しないけど、結末はハッピーエンドだ。

僕がそんな風に物語を確認していると、すずかが電話を終えて戻ってきた。どこかその表情が少し申し訳なさそうに見えたので、不思議に思って問いかける事にした。

「すずか、どうしたの？」

「え？」

「いや、どこか浮かない顔をしてるから」

僕がそう言うと、すずかは苦笑する。でも、何か迷っているような顔をして話すかどうかを考えていた。僕はそれをただ待った。別に無理に聞くつもりはないって告げると、すずかは一度息を吐いて苦笑いを浮かべた。

そして、アリサとの話の要点だけを教えてくれた。アリサは僕とすずかが本当に付き合う事にしたと聞いて、しばらく無言になったらしい。その後、アリサはいつもの感じでおめでとうとだけ言って電話を切ったんだって。それを聞いてすずかがどう考えたのかは、正直僕にも分かる。

「アリサちゃん、ユーノ君が好きだったんじゃないかな。なのに私……」

「すずかは気にしないでいいよ。僕がアリサの気持ちに伝えられないんだ。今度、僕自身がアリサと話すから」

僕は自分を追い詰めかねないすずかの言葉を遮ってそう断言した。それでもすずかが泣きそうだったので、その傍に近付いて背中を優しく抱きしめた。それにすずかが少しだけ驚きを見せたけど、すぐに委ねるように体を預けてくれた。

それが嬉しくて、僕はそのまま何も言わずにすずかを抱きしめた。僕の手にはすずかの手が重なり、互いの鼓動を感じ合う。何だろうね。なのは達に比べればすずかと過ごした時間は少ないのに、こんなにも落ち着くのは。

そんな事をぼんやりと考える。そして、程なくして原因に辿り着く。すずかの発する雰囲気は常に平和的だからだと。なのは達は三人揃って局員。つまり、常に気を抜きっぱなしとはいかない。でもすずかは違う。すずかは魔法も使えないし、局員でさえない。非日

常とは無縁の世界を生きてる。

「……そっか。さすがの穏やかな雰囲気は僕を癒してくれてるんだ」
「ユーノ君？」

つい呟いた言葉。それにさすがかどうかという事とばかりに視線を向けた。僕はそれに自分が感じた事を話す。それにさすがはどこか納得したけど苦笑した。自分も非日常な部分があるのにならね。

「月に一度血が吸いたくなるなんて、平和じゃないよ」

「そうだね。でも、逆に言えばそれ以外はそうでしょ？」

「……なのはちゃん達はそんなに気を抜く時がなかったの？」

「いや、抜いてはいたけど何だろうね？ どこか違うんだよ、さすがとは」

僕も明確に言い切れる訳じゃない。でも、なのは達は十年以上も局員として働いている。その暮らしがどこか身にまとう雰囲気へ影響していたとしても不思議じゃない。根本は変わっていないけど、魔法のない地球の島国で過ごす日々から局員として魔法を使って過ごす日々への変化がどれ程大きいかは、きっと言うまでもない。

すずかもそう言うと感じ的には理解してくれたみたいで、小さくそうかもしれないと呟いていた。僕はそんなすずかを見てふと思いついたように本を見せた。今からこれを読もうと告げると、すずかはそれまでの空気を終わらせるように元気に頷いてくれた。

そこから僕らは寄り添って本を読み始めた。物語は冴えない小説

家志望の男性が気紛れで書いた話が新人賞を獲得し、その編集に美しい女性がついた事から始まった。

「ありそうでなさそうだね」

「まあ、小説だから」

すずかの感想に僕は苦笑で答える。男性は次の話のアイデアが浮かばず、女性を頼る。女性はいくつかの案を出してみるのだが、男性はそれに乗り気になれない。何とか書き出したものそこで女性はある事に気付く。男性には異性の心理描写が出来ない事に。

その理由が一度として異性と仲良くした事がないからだと言っている。それに女性は仕方ないとばかりに、自分を相手として理解させようと計画する。と、そこまで読んで僕は揃って互いの顔を見合わせた。

「これって……」

「似てる、ね。僕達に」

どこか意外な印象を受けつつ、僕らはまた本に戻る。男性と女性は仕事だけでなく日常でも接するようになった。男性は初めてのデートに緊張して失敗ばかり。だが、それに女性は呆れるのではなく好印象を持った。

それまで女性に言い寄る男は皆、自分を良く見せる事に傾注していた。だが、男性はそうではなく女性を退屈させないようにとだけしていた。それを理解し、女性は男性へ無理をしなくていいと告げて優しく接していく。

やがて二人は自然に仲を深めていく。男性は女性のおかげで筆が

進み、次々と話を書き上げていった。だがある時、女性に問題が起きる。それは両親が事故で危篤に陥ったとの報。男性は当然そちらへ行くように言い、女性はそれに感謝して故郷へと向かった。

しかし、それは中々結婚しようとしないう女性をお見合いさせるためのもの。女性はそれに憤慨するが年老いた両親の懇願に折れる事となる。一方、男性は女性の帰りが遅い事に徐々に不安を抱き始めた。そこへ聞こえてきた女性の見合い話。それで男性は自分が捨てられたと思う。

いや、そもそも付き合ってたんだ。捨てられたんじゃない、彼女は自分の幸せを探し出したんだらう。

男性はそう思い、出版社へ女性以外の編集へ変更してくれるよう頼む。こうして二人はどんどんすれ違い始める。新しい編集は新人の女性で綺麗ではないが可愛らしい印象の相手。女性には別の新進気鋭の作家が担当として言い渡される。

次第に二人は相手から好意を抱かれ、告白を受ける。その時、二人は何故か互いの事を思い出す。何故かそれを受けては相手を悲しませるような気がした二人は、それを丁重に断りすぐに互いに連絡を取り合った。

「……ユ一ノ君、もういいよ」

「え？」

「結末はどうなるか想像出来るし、私はもう十分だから」

その続きを読もうとした僕の手を止めてすずかはそう言った。何が十分なのかは聞かない。すずかの顔は笑顔だったから。すずかはそう言っただけ軽く伸びをした後、僕へこう言った。一度お姉さんに会

って欲しいって。

その意味が分からない僕じゃない。力強く頷いて、是非って返した。この後、すずかはファリンさんへ連絡し、今日は帰らないと告げた。それを聞いて僕は当然ながら胸が高鳴った。

「ごめんね、ユーノ君。急に泊まりたいなんて言っ

「いいよ。お客さん用の布団もあるから」

「……一緒にベッドで寝るのは、駄目かな？」

その言葉の持つ衝撃は想像以上だった。すずかの顔は真っ赤ではなくやや赤いだけ。それをどこか意外に思いながらも、僕は乾きを訴える喉のまま問い返す。いいのかと。それにすずかは躊躇いもなく頷いた。

もう覚悟は決めたから。そう言ったすずかに僕はなのは達と同じものを感じて小さく笑った。親友だけあって似てるや。そんな風に思いながら。そんな僕の笑みにすずかが不思議そうに尋ねてきたから、僕はその抱いた気持ち伝える。

「そっか。やっぱり朱に交われば赤くなるのかなあ」

「どうだろうね。そもそも五人は、根本的に似てる部分が多かったんじゃないかな？ だから今みたいな仲になったんだよ」

僕の言葉にすずかは嬉しそうに笑って頷いた。そうだといいな。そんな風に呟きながら。すずかの着替えの問題は、晩御飯を食べに行った帰りに買う事で片付いた。すずかは少し申し訳ないって言ってたけど、僕がプレゼントだと思ってって言ったら、苦笑しながら受け入れてくれた。

そして、二人で遅めの昼食を作る。材料はそれなりにあるので、すずかを助手に僕が腕を振るってつと。はやてから教えてもらった簡単レシピを披露すると、すずかは少し悔しそうな顔をした。どうも僕の料理の腕前が意外といいらしく、自分も負けてられないと言ったんだ。

「じゃ、僕は近い内にすずかの手料理を食べれるのかな？」

「うん、任せて。次来る時は私が作るから」

「楽しみにするよ」

「ふふっ、ご期待あれ」

互いに笑みを浮かべての会話。出来上がったはやて特製のペペロńczyノを食べ、僕らは互いの話をする事にした。知ってるようで知らない事だらけの僕らだから、知っていかうと思っただ。そんな話をしていると日が暮れて夜になり始めた。それを受けて僕らは外出。近所の料理店に入り、すずかにメニューを読んで聞かせる。それを聞きながらすずかはどれにしようかと考え、僕はお腹が空いていたのでお腹に溜まる物を食べようとメニューを眺める。

結局僕らは揃ってディナーセットにする事にした。ワインを一本頼み、それを食前酒として乾杯しようと思っただ。すずかかとの新しい日々に……乾杯」

「乾杯……でもユーノ君、意外とキザな台詞言っただね」

僕が少しむず痒いものを感じながら言った言葉に、すずかはそう

楽しそうに笑ってグラスを合わせてくれた。そう思うけど、僕だつて好きな子の前では格好をつけたくなるよ。そう返すとすずかは嬉しそうに笑みを返してくれた。

ワインを飲みながら待つ事数分。運ばれて来たのはサラダとポタージュスープだった。味から察するとじやがいもかな。想像以上にあっさりしていて、胃に優しい感じがする。すずかもその慈愛溢れる味に満足そうだ。次に来たのは店で焼いてるだろうパンが三つと牛フィレのステーキだ。

「うわあ、美味しそうだね」

「僕は空腹だったから、このソースの焦げる匂いだけでも涎が出そうだよ」

僕の言葉にすずかは同意するように頷いてナイフとフォークを手にした。僕は同時にステーキを切り、それを一口大にして口へ入れる。ソースの味と肉汁の旨味が口中に広がる。焼き加減はミディアムらしく、肉汁の量が多い。僕はそれに思わず顔が緩む。

見ればすずかも笑顔でステーキを噛み締めていた。言葉はなくても視線だけで分かる。幸せだよなって。

「ユーノ君はパンをどう食べる？」

「そうだね。一つは普通に、残りはスープをつけてかな」

「じゃあ、私もそうしようっと」

そんな会話をしながら夕食の時間は過ぎていく。そして、店を出て向かうはずかの着替えを買う為の衣料品店。すずかはそこで動き易そうな寝間着などを選び、僕が支払いを済ませて揃って帰宅。

そのまま軽い雑談なんかをしてただけで、段々夜が更けていくにつれ、互いに変な意識をしてそわそわし始めた。僕は先にシャワーでも浴びようと思い、すずかにそう告げてバスルームへ。

(でも、これって余計そういう事意識しちゃうなあ……)

そんな事を思いながら、僕は服を脱いでシャワーを浴びる。この後の展開にどこか期待しながら……

柔らかな日差しが静かに差し込み、僕を起こす。片腕に感じる重みにぼやける意識がゆっくりと目覚めていく。

「……すずか」

そこには生まれたままの格好になった僕とその腕を枕に眠るすずかがいた。昨夜は忘れられない夜になった。お互いに初めてだから手探りに近い状態で事に及んだ。僕もすずかも多少は知識があったから余計にぎこちなくて、でもそれが途中から面白く感じて二人で笑ったりした。

破瓜の痛みはあったみたいだけど、すずかは僕へこう言った。この痛みも嬉しい。僕と結ばれた証のように思えるから。そう言っただけを浮かべて微笑んでくれたんだ。

「う……ん……」

「起きた？」

そんな事を思い出していたら、すずかが軽く見じろきして目をゆ

つくりと開けた。その愛おしさに僕は嬉しくなって笑顔を浮かべる。それを見てすずかがどこか照れくさそうに笑みを返してくれた。

「……うん。おはよう、ユーノ君」

「おはよう、すずか」

「何だか、少し恥ずかしいね」

「そうかも。でも、悪くない」

僕がそう言うとすずかも頷いてくれた。そこでどちらからともなく顔を近付けて唇を重ねる。これが夢じゃないって確認がしたくなった。そんな感じた。互いの存在を確かめ合って、僕らは顔を離す。あ、駄目だ。このままだと暴走しそう。

そう思っすずかにそれとなく告げる。そうしたらすずかは、少し楽しそうに笑みを浮かべて爆弾を投下してきた。

何なら……する？

理性が一気に大きく削られる。代わりに欲望が強くなる。でも、それを何とか食い止めて、僕はすずかに残念だけど今日は仕事があるって言っ起きて上がった。すずかはクスクスと笑ってるけど、どこか残念そうに見えたのが嬉しかった。僕も同じ気持ちだったから。

服を着て僕は一足早くリビングへ。すずかはそれから遅れる事数分で現れた。身支度が早いねって言ったなら、お化粧は元々あまりしてないからこんなものらしい。そういえばなのは達もそうだったなあ。薄くはしてるらしいけど、正直僕には口紅以外さっぱり分からないレベルだった。

そんな感じで他愛もない話をしながら、僕は揃って食事の支度始める。すずかは僕の手伝いをしながら、これからの事を話してくる。どうも夜の一族との誓いをして欲しいらしい。それは一種の契約であり異性の場合はプロポーズにも等しいもの。

「いいけど、どうして今なの？ 本当ならあの秘密を聞いた時に言わないと駄目なんじゃ？」

「えっと……ユーノ君は絶対誰かに喋ったりしないって信じてたから」

どうも下手にこれを迫ると僕へ変な枷を付けるみたいと思ったらしい。すずからしいと思えば笑う。そして、僕は一度手を止めてすずかへ向き直って深呼吸。真剣な眼差しを向けて誓った。すずかを決して裏切らないと。この命尽きるまで守り抜いてみせる。一生傍で支え合いたいと。

そう告げるとすずかは一際綺麗な笑顔を見せてくれた。僕はそれに負けないぐらいの笑顔を返した。するとすずかが僕へ飛び込むように抱きついてきたんだ。だから、僕はそれを受け止めて優しく抱きしめる。

「ユーノ君、大好き」

「すずか、大好きだよ」

そう言い合って、僕らはキスをする。長くて深いキスを。そんな僕らを現実へ引き戻したのは、互いの空腹を訴える音だった……

それから半年が経過し、僕は住んでいたマンションを引き払った。新しい住居は今までと違い過ぎるぐらいの豪邸。とはいえ……

「ユーノさん、すずかちゃんが待ってますよ」

「ごめんファリン。先に行ってもう少しだけ待って欲しいって言ってくれるかな」

「もう……分かりました。でも、早めに来てくださいね」

そう、月村家なんだ。僕とすずかは将来の事も考えて同棲する事にした。でも、婚約はしたので周囲にはそこまで白い目で見られる事もないだろう。すずかのお姉さんである忍さんと旦那さんの恭也さんにも一度会って話をした。恭也さんは、すずかは義妹だから泣かせないようにと言って本気の殺気をぶつけてきたのが予想以上だった。忍さんは誓いを立てた事を聞いていたからそこまでじゃなかった。ただ……

すずかを頼むわ。ああ見えて意外と脆い部分もあるからね。

さすが姉なだけあって僕が知らない面を知っているらしい。僕は忍さんが不安にならないように精一杯支えますと返した。それに嬉しそうな笑みを返してくれたけど、その表情は姉妹だけあってどこかすずかに似ていたのを今でも思い出せる。

「……つと、これでいいかな？」

今僕がしているのはちょっとした包装。中身は新品のフォトアルバム。すずかへのプレゼントだ。今日はすずかの誕生日。今から三人だけのパーティーなんだよ。さて、急ぐとしようか。すずかをあ

まり待たせすぎるのも良くないしね。

僕はプレゼントを手にはずすかの待つ食堂まで急ぐ。ファリンとすずかがこつちを見て手招きしてくれている。広い月村家。今は三人だけど、いつかここにも新しい住人が増える日がくる。すずか似の子供かそれとも僕に似た子供かは分からないけど、その日は必ず来る。

「お待たせすずか、ファリン」

「遅いですよ、ユーノさん」

「私は気にしてないからね、ユーノ君」

やや怒ってますよ的な表情を見せるファリン。それが軽い冗談だと分かってるけど、一応謝罪。すずかへも謝る。そして席に座つていよいよパーティーの始まりだ。すずかの前にはやや小さめのホールケーキが置いてある。蝋燭も立ててあり、本数は年齢と同じだけある。そして、勿論翠屋で買った物だ。

僕が部屋の照明を落として暗闇を作り出す。でも、完全な闇にはならない。暖かい明かりがあるからだ。蝋燭の明かりがゆらゆらと揺れる。それを見て僕はファリンへ声を掛けた。

「じゃ、ファリン」

「はい」

僕とファリンが揃って手にクラッカーを持つ。すずかはそれに苦笑した。それでも気にせず僕らはそれを上に向けた。

「「すずか（ちゃん）、誕生日おめでとうっ」「！」「」

クラッカーから鳴り響く破裂音。漂うあの独特の匂いの中、すずかは嬉しそうに蝋燭の灯を吹き消した。それを見届け、僕とファリンは拍手をする。そこからは誕生日パーティーらしい展開。プレゼントを渡して、料理を食べながら色々な事を話す。

ファリンは感慨深そうに今までの事を話せば、僕はそれを聞いて色々と尋ねたりする。いや、だって知らない事が多いからね。すずかはファリンの話に相槌を打つけど、時々僕の疑問にも答えてくれる。そんな感じで時間は過ぎる。

そして後片付けをして、僕はすずかと共に庭へ出た。夜風が少し冷たいけど、お酒で火照った体には丁度いい。すずかもそれは同じらしく、笑みを浮かべている。

「ユーノ君、あのプレゼントって……」

「これからのお互いの思い出を残すためについて感じかな」

すずかが尋ねてきた事に僕はそう返す。僕がすずかに送った物にはそんな気持ちを含めた。すずかはその答えが予想通りだったのかやっぱりと笑っていた。僕はそれに照れくさくなった。読まれるとは思っていたけど、やっぱり少し恥ずかしい。

すずかはひとしきり笑うと嬉しそうな笑みを浮かべて僕の腕に寄りかかってきた。その体を僕は支えるように腕を回して受け止める。二人で黙って夜空を見上げる。そこにある星空を眺めて、僕はすずかへ告げた。

「すずか、僕の苗字は部族名だって教えたよね」

「うん」

「だから、厳密には僕の苗字って訳じゃないんだ。何と云うか、全体名って言うのか」

「すずかもそれで僕の言いたい事を何となく察したんだろう。どこか驚いたように、でも嬉しそうに目を見開いて僕へ視線を向けた。

「それでね……そろそろ苗字をもらってもいいかな？」

「ユーノ君……」

「出来れば、今年中」

僕がそう言うとすずかは目を閉じて頷いてくれた。そこから涙を流して。僕はそれを嬉しく思っで見つめる。すると、すずかが僕へ顔を近付けてきた。それに僕は慌てる事無く応じる。静かに星が照らす中、僕とすずかの影が重なった……

それから半年の間は目まぐるしく時間が動く事になる。言わなくても分かるよね。色々と準備しないといけない事だらけだったからだよ。忍さん達との日程調整や式場の確保とかあったから。

「ユーノ君、どうしたの？」

「ん？ ちょっと昔の事を思い出してた」

僕の隣には小さな命を抱えたすずかがいる。あれから時間もそれなりに経った。結婚して半年もしない内に妊娠したって分かった時

は、もう色々大変だった。それを何とか乗り越えて、今や我が家は四人暮らしとなった。

僕とすずか、ファリンに加えて今年一歳になる息子の和為だ。名前の由来は字の通り。えっと、すずかが言うには古代の偉人が残した”和を以って尊しと為す”から。僕はその言葉を聞いて実にすずかしいと思っただ。

協調する事を尊いと考えて欲しい。そんな事を思うところがね。僕もその考えは共感出来るから、名前にはすぐに賛成した。

「昔かあ。ふふっ……」

「どうしたの？」

「うん。今の状況は、九歳の頃の私には信じられないだろうなって。すずかはそう笑って和為の顔を見つめた。僕はそのすずかの言葉に納得。きつと僕もなのはと出会った頃なら信じないだろう。まさかすずかと結婚して子供さえ授かるなんてね。でも、意外と人生ってそんなものなのかもしれない。そんな風に思って、僕はすずかの隣に立つ。

和為の頬を軽く突いて笑顔を見せると、その顔が笑顔に変わる。それに僕もすずかも微笑みを返す。こんな風にずっと穏やかに時間が流れてくれる事を心から願う。いつか年老いても、隣にはすずかがいてくれるしね。でも……

すずか、かなり気が早いんだけど、お願いだから先立つのだけは止めて欲しいな。

それは私もだよ。出来るなら同じ時間に旅立ちたいね。

そう言っ僕らは苦笑。まだ人生は長い。なのにもう最後の事を話してる事におかしさを感じたからだ。優しい風が吹き抜けていく。さすががそれに目を細めて僕へ視線を向けてこう言った。いつまでも一緒だよって。その呟きに僕はこう返す。当然ってね。

愛してるよ、すずか……

愛してるよ、ユーノ君……

寄り添う僕ら。その間にはあの時にはいなかった命がある。それを僕は愛おしく見つめて微笑み合う。いつまでも変わらない雰囲気。気がそこにはあった……

.....

すずかエンド。別名月村ユーノエンドでしょうか？ 次回はアリサ。さて、シンデレレ娘はどう展開させられるのだろうか……

アリサがユーノと温泉に行くらしい

ある晴れた日の事。僕はこれで四回目となるアリサとのデートをするべく、いつものように湖畔のコテージにやってきたのだが、そこで待っていたのは予想だにしない光景だった。

「え、えっと……」

「……何よ？」

今、僕の目の前にはアリサがいる。いる事自体は問題じゃない。問題なのは、その格好。白いワンピースに白い大きめの帽子という実にお嬢様然としたものだったんだ。黙って日傘でも差して微笑んでいたら、凄く絵になるぐらいの。

そんな事を考えていたら、アリサの表情が不機嫌そうに変わる。あ、僕の考えを読んだな。そう思ったので先制攻撃。アリサの傾向及び対策は既に把握済みだ。

「ちよつとユー……」

「その格好似合ってるね。あまりに可愛いからつい魅入っちゃったよ」

遮るようにそう言い切ると、アリサが顔を真っ赤にして口を何度も開閉する。僕はそんなアリサが本当に可愛く見えるので、笑顔で締め括る。今の顔も可愛いけどねって。それでアリサが完全に沈黙でも、その手が握り締められているし、体が小刻みに震えている。

そこから判断される事は一つ。どうも調子に乗ってやりすぎたみたいだ。なので、僕は耳を塞いだ。その瞬間、アリサの口が開いて

……
会った端から可愛い可愛い言っとなっ!!

吼えた。もうライオンやトラの如き勢いで。辺りの鳥達が驚いて飛び立つぐらだから、あながち間違いでもない。僕は肩を上下させてこちらを睨むアリサへ、心から謝罪するつもりで手を合わせた。それにアリサは許さないとばかりに顔を背けて歩き出してしまった。僕はそんなアリサへ慌てて駆け寄り謝りの言葉を掛ける。それをアリサはずっと無言で聞き流すので、結構辛い。そんなやり取りから僕らのこの日は始まったのだった……

一台の車が風を切って走る。行き先は海鳴温泉。僕にとっては色々と忘れられない思い出の場所だ。運転席のアリサはまだ無言。でも、少しは機嫌を直しつつあるみたいで、表情は先程よりは多少和らいでいた。

僕はそんなアリサに申し訳ない顔しか返す事が出来ない。これ以上言葉を掛け続けると、それはそれで怒りを買ってしまうから。なので、今は無言で反省を示す事しか出来ないんだ。

「……………わよ」

「え?」

そんな時、急に隣から何か聞こえた。僕は聞き間違いかなとも思っただけ、アリサの方へ視線を向けた。

「許してあげるわよって言うてんの。ったく、そんな顔するぐらい

ならからかつの止めなさい」

「ごめん。でも、アリサが可愛いつて思ったのは事実で……」

「だあかあ、それを止めるって言ってるのよ。……本気で言ってるのが分かるから嬉しいんだけど」

僕の言葉を遮るようにアリサがやや強めの声で割り込んだ。でも、何故か後半は小声になってよく聞き取れない。頬を赤めてるから、おそらく何か恥ずかしいと思う事を言ってるんだろうけど、それを無理に聞こうとすると怒るので諦める。

そこからはアリサが機嫌を完全に直してくれたので、僕らは楽しく会話を始めた。まずは互いの色々。アリサの場合は論文の進捗具合や料理のレシピについてだ。

事の始まりは、最初のデートの時に僕がいつかのお礼とばかりに作った食事が原因。なのは手伝いやはやてからの教えて磨かれた僕の腕は、どうもアリサの女性としてのプライドを刺激したらしく、その日から料理の勉強を始めたんだ。

その成果は主にお父さんに披露されている。まあ、アリサがその結果について話してくれないから推測するしかないけど、おそらく結構な結末になっているんだと思う。いつだったかさすがに教えてくれたんだけど、アリサがお父さんへ料理を食べさせるのを止めようと考え始めているって。それが意味する事を僕はそう考えているんだ。

「……と、アタシからこれぐらい」

「了解。じゃ、僕からはいつも通り」

そんな事を思い出しながらアリサの話を聞いていたんだけど、それが終わったので次は僕の番。とはいえ、内容はいつもほとんど変わらないので……

「資料請求と戦いながら、黒い奴と睨めっこ」

そう僕らは同時に言う。ただ、僕は疲れた声なのに対してアリサは楽しそうな声だけど。その後僕らは同時に笑い出す。そんな風に時間が流れる。恋人というよりは仲の良い友人だけど、でもきつとこれが僕とアリサの雰囲気なんだと思う。

それにその恋人同士っていうのがどこかお互い分からないのもある。結局のところ、僕もアリサもお互いを大事に思うってぐらいしか出来ないんだろうね。

しばらく他愛もない雑談をする。話題は基本アリサが出す。大学で誘いを受ける事が増えたっていうのは、三回目のデート以降から頻繁に言うようになった。丁度アリサへ僕がプレゼントを贈った時だからよく覚えてる。

贈ったのは翡翠のイヤリング。アリサが翡翠のアクセサリーが欲しいって言ってたからなんだけど、どうして翡翠にこだわるかは教えてくれなかった。すずかにその相談をした時、どこか苦笑して僕らしいって言われたっけ。あの時のすずかは、どこかなのはの事を相談した時のはやてに似てた気がする。

「それにしても……」

「何よ？」

「僕と会う時は必ず着けてくれるんだね、そのイヤリング。贈った方としては嬉しいよ」

「ま、まあね。ユーノがくれたものだし、アタシもかなり気に入ってるから。外出する時は結構これするのよ」

アリサはそう言って照れたのか、頬を片手で掻いた。僕はそんな仕草に微笑みを返し、視線をアリサから外して窓へ向けた。そろそろ目当ての場所が見えてくる頃かな。あの僕がなのはに無理矢理連れて行かれた女湯の思い出眠る温泉宿に。

どうしてそこへ行く事になったかと言うと、アリサが僕の体を心配してくれたからなんだ。いつも激務に近い無限書庫。その疲れをゆっくり癒して欲しいとアリサが計画してくれた一泊二日の旅行。泊まりとはいえ、僕は特に何か思う事はない。アリサもそこは当然考えて部屋を取ってくれてるだろうし。

いや、いくら恋人として接する事とはいえ、分別はつけるだろうから。そう僕は安心し切っていた。でも、それがある意味で裏切られるとは思わなかった。そう、この時の僕は知らなかったんだ。アリサが何を思っこの旅行を提案してくれたのかを……

宿に着いて、僕らはチエックインを済ませようとしたんだけど、そこで予想だにしない展開が待っていた。

「え？ 部屋が一つしか取れない？」

「どうも急に団体が入ったらしくてね。それで二部屋は無理なんだって」

アリサがどこか困惑したようにそう言って僕へ視線を向ける。ど

うする？ そんな風に聞こえてくる視線だ。僕は正直迷っていた。何せ同室となればアリサが落ち着かないだろうし、僕もどこかそわそわする。いや、常にそうって訳じゃない。つまりは就寝時だ。

誓ってそんな事はしないと云えるし、アリサも信じてくれるだろうけど、それとこれは別問題。仕方ない。こうなったら宿泊は取り止めて日帰りにしようかな。そう思ってアリサへそう告げる。すると、アリサはどこか呆れたように息を吐いた。

「あのね、どうせアタシの事を考えてそう言ってるんだろうけど、心配いらないわよ」

「どうして？」

「……あんたを信じてるからよ、バカ」

アリサは頬を赤めてそう言つと、これで問題はないわねとチエックインを済ませてしまった。僕はそれを呆然と眺め、アリサの言葉を噛み締めていた。信じている。それが単なる信頼じゃない事ぐらい僕にだって分かる。アリサは僕を異性として捉えながらもそう言ってくれた。

それは本当に嬉しい事だ。そう思って僕は頷く。この信頼に応えよう。そこへ僕を呼ぶアリサの声が聞こえた。そっちに意識を向け、アリサへと近寄るように歩き出す。仲居さんの案内を聞きながら、僕はどこか不思議な気分になった。

「……あの時はこんなに楽しい気持ちじゃなかったなあ」

「あー、まああの時はねえ……」

「アルフと初めて会ったのがここだった」

「あ、そうだったわね。あの時は結構イライラしたけど、事情を考
えれば仕方ないわ」

僕らが苦笑しながら話すのを聞いて、仲居さんは微笑みを浮かべ
て僕らへこう問いかけた。新婚旅行ですか。それに僕らは揃っ
て顔を赤めて慌てて言葉を返したんだけど……

「いえ、そんなんじゃないです！」

「あらあら、それは失礼致しました」

揃って同じ言葉を返したものだから、余計に仲居さんに誤解され
た。ちらりと視線を隣へ向けると、丁度アリサも同じ事をしたらし
く目が合った。何とも言えない気恥ずかしさが生まれると同時に、
どこか嬉しい気持ちも起こったのも事実なので僕は小さく苦笑した。
それを見てアリサも苦笑を返し、僕らはそのまま仲居さんに誤解
されたまま部屋へ。仲居さんが退出した後、アリサがお茶を淹れて
くれて二人でほっと一息。でも、まさか新婚旅行と言われるなんて
ね。そうアリサへ言うと、同じ事に向こうも思っていたらしく頷い
てくれた。

「やっぱりアタシ達の外見も理由かしら？」

「そうかも。外国から来た夫婦とでも思ってたんじゃないかな？」

「そういえば、確かに日本語お上手ですなって言われたわ」

そんな感じでお茶を飲みながら僕らは語らう。ゆったりと過ごす
時間は自然と僕の心を癒してくれる。いや、それだけじゃない。ア

リサがいるのも大きい。時に激しく、時に優しく、色々な表情を見せてくれるアリサ。飾らないその振る舞いは僕には凄く好ましいんだ。

何も偽る必要がない。本音を言い合える関係。同性でもあまりいない存在であるアリサ。僕が一番落ち着く会話相手はアリサかもしれない。そんな事を思いながら、僕はアリサへこう告げた。

「そろそろお風呂へ行こうか。浴衣を持ってさ」

「そうね。ならここで着替えて行きましょ。荷物になるし」

「了解。じゃ、僕は向こうで着替えるから」

アリサをそこへ残し、僕は浴衣を手に窓側へ。そのの襖を閉めて小さな空間を作り出す。脱いだ服は一先ず椅子へ置いて、僕は浴衣に着替える。少しだけ帯に苦労はしたものの、何とか出来たかな。

「アリサ、もういい？」

「いいわよ」

念のために声を掛けてから襖を開ける。そこには見事なまでに浴衣を着こなしたアリサがいた。違和感があまりないのはどうしてだろう。と思ったけど、僕は十年以上に彼女の浴衣姿を見ていたっけ。それが原因だろうと思ひ、僕は一人納得。

しかし、アリサは僕の姿を見て小さく息を吐いて近付いてきた。どうしたのって尋ねたら、帯の結び方が違うらしい。なので、アリサが直してくれる事になった。でもおかしいなあ。確かに僕は着るのは初めてだけど、あの時なのはのお父さん達が着るところを見てたから合ってるはずなんだけど。

アリサが僕の帯を結び直してくれている間、僕はそんな事を思い出していた。アリサは結び終わるとよしと言って頷いてくれた。確かにさつきより締め方がしつかりしてる気がする。

「ありがとうアリサ」

「べ、別にいいわよ。それより早く行きましょ」

僕がお礼を言うとアリサは少し照れたように顔を背けた。それを可愛いと思いつながら口には出さずに歩き出す。向かう先は当然温泉廊下を歩きながら先に出た場合の事を決めておく。フロント近くの椅子で待つ事にして、そのまま周辺を散歩しようとなった。

アリサと別れて男湯へ。あの時もこちらへ来たかつたんだけどなあ。そんな事を思いながら脱衣所へ。おそらくアリサはゆつくり浸かるだろうから、僕の方が先になるだろうな。でも、出来るだけゆつくり入りますか。

「……何か、本当に妙な旅行になったなあ」

意図せず相部屋となり、一夜を共にする事になった。それってやっぱり色々と問題だね。そんな事を思うも、もうどうしようもない。いくらデート中は恋人として接する事といっても限度はあるし。でも、どこかでこの状況を喜んでる自分があると僕は気付いていた。アリサと二人きりで過ごす夜。考えるだけで鼓動が早くなる。決してそういう事をしようと思っっている訳じゃないけど、それでも変な期待をするぐらいはいいよね。そんな風に邪な気持ちを抱いたまま、僕は浴室の方へ向かうのだった……

涼しい風が湯上りには丁度いい。周囲は静かで時折聞こえる風の音や川のせせらぎが心を穏やかにしてくれる。そんな中を僕とアリスは歩いていった。その手は繋がれている。いや、最初のデートの時にアリスが恋人なら手を繋ぐのは普通だって言ったから、それ以来僕は常にそうするようにしてるんだ。

湯上りのアリスはかなり艶めいていて、僕は一瞬息を呑んだくらいだった。でも喋るといつものアリスだったから、何とか平静を保つ事が出来たけどね。

「落ち着くね」

「そうね。いい雰囲気だし、気持ちいい風は吹いてるし、言う事無しだわ」

僕の言葉にアリスは同意するように答えてくれた。僕はそれに頷いて、ちよっとしたからかいをする事にした。いや、アリスにはどうしてもしたくなるんだよね。反応が本当に素直だからかもしれないけど、ついついやっちゃうんだ。

「僕もだよ。これで隣にアリスがいるんだから最高さ」

「っ！？」と、当然でしょ？　こんな美女と一緒にいられる事を光栄に思いなさいよね！」

「……そうくるとは思わなかった」

「ふふん、いつもからかわれてばかりじゃないのよ」

アリスはそう言ってしてやったり顔で歩く。僕はそんなアリスに

軽く引つ張られる形で続く。でも、確かにアリサのような美女と一緒に過ごせる事は凄い事なんだよね。なのは達五人はみんな美人だ。可愛いとも言えるけど、綺麗でもある。

僕はそんな五人と友人なんだから、確かに周囲から羨ましがられても仕方ないかも。なのは達はもう相手をそれぞれに作っているからそうでもないけど、すずかとアリサに関しては知られたら確実妬まれるだろうし。

何せ、それぞれとたまにはいえ恋人らしく過ごす事が出来るんだ。これって十分恨まれるような話だと思う。実際ロツサにそれとなく言ったら、そう言われた。どうやればそんな美味しい話が転がってくるのか教えて欲しいとまで言われたしね。

でも、僕は美味しい話なんて思った事はない。そう、アリサやすずかと親密になればなるほど空しくなるんだ。どこまでいっても僕は仮想相手でしかないって。二人にとっては、僕は将来のための勉強相手なんだから。

……いつかはアリサも、こうして旦那さんと歩く日が来るんだろうね。

だからついこんな事を言ってしまった。その声に悲しみと悔しさが混じったのは、僕の考えていた事が大きく影響してたと思う。でも、アリサはそんな僕の言葉に驚きを見せた後、何故か嬉しそうにこう返してきた。

さあ？　もしかしたら、今みたいにユーノと歩いてるかもしれないわよ。

それが自嘲的な意味とは思えなくて。でも、冗談にも聞こえない気がして、僕はアリサへ視線を向けた。するとアリサは、そんな僕

の気持ちが分かったのかやや顔を赤めて告げる。今言った言葉の意味は自分で考えろと。

それに僕は頷き返して考え込む。正直一つだけ希望的回答があるにはある。でも、そんな事はないはずとどこかで思う。アリサは僕へよくこう言うんだ。もつと男らしくしろって。優しいのは悪いとは言わないし、穏やかなのも構わない。でも、どこかに男性的な強さを持って欲しいって。

それが身体面なのか、それとも行動面なのかは分からない。でも、僕には足りないものなんだろうとは思う。クロノやロッサにも言われた事があるけど、僕は基本中性的。男らしさが見える時がないって。

しかも、最近は家事なんかを出来るようになったせいで、余計女性みたいな方面へ比重が増した感がある。男らしさ、か。アリサの考える男らしさって何だろう？ 僕が考えるには、きっと行動面だと思っただけだ。

「アリサ」

「何よ？」

「男らしくなれって、よく僕へ言うよね。それ、どついう事を意味するの？」

僕がそう尋ねるとアリサはやや面食らったような顔をした。そして少しすまなさそうにこう返してきた。あれは本気で言っているんじゃないくて、僕がよくやるからかいへの軽いお返しみたいなものだつて。

それに僕は呆気にとられた。意外と気にしてたんだけど、まさかそれが冗談レベルの内容だったとは。でも、ならいいか。僕は僕ら

しくあればそれでいいんだ。そう思う事にしてアリサへこう言った。結構気にしてたんだよって。

すると、案の定アリサがバツが悪そうにして謝ってきた。でも、僕も同時に謝る事にした。だって元はと言えば僕がアリサをからかったから言われたんだしさ。そうして互いに謝って、それからまた散歩を楽しんだ。

会話は無いけど、繋いだ手があるから寂しくない。周囲の景色を楽しみながら、僕らは静かに歩き続けた。ちよつとだけアリサへ視線を向けた。その横顔が綺麗で、通り抜ける風に揺れる髪がとても絵になっていた。

「……どうしたの？」

「えっ……？ あ、いや、その……」

気がつけば僕は足を止めていたらしく、アリサが不思議そうにそう問いかけてきた。僕はその声でやっと我に返り、どう説明すればいいのかと慌ててしまった。素直に言うのが恥ずかしいっていうのもあるけど、一番はアリサを意識していた事を告げるのが怖かった。これはあくまでも振りをしているだけの関係。なのに僕が本気になり始めているって知られたら、アリサとのこの時間が終わってしまふと思っただ。でも、言わないと何も変えられないし、嘘を吐いていくのも嫌だ。そんな風に思った僕は、意を決して言う事にした。

「ホントどうしたのよ？ そんなしどろもどろになっ」

「アリサに……見惚れてた」

「っ!？」

僕がそう答えたら、アリサが顔を真っ赤にして黙ってしまった。いつもなら何か反論してくるような言葉だったけど、僕が照れくさくなりながら答えたもんだから、アリサにも分かったみたいだ。僕が心からそう言ったって。

そのまま僕らは、しばらくの間そこに立ち尽くした。互いの顔を見る事が出来ないままで。そんな僕らの間を、穏やかな風がただ吹き抜けていった……

部屋に戻った僕らには未だに会話がない。あの後、アリサが搾り出すような声で部屋に戻ろうって言ったのを最後に、互いに一度として口を開いていなかったんだ。僕は何とか話しかけようとするけど、やはり出来ない。アリサを強く意識している。そう分かってしまった以上、この関係が辛いものでしかないんだ。

そう思った僕は、アリサへこの時間の終わりを告げる事にした。互いに気まずいままじゃ嫌だから。

「アリサ、僕は……」

もうこの時間を送る事が出来ない。そう言おうとした。だけど、僕がそう切り出した瞬間、アリサがそれを遮るように告げた。

逃げるなっ！

その言葉に僕は心臓を掴まれた気持ちになった。逃げるな。それは僕が一番言われたくない言葉だった。なのは達から逃げ、ヴィヴ

イオから逃げ、今、僕はアリサからも逃げようとしていたのだから。好きな相手が出来ても、どこかで僕は逃げ腰になっていた。なのは事にフェイトの事、はやての事も。僕はどこかでこう思い始めていたんだ。僕には異性と付き合う資格がないって。それを察したようにアリサは僕へ叫んだ。

「ユーノ！ 何であんたはそうやって自分の”好き”から目を背けるのよ！？ なのは達の事だってそうだったんでしょ？」

そのアリサの言葉に僕は反論出来ない。そうだったからだ。僕はなのは達を好きだった。心から好きだったんだ。それでも何も言えない僕に、アリサはどこか悲しそうな表情をしてこう告げた。

「これだけは言わないでおこうと思ったけど、言わないとあんたは変わらないだろうから言うわ。あんたはねユーノ、なのは達を大事に思ってるから逃げたんじゃない。自分が誰かの人生を背負うのが怖くて逃げたのよ」

「っ！？」

アリサの言葉に僕は声が出なかった。自分が見ないでいた部分。それをまざまざと突きつけられたからだ。なのは、フェイト、はやて。三人の想いを受け止められなかったのは、そこにある。

付き合う事になれば、最終的には結婚が待っている。結婚とは共に生きる事。つまり人生を共有する事だ。それを考えた時、僕には耐えられなかった。他者の人生を背負う。例え半分だとしても、その意味は重い。

「僕は……僕は……」

「あんたは真面目過ぎたのよ。誰かと付き合うつて始めは意外と軽くていいの。でも、あんたは最初から終わりの事まで考えてた。だからなのは達と付き合えなかったのよ」

アリサの言葉に僕は言葉がない。付き合つ事＝結婚まで考えていた事を完全に見抜かれていたからだ。でも、それが僕には当然の事だったんだ。なのは達の気持ちを考えれば真剣に考えて然るべきだと、そう思ったんだから。

だけど、そんな僕へアリサは静かに近寄つてこう告げた。好きでも上手くない時がある。まずはお互いが相手と一緒に居たいと思うだけで十分なんじゃないかって。それに僕は頷き返す事しか出来なかった。

簡単な事だったはずだった真実。それを僕はいつの間にか勝手に難しくしていた。一緒に居たい。それだけでいい。そんな事、確かに分かっていたはずなのに。僕がそれを思い出して噛み締めるように手を握り締めると、その手にアリサがそつと自分の手を重ねてきた。

「アリサ？」

「だからいいのよ。ユーノは、今アタシと一緒に居たいって思ってるんでしょ？」

「……うん」

「じゃ、それでいいじゃない。駄目になったら駄目になった時よ…
…でしょ？」

アリサはそう言ってウインクをしてくれた。それが可愛く見え

て僕は笑みを浮かべて頷いた。でも、これだけは言わないといけない。そう考えて、僕はアリサへこう言った。

ありがとう、アリサ。

どうぞ致しまして。

僕の言葉にアリサは嬉しそうに返事を返してくれた。もう僕らはいつもの雰囲気に戻っていた。でも、確かにそこには今までと違う何かがあった。それを互いに感じつつ、僕はアリサの肩をぎこちなく抱き寄せた。それにアリサが少し驚くものの、顔をやや赤くしながら受け入れてくれた。

そして、僕らはそのまま何も言わずに夕食の時間まで過ごすのだった……

食事を終えて、二人でまどろんでいた僕ら。でも、やはりどこかまだ落ち着かない。いや、アリサと正式に付き合う事になったんだけど、それ故に余計意識している事があるんだ。それはアリサも同じらしく、さつきからそわそわしている。

互いをチラチラと見ては視線を逸らし、少ししてからまた同じ事を繰り返しているんだ。でも、それも最初こそ緊張からしてたけど、今はどこかそれが楽しくなってきた。あ、アリサが笑ってる。

「どうしたの？」

「別に何でもないので。ただ、何となくおかしくなってね」

「おかしい？」

「そ。だって、アタシがユーノと初めて出会った時はこうなるなんて思いもしなかったから」

アリサの言葉に僕も頷く。僕とアリサの出会いはその月村家での茶会。フェイトと初めて出会った日の事。僕は変身魔法で動物の姿をしていたから、アリサもすずかも人間だなんて思ってた頃だ。

確かにその頃の僕らは、今の状況を予想する事はおろか想像する事さえ出来ないだろう。だって、まさか互いが友人になって、更に付き合う事になるなんて絶対に考えられないだろうから。

「そうだろうね。何せ、その時僕はフェレット扱いだし」

「そうだったわね。でも、逆に考えればそれで良かったかも」

僕が少しおどけたように告げた言葉にアリサはそう返した。何が良かったのだろうか。そう思って問いかける。

「何が良かったのさ？」

すると、アリサはそれに少しだけ頬を赤めて顔を逸らした。僕がそれに疑問符を浮かべると、小さな声でこう返してきたんだ。

本当の姿だったら、会えなかったかもしれないじゃない。

その言葉に僕は思考停止。やや間をおいて再起動し、その意味を考える。本当の姿だったら会えなかった。その意味する事は何だろうと。フェレットなら会えた？ 人の状態じゃ会えない？ 正直理解出来なかった。でも、と思い直す。僕がもしあの時本来の姿だった

たら、なのはは僕をアリサ達に合わせる事が出来ただろうか。

いきなり外国人然とした僕をなのはが連れて行ける訳がない。説明などで面倒な事になるからだ。結局フェレットになるか、もしくは僕は最悪なのはの家で留守番だった可能性がある。

いや、そもそもフェレットじゃなかったらなのはの家にも居れなかっただろう。そこまで考えて、僕は気付いた。アリサは僕と会えなかった可能性だけじゃなく、僕との繋がり自体がなくなる可能性を示唆したんじゃないかって。

「……僕って、意外と状況に適した姿をしてたんだ」

「何よ？ 今更気付いたの？ てっきり意図してたのかと思ってたのよ」

「……返す言葉がないよ」

僕が頂垂れながらそう告げると、アリサは呆れたように大きくため息を吐いた。そして、頂垂れる僕の横に座り、肩に頭を乗せるようにもたれかかってきた。その重みを僕はどこか心地よく感じる。アリサの温もりと存在感をはっきり感じる事が出来たからだ。

すると、アリサが僕へ優しく語り掛けてきた。その声は今まで聞いた事がないくらい静かで、でも確かな力強さを感じさせるものだった。

ね、ユーノ。お願いがあるんだけど……いい？ これから大抵の事はアタシが引つ張るだろうけど、出来るならユーノに引つ張って欲しいの。アタシ、結構強気だから今まで頼られる事が多くてね。だから、パートナーが出来たら甘えたいって思ってたのよ。だから……ね？

その言葉に僕はゆっくりと顔を上げた。視線を動かすと、アリサは僕の肩にもたれかかりながら目を閉じていた。それがアリサなりの甘え方なのかな。そう思いながら、僕は言葉だけじゃなくても行動でも答えた。

了解。アリサが頼りっぱなしに出来るようにしてみせるよ。

言葉と共にアリサの体を優しく抱き寄せる。任せてって思いを込めて。それにアリサも嬉しそうな笑顔を返してくれた。そして僕はキスをした。もう言葉はいらなかった。視線だけで互いの気持ち理解し合って、僕はもう一度キスをした。今度は深く互いの気持ちを込めたキスを。

「ねえ、お風呂に行かない？ その……」

「そうだね。折角の温泉だし、寝る前に入っておきたいな」

そう僕らはお互いに言い合って、ゆっくりと立ち上がって手を繋ぐ。アリサは女性らしい気持ちから汗を流したくなっただろうし、僕も念のため汗を流しておきたかった。どこか微かに照れながら僕は部屋を出た。手を繋ぎながら廊下を歩く。何故かその景色が来た時とは違う場所のように見えた……

あの翌朝、僕はすずかへ連絡を入れてアリサと本当に付き合う事にしたと告げた。すずかは、あまりにも突然だったからかしばらく無言だったけど、やがて涙交じりの声でおめでとうと言ってくれた。泣いた理由を聞いたら、アリサに先を越される形になって悔しかった。

たからとすずかは返した。でも、これをばねに自分も相手を探せる
つて、そう最後には明るく告げてすずかは電話を切った。

それを聞いた僕がどこか複雑な表情をしていたのを見て、アリサ
は何も言わずに手を握り締めてくれた。その温もりが嬉しくて、僕
はありがとうと返すのが精一杯だった。

すずかの涙の訳。それが何となくだけど違うのは分かった。でも、
その理由が正しく理解出来たとしても、僕はすずかの力にはなれな
い気がしたんだ。それがとても嫌で、同時に申し訳ないように思え
た。

「……僕はすずかの助けに」

「なるんじゃないわよ。それ、完全に同情になるから」

僕の小さな咳きを遮ってアリサはそう斬って捨てた。でも、その
表情はどこか悲しそうだ。

「すずかの事を本当に思うのなら、今はそつとしておきなさい。特
にあんたはね」

「そつか。アリサ、やっぱりすずかは……」

「当然でしょ？ すずかの秘密を知っても態度が変わらない相手な
んで、中々見つけられる訳ないじゃない」

アリサはそう言つと、これ以上この話はしないでと言つて黙つた。
それがすずかへの申し訳なさど僕への気遣いからのものと分かり、
僕はそれ以上何も言わずに黙つた。ただ、握り締められた手を優し
く握り返す事で返事に代えて。

そうして、朝風呂を浴びて朝食を終えた僕とアリサは宿を出た。帰りの車中で会話は無かった。それでも、気まずい雰囲気はもう消えていた。僕もアリサも、すずかの事を引きずるのは意味がないって分かっていたからだ。

しばらく走り、車がコテージの手前で停止する。僕は車を降りる前に運転席のアリサへ一言だけ告げた。

大丈夫。きつとすずかはアリサを恨んだりはしないから。

その言葉にアリサの背筋が震える。そこから俯くと小さい声でこっぴどく囁いた。

本当に……そうかしら？

当然だよ。

僕は心からの声で肯定した。すずかは誰かを恨んだり憎んだりするような人じゃない。アリサもそれは知ってるはず。でも、きつと罪悪感があるんだろう。すずかの事情を知るからこそ、その相手となり得ただろう僕と結ばれた事に対して。

まあ、真実はどうか知らないけど僕はそう取った。だから、アリサを安心させたかった。こんな事で断ち切られる程二人の絆は弱くない。そう僕は信じているから。

僕の言葉にアリサは軽く目元を拭って顔を上げた。そこにはいつものアリサがいた。それに僕は安堵しつつ、車を降りた。すると、アリサも何故か車を降りてきた。どうかしたのかなと思ったら、僕へ駆け寄って飛びつくようにキスをしたんだ。そしてすぐに離れるととびきりの笑顔で……

ありがとう！

と、そう言い残してアリサは車へ戻って去って行った。あまりの事に呆然とする僕を残して……

それから僕らは何度かデートを繰り返して、軽い規模から大きな規模までの喧嘩をしたりしながら仲を深めていった。すずかとアリサの関係は、僕の予想通り大きな変化は起こらなかった。でも、小さな変化はあった。

それは、すずかが僕とアリサの事をかなり気にするようになった事。どうもアリサが言うには、僕らが別れそうになっただけでなく、すずかも動こうとしていたらしい。それをアリサが指摘したら、すずかは苦笑してから諦め切れないうちに早く結婚してと言いのけたんだって。

そんなこんなで今も僕とアリサは恋人のまま。近々アリサのご両親に挨拶に行かないとなあ。その前にプロポーズという問題があるけど、それは何とかしてみせよう。

「ね、ユーノ」

「何？」

今、僕らはミッドチルダはクラナガンにある僕の部屋にいる。アリサはその綺麗な髪を指に絡ませながら、僕へ視線を向けていた。ちなみに時刻は深夜。僕とアリサは同じベッドに入り、何も着てない状態だったりする。

「今の仕事、辞める事は出来る？」

「いきなりだね」

アリサの言葉に僕はそう答えるしか出来なかった。それが何を意図しての発言なのかは知らないけど、おそらく今後の僕らに関する事だっけぐらいは分かる。なので、僕は真剣に考えてみる。僕が無限書庫を辞める。それがもたらす結果予想。

そして、それはあまり難しい事じゃない。だからすぐにアリサへ返す。無理だっけ。アリサはそれに驚くでも怒るでもなく、ただあっさり「そう」と返した。

そして、アリサはどうしてそんな事を聞いたのかを話してくれた。両親に彼氏がいると話したら、もし可能なら一緒に頑張って事業を引き継いで欲しいと言われたんだっけ。でも、僕の仕事がどれだけ多くの人を助ける仕事かを知っていたから、確認のつもりで一応聞いたんだそう。

でも、もしそれで僕が辞めてもいいって言ったら本当にそうするつもりだったんだらうか？ そう思った僕は、アリサへそう問いかけてみた。するとアリサはその問いかけに一瞬不思議そうな表情を浮かべた後、何でもない事のようにこう返した。

バカ言っでんじやないわよ。アタシのために多くの人を助ける仕事を捨てるような男、こっちから願ひ下げよ。ユーノなら絶対辞めないだらうって信じてた。

そう言われて僕が嬉しさから言葉を失っていると、アリサはこう続けて締め括った。

ま、まあ、でもクビになったら言いなさいよ。アタシが面倒

見てあげるわ。

……ありがとう、アリサ。

そのアリサの照れ隠しの言葉が嬉しいのと同時に可愛くて、僕は微笑みを浮かべた。それにアリサはやや恥ずかしがるように顔を背ける。きつとどこまでいっても変わらない雰囲気があるにはあった。僕とアリサのいつもの感じ。僕ら二人だけの空気感。それを互いに感じて嬉しく思う。いつまでもこうしていられたら。そんな風に思っ、僕はアリサへこう尋ねた。

「僕らはいつまでこうしているかな？」

「……一生よ。じゃないと許さないんだから」

アリサはそう言うと、顔を真っ赤にしながら僕の胸に抱きついた。僕はそれに軽く驚くけど、そんなアリサが心から愛おしく思えて優しく抱きしめる。願う事は同じだって、そうアリサが教えてくれたから。感謝を込めて腕に力を入れる。

僕の腕に力が入った事に気付いて、アリサの腕にも力が入る。このまま寝たいな。そんな風に思っているとアリサが不意に体を動かした。すると、僕の胸に柔らかい感触が強く押し付けられる。

「ええつと……アリサ？」

「……何よ？」

「その……当たってるんだけど」

僕が言い難そうに告げると、アリサはそれに対して顔を真っ赤に

したまま言い切った。

と、当然でしょ！……当ててるんだから。

その言葉を最後に、この日の僕の記憶は飛んでる。こういう状況でアリサが照れながら素直な気持ちや言葉をぶつけてくれるのは、正直嬉しいのと同時に困る。破壊力が凄いなだね、色々。理性を綺麗に吹き飛ばすわ、翌日に響く程頑張るはめになるわで大変なんだ。

こんな調子で僕とアリサの日々は続く。いつまでも、どこまでも変わらない時間。それを心から信じて……

- - -
- - -
- - -

アリサエンド。初の結婚描写なし。まだ恋人のまままで終了は初めてだったり。

次回はすずアリエンド。

すすかとアリサがユーノを取り合うらしい

もうお馴染みになりつつある光景を前に、僕は舞い上がる気持ちを抑えられないでいた。今、僕がいるのはもうすっかり常連となった湖畔のコテージ前。今日はすすかとアリサと三人で夜通し喋ろうという会合なんだ。

僕は仕事を終わるとすぐに転送ポートへと向かい、ここへ来た。手には三人で飲むためのそれなりに値の張るベルカワインの白がある。これは二人のお気に入りなんだよ。あのなは達が飲んでしまったフェイトとの記念ワイン。あれが赤だったから白はどうなんだろって思っただけで購入し、試しにと一度持ってきたら、かなり好評だったのを覚えてる。

そんな事を思い出しながら、喜んでもらえるといいなと呟いて僕は扉の前に立つ。今日は何を話そうか。そんな風に考えながら、僕は上機嫌で扉を叩くとゆっくりと開ける。そこには予想通り、すすかとアリサの姿があった。

「お待たせ」

「あ、意外と早かったのね」

「いらっしやいユーノ君。待ってたよ」

笑顔の二人に僕も笑顔を返す。既に準備は終わりがけのようで、テーブルには結構な数の食べ物がある。まあ、ほとんどおつまみ系なのは仕方ない。何せ酒宴なんだ。なら当然メインはお酒。その合間に摘む物は必然的にそうなる訳で……

「もうこっちは終わるから、あんたは座って待ってなさいよ」

「アリサちゃん、もう少し言い方が」

「いいよ、アリサのそういう扱い方にはもう慣れたしね。でも、すずかの優しさに感謝」

僕がそう言うとアリサがやや呆れ顔を返し、すずかは苦笑。アリサはきつと、それを誰が望んでるんだって思ってるんだろうし、すずかは僕の言い方がアリサへの軽いあてつけに聞こえてるはずだ。僕はそんな二人を眺めるように椅子に座る。

あ、そうだ。忘れない内にワインを渡しておこう。白ワインは冷やさないと美味しくないからね。なので、手にしていたワインをすずかへ渡す。それにすずかは笑みを返してアリサへそれを見せる。

「あ、これって結構美味しかった奴じゃない」

「でしょ？ ユーノ君、覚えてくれてたんだね」

「まあ、こうして定期的に酒宴を開いてくれる二人へ、僕が出来るせめてものお礼だよ」

僕がそう言うと二人して小さく苦笑。そう反応を返すとは思ってたけど、やっぱりそうなんだね。二人してこの集まりは自分の利益を兼ねてるから気にしないで欲しいって言ってきた。そうだと分かっただけ、それでもね。

僕がそう告げると、すずかもアリサも笑みを返して僕らしいと言った。うん、自分でもそんな感想を抱いた。真面目すぎるのかなあ。そう思いつつも、これを直そうとは思わない。だって、これが僕らしさと思うから。そんな事を考えている内に二人も支度を終えて椅

子に座る。

僕の両隣に座るすずかとアリサ。いつの間にかこれが定位置になっていた。最初はアリサとすずかが隣り合って、僕がその向かい側だったんだけど、二人と恋人ごっこをするようになったらこうなっていたんだ。

目の前のグラスへ琥珀色の液体が注がれていく。すずかが僕のワインのコルクを抜いて、それぞれに注いでくれているんだ。アリサはそれを眺めて少しうっとりとしている。綺麗だよ、ワインの色って。あ、ちよつとした事を思いついた。なので、早速アリサへ仕掛けよう。

「綺麗だね、アリサ」

「っ?! な、何言って」

「ワインの色って」

アリサが言おうとする言葉を遮って、僕は笑顔でそう言い切った。それにすずかが堪らず笑い、アリサは沈黙。しかし、直後大声で怒りを露わにして僕は謝る事になった。かなりアリサが怒っていたので、それを宥めるのに時間がかかりそうだったけど、すずかがこう聞いてきた事であっさり解決したのには驚いた。

ユーノ君はアリサちゃんの事もそう思ってるよね？

そうだね。確かに綺麗だっと思ってるよ。

迷ったら余計機嫌を損ねる。そう瞬時に判断して僕は即答した。それにアリサは一度だけ顔を背けたけど、小さな声でこれ以上から

かわれるのは御免だからって許してくれた。僕はそれに一安心。すずかの機転に感謝した。それを告げるとすずかは小さく微笑んで、からかうのも程々にと軽く注意してきた。それがどこかお姉さんみたいだったから、僕は悪戯を見つけた弟になった気分だ。

「そうだね……少し軽率過ぎた」

「そこまでは言わないけど、ユーノ君ってアリサちゃんばかり」

すずかがそこで言葉を止めた。気付いたんだ。今、自分が何をやっていたのかを。何せ僕だけじゃなくてアリサも驚きを浮かべてるんだ。だって、すずかの声はどう聞いても羨ましいって感じだったから。

そこから分かるのは、すずかが自分もからかって欲しいって事。そう考えて僕はどういう事かと思案中。いや、それが意味する事を色々考えると、どれもかなり希望的な答えしかなかったから。アリサはそんな僕には構わず、すずかへ問いかけていた。

「すずか、今の言葉本気？」

「い、嫌だな。ちょっとした冗談だよ」

「本当に？」

「本当に」

あれ？ アリサが少し不機嫌な表情してる。すずかはどこかバツが悪そうに見えるし……一体どうしたんだろう。まさか僕の考えたような事をアリサも考えてたりしないよね。そんな事を思いながら

二人を見ていると、アリサが何を思ったのか僕の腕を掴んできた。

「「えっ!?!」」

「……何よ?」

アリサの問いかけは果たして僕へのものか、それともすずかへのものか。どちらにしる、今は恋人の時間じゃない。友人として切り替えるのがルールだったはずだ。そう僕が思うのとすずかが注意しようと思うのは同じだったらしい。

僕がアリサへ注意するのと同時にすずかが口を開いたんだ。止めてって。でも、どこかすずかの声に怒りが混じってる。アリサはそれを聞いてやや苛立つ表情を浮かべた。でも、視線を僕へ向けながら問いかけてきた。

「いいじゃない。これぐらい平気でしょ?」

「いや……確かにそうだけど」

「アリサちゃん、今はお友達の状態だよ。恋人ごっこは二人だけの時って」

戸惑う僕へすずかが割り込むように告げる。怒りを浮かべているけど、アリサはそれに対してこう返した。

「そうだったわね。なら、ユーノ聞いてくれる? アタシ、ユーノが好きよ。」

その言葉に僕は目を見開く事しか出来ない。ここでアリサの好きの意味が分からない僕じゃない。でも、どうしてこんなタイミング

で。そう思っていると、アリサは僕から視線をすずかへ向けて問いかけた。

それで？ すずかはどうなの？

それに僕は息を呑む。見ればすずかも言葉を失い、固まっていた。それにアリサは大きくため息を吐いた。そこに苛立ちを込めるように。何故かその空気は、いつかのなのはとはやてによるフェイトへの問いかけに似ていた。

すずかはしばらく黙っていたけど、そんな様子が気に入らなかったのか。呆れたような表情をしたアリサが何か言おうともう一度口を開こうとした瞬間、叫んだ。

私だっけ好きだよっ！

それは僕へ余計大きな衝撃を与えた。何でこうなったんだろうという思いが頭をよぎる。確かに二人とデートをするようになって、以前よりもお互いの事を知ったし仲も深めてる。でも、それはどこかで友人としてっと思っていたんだ。

……いや、思うようにしていたかな。だっけ、なのは達の想いを後ろめたさから断つたのに、三人の親友であるすずかやアリサへ恋心を抱く訳にはいかないって。そして、そんな僕に二人が好意を寄せてくれるはずないって。

僕がそんな風に思いながら二人の会話を聞いていると、すずかとアリサが同時に僕へ問いかけてきた。

「ユーノ（君）はどうなの？」

その問いかけに僕が即答出来るはずがない。何のために三人の想

いを蹴つたのか。そもそも僕は幸せを探す権利なんかなかったんじゃないかって、そんな事まで考えた事もある。でも、ヴィヴィオの言葉が今の僕を動かしていた。

幸せになつて欲しい。あの時の言葉は、ヴィヴィオからのものでありながら、なのは達三人からの言葉のようにも聞こえたんだ。自分達も幸せをなるから僕も幸せになつて欲しいってね。そう思い返すと、僕は二人へ返す言葉が見つかった。

「……まずは僕の話聞いてくれる？　僕が相手を探し始めた理由は、ヴィヴィオなんだ」

「ヴィヴィオ（ちゃん）？」

そこから僕はあの日のヴィヴィオとの会話を話す。それを聞いて二人は最初こそ神妙な顔をしてたけど、最後には苦笑していた。ヴィヴィオとの約束が原因だ。すずかはその内容と僕が話した雰囲気からなのはみたいと評し、アリサは純粹に感心していた。

どうも僕の性格をよく理解していると思つたらしい。確かにヴィヴィオとの付き合いもそれなりに長い。そう思い、僕は密かにため息。思い出したんだ。ヴィヴィオなら本当に僕と結婚しようとするって。最近はやてから家事を教わったりしてらしい。それをヴィヴィオは僕へ逐一報告してくれるんだよ、有難い事にさ。

花嫁修業は順調ですっ！

そんな風に僕へ発破を定期的にかけるんだから、大したもんだよ。そんな事を思い出している僕の腕を、あまり感じた事のない感触が襲った。何だろうと思つて視線を動かそうとすると、両隣のすずかとアリサが僕の腕に強くしがみついて、少しだけ不満そうに視線を向けていた。

「何思い出してるのよ？」

「ニヤニヤしてたよ、ユーノ君」

「ええっ!？」

どうもヴィヴィオの事を思い出していた間、僕は嬉しそうに笑っていたらしい。なので、僕は言い訳をさせてもらおう事に。ヴィヴィオの事を思い出して、微笑ましく感じていた。気持ちとしては娘に慕われる父親のようなものだからと。

それに二人も納得はしてくれただけ。……どこか渋々だったけど。なので、僕が助かったと思っただけで二人は容赦無くこう告げた。まだ答えを聞いてないって。僕に逃げ道はない。いや、ヴィヴィオの話を出したのはそれを作るためだったんだ。そこに一縷の望みを賭け、僕は口を開く。

「僕はヴィヴィオに発破をかけられないと動けないような男だよ？」

「それが何？」

「つまり、仕方なく相手を探してるも同じなんだ。だから、どんな答えでも二人には納得出来ないでしょ？」

「それはアタシ達が決めるわよ」

すずかに笑顔で流され、アリサに笑顔で言い切られ、僕は逃げ道を作る事が出来なかったと痛感。やはり女性は強い。もう二人の視線は早く答えを聞かせてと訴えている。でも、僕は正直どちらが好きかなんて決められないんだ。

すずかには自分の秘密を打ち明けてくれたし、読書という共通の趣味がある。どこかフェイトにも似た後ろで支えてくれる性格なのも、僕としてはすごく嬉しい。献身的だなんて、そう実感する事が多いんだ。

アリサは良い意味で気遣いをしないで時間を過ごす事が出来るし、今はたまに二人で料理を作ったりする事が趣味になりつつある。なのははやてを足して割ったような雰囲気、僕を密かに後押ししてくれるのも有難い。

……駄目だ。やっぱりどっちがいいかなんて選べないよ。正直に言って、優柔不断な僕を諦めてもらおうか。だって、二人と離れたくないって答えしかないんだ。そんな虫のいい話許される訳ない。

嘘を吐いてどっちも好きじゃないなんて通用しない事ぐらい分かる。何せ、もう僕の反応は二人へ明確な好意を感じさせてるだろうし。なので、自分と向き合っておりそのままに気持ちを伝えよう。呆れられて、二人に愛想をつかされても構わない。

「じゃあ、正直に言うよ」

僕がそう切り出すと二人は真剣な表情で頷いてくれた。それに僕はどこか申し訳ないと思いつつ、告げる。

二人が同じぐらい好きなんだ。だから……ごめん、選べない。

そう僕が言うと、すずかとアリサが揃って互いを見つめ合う。そして、小さく頷くと僕へ呆れたように息を吐いた。ああ、やっぱりそうなるよね。どこかで予想していたとはいえ、実際にそうなるの辛いものがある。

僕がそう思って二人からどんな文句や罵声を浴びるだろうと覚悟

していると、二人は予想どころか思いもよらない事を話し出した。

「何だ、じゃあ喧嘩みたいな事する必要なかったわね」

「そうだね。勝負はここからみたいだし」

「え？」

今、すずかは何て言ったんだ？ 勝負はここからって……それは一体何の事？ 混乱する僕を置いて、二人は屈託ない笑顔でこう告げた。決められないなら、決められるまで付き合うだけだって。今まで通りデートを続けて、僕がすっかりとした覚悟を抱ける日までこの関係は続けよう。

そんな事を僕へ告げてきた。でも、それでも僕の気持ちは変わらない。そう思っ二人へ告げようとすると、僕の口へ二本の指が当てられた。

「いいんだよ。分かってユーノ君」

「アタシ達はこう言い聞かせて自分を納得させたいの」

すずかとアリサのその表情はとても強さと優しさを備えた笑顔だった。僕が思わず何も言えなくなるぐらいに。そして、同時に理解した。僕の言葉に二人がどんな判断を下したのかを。表向きは僕へ選ばせるといいながら、真実は僕の決断を受け入れてくれようとしてるって。

つまり、二人は僕を取り合うためにと自分に言い聞かせる事で、両手に花の状態を許容しようとしている。でも、そんな二人に無理をさせるのは駄目だ。そう思った僕は、すずかとアリサへ告げる。自分の気持ちを押し殺すのは止めて欲しいって思ったから。

「二人共、それは駄目だよ。二人が我慢するのなんて間違ってる」

「我慢なんてしてないよ、ユーノ君」

「アタシ達もある意味そう言ってくれて助かった部分があるの」

そう言っただけでアリサは互いの抱いていた気持ちを話してくれた。すずかの事情を聞いて、アリサはそれを受け止めてくれる異性が現れる事は厳しいと思っていたんだって。何せすずかのお姉さんである忍さんの相手である恭也さんも、どうやらあまり人に言えない事情持ちだったらしい。

だから、アリサは僕がすずかを選んでくれて良かったと思ったんだ。でも、自分が選ばれないのは嫌だったから、僕の判断にどこか安堵したみたい。

すずかも同じだった。事情持ちだからってだけで選ばれるのは嫌だった。でも、選ばれずに断られたらアリサが危惧したように相手を見つけるのが難しい。だから、僕の答えに安心したんだって。

でも、二人は最後にこう締め括った。僕がただ何も考えずに安易に両者を選んでいたら、とてもじゃないけど受け入れられなかったって。

「ま、ユーノがそんな短絡的に考える事が出来ると思わなかったけどね」

「もしそうなら、なのはちゃん達との事も悩まなかったはずだし」

「……つまり、今の状況は予定調和だったって事？」

現在、僕の両腕はしっかりと二人に固定されている。これじゃ何も出来ない。ワインを飲む事も料理を食べる事も、自分では出来ない。なので、当然のように……

「はい、ユーノ君」

「ほら、口開けて」

二人に口へ運んでもらうという嬉しいけど、素直に喜べない状態だったりする。でも、それも初めの内だけだった。アルコールが回ってくると、段々僕らは大胆になっていった。おそらく想いを通じ合わせた事が大きいと思う。

「ユーノ君、ワイン飲む？」

「うん」

「じゃあ……ん〜」

「す、すずかつ!?!?」

「冗談なのか本気なのか分からないけど、口移しで飲ませようとするすずかとか……」

「ユーノ、次は？」

「じゃ、そのクラッカーをお願い」

「しょうがないわね……ん」

「ちよ、ちよつとアリサっ?!」

普段のお返しとばかりに、口にくわえて運んでからかうアリサと
か……

そんな夢のような時間を過ごした僕を待っていたのは、もうお決まりの結末だった。出来上がった僕らはそれでも互いの思い出話をしていただけ、日付をまたいだ辺りからずかかとアリサがの雰囲気妖しくなった。

そして、僕へしだれかかると二人して上目遣いを向けてきた。何も言葉はない。でも、僕にはそれが何を告げているかがはつきり分かった。なので、一言だけ二人へ告げた。

大事にするよ……

それに二人は笑みを返してくれた。月のような微笑のすずか太陽のような笑顔のアリサ。対照的な雰囲気のために、僕は言葉にならない愛おしさを込めて、その体を強めに抱きしめた。その体温を決して手放すものと誓いながら……

それからは、もう頭を抱える問題が続出した。まず、すずかとアリサの家庭の事。二人は名家のお嬢さま。それがよりにもよって二股をかけられるなんて言えるはずもない。なので、結婚式は無理となった。

でも、二人にドレスは着せてあげたい。なので、海鳴ですずかと写真を撮り、ミッドでアリサと写真を撮る事にした。二人はそんな僕に苦笑したものの、気持ちは伝わったのがあるがとうと言ってくれた。

そして、住居の問題。月村家はすずかがいなくなったら存続する意味がなくなる。なので、僕は月村家に住む事になった。アリサは無理に家の事業を継ぐ必要はないから家を出る事は可能らしく、月村家で暮らす事は難しくなかった。

僕の方も通勤は庭の転送ポートから出来るし、マンションを引き払ってしまえるので財政的にも助かる部分がある。それに、月村家は元々街から離れてた事もあって、少し人には悟られたくない部分がある僕らには都合が良かったんだけど……

「ファリンは納得してくれたからいいとして……」

「問題は忍さん達ね」

すずかの言葉にアリサが続く。そう、問題はすずかのお姉さんである忍さんと旦那さんの恭也さん。今のところ事実婚しか道がない僕らだけど、やはり理解してもらえるかと言えばノーだ。アリサのご両親へはいつか僕が赴いて頭を下げるつもりではいる。アリサはそんな必要はないって言うけど、大事な一人娘なんだ。ちゃんと伝えないといけないと思う。

でも、最悪アリサのご両親に僕が許されないとしてもいいんだ。問題は、忍さんと恭也さんに許されなかった場合。まず、僕は確実に月村家にはいられない。そして、当然のようにすずかとの関係は断絶。転送ポート自体はなのは達も使うから分らないけど、最悪それさえも撤去の方向になる可能性もある。

「僕のせいで多くの人に迷惑をかける事になるかもしれないんだ……」

つい口をついて出た言葉。それが持つ意味を考え、僕は震えた。ジユエルシードを発掘した事で起きた一連の事を思い出したんだ。あれもそうだった。僕が原因で多くの人を巻き込んだ騒ぎになったのは達と知り合えたし、後の闇の書事件やJS事件みたいな次元世界を襲う出来事を阻止するキツカケになったけど、それでも……ね。

そんな事を考えて不安になる僕の手にも二つの手が重なる。言うまでもなくすずかとアリサだ。

「そんな顔しないでユーノ君。大丈夫、きっと上手くいくから」

「そうよ。失敗するはずないわ。アタシ達の家族を信じなさい」

「……そうだね。僕も信じるよ。二人の言葉と家族の事と……現状を掴んだ自分の運の良さをね」

二人に希望と勇気をもらえた事に感謝して、僕がそう最後におどけてみせるとすずかもアリサも笑ってくれた。その笑みもまた力に変えて、僕は内心で決意する。絶対に理解を得よう……

その後、僕はアリサのご両親へ挨拶と同時に事実を話した。すると、意外にも許してくれた。何でも、それぐらいの男でないとアリサを御せないだろうと思ってたんだって。それを聞いてアリサがお父さんへ軽く文句を言ったのが印象的だった。

でも一つだけ条件を出された。それは、身内だけの小さなものでいいから結婚式を挙げて欲しいとの事。バージンロードをアリサと歩くのがお父さんの夢の一つだったらしく、僕はそれに必ずと返し

た。お母さんの方は日本人らしい倫理観からあまり良い顔はしなかったけど、アリサの意思が固い事を察して好きにしないと云ってくれた。

まあ、まさか孫を早めに作って欲しいと頼まれるとは思わなかったけど。どうも、その子が大人になるまで事業を頑張つて、後継者にしたいって思ってるみたい。

そんな感じでバニングス家は良い意味で予想外な結果になった。でも、やはり考えていた通り問題は月村夫妻の方で……

「……本気で言ってるのか」

「はい」

その瞬間、室内は殺気で包まれた。原因は僕の言葉。すずかが連絡して来日してくれた忍さん達。目的は当然僕からの事情説明。最初こそ、僕が事情を知った上ですずかと付き合う事になったと聞いて、忍さんも恭也さんも嬉しそうだった。

でも、アリサとも付き合う事になっていると告げると、恭也さんがさっきのように殺気と共に言葉を発したという訳だ。あ、忍さんが軽く震えてる。見ればノエルさんやファリンさんも怯えるような表情だ。

「すずかちゃんの事情を知った上で受け止めるのは、さすが魔法を常識としてる世界の人間だと思う。だが、倫理観もこちらと違つてはな」

「そんな事はないです。僕だってこんな事が正しいなんて言いません」

「なら、どうして決断しない」

恭也さんの声が世間一般の声だと思う。だからこそ、それに僕は負ける訳にはいかない。何があっても、そう世界中を敵に回しても二人を守ると言い切れるだけの気持ちがあれば、これからの人生を送っていけるはずはないんだ。

僕がそう思い直すと、それを察したのか恭也さんが少し意外そうな表情を見せた。でも僕はそれに構わず、自分の中の答えを告げる。ここが僕の一世一代の大舞台だと思いながら。

僕は答えが出せなくて二人を選んだ訳じゃないんです。いえ、最初はそうだったかもしれない。でも、今は違う。二人を選びたい。それが今の僕の偽らざる答えです。

それに恭也さん達が言葉を失っている間も、僕は必死に訴えた。これが正しいなんて言えないかもしれない。それでも僕はこれを間違っているなんて思わない。それは二人に対する裏切りだからと、僕はそんな風に告げる。そこからどれだけ二人が僕の事を思ってくれたのかを話す。その頃には、恭也さんの視線に含まれる殺気なんかもう気にならなくなっていた。

何故か途中から忍さん達女性陣の雰囲気苦笑混じりのものになって、同席してゐるすずかが赤面してゐるけど。僕はそれに意識を向け続ける余裕もなく、恭也さんに理解してもらいたい一心で言葉を紡いでいた。

「……これが、僕の気持ちです」

「そうか……」

どれぐらい喋っていたんだろう。そんな風に思っぐらい、僕にはさっきの時間が長く感じられた。恭也さんはもう殺気を消していて、どこか馬鹿らしいというような雰囲気さえ感じられた。

「ね、恭也。もういいんじゃない？　　すぐか達の人生だし、本人達が決めた事だから」

「そうだな。それに……何よりここまで惚気られると怒りも起きない」

忍さんの言葉に恭也さんは大きくため息を吐いてそう締め括った。同時にノエルさんとファリンさんが頷いている。すぐかは顔を真っ赤にしたまま俯いていた。僕はその惚気の部分に疑問符を浮かべた。そんな事言った覚えはないんだけどなあ。

すると、そんな僕へ忍さんが何かを見せて楽しそうに笑った。その手にされてるのはICレコーダーだった。そして、それを忍さんが再生する。次の瞬間、僕は自分を呪った。そこからは、熱を帯びた声でするかとアリサへの想いをぶちまける先程の僕の話が流れてきたのだから……

「「乾杯！」「」

室内に響く缶ビールを合わせる音と僕らの声。今、僕らはクラナガンのマンションにいた。今日を最後にここを引き払うからだ。既に荷物は大方月村家に運んでいるので、残っている物はほとんどない。

今日の催しは引越しパーティーだ。とはいえ、月村家では少し広すぎるためにここでの開催となったんだ。僕は最初反対したんだけど

ど、二人がここがいいと譲らなかつた。理由はきつと三人だけになりたかつたんだと思う。月村家にはファリンさんがいるからね。

「このことも今日でお別れね」

「少し寂しいかも」

「何だかんだで二人もここへはよく来てたもんね」

ある時はデートの締め括り。またある時最初からここがデート会場だった。料理をしたり、読書したり、他にも色々な思い出がある。それもあつてか、僕らの表情はどこか神妙だったりする。

生活感の消えた室内。そこにはもう人が住んでいた形跡さえ残っていない。でも、確かにそこには思い出があつた。僕らはそれを思い出しながら語り合つた。再会してから今までそこまで長い時間が経つた訳じゃない。それでも、その中で出来た思い出は少なくない。

すずかの悩みとアリサの悩み。共に恋愛関係だつた事から、ふとした事で気が付けば僕と擬似恋愛をする事になって今の状態へと至るまで、様々な事があつた。楽しいものからちよつと笑えないものまであつたけど、それでも結局は大切な思い出になつている。

「なのはちゃん達へは、いつ言うの?」

「……今月中にはって思つてる。でも、本当にいいの? 僕は何を言われてもいいけど」

「シヤラップ! いいのよ。もう……決めた事なんだから」

アリサがそう言うすとすずかも同じようにどこか悲しそうな顔をし

た。三人の長年の想いを蹴った僕。それが親友である二人と付き合い
う事になった。それを聞いてなのは達がどう思っのか。それは正直
悪い方向しか浮かばない。

最悪すずかとアリサが三人と絶交状態になる可能性さえある。そ
れでも、黙つてるといふ選択肢を選ばないのが二人の強さだ。親友
と思うからこそ事実を伝えたい。そう僕へ告げた時の二人はとても
凛々しい表情をしていた。

僕は二人のそんな顔を見て、色々な事を考えてしまう。でも、そ
れら全てを振り払うように頭を振って二人へ視線を向ける。

「すずか、アリサ」

「何？」

「何よ？」

「約束するよ。絆を断ち切らせないようにしてみせるって」

僕の言葉に二人が一瞬呆気にとられて、それからすぐに小さく笑
ってくれた。そのまま僕へ期待してるって返して、二人は僕の横へ
移動した。何をするんだろって思っていると、二人揃って頬にキ
スしてくれた。

かっこ良かったよ、今のユーノ君。

ユーノも男らしい顔、出来るんじゃない。

そう言っ二人は僕に微笑みかける。それに僕は大きな勇気をも
らった気がして、心からの笑顔を返す。

惚れ直した？

そうキザっぽく問いかける僕に二人は躊躇う事なく……

当然。

と、返してくれた。自分で聞いておいてなんだけど、結構恥ずかしいものがある。そんな風に照れくさくなっている僕へ、二人は楽しそうな笑みを浮かべていた……

それから少し時間が経ったある日、僕はいつになく真剣な表情で月村家の一室にいた。原因は今日の茶会。すずかとアリサがなのは達三人を呼んだんだ。つまり、あの話をする機会を設けてくれたという訳。

現在、なのは達は庭で楽しく会話中。僕がそこへ現れるタイミングはすずかとアリサ任せ。二人がなのは達へ紹介したい人がいると切り出して、それが自分達の恋人だと告げる。それと同時に僕の携帯へメールによる連絡が入って、それを合図に僕は庭へと向かう事となっている。

「逃げ出したいな、ホント」

誰もいない部屋に僕の独り言が響く。正直、今すぐにでも消えてしまいたい。なのは達に会うのも怖ければ、それで五人の絆を切るかもしれない可能性が堪らなく怖い。心臓の鼓動は煩いぐらいだし、さつきから変な汗が止まらない。

それでも、それでも僕は逃げ出せない。もう逃げないと決めたん

だ。どんな現実とも向き合って、受け止める。そう決めたから。もうなのは達への負い目はない。誠心誠意ぶつかるだけだ。

「……来た」

そんな事を考えていると、携帯に着信あり。差出人は……あれ？

「どうしてすずかとアリサの両方の名前なんだ……？」

何故か一人でいいはずの名前は、すずかとアリサの連名で送られてきていた。疑問に思いつつも、それを展開して読んでみた。そこにはただ一言だけしか書かれていなかった。それでも、僕には何にも勝る応援だった。

信じてるから。

その文面だけで僕には十分だった。多くはいらない。ただ、それが僕に立ち上がるキツカケをくれた。

さて、行くうか。

誰にでもなくそう告げて、僕は歩き出す。目指すは僕だけの希望と勇気の女神がいる場所。太陽と月の笑みを浮かべてくれる二人の傍。僕を照らし、見守ってくれる存在の元だ。

そこでどんな事が待っているとしても、僕に不安はない。廊下を歩きながら玄関へ向かう。一歩足を進める毎に鼓動が早くなる感覚を覚えるけど、もう迷わない。玄関の扉を開け、庭へと出る。視線の先に僕へ背を向けるのは達と笑みを浮かべるすずかとアリサが見える。

僕に気付いてるんだろう。二人は笑顔を向けて手招きをしている。どうもなのは達もそれに気付いてこちらを振り返ろうとしていた。

ここからが本番だぞ、ユーノ……

自分に言い聞かせるように小さく呟き、僕は歩く。

その表情は強張っていたのか、それとも笑顔だったのかは分からない。

でも、ただ一つ言える事がある。

それは、ずかとアリサがとても眩しい笑顔を返してくれた事。

絶対、上手くいく。

そんな気にさせてくれる笑顔がそこにあつた……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ずか&アリサエンド。最後があまり甘々に出来ず、反省。今回からタイトルを変更しました。それと共に下げ更新を止める事にします。感想なしでも楽しみに読んでくださる方がいるようですので、それに甘えてみようかと思えます。

今回はダークホースヴィヴィオを予定。五人は……厳しいかもしれませんが、その後に書いてみようかと思えます。それでユーノ編は終わりの予定です

ユーノがヴィヴィオとの約束を果たすらしい

「とうとうこの日が来てしまった……」

僕は疲れた声でそう呟いた。今日のはあのJ S事件が実質的に終わった日。つまり、ゆりかごが落ちた日。そして、それは……

「私の誕生日がそんなに嫌なんですか？」

「違うよヴィヴィオ。この日が来た事に複雑な気持ちを抱いたんだ」

今、僕の後ろで朝食を作っているヴィヴィオの誕生日だ。今や管理局で知らぬ者はいないエース。そして、同時に無限書庫司書の肩書きを持つ十六歳。そう、十六歳になったんだ、今日で。

ヴィヴィオは僕の答えを聞くと、どこか苦笑しながら視線を手元のフライパンに戻した。そして、目玉焼きを皿に移しながらこう返してきた。

「そうですか。できり、ユーノさんは私と結婚するのがそんなに嫌なんだと思いました」

その言葉に僕はとんでもないと言葉を返すしかない。あの日の約束。それが遂に期限を迎えてしまったんだ。すずかやアリサとの恋人ごっこは大分前に終わりを迎えている。理由は二人に相手が出たからだ。

すずかは僕の同僚だった司書の一人とお付き合いを始め、今は二児のお母さん。彼は僕と同じで、すずかの事を聞いてもそういう人種なんだ程度で納得したらしい。まあ、僕も彼はそんな考え方をす

るだろうからつてすずかへ紹介したんだけどね。

アリサは大学卒業後、一人で世界を旅行してる最中に出会った男性と恋に落ちた。あまりお金に頓着しない性格らしく、困らない程度にあるのが一番だつて思っている人だつたんだつて。アリサの家の事を知つた後でも凄いとだけ笑つて言つて、すぐに話題を別の事へ変えていたのがアリサ的には好印象だつたらしく、帰国後すぐに単身彼がいる国へ留学。そのまま現地でゴールインした時は、すずかと一緒に驚いたと同時にアリサらしいと笑つたつて。

こうして僕は今も独り身つて訳。二人と友人に戻つた後も相手を探さなかつた訳じゃないけど、やっぱり忙しいのが原因で進展は無かつた。そして何よりも、僕がすずかやアリサと友人に戻つた後のヴィヴィオの攻勢が凄かつた。

学校が休みになるとほぼ毎回のよう無限書庫に現れ、僕の手伝いをしてくれた。その間、ずっと僕の傍を離れようとしなかつたしね。髪の色が似てる事や声が似てるせいもあつて、周囲には僕となのはの子じゃないかつて言い出す人もいたぐらいだつた。

「でも、ヴィヴィオ。本当にするつもりかい？」

「あれ、言つてませんでしたっけ？ 私、昔からユーノさんの事が男性として好きだつたつて」

僕の最終確認にさらりとそう返すヴィヴィオ。その顔は嘘や冗談を言つてるものじゃない。どうしてそういう事をあつさり言えるんだろうか。僕には無理だよ、そんな事。僕がそんな風に考えていると、朝食の支度を終えたヴィヴィオがエプロンを外しながら僕へ笑つて問いかける。

「え、気付いてなかつたんですか？ まあ、はつきり自覚したの

は、ママ達がお付き合いを始めた頃ですけど」

「……じゃ、あの約束はした時点で本気だったの？」

僕が信じられないと思いつながら告げた言葉にヴィヴィオは少しの躊躇いもなく頷いた。それに僕はまたもや返す言葉を失う。いや、まさか当時小学生の子に本気で結婚の約束をされていたなんてね。でも、何だろう。なのはの娘らしいと言えればいいな。

いつでも全力全開。素敵に本気。勇気に無敵。そんな感じだからね、二人して。そんな事考えながら、僕はヴィヴィオに促されるままテーブルへとつく。今日はヴィヴィオの仕事休み。だから、こうして僕へ朝食を作りに来てくれてるんだ。実は、これも結構日常的な事なんだ。

そんな感じで食事を開始する僕とヴィヴィオ。昔は幼さしかかった顔は、今や十分美人の域。でも、まだ歳相応の可愛さがある。髪も伸び、髪形はツーテール。十六歳当時のなのはの髪型だ。

将来はサイドポニーへ変えるつもりだと聞いている。けれど、それはヴィヴィオが自分を六課当時のなのはに並んだと思えるまでお預けらしい。僕からするともうそろそろだと思っただけど、ヴィヴィオからすればまだまだ遠い存在らしい。

「それで、僕はどうすればいいのかな？」

「約束さえ果たしてくれるなら好きなように」

僕のやや諦めたような声にヴィヴィオは若干楽しそうにそう返してくる。余裕さえあるな、これは。仕方ない、ここは年上の威厳を……無理だな。ヴィヴィオには結構だらしなところを見られてるし、何よりこうして家事などの世話を多少なりとも受けている

時点で負けている。

僕が情けない雰囲気を出したんだろう。ヴィヴィオが僕を見て小さく笑ってる。そして、何か思いついたのか小悪魔的な笑みを浮かべた。どこかはやてを連想させるそれに、僕は少し懐かしいものを感じた。

「じゃ、まずはママに挨拶を」

「……いきなり難問だなあ」

「で、次はフェイトママへ」

「それもまた厳しいな」

「あ、士郎お祖父ちゃん達へもお願いします」

「……………そこが一番の鬼門な気がしてきたよ」

ヴィヴィオが笑顔で矢継ぎ早に告げる内容に、僕はどんどん力が抜けて行くのを感じていた。特になのはお父さんは難関だ。何せ初孫だ。それが娘と同じ年の男に嫁ぐなんて聞いたら、絶対いい顔しない。僕だっけそう思うんだから、間違いない。

それでも約束は約束だし。そう思って僕がどうしたものかと考えていると、ヴィヴィオが急に笑い出した。とても面白いものを見たとも言つように。それが僕には不思議で仕方ない。何か笑える要素でもあったかな？

「どうしたんだい？」

「くすっ……………実はですね、もうママや士郎お祖父ちゃん達にも約束

の事は言っているんです」

「えっ!?!」

「だから、覚悟はしてると思いますよ？ 私、一度決めた事は絶対変えませんが」

ヴィヴィオは最初こそ笑っていたけど、最後にはそう凛々しい表情で言い切った。それは、まさにエースの顔。高町なのはの後を継いだ二代目エースオブエース、高町ヴィヴィオがそこにいた。そう、高町なのだ。まだなのはの姓は変わっていない。

なのは達三人はそれぞれ出来た相手と結婚まではいってない。それぞれの詳しい理由はヴィヴィオからの話で察する事が出来た。なのはは限界まで空を飛んでいたかった。でも、彼氏はそれを許さなかったんだって。

なのはの体の事を心配したんだと思う。教導官とはいえ、いつ現場に行かされて怪我をするか分からないから。いつ撃墜されて命を落とすか不安だったんだろう。何せなのはは一度撃墜しているしね。結局それが二人の仲を別つたんだと思う。

フェイトは子供を作れなかった事が原因だって聞いた。そんな事をなのは相手に愚痴っていたのをヴィヴィオが聞いたらしい。相手はそういう能力が低下している人だと、付き合い出してからしばらくして言われたらしい。

最初こそフェイトも我慢しようとしたみたいだけど、やはり自分の子供が欲しい願望は消えずにいた。それを察した相手が別れて他の相手を見つけないさと言ってくれたんだそうだ。フェイトはその優しさに謝罪と感謝を告げて今も相手を探しているようだ。

はやては二人と違って関係は続いている。でも、結婚はしていない。何でもヴィータとシグナムが認めていないって聞いた。相手の人は修道騎士。つまり二人からすれば、自分と同等か認めるぐらいの強さが欲しいらしい。

でも、試合に何度やっても相手が及ばず、認められていない訳。でも、同居しているので事実婚に近い形で推移していつてるからいいんじゃないかな。まあ、その内容が本当か嘘か分からないけど、八神家なら有り得ないと言えないところが怖い。

「どうしたんですか、ユーノさん」

「あ、ごめん。少しなのは達三人の事を思い出してた」

「……まだ諦められませんか？」

「そういう事じゃないよ。ただ、世の中って不思議だなんて思っ
ね」

ヴィヴィオのどこか不安そうな眼差しに僕は明るく返した。正直もうなのは達へ異性としての関心はない。あるのは、あの日の守りたいと思った誓いだけ。今でも三人に何か危険が起きたのなら、僕は駆けつけるつもりではいる。

でも、あの頃のような男としての気持ちはない。今の気持ちは、言うならば家族に近いものだね。まあ、それを言うつもりはないけど。そんな事を考えながらヴィヴィオへ視線を向けると、彼女は僕の方をじっと見つめていた。

「何？」

「ほんっ………とうに、諦めたんですね？」

「そうだね。僕はもうなのは達へ異性として視線を向ける事は無いよ……一生ね」

僕の断言にヴィヴィオがどこか寂しげで、それでいて嬉しそうな複雑な表情を返す。それが一瞬だけなのはにダブリ、僕は慌てて頭を振った。ヴィヴィオをなのはの代わりに見るつもりか、僕はっ！ヴィヴィオはヴィヴィオだ。なのはの面影を重ねるのは間違いだ。僕は慌てて食事を片付けると、立ち上がって玄関へ向かう。ちょっとした気持ちの整理のために外へ行きたかったんだ。それにヴィオが疑問を感じたんだらう。僕の背中へ声を掛けてきた。

「……ユーノさん？」

「ごめん。ちょっとだけ散歩したいんだ」

僕はそう返して外へ出た。ヴィヴィオがそんな僕へ悲しそうな顔を見せているとは気付かずに……

ユーノさんが出て行って、私は一人後片付けをしていた。正直、ユーノさんが今日まで一人のままだとは思わなかった。すずかさんやアリサさんと仲良くしてるって聞いた時は、ちょっと胸が痛んだけど嬉しかったんだから。

ママ達の気持ちを断った理由は、ユーノさん本人から聞かせてもらった。でも、それをずっと引きずり続けて欲しくないって思ったから、私はあんな約束を持ち出した。それがユーノさんを前向きに

させたって言われた時、私は凄く嬉しかった。

「てっきりユーノさんはずかさんと結婚すると思ったのに……」

無限書庫へ遊びに行った時、偶然見たユーノさんとずかさんの姿。二人仲良く隣り合って本を読んでいた。それが凄く絵になって、私はその日すぐに家に帰った。そして、沢山泣いた。泣き疲れてしまつて、ママに起こされるまで眠るぐらいに。

あの時、私は完全に自覚した。ユーノさんが好きだつて。でも歳の差があるし、私が大きくなるまでに自分の気持ちが変わる事もある。そうユーノさんも言つてたから、私は学校の友達から好きになる人が出来るかもつて思つた。

でも、駄目だつた。ユーノさんは大人だつたからだろうけど、見る子みんなが子供にしか見えなかった。周囲がカツコイイつて言う子も、私からすればどこか物足りない子にしか見えなかった。運動が凄いい子や頭の良いい子もいた。でも、やっぱり駄目だつた。

休みの度にユーノさんのお手伝いに行くと、余計そう思つてしまつた。優しいけど、決して弱腰じゃない。穏やかだけど、言うべき事はしっかり言う。ママの生まれた国の言葉で、柔よく剛を制すつて言葉があるらしいけど、そんな感じ。ユーノさんは力任せで物事を解決するんじゃないくて、周囲の色々なものを利用して解決するんだつて、その時思つた。

「……私と結婚してくれるのは、約束したからだよね」

言つて自分で悲しくなる。ユーノさんは真面目な人だ。私との約束を絶対守つてくれる。例えユーノさんが私を妹か娘のようにしか見てないとしても、それでもいいつて昔は思つてた。ユーノさんと一緒にいられるならつて。

でも、今は……違うよね？

自分へ確認するように問いかける。心から好きだって思われてないのなら、ずっと一緒にいたいって思ってくれないのなら、結婚なんてするものじゃない。そう思うんだ、今なら。私はユーノさんが好き。本当に愛してる。でも、ユーノさんがそうとは思えない。だから……

帰ってきたら、本当の気持ちを聞かせてもらおう。それで、ちゃんとけじめをつけるんだ。

気持ちの整理を終えた僕は、散歩を切り上げて家に戻った。そんな僕をヴィヴィオが真剣な表情で出迎えてくれた。その雰囲気から何かあったのかと思っただけど、どうやら違うらしい。でも、話があるって切り出したから何か大事な事を言いたいんだろうとは思った。

リビングで向かい合って座る僕とヴィヴィオ。ヴィヴィオの表情はどこか不安そうに見えるのは気のせいかな？ そう考えながら、僕はただその言葉を待った。

「あの……ユーノさんは私の事どう思ってますか？」

「どっつて……」

「女性として見てくれますか？ 好きだっと思ってますか？」

そう問いかけるヴィヴィオの目は不安そうだ。その理由を考えようとして、僕は気付いた。ヴィヴィオは、僕が約束を果たそうとしているのは責任感からだと考えているんじゃないかって。だから好きな女性として見ているのかを聞きたくなっただろうな。

僕はそんな風に結論付け、ヴィヴィオへ笑みを向けた。それは作り笑顔じゃなくて心からの笑顔。可愛いって思ったんだ。正直、ヴィヴィオはどこから見ても美人だ。その気になれば大抵の男性を恋人に出来るだろう。

「ヴィヴィオ、僕はあの日の事を今でもはっきり思い出せるんだ」

だから、教えてあげよう。僕が何を思っているかを。あの日の約束にどんな期待を込めてしまったかを。

「あれ以来、僕は相手を探そうとした。アリサやすずかと恋人ごっこをしたりもした。でも、結局今日までそういう相手がいなかったのは、ヴィヴィオが」一番”知ってるよね？”

「はい」

僕が”一番”との言葉に込めた意味に気付かず、ヴィヴィオは平然と返す。その辺りは本当になのはそっくりだよ。そんな事を考えながら、僕は苦笑しながら言葉を紡ぐ。

「正直、すずかやアリサへ好意を抱かなかった訳じゃない。でも、結局言い出せずに終わった。いや、言い出す気になるぐらいまでにならなかったかな？」

僕がそう言うとヴィヴィオはその意味を理解したのか、若干意外

そんな顔を見せた。そう、僕はどうしても二人を恋人にしたいと思えなかった。友人を通り越して親友にまでなった。でも、それが異性としての気持ちには繋がらなかったんだ。

「とにかく、二人に相手が出来てそんなごっこ遊びも終わった後、僕は相手を探す気を無くした」

「……そういえば、そんな感じでしたね。でも、どうして？」

ヴィヴィオが僕の言葉に疑問符を浮かべて問いかけてきた。その答えが僕の約束を果たしたい理由さ。でも、軽い言い方じゃ分かってもらえない可能性もある。そう思って僕はヴィヴィオの目を見つめて微笑みと共に告げた。

ヴィヴィオがいてくれたからだよ。

そう言った瞬間、ヴィヴィオが息を呑んだのが分かった。僕はそのまま続ける。もしヴィヴィオの気持ちが変わりなかつたら、僕との約束を忘れないでいてくれたら、その時はちゃんと求婚しよう。そう考えた事を伝える。

ヴィヴィオとの約束。それが僕に一つの覚悟をくれた。責任じゃなくて、希望を持ち続ける事。気付けば傍にいて、笑顔を向けてくれた小さな天使。無邪気に僕へ好意を寄せてくれる少女を、僕は大事にしたいって思うようになっていたんだ。

「だから、嬉しかったんだ。今日までヴィヴィオが一人でいてくれた事が」

「ユーノさん……」

「でも、同時に不安もあつたんだ。本当に君が僕の事を思つて一人
でいたのかなつて」

そう、だから複雑な気持ちだつたんだ。でも、それはヴィヴィオ
自身が教えてくれた。だから、自分に整理を付けるために散歩に出
ただけど、それだけじゃない。ある事を考えるためでもあつたん
だよ。そう教えるとヴィヴィオが驚いたように目を見開いた。

さ、じゃあその事を伝えようか。いや、その言葉を伝えるとしよ
う。ヴィヴィオが聞きたいだろう言葉を。僕が伝えたい言葉を。あ
りつたけの想いを込めて。

ヴィヴィオ、僕と結婚してくれないかな？

……………喜んで。

両目から涙を流して、ヴィヴィオは極上の笑顔で返事を返してく
れた。僕はそんなヴィヴィオへ静かに近付く。そして、その後ろへ
立つて優しく抱きしめる。これから大変だろうけど、そんな事はど
うでもいい。僕はヴィヴィオを大事にしたい。

これから歩く道はきつと辛い事が多いだろうけど、それでもヴィ
ヴィオがいてくれるのなら。そう、きつと耐えられる。笑っている
事が出来る。そう強く信じる事が出来るから。

「指輪を買いに行かない？」

「その……………時間をください」

僕の提案にヴィヴィオがそう返す。てっきり即答だと思つていた
のに。もしかして、やっぱり嫌とかなのかな。そんな風に不安を抱
く僕へ、ヴィヴィオはそんな思考を読んだのか、苦笑しながら告げ

た。

目が真っ赤なので、外に行ける顔に戻るまで待つて欲しいんです。

僕は、その言葉に安堵した……

それから、僕とヴィヴィオは恋人となった。結婚はさすがにまだ早いと思い、土郎さんが心から納得出来るだろう二十歳まで待つ事にしたんだ。ヴィヴィオとしてもデートなどに行きたかったらしく、この提案はすんなり受け入れられた。

そんなヴィヴィオは指輪を付けたネックレスを身に着けている。婚約指輪を使ったものだ。仕事の際は無くすかもしれないと外して貰うらしいんだけど、それ以外は出来るだけ身に着けているそうだ。

「ユーノさん、これなんてどうです？」

「どれ？ ……駄目。機能的じゃない」

「うう……いいと思うんだけどなあ」

今、僕らは二人で家具を見ている。本格的にヴィヴィオが同居する事になったからだ。なのは一人になるって寂しそうに言っていたらしいけど、それを聞いたフェイトがそれならと、以前のように一緒に暮らす気になってるそうだから大丈夫だろう。

それを話したヴィヴィオが、なのはとフェイトが同性じゃなければ

ばと言っていたのが印象的だった。それはきつと誰もが思った事だ
と思う。まあ、それだと僕はなのはかフェイトに異性として意識さ
れる事は確実になかったけどね。

ヴィヴィオはクローゼットから手を離してぶつぶつ言っている。
正直、ヴィヴィオが今使ってるのを運べばいいんだけど、それを本
人が拒否したんだ。どうやら、僕と二人で選んだ物がいらしい。
女性って、変なところにこだわりがあるんだなあ。そんな風に感
じたけど、何とかなく気持ちに分かるので口には出さず。あ、ヴィ
ヴィオがもう先へ行ってる。置いて行かれないようにしないと。

「ヴィヴィオ、ちょっと待って」

「待ちません。私の意見、ユーノさんが全部却下しちゃうだもん」

「だから、あれは……」

「いっつだ！」

そんなやり取りをしていると、周囲からクスクスと笑い声が聞こ
えてくる。完全に痴話喧嘩みたいだもんなあ。僕は若干の居心地の
悪さを感じながら、ヴィヴィオのご機嫌取りをする。それでも、ヴ
ィヴィオは中々機嫌を直してくれない。

でも、どこかそれがポーズのようにも見える。だから、僕は内心
苦笑しながらヴィヴィオへ弁解の言葉を言い続ける。結局、僕がヴ
ィヴィオの笑顔を取り戻したのは、それから一時間後の事。

昼食先に女性に人気の店へ連れて行く事になり、そこで僕以外見
事に女性という状況に気まずさを感じた。それに萎縮する僕を見て
ヴィヴィオが笑ってくれたのがそれ。いい性格してると思うも、仕

方ないかと思つて僕は何も言わないで耐えた。

そんな僕にヴィヴィオは最初こそ笑つていたけど、段々すまなそうに思つたのか最後にはごめんなさいって謝つてきた。でも、僕が確かにヴィヴィオの意見を少しも取り入れようとしなかつたのも問題だから。そう思つておあいこだよって返したらヴィヴィオはそれで機嫌を完全に直してくれた。

「それで……次は何を見るの？」

「えつと……あ、じゃ……」

腕を組んで歩く僕とヴィヴィオ。見た目としては、兄妹かな？でも、実際は恋人なんだよね。しかも婚約してるぐらいの。それを周囲は気付いてくれないだろうと思いつつ、僕はヴィヴィオの話す言葉に相槌を返す。何気ない日常。それが堪らなく嬉しいって、心から感じながら……

「それにしても、まさかヴィヴィオとは思いませんでしたよ」

「周囲からは犯罪的だつて言われた」

僕の言葉にロツサは無理もないつて言つて苦笑した。今、僕らは無限書庫にいる。僕は仕事。ロツサはサボリ。それを注意するのは無駄つて分かつてるから僕は何も言わない。話題は僕のこの現状に至るまでの話。ロツサは僕の事を結構心配してくれて、色々と相手になりそうな人を紹介してくれたりしてくれてたんだ。

だからこうしてこれまでの事を教えていたんだ。ロツサのしてくれた事に感謝しながらね。まあ、本人は別に大した事はしてないって笑ってたけど。

「しかし、これからが大変ですね。相手はあの二代目エースオブエースにして、聖王陛下の生まれ変わりですからね」

「ま、何とかなるよ。最低でもヴィヴィオだけは僕が守るさ」

「おや、貴方らしくないですね。惚気ですか？」

「好きにとつてよ。これは僕の本音だからね」

ロツサの軽いからかいに僕も同じ雰囲気で答える。実際、ヴィヴィオが聖王のコピーだという事はJS事件で知られている。まあ、今は大多数ではなく一部の者達となってはいるけどね。成長したのもあるけど、そもそも他の人達はヴィヴィオの名前を知らないからさ。

それでも、ヴィヴィオがかつてゆりかご起動に使われた存在だと気付く人はいる。大抵はそれを知っても何か言う事はない。でも、もしかしたらその内、心無い人に知られる事だっているかもしれない。そうなった時、僕はヴィヴィオを守り抜くって決めているんだ。

「そうですか。さて、では僕はこの辺で」

「仕事をする気になったのかい？」

「いえ、クロノ君と会う約束がありまして」

ロツサは悪びれもせず、そう告げて去って行った。僕はその颯爽たる行動に、呆れを通り越して笑みさえ浮かべた。あれでも凄腕の査察官と言われるんだから凄いよ。まあ、確かに飄々としてるけどやるべき仕事だけはきちつとこなしてるもんなあ。

そんな風な事を考えながら、止まりがちになっていた仕事を進めようと思って意識を集中する。そしていつものように仕事をし始めてどれぐらいした頃だろうか？ 僕が少し休憩でもと思って司書長室へ戻ると、そこには思いもよらない人物がいた。

「な、なのは……」

「……久しぶり、だね」

そこにいたのはなのはだった。今のなのはもう第一線を退き、後方で新人魔導師達へ自分の技術や経験を伝えている先生をしている。訓練校に引つ張りだこらしく、中々忙しい日々を送っているとはヴィオオからの話。

僕はもう何年も会っていなかった幼馴染の登場に、正直戸惑っていた。ヴィオオとの結婚は延期になったため、挨拶には行っていないんだ。最後になのはと会ったのは……いつだっただろう。もうそれぐらい前だ。

「久しぶり、だね。それで……今日は何か用事かな？」

「えっと……その、ね？ ヴィオオの事で少し……」

「そっか……あ、とりあえず座ってよ」

「うん……」

妙な気まずさ。それはあの日　　三人の想いを蹴った時からの
変わらぬ僕らの空気だった。そう、これが嫌で僕らは互いに距離を
取り始めたんだ。そんな事を僕は思い出していた。

かつては笑みを浮かべ合って、他愛もない事で微笑み合っただけは
の関係。それがあの日一変した。表面上だけでも取り繕えられれば
良かった。でも、生憎僕もものはもそういう事が出来る器用な人間
じゃなかった。フェイトやはやてもそうだったけど、一番顕著だっ
たのがなのはだったんだ。

それだけ僕との付き合いが長かったというのもあるんだろうとは、
正直思った。でも、だからといって何か改善策が打てる程、僕は女
性慣れしてなかった。いや、自分を誤魔化す事が出来なかった。だ
から距離を取った。

いつか自分の押し殺した気持ちが表示に出るんじゃないかって。
どこかで未練がましく縋るんじゃないかって。なのはの性格をよく
知るからこそ、その優しさに、その温かさに甘えなくなかったんだ。

「で、ヴィヴィオの事で話があるって言ってたけど」

「う、うん。ヴィヴィオがユーノ君と結婚の約束をしたのは聞いて
る。それがキツカケで二人がその……お付き合いしてるってのも」

なのははそう言い辛そうに告げた。僕もそんななのはの言葉に言
いようのない気持ちになった。かつてなのはが付き合い出したと聞
いた時もそうだった。ヴィヴィオから告げられた肯定の言葉に、僕
は正直心に穴が開いた気分になったのを覚えている。

あの時僕は思ったんだ。ああ、やっぱり僕はなのは達が好きだっ
たんだって。今思えば、そんな僕の内心をヴィヴィオは感じ取って
いたのかもしれない。だからこそ、あんな約束を言い出したのかも。

そんな事を考える僕の目の前にいるのはは、どこか弱々しく見えた。空戦魔導師として活躍していた頃からは考えられない程、表情が沈んでいるし、心なしか疲れているようにも見えた。

「それでね……今日聞きたいのは、どうしてもヴィヴィオじゃないと駄目なのって事」

「え？」

「だって親子に思えるぐらい歳が離れてるし、ヴィヴィオはまだ子供みたいなところがあるんだよ。二十歳になっただとしても、ちゃんと奥さんとして支える事が出来るか……」

僕はなのはの言葉に声を失った。なのはが言っているのは確かに親の意見だ。実際ヴィヴィオには幼いと思える部分もあるし、僕と一緒にいるととても恋人らしく見えないっていうのも分かる。二十歳になっても大人になるって訳じゃないし、ちゃんと夫婦生活出来るかどうかは不明だ。

でも、なのははそんな事を言わないと思っていた。僕は勝手に、ヴィヴィオを信じて好きな事をさせると考えていたんだ。だから僕は、ヴィヴィオとの結婚を考え直して欲しいと聞こえるような事を話すのはへ、一言だけ答える。

誰に何を言われても、ヴィヴィオが嫌と言わない限り、僕は結婚の意志を曲げないよ。

そうはつきり言い切る僕へなのはは一瞬言葉を失い、やがて涙を浮かべてこう返した。

どうして？ どうしてあの時そう思ってくれなかったの……？

その言葉が僕の心へ突き刺さった。今、僕が言った言葉。それはまさに、あの日の自分の決断とは正反対だと気付いてしまったからだ。誰に何を言われてもいい。それは、なのは達の想いから逃げた自分が気付かないといけなかった答えだった。

好きだった。それを最後まで貫けばいいだけだったんだ。それを僕は自分勝手な理由をつけて、納得させるように誤魔化して逃げ出した。覚悟も決意もない。好き。一緒にいたい。それだけで良かったのに。

言葉を失い、愕然となる僕へなのは悲しそうな表情を見せると、静かに立ち上がった。そして、部屋を後にしようと歩き出して、ドアの前で止まってこう言ってきた。

「ユーノ君がヴィヴィオの事をどう思ってるかはよく分かったよ。だから、私は反対しない。でも、これだけは覚えておいて」

「……何？」

僕は何とかそれだけを搾り出した。それになのは聞いた事もないような声で、一言だけ返した。

その代わりに、賛成もしないから。

無感情でそう告げ、なのはは部屋を後にした。僕はそれに涙も出なかった。終わった。そんな気持ちしかなかった。僕となのはの今日までの時間が、今ここで完全に断ち切られた。そう感じたんだ。

強い虚無感が僕を包む。何が未練はないだ。未練たらたらじゃないか。もしそうじゃないのなら、ああ言われてこんな気持ちになるはずないだろうに。僕は自分へそう言って責め立てた。

その日、僕はもう仕事が出来なかった……

「ねえユーノさん、何があったの？」

「ん？ ああ、何でもないよ。ちょっとぼーっとしてただけ」

ソファに二人で座っての談笑時間。貴重な揃っての休みなのに、ヴィヴィオへ意識を向けてやれない。あの日から僕はどこか暗くなつたと言われるようになった。周囲には疲れだつて言つて納得させただけど、ヴィヴィオにはおそらく誤魔化せてない。

どうもなのはが無限書庫を訪れた事を聞いたらしく、その理由を聞いた日に僕の部屋へと転がり込んできたんだ。どうも聞くところによると、初めてと言つてもいいぐらいの大喧嘩をしたらしい。詳しい事は聞けなかった。僕は……きっと怖かつたんだと思う。

「そうなんだ。もー、私がいる時は私へ意識を向けて欲しいです」

「ははっ、ごめん。もうしないから」

「誠意が感じられないんですけど？」

「そうかな……？」

「はい。あ、じゃあ許して欲しかったらキスしてください」

「それは……勘弁してくれないかな」

ヴィヴィオの軽い言葉に僕は応える事が出来ない。以前であれば、少し困りながらも頼などにしてあげたのに。ヴィヴィオはそんな僕に悲しそうな眼差しを向けるけど、すぐにそれを消して笑みを浮かべて手を振った。

そして、冗談ですよって、そんな風にからかうように言ってくれるんだ。僕はそんなヴィヴィオの言葉に余計居た堪れない気持ちになる。僕とヴィヴィオは好き合っている。でも、それを素直に喜べない人がいる。もしくは、それが心の傷を思い出させる人もいる。

そう考えると、僕はどうしたらいいのかわからなくなってきたんだ。確かに誰に何を言われても意志を曲げないと言った。でも、結婚って周りに祝福されるのが望ましいものはず。そうになると、僕との結婚はヴィヴィオにとって母親に祝福されないものになるのはどうなんだ。

それだけじゃない。今も仲の良かった親子だった二人が喧嘩までしている。僕がヴィヴィオとなのは不幸をもたらししているんだ。そう考えると、どうしてもヴィヴィオへの接し方が分からなくなる。そんな風に考えていると、ヴィヴィオが僕へいきなり抱きついてきた。

「え、えつと……ヴィヴィオ？」

「……………ですか？」

「え？」

「どうして何も言ってくれないんですかっ！？ 何で全部一人で抱

え込もうとするんですかっ!？」

ヴィヴィオの声は震えていた。泣いているんだと、そこで気付いた。呆然となる僕へヴィヴィオは教えてくれた。なのはと僕の会話を本人から聞いた事。結婚については反対もしないが賛成もしないと言われた事。

結婚式には出席しないと明言された事。理由は賛成しない自分は資格がないとの事らしい。それでもヴィヴィオが食い下がると、なのははこう言ったんだって。

問題でしょ？ 娘へ嫉妬する母親なんて。

その言葉に僕は目を覆いたくなった。ヴィヴィオはその言葉を聞いて、ならどうして僕へその気持ちを伝えなかったのかと詰め寄ったらしい。するとなのはは、言えば僕が変に意識するからと返したそうだ。

その予想が当たってるだけに、僕は何も言えない。そして同時に気付いた事がある。それは、なのはがヴィヴィオの事を応援している事だ。だって、賛成もしないと言っているのなら僕の気持ちを乱してもいいはずだ。でもそれをしなかった。

「なのは……君って人は」

「……ママは私にこう言ったんです。自分と同じ思いはさせたくないって」

「それで喧嘩したんだ。自分はなのはとは違ってた」

「……………はい」

それだけで僕は自分の事を呪った。あの日、ちゃんと自分から逃げずに向かい合っていたら。もっと早くに気付いていれば。そうすれば、今のような現状にはなっていなかったら。そう思っても、嘆くのはそこまで。僕にはやる事が出来た。もう落ち込んでいられない。そう、なのはとヴィヴィオの関係を戻すために。そして、なのはへ遅いかもしれないけど想いを伝えるために。

「ヴィヴィオ、なのはは今日は家にいる？」

「……確かいたと思います」

「じゃ、行こう。そして、なのはに僕らの事をちゃんと認めてもらおう」

僕がそう言うと、ヴィヴィオは目を見開いたけどすぐに嬉しそうに頷いてくれた。僕がなのはへ何を言うかが不安だったんだと思う。そして、僕はそんなヴィヴィオへ言わないといけない事がある。それは、一つの約束。

「ヴィヴィオ……」

「何ですか？」

僕の声が真剣みを帯びていたから、ヴィヴィオは不思議そうにこちらを見た。僕はそんな彼女に微笑みを返して告げる。

もう一人で抱え込まないって誓うよ。いずれ夫婦になるんだし、ね。

……絶対ですよ？

嬉しいそうに、でもどこか疑うようなヴィヴィオ。僕はそんなヴィヴィオを安心させるために頷いて、静かに近付いて頬にキスをした。それでヴィヴィオとしては満足だったんだね。弾けるような笑顔を返してくれたんだ。

そして、僕は揃って高町家へと向かう事になった。その手をしっかりと握り合って……

なのはは最初は会う事を拒否した。でも、ヴィヴィオが僕の気持ちを察してくれたみたいで、必死になって説得してくれたんだ。それに根負けしたのか、なのはは僕と会ってくれた。表情は初めてみるぐらいの無表情。

それでも、僕はなのははへはっきり告げた。あの日、僕が逃げた事を。そして、あの日も抱いていたなのはへの気持ちを。でも、もうそれは一番ではなくなっている事を告げる事も忘れない。

今の僕は、はっきりとヴィヴィオが一番好きだって言える。なのはの事も好きだよ。でも、それはもう異性としてじゃないんだ。ヴィヴィオにしかそんな想いを抱かないって決めたから。

……それで？

だから……ヴィヴィオと結婚させてくださいっ！

僕がそう言って頭を下げると、それが当然ながらテーブルに当たる。それでも僕は身動き一つ取らない。ヴィヴィオはそれにやや驚

いたような表情を浮かべていただろうし、なのはは無言で僕を見つめていた。

そんな光景が結構な時間継続していたと思う。すると、急になのはが笑い出したんだ。それに僕は思わず頭を上げた。ヴィヴィオも戸惑いを顔いっぱい浮かべている。そんな僕らへなのはは笑いを抑えてこう話し出した。

もうなのはは僕への気持ちをちゃんと整理している。でも、もし僕がまだどこかでそれを引きずっているとしたら、ヴィヴィオを悲しませる事になるかもしれない。だから試したんだって。正直演技するのは難しかったけど、ヴィヴィオのためには思ってたやりきった。そんな風になのはは言うのと、ヴィヴィオへ笑顔を向けて、式には出席させてもらうからと告げた。それにヴィヴィオが嬉しそうに頷いてこの話は終わった。そして、その日はこのまま三人へ夕食を食べる事になり、ヴィヴィオがなのはにそそのかされる形で買い物に出かけた。自分よりも料理が上手くなったか見せて欲しいってね。

でも、そこに何か意図があると僕は気付いた。ヴィヴィオが意気込んで出かけるのを見送って、僕はなのはへ言った。

で、話したい事は何？

……にやはは、やっぱり分かるか。

僕の言葉になのはは降参とばかりに苦笑した。うん、当然だよ。なのはがあんな演技が出来るような性格なら、僕が知らない訳ないじゃないか。そう思ったけど、それは口には出さない。その代わり、何となくねとだけ返す。

その僕の答えになのはは小さくため息を吐くと、リビングへ行くこうって告げて歩き出した。僕はそれについていく。そして、さつき

と同じようにテーブルに着いて話を聞く事にした。

「実はね、彼と別れる要因はそれだったんだ」

「え……？」

「ユーノ君が忘れられなくて……ね」

なのはが言ったのはとんでもない事だった。あの教導先の教え子。彼と別れる原因になったのは、僕だつて言うんだ。なのはは僕への気持ちを整理出来ていなかった。でも、何とかそれを乗り越えようとして、つい身近で優しくしてくれた相手に甘えてしまった。

最初はそれで良かった。でも、段々相手にも自分にもその関係が良くないと思い始めた。だから別れを告げた。直接の理由は仕事に対する意見の相違だけど、そこに至る根底には僕への好意があった。そうなのはは言つて笑つた。

「だから、ユーノ君とヴィヴィオが結婚の約束をしたつて聞いた時は正直羨ましいって思つたんだよ」

「でも、あれは……」

「ユーノ君も分かつてたはずだよ？ ヴィヴィオならそれを本当にするつて」

僕の言葉を遮り、なのははそう言い切つた。さすが母親。娘の事は正確に把握しているよ。そして、さすが僕との付き合いが長いだけあるね。寸分の狂いもなく僕の思考を言い当てたや。

「まあ、私もどこかで、それまでにどつちかが相手を作るだろうな

って思ってた」

「……だけど、それがまさかの結末を迎えた」

「うん、しかもユーノ君の方も乗り気って分かった時は本当にショックだった。あの時の言葉は、私の本当の気持ちだったんだから」

そう言うのはは、もう悲しみじゃなく拗ねるような声で僕へそう告げていた。僕はそんなのはに何て返せばいいのか分からず、ただ困り果てる。そんな僕を見て、なのはは楽しそうに笑みを見せた。

もう今は気にしてないから。そう言ってなのはは僕へ真剣な表情を向けると同時に立ち上がった。そして、戸惑う僕に頭を下げながらはつきりこう言った。

ヴィヴィオの事をよろしくお願いします。

それに僕は慌てて立ち上がり、同じように頭を下げながら答える。

が、頑張って幸せにします！

僕がそう答えるとなのはが一瞬呆気に取られてから、楽しそうに笑い出した。それに僕はちよつと恥ずかしかったけど、すぐに同じように笑った。それから、もう気まずさは無かった。昔の雰囲気に近いけど、でもやっぱりどこか違う空気感。

なのはと友人でありながらも未来の家族になる。そう考えると、妙な気分だ。でも……うん、悪くない。義理の母になるんだろうけど、そう呼ぶ事はきつとないだろうしね。

「ユーノ君、長生きしないといけないね」

「そうだね。ヴィヴィオの方が若いし、女性だから」

「先立たれるのは辛いらしいからね。あ、最低でも私より長生きして欲しいなあ」

「いいよ。僕とヴィヴィオでなのはを見送るから」

「……うん、お願いするね」

そこで会話は終わった。それからヴィヴィオが帰ってくるまで、僕らは一言も喋らずにいた。あの日から始まった気まずさが終わり、新しい関係が始まった。そう強く実感しながら……

それから時は流れ、僕とヴィヴィオは一度として別れ話などもなく、比較的平和に過ごしていた。まあ、喧嘩は結構あったけど、大抵ヴィヴィオの勝利で終わったとだけ言うておく。いや、僕じゃどう足掻いても勝てないよ。

男は最終的には女に勝てない。そう痛感させられる事ばかりだったしね。それでも全敗じゃない事を褒めて欲しい。あのヴィヴィオ相手に勝利する事が出来たんだから。……ちょっと強引な方法を使っただけど、さ。

「ユーノさん、ちょっと来てー」

「今行くよー!」

時刻は夜。もう少ししたら寝る時間だ。なので、のんびりとリビングで本を読んでいると、浴室の方からヴィヴィオが呼ぶ声がするので返事をしながら立ち上がる。ゴキブリが出たという訳ではなさそうだ。声が落ち着いていたからね。

以前出現した時のヴィヴィオの慌て方はそりゃあ凄かった。マンション中に響き渡るんじゃないかってぐらいの声で叫んで、ゴキブリ相手に見よう見真似のスターライトを撃とうとしたんだ。僕もさすがに焦って、それならアクセルシューターがいいよなんて意味不明な事を言ってたから、相当慌ててたのが分かってもらえるとと思う。

「どうしたの？」

「あ、ユーノさん。これ、どうですか？」

一応顔を出さずに声を掛けると、ヴィヴィオがそう返してきた。なので安心して脱衣所へ顔を出す。そこには色っぽいネグリジエを着たヴィヴィオの姿が……

「な、な、な……」

「えへへ、思い切って着てみました」

言葉に詰まる僕へヴィヴィオははにかみながらそう告げた。でも、顔は真っ赤だし、体をもじもじさせてるし、絶対に恥ずかしかってる。あ、駄目だ。ヴィヴィオのそんな様子に余計クラクラする。

何と言えればいいんだろう？ 大人と子供の良いとこ取りとでも言うのかな。可愛さと色っぽさが両立されてるや。魅力的だけど、どこか保護欲をそそる雰囲気 realism が実にヴィヴィオらしいな。そう思ってヴィヴィオへ告げる。

理性が飛びそうなんだけど……

じゃ、じゃあ……飛ばしてください。

それが最後だった。僕が辛うじて覚えてるのは、ヴィヴィオを抱き抱えて寝室へと直行したところまで。そこから先はまったく記憶にない……事にしておく。翌日、ヴィヴィオは僕へ嬉しそうに抱きついたらそのまま寝てた。

おかげでその日、僕はヴィヴィオが起きるまで動く事が出来ず、仕事に遅刻したんだ。まあ、ずっと寝顔を眺めていた僕の自業自得だからあまり文句は言えないんだけどさ。

「早く二十歳になりたいなあ」

「後二年ぐらいの辛抱だよ」

「む……十八に変更出来ないですか？」

「残念ながら現行法では許可出来ません」

「なら法改正を求めます！」

「要求を却下します」

「説明を要求します！」

そんなやり取りをしながらの二人での食事。僕はすまし顔でヴィヴィオの言葉を流す。それにヴィヴィオが半ばむきになって食いついて、それに僕が苦笑しながら返事を返す。そんな他愛のない、け

れど愛おしい時間。

いつだったか、クロノがヴィヴィオの事をこう評していた。なのはとフェイトとはやて。この三人を足して三で割ったような感じがするって。こう過ごしているとその意味が何となく分かる。所々似てるんだよね、三人に。

「ユーノさん、何考えてるんです?」

「ん? ヴィヴィオは可愛いなあって」

「またそうやって誤魔化す。じゃあ、もういいです。明日の朝はんは無しにしちゃいますからね」

「あ、横暴だ。発言の撤回を要求する」

「では、条件として私に対する本音の開示を求めます」

僕が朝食を取り戻すために提示した要求に、ヴィヴィオはそう返してきた。その表情はどこか期待に満ちてる。うっ、これは下手な事を言えないや。かと言って正直に言っていると恥ずかしいんだけどなあ。でも、嘘の類は見抜かれるだろうから、結局正直に言うしかないのか。ええいままよ。自爆覚悟で言ってるさ! そう決意して、僕はヴィヴィオの目をしっかりと見つめたままで言い切る。

世界中で一番愛してるよ、ヴィヴィオ。

あ、えっと……わ、私ですっ! ……うっっ、いざ言われるとすごく恥ずかしいよ。

お互いに顔を真っ赤にしてる僕ら。きつと傍目から見れば呆れる

事請け合いだ。それでも、これが僕らの偽らざる気持ち。そう感じ取って、僕は静かに席を立ててヴィヴィオの横へしゃがみこんだ。それに気付いてヴィヴィオがこっちを向いて瞬間……

……不意打ちなんてズルイです……

仕方ないじゃないか。ヴィヴィオが可愛いのがいけないんだ。

照れながら拗ねるヴィヴィオ。でも、どこか嬉しそうだから良しとする。僕はそんなヴィヴィオへ笑みを返して、心からある事を願う。

願わくば、こんな時間が永久に続きますように……と。

- - -
- - -
- - -

ヴィヴィオエンド。これにてユーノ編の個別は一旦終了。次回は無謀にも五人エンドに挑戦。

「これを読むと”ユーノ爆発しろ”と言いたくなるらしい

今の気持ちをどう表現すればいいんだろう。そんな風に僕は考えていた。僕の現在地は自宅のリビング。でも、そこに一人でいる訳じゃないんだよ、これが。そこにはすずかやアリサがいるんだ。それに……

「すずかはアリサとベッドを使って。なのははフェイトやはやてと一緒に来客用の布団を使ってよ。僕はこのソファを寢床にするからさ」

「それはええけど、家主のユーノ君がソファはどうか思うなあ」

「あ、じゃあいつそ私と一緒に寝ようよ、ユーノ君」

「……すずか(ちゃん)っ?!」「」「」

はやての発言にすずかがとんでも発言。なので、僕ら五人の声が見事に重なった。それにすずかは少し頬を朱に染めて僕を見つめた。無言だけど、言いたい事は伝わった。つまり、本気だよって事だろう。

でも、それに僕が何か言う前にアリサが嚴重注意を行っている。内容は……あまり聞かないでおこう。注意だか警告だが分からない事を言ってるし。そう思った僕は、意識を現状から逸らす。どうしてこうなったんだろうって。

そう、なのは達五人が今、僕の部屋にいる事に対して何故こうなったのかと。そのキツカケは、あの茶会の日まで遡る。僕はすずかとアリサに呼び出される形になったものの、なのは達の前に顔を見

せて二人と付き合う事になったと告げただ……

二人と付き合う事になった経緯を話す僕。その発言に三人は驚くでも怒るでもなく平然としていた。そして、全てを話し終えた僕へこう告げただ。二人と付き合っていたのは知っているって。

それに僕ら三人が逆に驚いた。どうもなのは達はすずかやアリサがイキイキし始めたのを感じて、好きな相手が出来たと察したらしい。それで、その相手を教えてくれない事や話題にさえしない事から僕の存在に思い当たったらしい。

「それに、ユーノ君は少しうっかりしてたね」

「すずかは無限書庫で何度か目撃されてるし……」

「アリサちゃんとはある筋からの情報で確認済みや」

とどめとばかりになのは達が告げた言葉に僕は返す言葉が無かった。すずかに関しては確かに言う通りだ。デートとして使っていたけど、そんな事をすれば噂にならない方がおかしいんだよね。

そしてアリサの方も仕方ないと言えた。はやてへ僕とアリサの事を教えそうな人物に心当たりがあるんだ。そう、自称はやての兄貴分。ヴェロツサ・アコースだ。これに関しては僕の完全な失敗。確かに誰にも言わないでとは言わなかったからなあ。ロツサは言わないうでと言えば絶対に言わないくらい信頼出来る相手なんだけど、言わないと今回のように意外とあっさり話してしまったりする困った人物だ。

「すずかとアリサは揃って苦笑しながら僕へどうするのかと視線を向けていた。ここが度胸の見せ所だぞと言わんばかりだ。仕方ない。僕がある意味で三人に悟らせたようなものだし、ちゃんと責任を取らないとね。」

「その、なのは達の気持ちをあんな風に蹴っついておいて、その親友二人となんて許せないと」

「思うけど。そう言おうとした僕の言葉を予想出来ない言葉が遮った。」

別に許さないなんて思わないよ。

僕は思わずそうはつきり言ったのはへ視線を向けた。なのははどこか拗ねたような表情を見せて、僕へ尋ねた。今の僕なら本音を言えるんじゃないかって。その視線は僕へ正直に言っただけだ。気持ちがかもつていた。

その言葉にフェイトとはやてが同じような視線を僕へ向ける。それに僕は微かにたじろいた。いや、気持ちの上でだけだ。でも、そんな僕の背中へすずかとアリサがそつと手を当ててくれたんだ。まるで二人が支えてくれてるような気がして、僕はそつと心の中で感謝を告げた。

そして、僕はなのは達三人へ真剣な表情を返した。それになのは達が軽く息を呑んだのを見ながら、僕は告げる。

「虫のいい話だけど、それでもいいなら言うよ。僕はなのは達が今でも大好きだ」

……言った。言ってしまった。すずかとアリサがいるのにも関わらず、二人の目の前でなのは達が好きだと明言したんだ、僕は。でも、まだ僕の背中には二つの手の温もりがある。それだけが僕の心を支えてくれていた。

後で聞いた話なんだけど、この時二人は、なのは達にはそれぞれ相手がいるから何を言っても大丈夫だと思っていたらしい。だから僕の発言を許してくれたし、支えてもくれてたんだって。

そしてなのは達三人は僕の発言に驚きを見せ　　ないで嬉しそうに笑顔を返した。あれ？　何か嫌な予感がしてくるんだけど……どうしてだろう？　しかも、どうもそれは僕だけじゃなくてすずかとアリサも同じみたいで、両隣からは息を呑む音が聞こえてくる。そんな僕らへまず口火を切ったのははやてだった。

よっしや、なら早速あの人に作戦終了って教えんと！

嬉しそうに笑顔を浮かべて携帯を取り出すはやて。そんな光景に疑問符しか浮かばない僕達。するとフェイトが同じように嬉しそうな声でこう言った。

私も先輩へお礼を言わなきゃ！

そして、はやてと同じように携帯を取り出した。もう僕は何が何だか分からないまま、そんな二人を見つめていた。そこへなのはの声がとどめを刺した。

実はね、お付き合いしてたのは全部お芝居だったんだよ。

瞬間、僕達の空気が凍った。でも、すぐに立ち直ったすずかとアリサなんかはなのはの言葉から全て悟ったため、呆れたような表情

をしていた。だけど、笑みを浮かべているところからして、その考えには理解が出来てしまったんだろうね。

僕は理解してはいたけど、困惑もしていた。だってヴィヴィオから聞いた話は、全部なのはが幸せそうにしているって思わされる事ばかりだったんだ。つまりはそれさえもお芝居って事なのだろうか。

「な、なのは……ヴィヴィオもそれに一役買ってるの？」

「え？ ヴィヴィオは違うよ。あ、でもあの子もユーノ君がパパになると嬉しいって言ってたから、勝手に協力してくれてたのかも」

僕の質問になのははそう答えた。その後半に僕は納得した。ヴィヴィオは直感で感じ取っていたんだ。なのはが本気じゃない事を。そして、その目的が何かにも。まさか僕の心を刺激して、なのは達への気持ちを再確認させようとしたとはね。

でも、どうも目的とは違う形で僕の気持ちを聞き出せたのは意外だったようだ。そんな風に状況を整理する僕へ、なのはは少し申し訳なさそうに問いかけてきた。怒ってるかって。いや、怒ってはなけれど、正直意外には感じていた。

「よくなのは達がそんな演技出来たね？」

「それ、ユーノ君が言うんか？」

「ユーノ達と同じ事だと思っな」

「恋人ごっこ、だよ」

僕の言った言葉に三人が見事な連携で返す。そこられると何も言えないや。確かに演技って意味なら僕らが最初してた事は十分そ

れに該当するからね。でも、本番はここからだっただ……

「で、ユーノ君。すずかちゃんとアリサちゃんとお付き合いしてるんだよね？」

「二人と真剣に向き合ってるって言い切ったよね？」

「しかも理由はユーノ君が二人を選べないからやって聞いたで？」

三人の目が獲物を捕らえた獣のように見えてきた。僕は逃げ場を失った感覚を覚えるも、何とか出来ないかと思っすずかとアリサへ視線を向けた。すると、二人は揃って苦笑しながら僕へ告げた。

「諦めた方がいいよ（わよ）」

「……そんな」

すずかとアリサはなのは達の気持ちが自分達と同じかそれ以上だと感じているのか、僕へそう言い切った。僕はそれに完全に逃げ場を失ったと実感した。そんな僕へなのは達が揃って不安そうな表情を見せる。

もう、それで勝負は着いた。なのは達への気持ちをはっきりさせられた今、僕に出来る事はただ一つ。現状をありのままに受け入れる事。こうして僕は密かに思うのだ。恭也さんにまた恐ろしい程の殺気をぶつけられるんだらうなあ……と。

そんな回想を終え、僕は現実へ意識を向ける。すずかへの注意も終わったらしく、なのは達は五人揃って僕の扱いをどうするかを決めていた。どうも誰が僕と一緒に寝るかを本気で話し合うみたいだ。僕はそれに対して一番の解決策を提示した。

その有効性を示すように実際にやってみせてね。まずは変身魔法を使ってフェレット状態になつてつと……よし。なのは達はそれに一齐に手を打った。そうなんだよ。これなら場所もあまり取らないし、その……なのは達へ手を出す事も出来ないしね。

「さすがユーノ君。これなら問題ないね」

「だね。じゃ、じゃあ私と一緒に……」

「あ、抜け駆け禁止や。ユーノ君、わたしとがええよな？」

「はやてちゃんこそ駄目だよ。ユーノ君、私と寝てくれないかな？」

「ああもつっ！ すずかもはやてもフェイトと結局同じでしょうが！」

……前言撤回。解決策にはならなかった。むしろ、余計悪化させた感じがする。フェイトとはやてにすずかが僕を誘い、アリサがそんな三人へ怒りをぶつけ、なのはがそのアリサを宥めている。そんな光景を眺め、僕は一人苦笑。

フェレットになつても本来の姿でも五人の僕への接し方は変わらないんだと思つて。嬉しいんだけど、少し抑えてくれないかな。正直僕はそんなに自制心に自信はないんだ。いや、これが誰か一人ならまだ耐え切れるかもしれないけど、さすがに五人は厳しいからさ。

喧嘩のような五人のやり取りを見つめ、僕は小さく呟く。良かった

たつて。僕が原因で五人がこんな風に過ごせなくなる可能性もあったんだ。そう思うと、良かったって心から思う。色々と思いがつてる部分もあるかもしれないけど、それでも僕がキツカケで五人がもっと仲良くなった感じがしないでもない。

「じゃあ、公平になるようにじゃんけんで決めよか」

「いいわよ。こうなったらさっさと終わらせましょ」

はやての提案にアリサが息巻いて拳を握る。それってどう見てもじゃんけんをしようとするように見えないのは、僕だけかな。そんなアリサを見て、なのはがやや苦笑した。でも、どこかその目は羨ましいって言ってるようにも見えたけど。

「あ、アリサちゃんも飲まれてる……」

「なら、そういうなのはは辞退でいいね」

フェイトがそう言うとなのはが小さく呻いた。それにフェイトが軽くしてやったり顔をしてる。そのやり取りを見てさすが笑顔でなのはへ締め括りの言葉を発した。

「なのはちゃんもユーノ君と一緒に寝たいんだよね？」

その問いかけになのはも頷いて、五人はじゃんけんを開始した。でも、当然五人でやれば中々勝負がつかないのも事実。その対決にも熱が入っていく。その様子を見つめる僕だったけど、ちらりと視線を時計へやっつて大きいため息を吐いた。

「……でも、そろそろ静かにしてくれないかな？ もう夜遅いんだ

けど……」

僕のそんな咳きはなのは達の喧騒にかき消される。五人が元気なのは、多少アルコールが入っているのも関係してるだろうな。まあ、理性を失う程は飲んでないし、このイベントが最後になるだろうから、僕は一足先に寝かせてもらおう。

五人に気付かれないようにこっそりとベッドルームへ移動。フェレット状態だと、こういう隠密行動に適してるからいいよね。そして、一旦変身魔法を解いて下着などをしまっただけある棚を開ける。うん、ここなら大丈夫だろう。そう思って僕はその中身を少し整理して軽い窪みを作る。それから再び変身魔法を使ってフェレットに変わると、そこへ入り込む。

「じゃ、みんなおやすみ。お先に寝るからね」

そうリビングで騒ぐなのは達へ小さく告げて、僕は目を閉じた。この姿で眠るなんてどれくらいぶりだろう。そんな事を考えながら

……

「……………どうしてこうなったんだ？」

僕は正直困惑していた。今はフェレットではなくいつもの自分の姿をしている。時刻は早朝。まだ五人は眠ってる。そう、眠ってるんだ。でも、その格好が問題だ。何せ僕が最後覚えている時はちゃんと寝間着姿だったはずなのに、今は……………その……………

「何で下着姿なのさ……？」

なのはとフェイトにはやては布団に横になってたけど、掛け布団がはだけてたから掛け直そうとしてそれに気付いたんだ。すずかとアリサも大胆な格好で寝てる事に気付いたのは、それを見たから。

僕は最初眩暈を感じたけど、とりあえずなのは達の上に掛け布団を掛け直し、すずかとアリサの上にもタオルケットを掛けておこう。正直かなり葛藤しながらの行動だったけどね。

「最初に起きるのが僕じゃなきゃよかったのに……」

ついそんな事を呟く。僕が目を覚ましたのは喉が渴いたから。摂取したアルコールのせいだろう。で、仕方なく寝ていた場所から出てキッチンへ向かったんだ。そこで水を飲むために魔法を解除し、人心地ついたところでのろりとベッドルームへ戻ってこの現状に気付いたという訳だ。

しかも見れば全員の寝間着は綺麗に畳まれていて、とても酔っ払って脱いだとは思えないんだ。と、そこで僕は嫌な想像が浮かんだ。なので、もう一度リビングへ戻る。そこで僕が見たものは、眠る前には無かった大量のカクテル系飲料の空き容器だった。

どうやらあの後、五人はじゃんけん大会の景品扱いだった僕がいない事に気付いて、ならばと酒盛りをするべく買出しに出たんだろう。きつと扇動したのははやてのはず。それにアリサ辺りが賛同したはずだ。それで五人でこれを飲みながら昔話か僕への愚痴でも言い合ってたんだろうね。

「……それで暑くなったから寝間着を脱いで寝たのか……」

僕は思いついた結論を口に出してため息。変なところで礼儀正し

いのが実になのは達らしいや。そうは思うものの、ベッドルームに戻る気にはなれない。今のあそこは天国であり地獄だ。だって無防備なのは達が深く寝入っているんだから。

なので、僕はキッチンの方へ向かう。そして静かに椅子へ座った。今日は僕は仕事だけど、なのは達三人は休暇を取ってる。だから、すずかとアリサの二人と一緒に出かけられる事になってるんだけど、大丈夫かな。

「結構な量飲んでるだろうし……」

僕は言いながら視線を動かす。そこには時を刻む時計がある。現在午前五時を少し過ぎたところだ。今日はシャマルが夜勤のはずだ。それを思い出して、僕はある事を考えついた。なのは達が二日酔いになっていてもいいように、今から手を打っておこうかなってね。

そう思っ僕はなるべく音を立てないようにように動き出す。向かう先はシャマルの勤めている場所。そう、管理局の医療機関。そこである物を融通してもらおうと思うんだ。本当は色々と問題もある行為だけど、そこは大目に見てもらおう。

……行って来るね。

小さくベッドルームの方へ呟いて、僕は玄関のドアを開けた。出来るだけ急ごう。時間に余裕はあるけど、いつ起き出すか分からないからね。いくついるかな？ 人数分も……いるかもしれないから五人分頼もう。

昇り出した朝日を浴びながら僕は走る。あ、一応シャマルへ連絡を入れておこう。メール画面を起動して、用件は二日酔い対策。内容は、はやて達がかなりの量のアルコールを摂取しているので、アしを取りに行くから五人分用意しておいて欲しい。これでよしと。

シャマルが苦笑しながら用意してくれている光景を想像しながら、僕はふと気付いた。僕自身が行かなくてもシャマルに頭を下げて来てもらえばいいんだって。でも、もう行くなって文面に書いたしなあ。

「……僕もまだ頭が寝ぼけてるみたいだ」

一人苦笑しながら急ぐ。シャマルに会ったら、コーヒーの一杯でも奢って頼みを聞いてもらおう。そんな風に考えながら僕は朝焼けの中を行くのだった……

あの後シャマルと会って、なのは達が二日酔いだった場合連絡するので、処置をしてくれるように頼んだ。シャマルは案の定苦笑していたけど、分かったと返してくれたので、お礼を言って再び自宅へと戻った。

まあ、シャマルにもそれだけならわざわざ来なくても良かったのには言われたけどね。僕はそれに寝ぼけてたんだって返して笑われた。そんな出来事を終わらせ、僕が玄関からリビングへと入ると、そこには死んだような顔をしたはやてがいた。

「……あ、ユーノ君。おはよ〜」

「おはよう、はやて。顔色悪いけど大丈夫？」

「あ〜、ちょう頭ガンガンするんよ」

はやてはそう返して力なく笑うけど、それが余計心配させるよ。なので僕は、はやてへシャマルに頼んだ事を教えてあげた。はやてはそれに苦笑しながら、僕の手配に感謝してくれた。

その後はリビングの後片付けをしながらはやての世話を焼いて時間を過ごす。はやては申し訳ないって言ってたけど、僕が逃げたせいでこうなったのなら責任は僕にもある。そう思うから気にしないでって返した。

やがてすずか、なのは、アリサ、フェイトの順番で起きてきた。フェイトとアリサは平気だったみたいだけど、なのはとすずかはちよっと辛いらしい。はやてが一番酷いのは、やはり昨夜飲んだ量が一番多いからだそうだ。

なので、シャマルには三人分の処置をお願いする事にして、僕は自分を含めた六人分の朝食を用意しないとね。幸いフェイトとアリサは戦力になるので、手伝いをお願いするのでしょうか？

メニューは胃に優しそうなものにする。パン粥がいいかなあ。食パンに牛乳と砂糖を用意してっと……

「はやて、パン粥なら食べれそう？」

「うう……食べる事は出来そうや」

「了解。なのはとすずかもそれでいい？」

「うん、お願い」

「じゅめんね、ユーノ君」

はやては食欲だけはあるようだからよしとして、なのはとすずか

は本当に少し辛いだけのようだ。これなら食事は平気だね。僕は気後れするなのはとすずかへ気にしないでと返して料理を始める。

正直フェイトとアリサの手伝いが必要なくなってしまうので、代わりに洗濯とはやて達の相手をお願いした。フェイトが洗濯を受け持ち、アリサははやての世話を甲斐甲斐しく……いや、結構辛辣な言葉も掛けてるな。

「だからアタシが言ったじゃない。程々にしなさいって。絶対こうなるって分かってたんだから」

「やって……ユーノ君、一人で勝手に逃げてまうんやもん」

「だからって、買ってきた缶チユーハイを一気飲みとかするなっ！」

「うつつ……あ、アリサちゃん、声抑えて。頭に響く」

……何となくだけど、今のはやての言葉は演技の気がする。アリサははやての反応を見てどこか疑ってるみたいだけど、それでも仕方ないと思っただのか、一応謝っていた。そうこうしている間にも朝食準備は進んでいく。

出来上がったパン粥をみんなで食べ、少し落ち着いたぐらいで僕は出勤準備開始。そして靴を履いたところで、なのは達に見送られて玄関を出る。うん、まるで家族だね。そんな事を考えながら僕は無限書庫へと向かう。今日は絶対定時で上がってやる。そう強く思いながら……

疲れた。もう何が疲れたって、黒い奴との戦いが一番疲れた。いつもの事なんだけど、最近はフェイトが僕との事ばかり話題にするらしく、そのの八つ当たりも混じってるんだ。本人はそんな事はな
いって言い張ってるけどね。

家に帰ってきた僕を待っていたのは、すっかり元気になったはや
てを始めとする五人だった。僕が疲れ切った顔をしている事に気付い
たはやてが、元氣付ける意味も込めたんだらう。こんな事を聞いて
きた。

おかえりユーノ君。ご飯にする？ お風呂にする？ それと
も……わ・た・し？

食事に決まってるでしょ！

それに僕が答える前にアリスが答えを出してくれた。その言葉に
僕も頷いて、靴を脱いで着替えるためにベッドルームへ。でも、心
配したのかなのはがついてきてくれた。

「ユーノ君、上着渡して。私が掛けておくから」

「ありがとう、なのは。じゃあ……はい」

「うん」

まるで新婚のようだなあ、なんて思いながら僕は上着を手渡す。
そして、なのはが上着をハンガーに掛けてる間にズボンも履き替え
る。その脱いだズボンもなのはが回収して片付けてくれる。本当に
夫婦みたいだ。内心で感動している僕だったけど、体を休めたくて
リビングへと向かう。

ソファに座って少し休憩していると、さすが僕の後ろに立って

肩揉みを始めた。嬉しいんだけど、正直ちょっと申し訳ない。でも、僕がそう思っていると感じ取っているんだろうな。すずかは笑顔で僕へこう言ってくれた。

「ユーノ君は何も気にしないでいいよ。これは私がしたくてしてるんだからね」

「すずか……」

「それに……こうしていると夫婦みたいだし」

そのすずかの言葉で僕は思わずドキツとしてしまう。まさか僕もそう思ったなんて言えないや。と言うかすずか？ 何故そう言ってる周囲へ若干自慢するような顔を向けるの？ いや、別に僕がすずかの顔を見た訳じゃない。でも、すずかの方を見たアリサが少し呆れた表情をしたから、そうなんじゃないかなって当たりをつけたんだ。

「ユーノ、もうご飯食べられるからね」

「すずかちゃん、配膳をちょう手伝ってくれへんかな？」

フエイトがその雰囲気を感じて苦笑しながらそう切り出すと、はやてがすずかを指名して呼び寄せる。アリサはそれに小さくため息を吐いて、僕へと近付いてきた。

「ユーノ、あんたもすずかと同じ事思ったでしょ？」

「うめん……」

「違うのよ。それは……まあ良くはないけど、この際いいわ。ちょ

つと食事が終わつた後にその事に関係する話をしたいのよ」

アリサはそう言うと、視線をなのはへ向けた。それになのはも何を意味するのか気付いたように頷き返した。僕はそんな二人に疑問符を浮かべながら分かつたと返して立ち上がる。

アリサの言っていた話つて何だろうと思いつながら、僕は席に着いてテーブルの上を眺める。そこにあるのははやてが主体となつて作つたのだろう料理の数々があつた。どれも美味しそうで、見てるだけで涎が出そうになる。

「さ、じゃあ食べよか」

全員がテーブルに着き、はやての言葉でその視線が僕へ向く。号令を僕が言う事になつて居るのは、家長としての役割らしい。僕はその視線を受けて手を合わせる。五人もそれに合わせてくれるので、後はこの言葉を言うだけだ。

「いただきます」

「……………いただきます……………」

こうして食べ始める僕達。まずははやてが今日の外出時の事を話題に会話が始まる。僕はそれに相槌を打ちながら食べ進め、なのは達も補足なんかをしながら料理を口に運んでいく。

そうして食事が終わり、後片付けはアリサとフェイトにすずかとする事になった。はやてとなのはは食事を作つたので休んでいてほしいとなつたんだ。僕は家主なので免除された。やるつて言つたんだけど丁重に断られた。

今、僕はアリサ達が後片付けを終えるまでソファに座つて待つて

いた。話があるって言われてるからね。なのは達もどうやらそれを知っているらしく、静かに待っている。実は食事が終わった後から会話がないんだ。その理由もきつとアリサの言っていた話にあると思う。

「お待たせ」

「なのは、ちょっと寄ってもらっていい？」

「いいよ」

するとアリサ達がこちらへやってきた。フェイトがなのはの隣へ座り、さすががはやての隣へ。アリサは僕の向かいの一人掛けの椅子へ座り、話を始める雰囲気は漂った。見ればなのは達の表情も真剣だ。

僕は一体どんな事を言われるのだろうかと内心緊張しながら、アリサが口を開くのを待った。どうもアリサは自分の中で何かを整理しているのか、深呼吸を繰り返していた。そして、何度目かの深呼吸を終えた時、その口から信じられない内容が飛び出した。

アタシ達、結婚式を挙げたいの。

ああ、そんな事か。そんな風に思ったのは少しだけ。よくよく考えて、僕は返事をする事が出来なかった。いや、アリサ達二人については内々に結婚式をする事が決まってるけど、なのは達はまだそんな話をしていない。

そう思っただけで沈黙する僕へ、次に口を開いたのはなのは。表情は真剣そのもので、でも声には不安が見え隠れしていたけどね。

出来れば五人一緒がいいんだけど……駄目かな？

え？ 五人一緒って……本気？！ そう思うも僕は口を開く事はしなかった。まだ話が終わってないと理解したからだ。どうも五人全員が言いたい事があるらしい。何故ならなのはの言葉に驚愕する僕へはやてがこう言ってきたんだ。

方法はあるし、わたし達の意見はもう一致しとるんよ。

家族の事は私達である程度説得出来るから……

後はユーノ次第……なんだ。

次から次と告げられる言葉に僕は理解が追いつかない。そんな僕へ五人はそんな結論へ至った理由を話してくれた。

事実婚しかないと諦めたすかとアリサ。でも、ミッドチルダには重婚が許される場所があると知って、何とかそれを可能としたいと考えた。なのは達も二人だけ式を秘密裏にさせるのは気が引けたらしく、だからこそその事を教えたそうだ。

ベルカ自治区での挙式。古代ベルカ式のそれなら、確かに重婚は出来る。でも、問題だつてない訳じゃない。一番は一夫一妻が原則と考えているすかとアリサの家族達。なのは達の家族もそういう意味じゃ一緒だけど、こつちは魔法を知っている人達だ。

なら、ちゃんと説明すれば理解を得る事は不可能じゃない。でも、二人の家族の場合は魔法を知らないんだ。特にアリサのご両親は本当に一般人。その理解を得るのはかなり難しいはず。

「……分かった。僕はとりあえず五人の家族へ納得してもらえよう、男を見せればいいんだね」

僕はそう決意した。理解を得るだけじゃなく、納得してもらおう
つて。月村家の人達にもバニングス家の人達にも。勿論、高町家や
ハラオウン家に八神家もだ。大仕事でかなり難しいけど、絶対不可
能じゃない。

誠心誠意ぶつかれば、必ず分かってもらえるはず。それに、僕一
人じゃなくて五人も手を貸してくれる。なら、もう敵はないし何も
怖くないさ。僕はそんな気持ちで五人へ告げる。それに五人は苦笑
するも、すぐに嬉しそうに頷き返してくれた。

約束するよ。絶対みんなから祝福される式にしてみせるつて。

そう僕が力強く宣言すると、五人はとびきりの笑顔を見せてくれ
た。僕の心へ大きな勇気と希望を与えてくれるみたい……

予想通り、高町家などの魔法へ理解がある家は何とか理解と納得
を得られた。月村家も夜の一族という特殊性があるためか、思った
よりも苦労しなかった。恭也さんはもうさすがに呆れたようで、僕
が五人と結婚すると言った時には苦笑しながら頑張れとまで言っ
てくれた。

でも、バニングス家はそうもいかない。一番の難問は、説得出来
たとしても魔法の事を教える訳にはいかないのにミッドチルダへ連
れて行かないといけない事。そんな矛盾した問題を解決しなければ
ならないんだ。でも、そこはアリサが思わぬ方法を提案してくれた。

すずかの家にある転送ポートを忍さんが発明した事にして、
ミッドチルダへ連れて行けばいいのよ。

それを聞いたなのは達は揃って苦笑しながら納得していた。どうも忍さんはかなり色々な物を発明していたらしく、その話自体はアリサのご両親も知っているらしい。だから、そう言えば後は何とでも誤魔化せる。そう言い切ったんだ。

僕はそんな簡単にいくのだろうかと不安だったけど、周囲が大丈夫と断言したのでそれを採用する事にした。そんなこんなでやってきたバニングス家。忙しいにも関わらず、僕とアリサのために時間を割いてくれたご両親に感謝し、早速本題へ。

以前と違って、いきなり重婚が出来る国で式を挙げるとの僕らの言葉に、さすがにご両親も言葉が無かった。でも、すぐに怒り出してしまふのではなく、ちゃんとこちらの話を最後まで聞こうとしてくれたのが嬉しかった。

僕とアリサはそうなった経緯と覚悟などを語った。正直納得どころか理解さえ厳しいだろう話。それをご両親は黙って聞いてくれたんだ。そして、全てを話し終えた僕へ、アリサのお父さんが険しい表情で問いかけてきた。

「ユーノ君、君達はそれでいいのかもしれない。だが、私達は親だ。娘が五人の中の一人になると聞いて喜べると思うかね？」

「……確かに仰る通りです。いくら僕らが納得していても、お二人がすんなり納得出来るとは思えません。でも、こればかりは式を許して頂いて、出席して下さいとしか言えません。それでお二人が心から祝えるようにしてみせます」

僕が静かにそう返すと、アリサが何か言いたそうな表情を浮かべる。でも、僕がその手を握ると、それから察してくれたのか黙っていてくれた。アリサが何か言っただけに訴えかけるのは有効だ。それ

でも、僕はそんな事はしたくなかった。

だから、僕は自分の言葉だけで勝負した。親子の情で納得してもらうのではなく、あくまで娘をもらう一人の男の覚悟で納得してもらうために。そんな僕へ今度はアリサのお母さんが尋ねてきた。

「仮に貴方がアリサの事を真剣に愛しているとしてもしょう。でも、人は五人を平等に愛する事が出来る程、器用ではないの。貴方はそれが出来ると言つつもり？」

「お言葉を返すようで申し訳ないですが、本当にそう思っていますか？僕は孤児だったのでつきりとは言えませんが、家族がそうじゃないでしょうか。家族全員を同じように心から大切に思い、愛する事が出来る。それが家族の絆ではないですか？お二人もアリサやお互いの事を同じように愛していると思います。そこに優劣はないはず。なら、それは人数が増えたとしても変わる事はないと考えます」

僕がそう反論するとアリサのお母さんは苦笑した。中々の反論だと思ったんだろうな。でも、僕は別に論破する事を目指している訳じゃない。僕自身の考えを知ってもらいたいんだ。それが気に入らないのであれば、そこでもうこの話は決裂するしかないからね。

そんな風に思っただけでアリサのご両親を見つめていると、いきなりその二人が笑い出した。突然の事に戸惑う僕とアリサへ二人は笑いながら理由を教えてくれた。

実は、もう二人は僕がすずかとアリサの二人と付き合うようになった時から、その行く末を見守るつもりだったらしい。つまり、僕らが重婚するとなった時も本心は好きにしないさいつて思っていたんだ。でも、一応親としてきちんと問い質しておくべきかと思いい、今のようない事を聞いてきたという訳だ。

「中々思い切った決断を下したな、と思っていた。では、これで大手を振ってバージンロードを歩けるのかね？」

「あ、はい。そこは……大丈夫です」

アリサのお父さんの言葉に僕は式の事を思い出して答えた。その横ではアリサとアリサのお母さんが何かを話していた。

「アリサ、これから辛い事が多いでしょうけど、自分の選んだ道をしっかりとユーノ君と歩いていきなさいね」

「ママ……ありがとう」

アリサが涙を浮かべているのを見て、アリサのお母さんは優しく微笑んで頷いた。それを僕とアリサのお父さんは見て、小さく笑みを見せ合う。こうして最後の難関を突破し、僕らはいよいよ最終段階へ向かって動き出したんだ……

住居はやはり月村家と言う形で決着した。そもそもが大きな屋敷だったから、なのはとヴィヴィオにフェイト、はやて達八神家を加えても余裕と言えたんだ。正直ヴィヴィオが学校を卒業するまでは、ミッドと海鳴の二箇所に住居を持つ案も出たんだけど、色々な面で没。

一番の理由はヴィヴィオが月村家での暮らしを賛成したからなんだけどね。だって、小学生が転送ポートから通学するって言うてる

のに、大人達がそれを面倒だと言えるはずはないから。

こうして残った問題は結婚式自体だけになった。ドレスはいいとして、色々と覚えなきゃいけない作法が多いんだ。古代ベルカ式の儀式だからね。でも、すずかもアリサも異文化を知るいい機会だつて楽しんでいた。

招待状を恭也さん達にも配り、僕らは全てをその日に合わせて動いていた。かなりの規模になるけど五家族合同の式だからさ。それは当然というものだし、僕はこれでその五家族が親戚になるって気付いた事に驚きだつたぐらいだ。

「桃、黄、白、紫、赤。こうして考えると凄いなあ」

僕は明日の式で五人が着るドレスの事を思い出してそう呟いた。すると、それを聞いてなのはが笑顔でこう返した。

「だって、魔力光の色でドレスを作るんだもん」

「私は正確には金色だけどね。だからカラフルになるのは仕方ないよ」

「すずかちゃんとアリサちゃんはイメージカラーやしな」

フェイトの言葉にはやてがそう付け加える。そう、五人のドレスの色はそういう理由で決まった。さすがに全員同じは嫌だつてなつて、なのは達で話し合つてそうならしい。僕はどんなドレスでも似合つて思っていたからさ。その話し合いには加われなかった。何でもいいという意見はいらないうて拒否されたんだよ、参加するのをね。で、いよいよ明日が運命の日だ。聖王教会での重婚式。

関係者だけの厳かな式だ。正直何かミスをしないか今から不安だけ

ど、なるようにしかならないって思って無理矢理自分を納得させているんだ。

「でも、何か不思議だね。この五人で同じ人の奥さんになるなんて」「ホントにね。どれだけアタシ達に出会いが無かったのかって話よ」

すずかの言葉に苦笑しながらアリサがそう応じる。それには僕らも同じように苦笑するしかない。紆余曲折あって、今の状態に落ち着くまでに色々あったしね。僕がそんな事を考えていると、なのは達も同じような事を考えたんだろう。その目が少し遠くなっていた。この時間を作るキツカケは願いの宝石、ジュエルシード。全ての始まりにして原因となったそれを僕が発掘した事で、この日々は始まった。それがなければ、僕がなのは達と会う事も、フェイトがなのは達と会う事も、なのは達が魔法を知る事も無かった。

それだけじゃない。闇の書事件があったからこそ、すずかとアリサは魔法を知る事になった。そして、すずかとアリサがあの時無事にすんだのは、なのはとフェイトがいたからだ。全てが繋がって現在を作っている。そう思って、僕は小さく呟いた。

全ての出会いは奇跡だったんだな……それこそが”魔法”なんだ……

なんてね。そんな事を呟き、軽く笑う。すると、僕が笑っているのに気付いたのか、五人の視線が一斉に注がれた。その視線に僕は正直戸惑った。いや、何せ何が面白いのっていう気持ちから視線から伝わったからだ。

面白い訳じゃないし、別に話す程の事でもない。そう思ったけど、五人が聞きたいようだし……軽い話でもするつもりで話そうかな。

僕はそう考えて、笑みと共に語り出す。そこから始まる僕達六人のちよつとした思い出話。

僕となのはが主体となりつつ、時々フェイトやすずかにアリサが加わり、途中からははやても主体になりながらの懐かしい時間。僕ら六人が出会い、共に過ごした時間はほとんどないけど、それでもこうして共有出来るから不思議だよ。

僕が知らない時間もこうして聞けば僕の時間になる。逆に僕しか知らない時間もこうして話せばみんなの時間になるんだ。思い出は作るだけじゃなくて、分かち合う事も出来る。そんな風に感じながら、僕らはこの日遅くまで語り合った。

明日には、親友じゃなくて家族になるんだね。

違うよ、ユーノ君。親友で家族にもなるんだよ。

何か不思議だよ、それ。

せやなあ……まあ、苗字変わらんから余計そう思うのかもしれん。

でも、家族になるんだよね。一気に親戚増えるから大変。

それどころか一緒に暮らす家族も増えるのよ。賑やかなんてもんじゃないわ。

そんな会話をする僕達。でも、表情は揃って笑顔だ。明日への不安なんて忘れるような雰囲気の中、僕は誓った。決してこの時間を壊すものかと。そう一人強く思い、僕は明日の式へ思いを馳せる。いい式にしよう。そう心から思いながら……

厳かな雰囲気にも包まれる式場内。多くの人達が見守る中、僕達は肅々と式を進めていく。重婚式という響きを払拭するようなそれに、誰も言葉がない。下手な結婚式よりも厳粛且つ煌びやかなそれは、きつと見ている人達に色々な感慨を与えるはずだ。

僕はそんな事をどこかで思いながら、式の最後を迎えようとしていた。今、僕の周囲には五人の花嫁がいる。両斜め前になのはとフエイト。その対角線にはすずかとアリサ。そして、僕の背後にはやてがいる。

「それでは、最後に宣誓の儀を行う」

カリムさんの言葉に僕達は少しだけ緊張が増す。これが最後の儀式。言うなれば誓いの言葉だ。でも、これは従来のもとは違い、非常に重いもの。破れば相手を欺いたとされ、殺されても文句は言えないという、実に戦乱の時代の決まりらしいものだ。

勿論、それは現代でも変わらない。なので、この儀式を行う者は中々いなくなつたらしい。つまり、これをするという事は永遠の誓いを文字通り立てる事。自らの命を賭けて愛を貫く行為なんだ。

「高町なのは」

「はい」

「汝はユーノ・スクライアの妻となり、その身命を賭して支える事を誓うか？ 誓うのならば、この刃を以つてその証を立てよ」

カリムさんの言葉になのはは表情を凜々しくすると、手渡されたナイフを掲げてはつきりと告げた。

この命の灯尽きようと、この不屈の心は常に彼とあり。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

なのははそう言い切って、地面へナイフを突き立てた。それは、この誓いを破った際、この刃を持った者が自分を殺す事を許すという意味だ。命を刻むとはそういう事。なのはが終わったのを受け、今度はカリムさんがフェイトへ視線を向ける。

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」

「はい」

「汝はユーノ・スクライアの妻となり、その身命を賭して支える事を誓うか？ 誓うのならば、この刃を以ってその証を立てよ」

フェイトにも同じようにナイフが手渡される。それを受け取り、フェイトも力強く周囲へ告げた。

この身果てるとも、この絆は決して死なずに彼とあり。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

フェイトも宣言と共に地面へナイフを突き立てた。宣言の内容は後半が決まっっていて、前半は個人によって様々だ。一応昔の範例は教えてもらっているけど、別に好きにしてもいいって僕は聞いた。

フェイトの次ははやて。カリムさんから問いかけと共にナイフを手渡されると、よく通る声で告げた。

夜天の主の名にかけて、どんな時も彼と共に生きる。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

はやての言葉にシグナム達がやや息を呑んだのが分かった。魔法の事を知らない人がいるにも関わらず、夜天の主の名を出したからだろう。でも、アリサのご両親はそれを儀式に関する言葉と受け取ったのか、特に何か言う事もなかった。

カリムさんはそれを予想していたのか、表情を少しも変える事なくすずかへ問いかける。すずかもナイフを受け取り、静かにだけどしっかりと告げた。

私の全てを受け入れてくれた彼に、永久の愛を捧げる。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

すずかの言葉の正しい意味は、僕達と月村家の人達しか分からないだろうな。でも、すずからしい誓いだと思う。そして、花嫁の最後を飾るのはアリサ。カリムさんの問いかけと共に渡されたナイフを手に、凜々しい声で告げた。

アタシを、ただのアリサ・バニングスとして見てくれる彼の傍にずっといる。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

アリサの宣言と同時に地面へナイフが突き立てられる。それを見届け、カリムさんが僕へ視線を向けてきた。これが本当の最後だ。そんな雰囲気も周囲にも漂い始める。僕の心臓も鼓動が早くなっていく。

カリムさんはそんな僕へ真剣な表情のまま、問いかけてきた。その声は今まで以上に鋭いものだったと思う。この時の僕は、そんな事に気付く事も出来ずにただ緊張で固まっていたんだ。

「それでは……ユーノ・スクライア、汝に問う。汝はこの者達の誓いを受け、その身命を賭して守る事を誓うか？ 誓うのならば、この刃を以ってその証を立てよ」

カリムさんから渡されたのはナイフではなく、儀礼用の剣。騎士らしい装飾が施された物だ。僕はそれを両手で掲げると、心の底から声を出すように告げた。

全身全霊を賭け、あらゆる災厄から彼女達を守り抜くと共に、必ず幸せにしてみせる。その誓いとして、ここに我が命を刻む！

そう断言し、両手で手にした剣を地面へ突き刺した。それと同時にカリムさんが一際大きな声で告げる。

「ここに誓いは立てられた。この場の者全てが証人となり、この日の事を忘れないだろう。この誓いが永遠に破られる事なき事を切に願う」

そして、式の終わりが告げられると周囲からは一斉にため息が漏れた。やっと終わったとの解放感からくるものだろうな。現に僕達も大きく息を吐いているんだ。いや、やっぱり色々と緊張した。最後の剣を持った時なんかは、正直落とすんじゃないかって思うぐらいに手が震えてたからね。

この後、僕達は周囲の人達から祝福される事になる。それは、本当に夢のような幸せな時間の始まりだった。そう心から誰もが感じられる瞬間だったのだから……

あれから数時間後。僕達は六人でクラナガンのあるホテルの一室にいた。まあ、新婚初夜を過ごすためにつて、それなりに広めの良い部屋をはやてが予約したんだけど、正直それで丁度いいくらいだった。えつとキングサイズぐらいの大きなベッドもあつて、それには結構びっくりした。

今はそのベッドがある場所で談笑中。初夜だからといって、特別何かする訳じゃない。いや、確かにお決まりのイベントはしたいけど、僕はそこまで性欲に正直になれない。それに、今はそれよりも六人で話している方が楽しいってのもある。

「いや、それにしてもユーノ君は中々様になつとつたな」

はやてがそう感心するように言うと、なのは達が一斉に頷いた。えっ？ 僕としてはそこまで決まつたとは思えなかつただけ……？ 何せ、緊張から震えてたんだからさ。でも、そう言つてもなのは達は小さく笑うだけ。僕らしいつてそう言つんだらうね。と思つていたら、予想外の一言。

「だとしても、アタシ達にはかつこよく見えたのよ」

「うん、あの一瞬だけはユーノ君が本当に騎士に見えたんだから」

アリサとなのはの言葉が僕へ強烈な嬉しさと照れくささを与える。そこへ追い撃ちのようにフェイトが笑顔を浮かべてこう言った。

「実際、今の私達にはユーノは騎士みたいなものなんだよ」

「そ、そうかな？」

「そうだね……確かに優しくて頼りになるけど、少しだけ情けないところがあるもんね、ユーノ君って」

うっ、すずかの的確な評価が胸に痛い。でも、僕が軽く呻いた瞬間、五人が互いに視線を交差させてこう口を揃えて言い切った。

でも、そんなユーノ（君）が好きだから。

……うん、僕はもう死んでもいい。今、死ねたらある意味一番幸せなままで逝けるんじゃないかな。そんな事を考えるも、口には出さない。いや、だって出したら何を言われるか分かるからさ。なので、これは胸の内にとまっておこう。

そんな事を考えていると、五人が一齐に視線をある一点へ向けた。僕もそれにつられるように視線を動かす。そこには時計があった。時刻はもうすぐ日付が変わる五分前。

「そろそろ時間も時間やし、みんなでお風呂入るか」

「そうね。さつき見たけど広いバスルームだったし」

「はやてちゃんらしいよね。まさか私達の胸を触るつもり？」

「はやてならありそうです」

「にゃはは、それはちょっと勘弁してね」

五人が仲良く話しながら立ち上がる。僕はそれを見送って、一人で軽く読書でもしよう。そう思って、五人へ笑顔で声をかけた。

「じゃ、じゅっくり」

でも、そう言った瞬間、はやてが不敵な笑みを返してきた。あれ？ 何だろう。この嬉しいようで怖いような感じは。まるで天国のような地獄の入口へ立っているような感覚がする。と、そんな僕へ五人がそれぞれに頬を赤く染めながら上目遣いで見つめてきた。

「えっと……ユーノ君？」

「……何？」

なのはの声が妙に艶っぽく感じる。可愛いけど色っぽい。そんな声に僕の理性がいきなり警報を鳴らす。

「ユーノは、今夜がどういう時間か分かってるよね？」

「……う、うん」

フェイトの声も同様だ。警報がけたたましく鳴り響く。僕の頭の中限定で。

「なら分かって欲しいなあ。わたし達が言いたい事」

「でも……その……」

はやての表情が少し照れている。声も恥ずかしさが混じっているから、余計可愛い。あ、警報が止まった。

「大丈夫だよ、ユーノ君。恥ずかしいのは……最初だけだから」

「さすが……それは何か別の意味に聞こえるよ」

すずかの告げた内容に僕はすぐにいかかわしい方向を浮かべてしまった。でも、もう警報は鳴っていない。つまり、僕は理性を失う危険を乗り越えたんだ。

「と、とにかく！ 一緒に入るわよ、ユーノ！」

「りよ、了解……」

アリスが顔を真っ赤にして告げた言葉に僕は素直に頷いた。あれ？ 何か間違ってるような……？ と、そんな事を考えて足を止める僕へ、とどめとばかりに五人が揃って呼びかけてきた。

「……あなた、早く」「……」

「え？ あ、う、うん」

こうして僕は五人に連れられるまま、バスルームへ向かった。うん、もうここから先は言うまでもないよね。僕はもう夢のような時間を過ごさせてもらったよ。それこそ人生の運をここで使い切ったんじゃないかって本気で思うぐらい。

でも、それが終わりじゃなくて始まりだったと改めて気付かされたのは、その後。五人に先に出されたので、一人汗を拭き終えたからベッドに横になっていると……そこで僕はもう思考能力を捨てた。

翌日、僕達六人はお昼近くまで眠った事だけ記しておく。あ、それともう一つ。天国と地獄は紙一重だつてよく分かった事も記す。でも、まあ……それでも幸せだからいいけどね！

エリオが進路に迷っているらしい

「どうしよう……」

僕は今悩んでいた。原因は六課解散後の進路だ。キャロからは一緒に自然保護隊へ行かないかと誘われてる。凄く嬉しかったけど、一応保留にさせてもらった。すぐに答えるには、問題が大きかったからだ。

それに、理由はまだある。シグナムさんからは武装隊に来る気はないかって誘われてる。僕には飛行魔法の適性がないけど、ストラダを使つての限定的空戦が可能だ。だから、その気になれば十分通用するだろうって。

そして、もう一つはスバルさんやティアアさんを見て思った事。そう、他の陸士隊へ入って経験を積む道だ。スバルさんもティアアさんもそれぞれの道を歩き出しているけど、原点は陸士隊での日々にあるってというのは、今まで聞いてきた話で知っている。

そうなんだ。四人の中で僕一人だけ道が決まってないんだ。それは局員としての夢がないからなんだけど、だからって局員を辞めて今更学校に行くのは違う気がする。……フェイトさんはそれを薦めてきそうだけど。

「……やっぱりティアアさん達に相談をしよう」

結局僕に出せたのはそんなありきたりの結論だった。そう決断して、僕はベッドへ横になった。明日の休憩時間にも早速実行に移そうと思いつながら……

「進路相談？」

「はい……」

僕の切り出しにスバルさんとティアさんが揃って同じ声を出した。こんなところまで息ぴったりなんだなあ。そんな事を思いつつ、お二人の言葉を待つ。スバルさんとティアさんは互いに視線を交わすと、同時に僕へ視線を戻してこう言った。

「エリオは夢とかないの？」

「もしくは目標でもいいわ」

「……夢……目標……」

お二人の言葉に僕は改めて自分が意外と単純だった事を思い出させられた。フェイトさんの手伝いがしたい。その一心で局員になったんだ。つまり、僕の夢も目標も現時点で叶ってしまっている。そう気付いて、僕は答えを待っているお二人へ申し訳なく思いながらも、そう告げた。

すると、スバルさんは苦笑して、ティアさんは呆れ笑い。あれ？その反応はつまり僕らしいって思ったって事ですか？僕がやや戸惑いながら見つめるとまずはスバルさんが笑顔で口を開いた。

「つまり、今のエリオは新しい夢や目標がないんだね」

「新しい、夢……」

「フェイトさんを助けたいって夢がそのまま目標だった。で、それが六課に来た事で叶っちゃった。だから、今のエリオは満足してるんだよ」

スバルさんの指摘に僕は納得した。満足してるって表現が的確だっと思ってたから。そうか。僕は現状こそがベストの状態だったんだ。そんな風に僕が軽い感心をしていると、ティアさんが苦笑してこう続けた。

「だから、あんたはこのままでいいの。でも、それが出来ない。あんたが迷ってるのはそのせいよ。満足出来る場所に居続けたいんでしょね」

「……僕は自分で道を決めたつもりで、結局フェイトさんを頼ってたんでしょか？」

ティアさんの結論に僕は返す言葉がそれしかなかった。自分の主体で決めたと思っていた道。それが結局フェイトさんがいなければ決められなかった。そんな風に感じたからだ。でも、そんな僕にお二人は一瞬だけ息を呑むと、すぐに小さく微笑んでこう言ってくれた。

「そんな事ないよ。今のエリオの道は、ちゃんと自分で決めた道」

「フェイトさんは理由の一つね。だって、局員になる以外の方法でもフェイトさんを助ける事は出来たはずよ」

「スバルさん……ティアさん……」

目頭が熱くなる。僕の不安をお二人は優しく否定してくれた。それが嬉しくてじわりと涙が出そうになる。そんな僕に気付いて、スバルさんとティアさんが一際優しい顔を見せてくれた。

「まあ……私の場合と似てる部分もあるから分かるんだけど、今のエリオにはフェイトさんの助けになりたい以外の気持ちはない？」

フェイトさんを助けたい以外の……気持ち。僕はその言葉に六課に来てからの日々を思い出す。レリック事件の中で出会った人達。経験した多くの思い。そうだ……確かに僕にはある。フェイトさんの助けになる以外の思いが！ 僕だけの思いが！

「その顔だとあるみたいね。なら、もう答えは出せるでしょ。新しい自分の道、歩き出しなさい」

「はいっ！ スバルさん！ ティアさん！ 話を聞いてくれてありがとうございますっ！」

僕が大声でそう言うと、お二人は揃って照れくさそうに笑っていた。大した事はしてないから。そんな答えまで揃って返してくれてこうして僕は進路を決める事が出来た。自分だけの道。僕だけしかない思いを叶えるための道を。

そう決意を新たにして、僕は自室へと戻って歩き出した。背中にスバルさんとティアさんの視線を感じながら……

エリオが凜々しい顔で去って行くのを見送って、私は小さくため

息を吐いた。正直エリオがあんな顔するとは思わなかったんだよね。今にも崩れそうな顔。自分の決断がどこかで人に頼っていたんじゃないかって、そう思っただけで愕然となった表情を。

それを見た瞬間、私の中で何かが叫んだ。その考えを否定してやれって。だって、それは私がなのはさんに憧れて局員を目指した事までそうだって言うような気がしたから。

「エリオ、泣きそうだったね」

「……そうね。まさかあの子にあんな脆い面があるとは思わなかったわ」

ティアの言葉に私も同意する。エリオって、歳の割りに結構しっかりしてるイメージが強かったからね。でも、やっぱりまだ十歳の男の子なんだ。と、思うのと同時に思い出す事があった。あの涙目になった瞬間、私はエリオを見て胸がキュンってしたんだよね。

ティアはどうなんだろ？ そう思って聞いてみる。

「……実は、エリオが涙目になった時、ちょっと抱きしめたくなくなっちゃった」

「……まあ気持ちは分からないでもないわよ。助けを求める子犬みたいな雰囲気あったし」

「ティアもそう感じた？ 私もそんな感じがしてさ」

そっか、ティアも同じ気持ちになったんだね。でも、弟がいたらあんな感じなのかな？ 私は妹だから分からないんだよねえ。今度冗談でエリオの事を弟みたいに接してみようかな。抱きしめたりしたらやっぱり驚くよね。海鳴と一緒に風呂に入ったのに、エリオは

未だにそういう事に恥ずかしさを覚えるみたいで、中々スキンシップが取れないんだよね。

そんな事を考えてると、ティアがジト目の視線を私へ向けてきた。

「あんだ、エリオに変な事すんじゃないわよ」

「変な事なんてしないよ。ただ、ちょっと弟みたいに可愛がろうかなって……」

「それが変な事なの！ あの子はもう男としての自覚ありなんだから」

「え〜っ」

別にいいじゃん。そう言おうとしたけど、ティアの目が一段と鋭くなった気がしたのでやめる。実はティアとエリオは結構仲がいい。私とも接近戦コンビとして仲がいいけど、ティアとは作戦立案とその補佐役として関係が深いんだよね。

そのためか、ティアはエリオの事を結構気にかけてる。何せパートナーのキャラロがかなり天然さんで、女の子にも関わらずエリオと一緒に寝たがったり、お風呂にも入りたがったるするんだよね。その悩みをティアがよく聞いてあげてるのを見た事がある。

「そつえばティアって、エリオのお姉さんみたいだよ」

「はあ！？」

私がそう言うとティアが何言ってるのって顔でこっちを見た。でも、私の思った事って結構当たってると思うんだよね。なので、そ

の理由を挙げていく。

「だって、よく相談乗ったりしてるし……」

「あれはエリオがアタシに言ってくるからよ」

あ、そうなんだ。何で私には言っておかないんだろう……？ もしかして私ってそういう面では頼りないって思われてる？ そう思っ
て少し凹みつつ、次の理由を言う。

「訓練中も話す事多いし……」

「あ、あれはエリオのポジションが作戦上は重要になる部分が多いからよ」

そうかもしれないけど、なら終わった後にするのはどうなの？
そう思うけど、敢えて聞かない。ティアの顔が少しだけ赤くなっ
てる気がしたからだ。なので、次の理由を告げる。

「エリオの好みも詳しいし……」

「あ、あれは……チームを組むんだからお互いの事を知っておいて
損はないからよっ！」

その答えから完全にティアが怒る前兆を感じ取って、私は次の理
由を挙げる事を止めた。あ、ティアが照れてる。認めなよ、自分が
エリオのお姉さん役してるって。そう私は心の中で呟く。でも、テ
ィアは私の顔を見て何かを悟ったのか怖い顔をした。

……何だろ。嫌な予感がする。というか、嫌な予感しかしない。
そう思ったので、私はティアが何か言い出す前に急いで逃げ出す事

にした。後ろから聞こえるティアの怒鳴り声を背に受け、私は一目散に部屋へと戻る。結局後でティアが来るって事を忘れて……

「……ったく、スバルの奴は」

誰もいなくなつた休憩室で、アタシは一人そう呟いた。いきなりエリオのお姉さんみたいと言われ、何を馬鹿な事言つてんだろって思つていられたのは少しの間。あいつの拳げていく理由を聞く内に、自分でもそうかもしれないと思つてしまつたのだ。

別にエリオを特別視した訳じゃない。キャラの事だつて結構聞いたし、知っている。スバルに関しては……思い出すのも馬鹿馬鹿しい。だからエリオの事を詳しく知っている事は別に变じゃない。でも、確かにスバルの言う通り若干気にしているのは事実だつた。

エリオはフォワード四人の中で唯一男だ。だから、きつと色々と相談出来る相手がいないだろうって、最初は思った。同僚になら男性はいる。でも、それは先輩で年上ばかり。同年代はいないし、同期さえいない。

そんな中で真面目なあの子が自分の悩みを相談しに行く訳がない。まあ、今は大分変わってきたのか、自分からそういう弱さを見せるようになったけど。とにかく、最初の頃のあの子じゃそれが出来なかつた。

「周囲に負けるものかつて、必死だつたもんね」

アタシも同じようなものだつたから分かる。エリオは唯一の男と

して、精一杯虚勢を張っていた部分もあったらうって。歳の割りにしつかりしていたのも、キャラがいたから。キャラが弱気な分、自分が強気で支えようとしていたんだと思う。

あの頃のアタシは自分が取り立てて才能がないって焦ってたから、そんなエリオに気付けなかった。それどころか、もう少しぐらい子供らしい部分を見せなさいって思ってたわ……

「……弟、か」

スバルの言っていた言葉を思い出す。アタシは妹。お兄ちゃんとの思い出は残ってるけど、今はそれよりも一人でいた時間の方が多くなってしまった。そんな事を思い出し、小さく苦笑。エリオが弟だったら、アタシはどうしていただらうって、そんなバカな事を考えてしまったからだ。

きっと執務官になるって思うよりも先に、今度はアタシがエリオを育てるんだって、そんな事を考えただろうな。進路も局員は局員でも、最初から陸士を選んだらうし、ランクを上げる事よりもエリオと過ごせる時間を優先……

「って、アタシは何を考えてんのよ」

バカらし。そう思ってアタシも部屋に戻るべく立ち上がる。大体歳が離れてるんだから有り得ない。そんな見当はずれの突っ込みを自分にしつつ、アタシは部屋へと向かって歩き出す。

と、そこでアタシは足を止めた。キャラから聞いた事を思い出したからだ。エリオへ自分と一緒にスプールスへ来ないかと誘ったとの話を。それをあの子は即答出来なかった。いつかエリオ自身さえ、自分とキャラはコンビで一人前だと言う程の関係にも関わらずだ。

「……あの子、てつきりキャロが好きだと思つてたのに」

歳も同じで境遇も似ている二人。だからアタシは勝手にそう思つていたんだけど、違うのかしら。まあ、好きだったとしても進路を一緒にするとは限らないか。そう納得させて、アタシは歩みを再開する。

さて、部屋に戻ったらバカスバルを軽くつつちめてやりますか。そんな事を考えながら、アタシは一人密かに笑う。そろそろ油断し切っているだろう相棒の事をどうしてやろうと思ひながら……

「エリオ君、どうするんだろう……」

「キユク？」

私の呟きにフリードが小さく声を返してきた。別に聞かせるつもりはなかったけど、その反応がちょっとだけ嬉しくて、私は何でもないよって返してその頭を優しく撫でた。フリードがそれに気持ちよさそうな声を出したので、私はおやすみって声を掛ける。

そして、心の中で考え始めた。エリオ君の事を。本当はすぐに返事をくれるって思ってた。六課解散後の進路を二人で話し合った時、エリオ君も私も一緒にいる方が上手くいってるし、フェイトさん達もコンビとしてかなりのものがあるからって、そう言われてたから。

でも、エリオ君は私が誘った時、嬉しいけど少し考えさせて欲しいって返ってきて、正直困惑した。その時は何とか普段通りに、じやあお返事待ってるねって、そう返せたけど……

「本当は……凄く悲しかったんだよ？」

フリードが眠ったのを確認して、私は小さく呟いた。スプールスでの日々は、とても楽しくて充実した時間だった。元々六課が解散した後はそれへ戻る事は決めてたから、私はそこまで進路を考える必要はなかった。

ティアさんは執務官を、スバルさんはレスキューを、それぞれ目指してる。エリオ君だけがそういうものがない。私と違って、フェイトさんを助けたいってだけで管理局に入ったもんね。だから、六課以外の場所を知らないし、六課以外に行きたい場所がないんだ。

だから余計に私と一緒に来てくれるんじゃないかなって、そう思った。私は、出来るならエリオ君とずっと一緒にいたいって、そう思ってるんだ。小さくても優しい槍騎士。私と支え合って頑張ってくれた頼もしい男の子。

最近、エリオ君と二人でいると胸がドキドキする事が多い。不思議に思っただけでシャマル先生に病気ですかっただけで聞いたら、どうしてか楽しそうに笑って確かに病気だと言われた。

でもね、キャラの病気はキャラ自身しか治せないの。

最後にはそう言われて励まされた。でも、死んだりする病気じゃなくて、今の症状が酷くなるくらいだって言われた。病名は教えてくれなかったけど、その内分かるだろうからって笑顔で断言されたんだよね。

エリオ君と二人でいる時だけなる症状。特にエリオ君が笑ってくるとそれが起き易い。自分でも軽く調べてみたけど、そんな病気は載ってなかった。フェイトさんに相談してみようかな？ それともスバルさんかティアさんがいいかな？

エリオ君には言わない方がいい気がした。心配させちゃうだろうし、自分が原因だって思われて距離を取られる方がもっと辛い。エリオ君の悲しむ顔なんて見たくないから。あ……そんなエリオ君を想像したら、胸が苦しくなってきた。

これも症状の一つなのかな？ やっぱリシャル先生に教えてもらおう。せめて病名だけでも分かれば安心出来るだろうしね。そう決意して、私もフリードと同じように寝る事にした。あ、そうだ。寝る前にいつもの言葉を言っておこう。

「明日もいい日になりますように……」

そう呟いて目を閉じる。思い浮かべるのは今日の事。今日も色々な事があったけど、そんな時間ももう終わりが近い。そう思いながら、私は徐々に意識が薄れていくのを感じていた。今日は夢を見れるかな？ 出来れば楽しい夢がいいなあ……

- - -
- - -
- - -

エリオ編序章？ とりあえずはフォワードメンバーのエリオへの思いから。エリオの選択肢は次回ではなく次々回で。

ルーテシアはおそらく次回で登場。エリオって、スバル、ティアナ、キャラ、ルーテシアぐらいしか思い付かないのでその四人でいきます。

……シグナムなども無い事は無いのですが、自分としては無いのでごめんなさい。

エリオの周囲で変化が起きているらしい

最近ちょっとおかしい。何がって言われると少し言い辛いんだけど、スバルさんとティアさんの雰囲気とキャラの距離感だ。

「エリオ君、お疲れ様」

「うん、キャラもお疲れ様」

今も訓練が終わって、軽く汗を流しに行こうってなる流れなんだけど、キャラは僕の手をしっかりと掴んでいる。別に嫌じゃないけど、このところ急なんだ。そう、丁度僕がスバルさんとティアさんに相談した翌日、シヤマル先生にキャラが何か相談した時から。

それだけなら別にいいんだけど、困ったのはこれを見ると絶対にある人まで僕と手を繋ごうってしてくるんだ。いや、嬉しいけど若干そこから過剰な気が事になるから困惑するのも事実なんだ。

「あ、また手繋いでる。仲がいいね」

「はいっ!」

「あの……言いながらスバルさんも手を繋ごうとしてませんか?」

「え? だって私とも仲良くして欲しいもん」

そう、スバルさんがキャラの行動を見て楽しそうに僕を軽くからかってくるんだ。フェイトさん達は完全に年上で、言い方は問題かもしれないけど親のように思う事が出来る。でも、スバルさんはどう頑張ってもお姉さんでしかない。

つまり、僕はスバルさんを恋愛対象みたいに思ってしまった時がある。だって、スバルさんは可愛い人だし、僕に対して結構気さくに接してくれる。正直ドキッとすることだつてない訳じゃない。

「こらスバル。エリオを困らせるなつて何回言わせたら気がすむのよ」

「いいじゃん。あ、何ならティアが繋ぐ？」

僕がこうなるとティアさんがこうやって助けようとしてくれる。でも何故かスバルさんにこんな返しをされると、ティアさんはやや戸惑った表情を見せて僕へ視線を向けてくるんだ。

僕は正直キヤロと繋ぐのもスバルさんと繋ぐのも一緒だと思ってる。なので、ティアさんに対しても同じようにしか思つてない。そう何度も言つたんだけど、それでもティアさんは僕の事をちゃんとした男として扱ってくれるみたいで、そういう事は恋人としかしないって言い張つてるんだ。スバルさんはそれを知つててこう言ってる訳。

「繋がらないわよ。言つてるでしょ。そういう事をする異性は恋人じゃないって」

「ティアの恋人かあ……いつ出来るんだろうね？」

「あんだ、いい度胸してるじゃない。その言葉、そっくりそのまま返してあげるわ」

ティアさんの軽い怒りの言葉。それにスバルさんが苦笑して終わる。そんな風に僕は思っていた。でも、そこで意外な答えが返ってきた事に、ティアさんだけじゃなくて僕とキヤロも驚く事になる。

だって、スバルさんはそれに笑顔でこう返したから。

大丈夫だよ。私にはエリオがいるから。

その瞬間、僕らの動きが見事に止まった。スバルさんだけはそんな僕らにしてやったり顔。あ、そうか。今のは軽い冗談なんです。僕がそう判断すると同時にティアさんもその結論に達したみたいで、小さくため息を吐いていた。

ただキャラだけがその言葉に違う反応を示した。どこか不安そうな表情を浮かべたんだ。そして、スバルさんが言いながら僕の手を掴もうとしたのを見て、少し慌てたように僕を引っ張った。おかげで僕がキャラの方へ寄りかかるように動いて、スバルさんの手が空を掴んだ。

「あれ？」

「え、エリオ君！ 早く汗流しに行こ！」

「あ、そうだね。時間も惜しいし……」

キャラの突然の行動に戸惑いながら、僕はその言葉に同意する。ティアさんはそんなキャラの反応を見て苦笑しているし、スバルさんは自分が空振りしたのを見て苦笑していた。

キャラに引っ張られる形になりながらも、僕は歩き出して後ろのスバルさんとティアさんへ声を掛ける。お二人も早くって。それにお二人も頷いて、軽く駆け足で僕らを追い駆けてくる。こんな四人で過ごす時間ももう残り僅か。六課解散の日は、刻一刻と近付いている。

「そういえば、今度のお休みはルーテシアに会いに行くんだっけ？」

「はい、ルーの見送りです」

「無理言ってお休みにしてもらいました。どうしてもルーちゃんをお見送りしたかったから」

「そっか。最後に……なるんだっけ」

ティアさんが言った言葉にキャラ口は首を横に振った。キャラも僕と同じ気持ちなんだろう。なので、僕が言葉を以ってその気持ちを告げる。

しばらく会えなくなるだけです。決して最後じゃありません。最後になんて……させませんから。

そっだ。ルーは僕とキャラ口へこう言ってくれた。友達になってくれてありがとっつて。なら、その絆を断ち切らせない。僕は少なくともそう思ってる。だからティアさんの言葉は絶対に否定しなきゃいけない。

僕のそんな気持ちが伝わったんだろうか。ティアさんは少し申し訳なさそうに頬を掻いて謝ってくれた。軽率だったって。でも、僕はティアさんを怒ってはいない。それに、そう言ってくれるだけで満足ですよ。

「気にしないでください。僕こそ少し熱くなりました」

「そう言ってくれると助かるわ。ま、じゃあしっかり見送ってきなさいよ」

「はいっ……」

ティアさんの言葉に僕とキャロの声が重なった。それにティアさんとスバルさんが笑顔で頷く。こんな時間が凄く嬉しくて、でも同時に寂しくなる瞬間でもある。六課の終わりがこの時間の終わり。そんな事を強く僕へ意識させるから。

でも、もう迷わない。僕は決めた。自分だけの道を。あの日気付いた思い。それを貫ける道に行く。そう心に誓ったのだから……

「じゃあ……ルー、体に気をつけて」

「絶対、会いに行くからっ！」

「うん。エリオもキャロも元気で」

場所はミッドチルダの転送ポート。ルーの後ろには車椅子に座った女性がいる。それがルーのお母さん。メガー又さんだ。少し話した感じは穏やかな雰囲気の人だなって思った。スバルさんのお母さんの同僚で親友。そのため、スバルさんも一度会って話を聞いてみたいって言った。

スバルさんのお母さんが社員としてどんな風に働いていたのか。それをまったく知らないから聞いてみたいらしい。なので、僕がそんな事を教えるとメガー又さんは少しだけ苦笑して、機会があれば是非会いに来てって伝えて欲しいと答えてくれた。

今、僕らはルーとのお別れをしていた。边境世界隔離。ルーの処分は思っていた以上に重い内容だった。これでも軽くなった方だと、

フエイトさんから聞いた。母親のためにと犯罪に手を染めた。そこが若干考慮されたけど、やはり自分でも悪い事と知りながらやっていたのが悪い方向に効いたらしい。

本人が罪を認めた事もあって、比較的温情を受ける結果になったけど、それでも辺境に隔離されて魔力まで嚴重にリミッターをかけられるんだ。正直僕は何も出来ない事が悔しいくらいだよ。

「僕は待つてるよ。ルーがまた自由になれる日を。その時には、ベルカの槍騎士としてあの人に近い姿になってるから」

「……うん、エリオならなれるって信じてる」

僕がそんな自分への無力さを噛み締めながら告げた言葉に、ルーは少し目を潤ませて頷いてくれた。ルーを守っていたベルカの騎士。僕は一度として槍を交える事が出来なかったけど、その強さと気高さは聞いている。

ルーの父親のようでもあった人。ゼスト・グランガイツ。僕はその人を目標にしようと思った。夢はそれとは違う。そう、目標と夢を別にした。目標はなりたい自分。夢は実現したいもの。そう決めたんだ。

そこからしばらく見つめ合う僕とルー。ちょっと気恥ずかしいけど、ここで目を逸らしたら騎士らしくない。そう思ってたルーを見つめ続ける。段々ルーの顔が赤くなる。同時に僕も赤くなる。と、そこでキャラ口が割って入るように声を発した。

「えっと、あの……ルーちゃん、お母さんが呼んでるよ」

「あ……そ、そうだね。じゃあ……エリオ、キャラ口、またね」

「うん。またね、ルー」

「お手紙、書くから」

離れていくルーを僕は手を振って見送る。ルーも何度もこつちへ手を振り返してくれた。でも段々その背中が遠くなっていく。やがてそれが完全に見えなくなったのを合図に、僕らも帰るべく歩き出した。キャラは当然のように僕の手を握っている。

そういえば、ルーがそれを見てどこか羨ましそうな目をしてたっけ。今度機会があつたらキャラに、僕じゃなくてルーと手を繋いであげてって言おう。そんな事を考えながら、僕は歩く。でも、僕は一度だけ後ろを振り向いた。そこには当然誰もいない。そんな誰もいない方向へ小さく呟いた。

絶対、約束は果たすからね……ルー。

「ルー、テシアはいいお友達を持ったわね」

「……うん」

お母さんの言葉に私は噛み締めるように頷いた。初めて会った時は邪魔な相手としか思わなかった。でも、エリオとキャラは違った。酷い事をした私を助けたと思ってくれた。ガリユー達も止めてくれたし、クアットロに操られた私の事も止めてくれた。

それだけじゃない。施設に入った私に頻繁に会いに来てくれた。優しくしてくれた。友達に……なってくれた。初めて得た友達。エ

リオもキャラも私に近い境遇だったって知ったのは、その時。

あの時のルーを見てこう思うんだ。僕らも一つ間違ったら同じような事になったんじゃないかって。

だから、ルーちゃんが他人に思えないの。同情とかじゃなくて、共感出来る部分が多いから。

……そうなんだ。じゃ、私達って似た者同士だね。

クアットロがいつか私にエリオとキャラを指して言った”兄妹仲良く”って言葉。あれは間違ってた。でも、それは本当の意味でじゃなくて、概念的なもの。親と離されて、孤独に怯えていた時がある。そこへ手を差し伸べてくれた優しい大人がいた。私はゼスト。エリオとキャラにはフェイトさん。

そんな背景が私達にはある。だから、エリオとキャラは私から見てもある意味兄妹。今はそこに自分も加わっている。そう考えると……不思議。心が弾む。もう一人じゃないって、そう強く思える。

私がそんな事を考えていると、お母さんが小さく笑った。どうしたんだろ？ そう思ってお母さんに視線を向けると、その笑顔が深くなった。

「何か嬉しい事でも思い出したの？ 今、とてもいい笑顔よ」

「とても……いい笑顔？」

「ええ。そうね……言つなれば輝いてるの。母親の私から見ると、世界で一番可愛いつて断言出来るぐらいにね」

お母さんはそう言って微笑んでくれた。それだけで私は嬉しくなる。実感出来るんだ。お母さんが一緒にいるんだって。あの見上げるだけしかなかった頃とは違う関係。本当を言えば、ここにアギトやゼストもいて欲しかった。でも、それは無理だから。

アギトはゼストの薦めもあつてシグナムさんをロードに選んだ。そしてゼストは騎士の誇りを抱いたまま、その最後を同じ騎士に看取られて眠った。最後の最後にゼストは聞きたかった事を聞けたのが気になったけど、私は敢えて聞かなかった。

ゼストが最後に満足して眠ったのなら、きっと聞けたんだって思ったからだ。そう思い続けていたいから、私はアギトに聞かなかった。ゼスト、いつか行けるようになったら必ずお墓参りに行くね。

あ、そうだ。お母さんに聞きたい事があつたんだ。エリオとキヤロがお見送りに来てくれた時からずっと手を繋いでた事。それを見ると、どうしてか胸が苦しかった。最初はお別れするからかなくて思ったんだけど、どうも違つて気付いたのは最後エリオと見詰め合った時。

「お母さん……私、エリオとキヤロが手を繋いでるのを見てずっと胸が苦しかったの」

「そうなの？」

「うん。それで、最後にエリオと約束した時にちよつとだけ見詰め合ったんだけど、その時の苦しくなった感じが違ったの。どうして？」

私がそう言うとお母さんは一瞬驚いた顔をした。でも、すぐに小さく笑つてこつ言つてくれた。

ルーテシアはもう女の子として成長を始めてるのね。

正直意味が分からなかった。成長……？ 胸が苦しくなる事が成長なのかな？ そう思ってた私は自分の胸を見る。……うん、見事なまでに真つ平ら。全然成長している感じはない。一応両手で触ってみる。やっぱり少しも変わってない。

私がそんな事していると、お母さんがそれを見て声を出して笑った。何だろう？ 軽く馬鹿にされた感じがする。でも、お母さんだからそんな事はないか。そう思ってお母さんの言葉を待つ。

「ふふっ……あのね、ルーテシア。きっと貴方は恋をしてるの」

「恋……？」

「初恋、かしらね？ 相手は初めてのボーイフレンドでガリユーと互角に渡り合った槍騎士。うん、見事に王子様」

「王子様……エリオは白馬に乗ってないよ？」

私がそう言うとお母さんはまた声を出して笑った。だって、私がドクターの所で読んだ本に出てくる王子様は大抵白い馬に乗ってたから。そう言うとお母さんはもっと楽しそうに笑った。よく分からないけど、お母さんが楽しそうだからいいか。

私がそう思ってた歩いている横でお母さんが小さくこう呟いた。どこか楽しそうだけど、同情するような声で。相手はエリオかキャラオか分からない。でも、そのどちらかだろうって、私はそう思った。

これは大変でしょうね、あの子。

何だろう？ 今、一瞬だけ背中に暖かいものを感じた気がする。
気のせいかな……？

「エリオ君、進路は決まったの？」

「あ、うん。もう答えは出したから」

「そっか」

僕がはつきり言い切るとキャラが嬉しそうに笑った。やっぱりキャラは笑顔が似合う。ううん、誰だって笑顔が一番だ。僕はそう思い直して小さく頷く。明日フェイトさんへ僕の決断を聞いてもらう。そして、僕の道を歩き出そう。

今も確かに僕の道。でも、これから行く道はフェイトさんが前にいない道。誰もいない僕だけの道。そういえば誰かがこんな事を言っていた。自分の前に道はなく、自分の後ろに道があるって。

……うん、作ってみせよう、僕だけの道。厳しくても辛くても負けないで前に進みながら。そこでふと気付く。僕の手を握るキャラの手に。それを思い出して、僕は小さく笑う。きつと僕はこの温もりを忘れない。これがあるからずっと前に進み続ける事が出来るはずだって。

「ありがとう、キャラ」

「え？ 私、何もしてないけど？」

「あはは、そうだね。キャラはそついう子だった」

「もう、意味が分からないよ。ちゃんと説明して、エリオ君」

僕の突然の感謝の言葉とその後の言葉。それにキャラが軽く困惑しながら僕へ迫る。それに僕は答える事はしない。恥ずかしいからでも、その代わりにこう返す。キャラと会えて良かったって。

それにキャラが顔を赤くする。照れてるんだね。僕はそんなキャラに笑いかける。それでもっとキャラが赤くなっていく。本当にキャラは素直な反応をするよ。僕も多分顔が赤いだろうけど。

そんな事を考えながら僕は思う。キャラだけじゃない。スバルさんやティアさん、ルーにも会えて良かったって。六課に来て、本当に良かった。そう心から思うんだ。悲しかった事もあったけど、全て含めて僕の現在に繋がっているから。

この一年で得るものはきっと将来の大きな財産になる。これからの僕を支える基盤になってくれる。局員としてだけじゃなく、人として僕を成長させてくれた時間。そう胸を張って言えるはずだ。

「いつかルーと三人でどこかに遊びに行きたいね」

「話を逸らさないで欲しいんだけどなあ。でも、私もそれは賛成。早く出来るといいな」

「出来るさ。僕らが休みを取って、ルーに会いに行けばいいんだから」

「そっか。そうだね」

そんな会話をしながら僕らは歩く。ふと見上げれば、そこには目

エリオはスバルとある約束をしたらしい

フエイトさんは僕の告げた進路に納得の笑みを浮かべていた。結局僕が選んだのはキャロと共に自然保護隊に行く事だ。でも、そこへ居続ける訳じゃない。そこで自分を磨いて、少なくとも数年後にはミッドの陸士隊へ異動するつもりだ。

僕の夢。それは地上の平和に少しでも貢献する事。自分はそのための力になる。レジアス中将が取った手段はさすがに急ぎすぎた気もするけど、言っていた事は間違っていない。もしもつと地上が平和だったのなら、JS事件は別の結末を迎えていたはずなんだ。

そう思ったからこそ、僕は決意した。待遇にこだわらず、手の届く範囲の人達を守る事を。そしてその気持ちと同じくしてくれる人を増やす事を。そう、空にはなのはさんが所属する戦技教導隊がある。なら、僕は陸の教導隊を目指そうって思ったんだ。

未だにそういう部隊がないのは、どこかで陸士が軽視されてるからじゃないのかなって、そう思った。だからいつか僕がそれを立ち上げたい。空を飛べなくても、空を翔ける事が出来なくても、そこへ届く事が出来るように。陸を制する事と空を制する事は両立出来るって僕は信じたいから。

「……じゃ、キャロの所属してた部隊へ打診しておくから」

「はい、お願いします」

「うん。エリオ、これだけは覚えておいて。どんな選択も自分で決める事。例え、どう選んでも辛い結末しかないとしても」

「……………分かりました。絶対忘れません」

フェイトさんの言葉を、僕は胸に刻みつけるように小さく呟いて頷いた。それにフェイトさんは嬉しそうに頷いてくれた。こうして僕の進路は決まった。キャラがそれを聞いて喜んでくれたのは言うまでもなかった……

「それで……結局キャラと一緒に行くんだ？」

「はい」

スバルさんの手のひらへ拳を突き出す。それを受けてスバルさんは小さく笑った。どうも中々いいパンチだったみたいだ。実は、あのゆりかごが落ちた日の翌日から、僕はスバルさんと少しだけ組み手をする事にした。ガリユーとの戦いで咄嗟に放った紫電一閃。それを思い出して、格闘技の技術も身につけておこうと考えたんだ。

それでスバルさんへお願いして、食事終わりに少しだけシューティングアーツを教わる事にした。最初は覚える事だらけで苦労し、今は別の事で苦労している。それは……

「はっ！」

「つと、残念。届かないよ」

僕の蹴りを見てスバルさんがどこからかうようにそう返してきた。そう、僕のリーチの短さだ。手足が短いせいでスバルさんの隙

を突いたと思っても、それが原因で当たらない事が多い。その度に僕は内心ため息。

早く成長してくれないかな。シヤマル先生に聞いた男性の成長期は大体早くて十三歳からぐらい。僕には遠すぎる時間だ。でも、こればかりはどうしようもない。気長に待つしかないって思っている。いるけど……

「おわっ！ ……いやあ、大きくなったエリオなら今の極まってきたよ」

「そうですか……」

スバルさんが言うような事がある度に、僕はもどかしくなる。早く大きくなりたい。大人じゃなくてもいい。体が今よりも大きくなって欲しいって。

「あれ？もしかして……身長の事気にしてる？」

僕の声が沈んだのを聞いて、スバルさんが少し気まずそうな表情を見せた。気にしていない訳じゃない。でも、下手に隠すとスバルさんに余計心配かけてしまうからここは素直に頷いておいた。

するとスバルさんが勢いよく頭を下げる。突然の事で僕はどうしたのかと思った。でも、スバルさんが言った言葉で全てを理解した。

ごめんっ！ ……ちょっと無神経だったね。

頭を上げると申し訳なさそうにスバルさんはそう締め括った。僕はもう気にしていないと返して、笑顔で構え直す。それだけでスバルさんも僕の気持ちを察してくれたみたいで、苦笑しながら構えてくれた。

再び始まる組み手。そんな中、スバルさんは僕へ問いかけてきた。いつか陸士隊へ異動してくるとしたら、自分と同じ部署に来てみないかって。それはつまり特別救助隊だ。それも確かに僕の描く夢を叶えるための経験としては有難い。

「そうですね……じゃ、もし僕がその時に使える男になつてたらお願いします」

「使えるなんて……エリオなら十分いけると思うよ。だから、期待して待つてるね」

スバルさんはそう笑みと共に言ってくれる。でも、同時に僕の腕をしっかり捕まえていた。そしてそのまま捻り上げるように……

「痛っ！」

「ふっふっふ……で、ここからどうする？」

「……降参です」

これだもんな。やっぱりスバルさんはどこか年上に見えない時がある。今も屈託のない笑顔で「よしっ！」なんて言いながらガッツポーズをしていた。それを見て僕は小さく苦笑。可愛いって、そう思ってしまったんだ。

スバルさんはそんな僕には気付かず、宿舎の方へ向かって歩き出していた。ただ、僕の方へ声を掛けてくれてはいた。汗を流しに行こうって。でも、そこで平然と一緒に入る？ って聞くのは止めてください。海鳴の時は僕もまだ意志力が弱かったです。

「あ、じゃあティアの裸は忘れた？」

「……………忘れられたのなら、僕はある意味聖人です」

忘れられるはずがないじゃないですか。そう思うも口には出さない。ティアさんの裸。それはあの海鳴の時間で一番大きな思い出になってしまったんだから。アレが無ければ、きっとキャロとの時間だったと思う。って、どちらにしるお風呂関係か。

僕は自分が少しだけ嫌になった。男としては正しいのかもしれないけど、やっぱり問題のような気がする。そんな事を思いながら、僕はスバルさんと会話しながら歩く。心なしかあの部分が大きくなっていた気がしたので急ぎ目だったけど、スバルさんは気付かずにいたのでほっとしたのはここだけの話。

変な事を意識しないで、真面目に今後の事を考えよう。

そう自分へ言い聞かせ、僕は一人将来の事について考える。そんな僕をスバルさんがどこか微笑ましく見てるとは知らずに……

お風呂から上がった僕は、休憩室でスバルさんを待っていた。お風呂上りに話したい事があるって、そう言われたからだ。でも、僕にはその心当たりがない。進路相談についてはもう結論が出たし、スバルさんにも話した。

それ以外でスバルさんへ話した事は何も無い。だから僕はさつきから何を話すんだろうと考えながら、静かにスバルさんを待っていた。そうして待つ事数分でスバルさんがやってきた。タンクトップにハーフパンツと楽な格好をしている。

「ごめん。少し待たせたね」

「いえ、丁度熱も取れたんで」

「そっか」

そう言っつてスバルさんが何か飲み物を買おうとしていたので、僕は少し慌てて前もって買っつておいたスポーツドリンクを見せた。湯上りにはこういう水分補給が出来るものが一番だつて知つてゐるから。

それに、スバルさんも同じ物を買おうとしていたし。僕とスバルさんは結構こういう部分で気が合う。食べ物の好みとかもそうだし、休みの日の過ごし方も似てる事が多いんだ。

「スバルさん、これどうぞ」

「え？ いいの？」

「はい、今日だけですけど」

「え〜っ？ そんな寂しい事言わないですよ」

楽しそうに笑いながらスバルさんは僕の手渡した缶を受け取つた。その笑みにつられるように僕も笑い、もう一本を手を取つた。同時にプルタブを開けて軽く缶を合わせる。

「エリオの奢りに乾杯」

「なら、スバルさんの明るさに乾杯です」

「あはは、それだけが取り柄だしね」

「そんな事ないですよ。誰かを助けるためならどんな危険にも立ち向かうじゃないですか。僕、そんなスバルさんが好きです」

僕が真剣な表情でそう告げると、スバルさんが少しの間呆気に取りられたように見つめてきた。それに僕も見つめ返す。僕の気持ちは本当だ。誰かのために命懸けで動けるスバルさん。それが昔体験した事からの行動だとしても、僕はそんなスバルさんを尊敬している。そんな思いを分かちて欲しくて見つめたんだけど、これって傍から見たらへんな意味に取られるかも。そう思っ僕が苦笑しながら頬を掻くのと、スバルさんが嬉しそうに笑って頬を掻くのは同時だった。

「な、なんか照れるな」

「そうですね？ でも、僕は本当にスバルさんのそういうところ、すごく好きです」

「……ありがとう、エリオ」

優しい声で僕へスバルさんがそう声を掛けてくれた。その表情はお姉さんって感じがする。僕はそれに照れくさいものを感じたけど、顔を逸らす事無くそんな事ないですって返した。

その妙な雰囲気落ち着いて、スバルさんへ僕は疑問に思っていた事を切り出した。一体何を話すつもりなんだろって。するとスバルさんはそれで思い出したのか、やや苦笑しながらこう尋ねてきた。

エリオってさ、ティアにはよく相談するけど私にはしないよね。何で？

僕はそれにどう答えるべきか迷った。キャラの事を言っているっですぐに分かったけど、正直ティアさんを頼ったのは普段の流れからだったんだ。僕が何かを相談する時は大抵ティアさん。僕達四人の中で一番しっかりしてるし、面倒見もいい。

だから、そこまで大した理由は無かった。スバルさんへ相談しなかったのは、スバルさんは少しキャラ寄りな気がしたからというものもある。そう考えて、僕はスバルさんへ告げた。

「ティアさんが一番しっかりしてる印象があったからです。それに、スバルさんはどこかキャラに近い考えするじゃないですか」

「近い考え？」

「今日だつて僕と一緒に入るうって」

「あゝ……そうだね。確かに私はキャラ寄りだ」

僕の指摘で自分の相談されない原因に気付いたらしく、スバルさんは苦笑しながら片手を頭の後ろに置いた。僕はそれに内心安堵した。もっと違う反応をされたらどうしようかと思っただ。でも、どうやら納得してくれたみたい。

その後は軽い雑談をした。内容は海上施設のナンバーズの事。僕はそこまで仲良くなった相手がいる訳じゃないけど、スバルさんはノーヴェやウエンディなどのナカジマ三佐が身元引受人をする事になった四人と仲を深めてるらしい。

ティアさんもその流れでウエンディと仲がいいって聞いている。一

度は敵として戦った相手とそうなれるって、やっぱりどこか不思議で……そして暖かい気持ちになれる。僕がそう言つとスバルさんもすぐに笑顔で頷いてくれた。

話に聞く限りだと、更生するナンバーズはもう全員身元引受人が決まっているらしく、チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイの四人がナカジマ三佐。セインがシスター・シャツハ。オットーとデイドが騎士カリムらしい。アギトはシグナムさんの融合騎となつて、八神家の仲間入りが決まっているのは知ってる。

「……みんな、離れ離れになるんですね」

「そう……だね。でもさ、これで会えなくなる訳じゃないから！」

「はい！」

姉妹だと言っていたナンバーズ。それがまず更生プログラムを受ける者と受けない者で離れ、更に身元引受人の元で暮らす事で別れる事になる。それが結構寂しい気がして、僕はついそんな言葉を言った。

でも、スバルさんが力強く言ってくれた言葉に僕も頷けた。それは、ルーとの事で僕が抱いた思いと同じだったからだ。きっとそれを意識してくれたんだと思う。やっぱりスバルさんは優しいな。そう思つて、僕はそれに応えるようにこう言い切った。

僕達もそうですよね！

そうだよ。六課が無くなつてもまた会えるから！

つい立ち上がってしまったけど、スバルさんはそんな僕へ小さく笑うと同じように立ち上がってくれた。そして、無言で拳を軽くぶ

つけ合う。互いの顔を見つめて、僕とスバルさんは笑う。

こうしていつまでも過ごせたらいいのに。そう思わず呟くと、一瞬だけスバルさんが驚いた顔をした。でも、すぐに笑顔を手放さず、こう返してくれた。

私もエリオと同じ気持ち。

その笑顔が何故かいつもとはどこか違う気がして、僕は軽く息を呑んだ。何と言うか、大人の女性の顔とでも言えばいいのかな。そんな感じの雰囲気があったんだ。その後、僕とスバルさんはまた明日と言い合って互いの部屋へと向かった。

でも、僕は最後のスバルさんの笑顔が頭から離れなかった。凄く綺麗な笑顔だったからだろうな。少し高鳴っている鼓動を無視して、僕は自室へと入る。そしてすぐにベッドへ横になる。

明日も普段と同じ時間が流れる。でも、それは長くはない。その残された時間で少しでも自分を鍛えよう。そう改めて誓って、僕は目を閉じる。六課に来て、フェイトさん以外の守りたいと思う人が出来た。

まずはキャラ。次にスバルさんとティアさん。そしてルー。僕が守りたいと思う人達。女性ばかりなのは、周囲にいる人達がそうだからだろうな。それと僕が知り合う男性は、みんな強くてしっかりしていて頼りになる人しかいないしね。

「いつか……僕もそんな男になりたいな」

誰かの事を守れる男。もしくは好きな女性を絶対に守り抜ける男性に。そんな事を考えながら僕は眠りに落ちていく。その日見た夢は、何故かスバルさんと二人で食べ歩きをするものだった……

翌朝、僕はスバルさんへ夢の話をした。それを聞いて楽しげにスバルさんは笑っていた。そして、僕へこう言ってきた。六課解散後に二人で食べ歩きに行こうって。スバルさんと二人で遊んだ事はなかったし、僕と同じぐらい食べる事が出来るスバルさんなら遠慮もしなくていい。

そう考えて、是非って返すとスバルさんが嬉しそうに頷いてくれた。こうしてこの日も始まった。訓練は、もうなのはさんだけじゃなくて、可能ならヴィータ副隊長達も交えての激しいものが主体になり始めていた。本当に六課解散までに、僕らへ教えられるだけの事を教えておきたいって考えてくれているのが分かるぐらいに。

ふとした偶然で知ったなのはさんの本心。それを受けて僕らは決意した。絶対に一つとして教えを忘れないって。自分の魔導師生命を減らしても教導を続けようとしてくれるなのはさん。その想いを決して無駄にしたいくないから。

そして、その気持ちはフェイトさん達も同じだろうからって。六課が解散すればこのメンバーが揃う事はもうなくなる。いや、なくなってほしい。これだけの人を同じ部隊にしなきゃいけない状況なんて、もうあって欲しくないから。

「エリオ、行こう！」

「はいっ！ スバルさん！」

なのはさんの魔力弾をかわしながら、僕とスバルさんは駆け抜ける。こうして共に駆ける事が出来るのも、後少し。そう考えると、

この何気ない時間さえ大切にしたいと思える。だから、僕は叫ぶ。スバルさんにその気持ちを込めた声を。

これで決めましょう、スバルさんっ！

うん！ やるよ、エリオっ！

僕の声に頷き返してスバルさんは構える。僕もそれに応じるように加速する。ティアさんが立てた考えは、ソニックムーブで僕が特攻し、その後ろからスバルさんが本命の一撃をなのはさんへ打ち込む事。

それをなのはさんも分かっているだろう。僕への対処をしながらスバルさんへ視線を向けてる。でも、実はそうじゃない。ティアさんには悪いけど、僕とスバルさんだけでそれを少し変えている。

「はああああ！！！」

「やっぱりスバルが本命だね」

スバルさんの拳がなのはさんの防御魔法で防がれる。それでも、スバルさんは諦めない。強固なのはさんの魔法を打ち破ろうとしている。その間、僕は無理矢理ストラダを使って急旋回。カートリッジを二つ使つての再度の特攻を仕掛ける。

でもなのはさんは僕へ視線を向ける事は出来ない。スバルさんがある攻撃を使い始めたからだ。それは振動拳。スバルさんのISを応用したものだ。それがどれだけ強い攻撃かはなのはさんも知っている。

「もしかして……本命はっ！？」

「紫電！ 一閃っ！」

背後からの一撃。それになのはさんが本来出来たのは、咄嗟に防御魔法を展開する事だった。それさえ出来れば、僕の攻撃を防ぎ切る事が可能な強度をなのはさんの魔法は出せるから。

でも、今回はそれさえ出来なかった。スバルさんの攻撃を防いでいたからだ。スバルさんの攻撃力を受け止めるためにはなのはさんも全力で魔法を維持しなきゃいけない。そう、スバルさんだけに。僕の攻撃へ対処すればスバルさんに、スバルさんに対処すれば僕に突破される。だから、なのはさんは何もしなかったんだ。僕の攻撃の方がまだ自分へのダメージが低いと判断して。

僕の攻撃がなのはさんを捉えた。それを合図に、スバルさんがその手を引いてなのはさんを受け止める。

「私達の勝ちですね」

「……参ったなあ。スバルの攻撃を陽動兼本命にするとだね。もう一人じゃ四人には勝てないかも」

なのはさんの言葉に僕らの顔が綻ぶ。スバルさんが僕へ駆け寄り、笑顔と共に拳を突き出してきた。それに僕も笑顔で拳を突き出す。軽くぶつかる拳と拳。

やったね、エリオ。

スバルさんのおかげです。

そんな事を言い合う僕らを見て、なのはさん達が優しく笑っていた。これもまた、僕の大切な思い出の一つになる……

エリオとキャラロが最初の休日のやり直しをするらしい

その日もいつもの日々だった。つまり、朝に訓練をしてデスクワークの後、午後の訓練を終えて終了というそんな時間だ。ティアさんの指示を受けて僕ら三人が動く。スバルさんと連携したり、ティアさんの援護を受けたり、キャラロの護衛になったりとその時々で変わる役目に対応しながら、僕は自分を鍛え上げる。

なのはさん達の指導を受けられるのも残り僅か。だったら、僕はどんな事でもいいからそれを受けたい。先人としての経験や知識を受け継いで、次は僕が誰かにそれを伝えていきたいから。

こんな事を言ったらシグナムさんに「生意気な」って軽く笑われた。でも、その気持ちは大事にしるとも言ってくれたから、シグナムさんは僕の考えを褒めてくれたんだと思う。そんなこんなで過ぎていく時間。でも、ずっとそんな時間ばかりなはずもない訳で……

「え？ 最初の休日のやり直し？」

「うん。ほら、あの時はガジェット騒ぎで途中までしか行けなかったし」

休憩室でスバルさん達を待つ間、キャラロから提案されたのは意外な事だった。一番最初の休暇で行ったクラナガンの街。シャーリーさんの立ててくれたプランで僕とキャラロが動いたあの時の行動。それをもう一度しないかとの誘いだった。

僕としては、キャラロがそんな事を言い出した事が正直驚きだった。てつきりルーの所へ行かないかって誘われると思ってたから。でも、考えてみればルーはお母さんと一緒にいた時間が少ない。なら、もうしばらくは行かない方がいいんじゃないかって、そう思った。

「そうだね……じゃ、今度は僕らで行き先を決めよう。自由に動きたいから」

「エリオ君と私が決めるって事？」

キャラがどこか不思議そうに問いかけてくるから、僕はそれに頷いて答える。あの時はまだ二人してクラナガンの事を知らなかったけど、今は多少なりとも知っている。それに、誰かに決められて歩くよりも自分達で決めて歩いた方が思い出になる。

そう思ったから、僕はキャラへそう提案した。その考えを教えるときキャラもそれに笑顔で頷いて、じゃあそうしようとなった。そんな感じで二人で話していると、そこへスバルさん達がやってきていつものように雑談となる。

でも、僕はその間ずっとキャラと二人で行く時の事を考えて、あしようかこうしようかって一人で悩んでいた……

「あ？ クラナガンでデートするとしたらどこがいいかだって？」

「ちょ、ちょっとヴァイスさん！ デートじゃないですって！」

僕は午後の訓練終わりに、ヴァイスさんへキャラとの外出での助言をもらう事にした。でも、何でデートって言われるんだろう。確かに傍目から見ればそうかもしれないけど、僕らからすれば最初の休日のやり直しなんだ。

そうヴァイスさんへ説明するんだけど、余計ニヤニヤと笑って「そうかそうか」なんて言ってきた。僕をからかって楽しんでるみたいだけど、今はそれを訂正するよりも情報を得よう。そう判断し、僕はヴァイスさんへデートでいいですと返す。

「で、どうしたいんだ？ 楽しませたいのか、楽しみたいのか」

「えっと、僕としてはキャラを楽しませたいですけど、それじゃその内キャラが僕へ気を遣い出すような感じがするんで、一緒に楽しめる方をお願いしていいですか？」

「いいぜ。しっかし、やっぱお前さんは子供らしくねえな」

ヴァイスさんは苦笑しながらそう言うと、僕の希望を叶えるための場所や方法を教えてくれた。何だかんだ言っても、やっぱりヴァイスさんは優しいし頼りになる。僕らへ何気なく助言をしたりしてくれるし、面倒見もいい。こういう人の事を”兄貴分”って言うんだって、以前ザフィーラが教えてくれた。

でも、シャマル先生曰く「それはザフィーラもよ。人の姿をしていれば、ヴァイス君に負けないくらいお兄さんするんだから」って自慢そうに言ってたので、僕は一度ザフィーラのそんな姿を見てみたいと思ってる。盾の守護獣なんて異名を持つてるし、きっと色々と教わる事もあるはずだから。

そんな事を考えながらも、僕はヴァイスさんの教えてくれる事を忘れないようにメモして、お礼を言って宿舎へ向かった。キャラとはこれからしばらくコンビを組む。今でも仲はいいと思うけど、今後の事も考えて色々と話したい事もある。

フェイトさんに保護されて、六課で出会った僕とキャラ。境遇が似てる事もあって、すぐに打ち解ける事が出来た。正直、キャラが

いてくれて良かったって思う事は沢山ある。あのルーとの戦いでも、キャラロがいたから僕はガリユーにだけ集中する事が出来た。それだけじゃない。初出勤の時だってそうだ。僕が落下するのをキャラロがフリードと一緒に助けてくれなかったら、今頃僕は生きていない。

「僕は……キャラロに何度も助けてもらってるんだ」

改めて感じるキャラロの大きさ。キャラロ自身は、自分は大した事ないうってそう言うけど、僕からすれば絶対そんな事はないって言える。自然保護隊で過ごす日々はどうなるか分からないけど、キャラロが一緒にいてくれるならきつと大丈夫。

そんな風に根拠のない自信を感じ、僕は歩く。とりあえず、今夜はヴァイスさんから教えてもらった事を参考にして、行き先なんかを決めよう。キャラロ自身の意見も聞きたいし、寝る前に聞いてみるのがいいかな。

「よし、今度の休みはキャラロといっぱい笑おう」

自分へ言い聞かせるように呟いて、僕は宿舎の中へと向かう。まずは汗を流そうと、そう考えながら……

「結構色んな場所があるんだね」

「そうだね。キャラロはどこか気になる所はない？」

「うーん……そうだね……」

寝間着に着替えた僕とキャラは、ヴァイスさんから教えてもらった候補地を書いた紙を前に意見を出し合っていた。場所はキャラの割り当てられた部屋。つまりキャラの部屋。フリードはもう眠ったようで、静かな寝息を立てている。

僕が泊まりに来る事にキャラは当然だったけど、フェイトさんも許可を出してくれた。僕とキャラがもう少し大きかったら、おそらく色々と問題があったとは思っただけだね。さすがに十歳やそこらじゃ心配されるような事はないからだと思う。

隣り合ってベッドの上で話す僕とキャラ。お風呂上りだからだろうか、キャラからは少しだけいい匂いがする。実はさっきからそれが気になって、僕は何度もキャラの方へ視線を動かしている。キャラの横顔はいつも通り。でも、どこか違うような気がして、僕はちよつとドキドキしてる。

キャラは僕に異性なんて意識はないだろうけど、僕はそうもいかない。ティアさん曰く僕は早熟らしく、キャラを異性って意識してるからだろう。キャラの事が異性として好きかって、そう聞かれた事が一度だけある。その相手はフェイトさんだ。

えっと……まだよく分らないんです。キャラの事が好きなのは確かですけど、それが恋愛対象としてなのかまでは……

そっか。あ、別にそこまで深い意味はないんだ。ただ、もしそうなら一緒にいる事が色々ややこしい事になるかもって、そう考えただけなんだ。今のキャラは、恋愛感情なんて理解してくれないだろうって思うからね。天然さんだし。

あの自然保護隊への配属を希望した時、途中で聞かれた事。フェイトさんは保護者として、僕とキャラの事を少し過剰に心配して考

えてくれていたんだと思う。ある時を境に、僕らとフェイトさんは時々話す機会を設けるようにした。

それで互いの気持ちのすれ違いを無くそうって、リンディさんやアルフからの助言を基に決めたからだ。話し合ってみれば意外と簡単に気持ちを通じ合わせる事が出来るって、そう教えてもらったから。

だからフェイトさんは、キャロが僕をどう捉えているかを理解してるんだと思う。女性同士で話す事もあるだろうし、フェイトさんとキャロはどこか親子というよりは姉妹みたいな感じもするから。

でも、これだけは言いたかった。天然さんって、それは貴女が言える事じゃないですよ、フェイトさんって。きっとその言葉は、フェイトさんを知る人達なら全員が同意してくれると僕は思う。

「あ、エリオ君。私、動物園行ってみたいな」

「動物園？」

「うん。スプールスで色んな野鳥や動物は見たけど、それ以外の動物も見てみたいんだ」

僕が回想から脱却すると同時にキャロがそう提案してきた。成程、動物園か。キャロらしい選択肢かも。そう思いながら、僕はならそこへ行く事を決定する。でも、そこだけで時間を使い切るのは難しいから別の行き先も決めないと。

そう僕が言うと、キャロがまた考え込み始めた。でも、僕には実は候補があつたりする。キャロが喜んでくれて、今後活かせるだろう場所。そう、植物園だ。

「そっか。自然保護隊に来るならいい勉強になるね」

「うん。僕はキャラロみたいな知識が不足してるから、色々教えてくれると嬉しいな」

「任せて。じゃ、今度のお出かけはエリオ君のお勉強も兼ねるんだ。頑張らないと」

「キャラ、キャラロ？ 楽しむために行くんだよ……？」

「あ……えつと、そうなんだよね。ごめんなさい」

照れ笑いを浮かべるキャラロ。その笑顔がとても可愛く見えて、僕も知らず笑顔になる。この後少しだけ当日の事を話して、翌日に備えて寝る事にした。一つのベッドに横になると、座っている時より意外と狭く感じる。

ふと隣を見るとキャラロも同じ事を思ったのか、小さく苦笑していた。何となく狭いねって、そう僕が言っているとキャラロも同じようにそうだねって返してくる。そして、手を繋ぎ合って寝たいって、そうキャラロが言ってきたから僕も二つ返事で頷いた。

それで少しだけ僕の鼓動が早くなった気がする。でも、不思議と落ち着く感じもある。キャラロはどうなんだろうって、そう思って視線を横に向けると目が合った。何となく恥ずかしくなったけど、そのまま僕はキャラロの方を向き続けた。

キャラロの方も目を逸らす事もなく、僕を見つめ続けてきた。そのままどれくらい経ったんだろう。正直時間の感覚が鈍くなった中、僕は少しだけ顔が熱いと感じながらも、小さく告げた。

何だか妙な感じがするね。

そうだね。でも、私はエリオ君と一緒にいられて嬉しいな。

そのキャラの言葉は素直な気持ちだったと思う。僕はそれに顔が一段と熱くなった気がして、少し上ずった声で僕も嬉しいよって返すのが精一杯だった。その後は素早くおやすみと告げて顔を背けた。隣からキャラの少し不思議そうな声で返事が返ってきたけど、僕にはその原因を探る気はなかった。それどころじゃなかった。鼓動が凄く煩くなっていて、聞こえるかもって思うぐらいだったんだから。

その内キャラの寝息が聞こえ始めた。でも、僕はまだ寝付けそうにない。もしかして、僕のキャラへの”好き”って恋愛感情としてものなんだろうか。そんな事を考え、僕は一人思い悩んでいる内に……いつの間にか寝てしまったらしい。

何故なら気がつく朝になっていたから。そんな僕が最初に見たのは、元気に飛びフリードと訓練着に着替えておはようと微笑むキャラだった……

「結構人がいるね」

「そうだね。じゃ、僕は入場券を買ってくるよ」

あの日から少しして迎えた休日。かねてからの打ち合わせ通り、僕とキャラは動物園の前にいた。僕の手には二つのバスケットがある。キャラが用意したものだから、きつと昼食の用意だろう。

しかし、平日だけだと思っていたよりも人がいるような気がする。

とりあえず、二人分の入場券を買うために券売所へ向かおう。そう
思って、キヤロと繋いでいた手を離し、僕は一人歩く。後ろから微
かにキヤロの咳きが聞こえた気がしたけど、気のせいだろうな。フ
リードはキヤロの頭の上に乗っている。あまり動き回ると誰かにぶ
つかったりするかもしれないからだ。

「子供二人です」

そう言った瞬間、僕は少し複雑な気持ちになる。どれだけ思考を
大人に近づけようとしても、どれだけ実力を伸ばしても、今の自分
は世間から見れば子供でしかない。それを認めると言われているよ
うな気持ちになる。

今は子供でもいい。そんな風に思えない自分が嫌だ。生意気。そ
んな単語を思い浮かべながら、僕はキヤロの元へ戻る。するとキヤ
ロは僕の顔を見て少し不思議そうな顔をした。多分僕の気持ちが表
情に出てたからだと思う。

「どうしたの、エリオ君。何かあったの？」

「ほら、予想以上に人が多いから困ったなって」

「あゝ、そっか。でも、大丈夫だよ。こうやって手を繋げば迷子に
ならないから」

キヤロはそう言って僕の手を掴む。その温もりだけで僕の気持ち
が落ち着いていく気がする。

「……そうだね。じゃ、行こう！」

「うんっ！」

「キユク！」

気持ち切り替えて笑顔で声を出すと、キャラもそれに応じて笑顔で声を返してくれた。フリードも声を出し、僕らはそのまま園内へと歩き出す。客層は子供連れよりも若干カップルが多い気がする。そんな事を考えながら、僕はキャラと一緒に色々な動物を見て回る事にした。

まずは大型の動物。象やライオン、キリンなどだ。昔フェイトさんに見せてもらった図鑑を思い出しながら、キャラと感想を言い合う。ただ、キャラがまったく動かない状態の虎を見て「気の抜けた時のスバルさんみたい」って言ったのには思わず笑った。

でも、僕はすかさず「それを言うなら最初の頃の訓練終わりの僕らだよ」って返すと、キャラは成程と頷いて苦笑した。何せ、あの頃は訓練終わりには少しも動けないぐらいの事が多かったから。

大型の後は小動物を中心に見て回る事にした。リスやムササビなどを見ていると、キャラがスプールスでも沢山見る事があると教えてくれた。大自然の中で暮らす事になるため、やはりこういう小動物は多いんだって。

僕がそんなキャラの話聞きながら歩いていると、その視線が突然別の場所へ向かって動いた。僕もそれに視線を動かしてみると、そこにあっただのは一つの檻。中には三羽のウサギがいた。白と茶に黒の三羽だ。

「あのウサギがどうかしたの？」

「可愛いなって思って。しかも、色的にフェイトさん達みたいで」

そう言って微笑むキャラ。白はなのはさんで、茶がはやてさんかな？ フェイトさんが黒なのはバリアジャケットから確定だと思っし。そう思っけてキャラへその予想を告げると笑顔で頷いてくれた。

「……和むね」

「うん、和むね」

「キユク〜……」

餌を食べる姿を眺める僕ら。一つの餌入れへ三羽して顔を突き入れる形で食べるその微笑ましさに、知らず僕とキャラの顔も緩んでいく。そうやって僕らはしばらくウサギ達を眺め続けた。どれぐらいそうしていたかな。僕らを現実へ引き戻したのは、お互いの空腹を告げる音だった。

少しの照れを混ぜて笑う僕とキャラ。一先ず昼食を食べる事にして、その場を離れる。キャラはウサギ達へ手を振っていた。気のせいかもしれないけど、それにウサギ達も別れを惜しむような声を返してくれた。それを聞きながら僕はキャラの手を掴んだまま、笑顔でその横顔を見つめた……

「どうかな？」

「うん、美味しいよキャラ！」

「良かったあ！ 頑張っけて作っけてきた甲斐があったよ」

休憩所で座って二つもバスケットを広げている僕ら。その中身は予想通り昼食用のお弁当だった。キャラコが作ってくれた色々なサンドイッチが入っている。僕の事を考えてかなりの量を作ってくれたようで、一つが丸々僕用だった。しかも、残る一つも半分は僕の分らしく、キャラコはこのために早起きしてくれたんだって。

それを聞いて、いつもは急ぐように食べる僕だけど、今日はゆっくりと味わうように食べようと思った。キャラコの気持ちを噛み締めるように、じっくりと食べたかったんだ。そんな僕にキャラコが少し首を傾げた。

「あれ？ いつもより食べるのが遅いね？」

「うん。今日は味わって食べたいんだ。キャラコの手作りだから」

「そ、そっか。……うん、じゃあ私はエリオ君の顔を見て食べるね。表情で味の評価を見たいから」

「ええっ！？ そ、それは止めてくれないかな？ 結構恥ずかしいんだけど……」

キャラコの発言に僕は本気で困った。でも、そんな僕へキャラコは大真面目な顔でこう返してきたんだ。

それなら大丈夫だよ。私も恥ずかしいから。

その瞬間、僕は呆気に取られてキャラコは真っ赤になった。そして、やや遅れて僕の顔も真っ赤になる。いや、自分達の会話が凄く、その、恋人みたいに思えたからだ。キャラコはそうじゃないのかもしれない

ないけど、僕は少なくともそう感じている。

まだ子供でしかない僕ら。それでも、少しずつではあるけれど大人に近付いている。今はそこまで分からないだろうけど、その内僕らの体が性別をはっきり認識させるような状態へと変化していく。背丈もきつと大きな差が出来るはず。

……じゃ、じゃあ……お互いを見詰め合って食べようか？

あ、そうだね！ それならおあいこだもん。

そんな良く分からない提案をする僕。キャラはそれに笑顔で頷いて了承。こうしてどこか変な状態で僕らは食事をする事になった。でも、そんな風に意識していたのも最初だけ。途中からはもういつものような雰囲気話しながら食べている僕らがいた。

キャラがバスケットに入れるサンドイッチだけに意識を取られて飲み物を用意するのを忘れていた事に気付いたり、フリードがサンドイッチのハムだけを抜いて食べようとするのを二人で苦笑しながら注意したりと、楽しい時間は過ぎていった。

あれだけあったサンドイッチは見事に全部消えた。キャラは完食した僕に笑顔で「やっぱリエリオ君はよく食べるね」と嬉しそうに言っていた。僕はそんなキャラへ、改めて作ってくれたお礼と美味しかったとの言葉を告げた。

そして、次の目的地である植物園目指して僕らは移動を開始。手は当然のように繋いだままだ。最近はキャラと二人でいる時はこうしている事が常になりつつある。フェイトさんはそんな僕らを見て微笑ましく思っているようだった。でも、時々寂しそうな表情もするんだけど……その理由は何だろ？

キャラにその事を聞いてみると、キャラも知らないらしい。でも、

多分フェイトさんは仲良くしたい人がいるんじゃないかって言った。僕はそれに納得するように頷き、フェイトさんの寂しがつている理由に察しをつけた。

おそらくフェイトさんは好きな男性がいるんだ。僕とキャロが仲良くしているのを見て、その人とそういう事が出来たらってそう思ってるんじゃないかな。でも、フェイトさんと親しい男性なんて僕はあまり知らない。クロノさん以外だと……あ、幼馴染のユーノさんぐらいだ。

「次の植物園はお花もいっぱいあるんだよね？」

「そうだよ。だから、僕へ色々教えてね、キャロ」

「任せて。結構私も教えてもらったんだから。薬草なんかも詳しいんだよ」

僕の言葉に笑顔を返してくれるキャロ。それに僕も笑顔を返す。こうしてこの日は過ぎて行った。そして、宿舎に帰る途中の道で……

「エリオ君、今日は楽しかったね」

「うん。楽しかった」

夕日の中を行くレールウェイに揺られながら、僕は手すりに掴まりながらキャロと話していた。時刻が丁度帰宅時間と重なってしまった、キャロは何とか座席に座る事が出来たけど、僕は無理だったのが現在の状態となっている。

フリードは疲れたのか眠っていて、キャロも実は何度か眠りそうになっている。でも、僕がちゃんといいたら起こすって言ったのに、頑張って起きていようとするとところがキャロらしい。

エリオがティアナとツーリングするらしい

あれからまた時間が過ぎた。秋が終わって冬が来て、その寒さが春に近付き少し和らぎ始めた。そう、二月も中旬になり六課解散の日が近付いてきたんだ。そんな時、おそらくもう最後だろううある機会が告げられた。

「明日の休みは僕とティアさんだけ、ですか？」

「ええ。で、その二日後にスバルとキャロが休みよ」

どうもスターズとライトニングで休みではなく、それぞれの片方ずつで休みを取らせようとの事らしい。理由は、あまり接点がない者同士を過ごさせようとの考えだそうだ。きつとはやてさんだろうな。

そう思ってティアさんへ告げると、苦笑しながら頷いてくれた。そこで話題は翌日の過ごし方になった。なので、僕は一度ティアさんをお願いしたい事があったから、それを頼んでみる事にした。

「バイクに乗ってみたい？」

「はい。駄目ですか？」

「いいけど……ヴァイス先輩へ許可取らないといけないわね」

「それなら僕がお願いしてきます。許可もらえたらいいですか？」

バイクに乗ってみたいと前々から思っていたから、ティアさんをお願いしたかったんだ。一度ヴァイスさんに頼んだ事もあるんだけど

ど、中々休みが合わなくて無理だった。そう言つとティアさんも納得してくれたのか、笑顔で頷いてくれた。

その後、僕はヴァイスさんへバイクの使用許可を取りに行った。ヴァイスさんは、僕へいつものからかい混じりの笑いで許可をくれた。きつとこの前はキャロとのデートで、今度はティアさんとデートかって言いたいんだろうな。

「あのヴァイスさん、一つだけ言わせてください」

「ん？」

「デートって、双方にそういう意識がないと成立しないと思います。だから、これはデートじゃないです」

「……ま、確かに一理あるわな」

僕がそう言つとヴァイスさんは少しだけ意外そうな顔をして、苦笑混じりでその意見を肯定してくれた。でも、やっぱりどこか僕を見て笑ってる。もういいや。そう思つて、僕は許可をくれた事だけ感謝してそこを去った。そんな僕の背中を見て、ヴァイスさんは楽しそうに笑っていると知らずに……

その日の夜、僕らはいつものように休憩室で談笑していた。僕にキャロ、ティアさんにスバルさんとアルトさんという、本当にいつもの顔ぶれだ。話題はそろそろとなった六課解散について。それぞれが進路先を教えているため、次はどうするのかを話しているんだ。

スバルさんはおそらく続けられる限りレスキューをすると言い切った。ティアさんも執務官になってお兄さんの夢を継ぐと断言。キヤロはまだ絶対じゃないけど、おそらく自然保護隊を続けると言った。アルトさんは陸士隊のヘリパイロットを目指して頑張るそうだ。

「で、エリオは？」

「当面は自然保護隊なのよね？」

「はい。でも、キヤロみたいにずっととは思っていません」

僕がそう言うのとキヤロが少しだけ驚いた顔をした。でも、それだけ。何かを言う事はなかった。きっとキヤロは、僕の答えを聞いてからにしようと思ってくれたんだと思う。それに僕は少しだけ嬉しく思いながら、スバルさんに軽く話した事を詳しく語った。

それを聞いたティアさん達は驚きを見せていた。でも、それも最初だけ。途中からは僕の言葉を真剣な表情で聞いてくれた。そして、最後にはどこか微笑みを浮かべてくれた。

「そう。あんたの夢はレジアス中將に近いのね。それで局員が陸士達に憧れるような部隊の設立、か。大きく出たじゃない」

「いつかは地上の教導隊を……かあ。うん、エリオの夢が叶うといいね。あたしも応援するよ」

「まさか、そんな凄い事考えてるなんてね。私はてつきり一流のストライカーになる！ ってぐらいだと思ってたよ」

「エリオ君の夢、いいと思う！ そうだね。もっと陸が安全になれば、きっと沢山の人が笑顔でいられるもん」

僕の進路先というか、将来の夢にティアさん達がそう返してくれた。正直途中から熱くなりすぎた気がするけど、でもそれぐらい今の僕にとって大事な夢。一人でも涙する人を減らせるように。一人でも傷付く人がいなくなるように。

あのJS事件の中で僕らがしたような思いを……もう誰にもさせたくないから。だから、僕は決めたんだ。技術や経験だけじゃなくその思いを伝えていこうって。僕がなのはさん達から受け継いだものは、きつとそういうものもあると思うから。

「ありがとう、キャラ。ありがとうございます、ティアさん、アルトさん、スバルさん。僕、頑張って夢を叶えてみせますっ！」

そう言っただけで僕が拳を握ると、それにティアさん達が笑みを浮かべて頷いてくれた。その後は、今度の休日を話題にして話し出した。キャラはスバルさんと一緒にルーに会いに行く事になっているらしい。キャラはルーと、スバルさんはメガー又さんとそれぞれ話したい事があるからだって。

アルトさんはそれを聞いて、自分はルキノさんと一緒に買い物に行く事にしてるって言った。アルトさんのお休みはスバルさん達と同じタイミンングらしく、もし誘えるなら一緒にって思っていたみたいで、声が少し残念そうだった。

僕はそこでヴァイスさんの許可をもらえた事を思い出してティアさんへ告げた。するとその瞬間、アルトさんとスバルさんの表情がやや不敵なものへ変わった。あ、これは僕らをからかうつもりだ。そう僕が判断するのと、ティアさんがスバルさん達へやや呆れた顔を見せたのは同時だった。

「あのね、アタシはエリオの頼みでバイクに乗せるだけよ？」

「成程成程。ティアとエリオは二人でツーリングかあ」

「いいなあ。あたしもそういう相手欲しいよ」

やっぱりだ。ティアさんの言葉に、スバルさんもアルトさんもニヤニヤしながら言葉を返している。キャラは僕へ無言のまま視線を向けている。でも、どこか複雑な顔をしていた。僕はそんなキャラへ念話でどうしたのって問いかけたけど、キャラはそれに何でもないうって返すだけ。

そのまま、キャラは僕から顔を背けるように俯いた。だから余計気になって、僕はキャラへ意識を向けようと思ったんだけど、そうもいかない状況になった。スバルさん達のからかいが少し度を越し始めたみたいで、ティアさんから念話が入ったんだ。

【エリオ、この話の続きは後でしましょ。一旦アタシは部屋に戻ってから、ここへ来るわ】

【わ、分かりました。なら、僕もキャラを送ってからここへ来ます】

【分かったわ。じゃ、また後で】

ティアさんは僕へ念話しながら、スバルさん達へ怒りを軽く見せて立ち上がった。そのまま部屋へ向かって去って行く。それにスバルさん達も少しやりすぎたと思ったのか、若干しまったというような顔をしていた。

僕はそれを軽く見て、キャラへ声を掛けて部屋に送っていくからと手を繋いだ。それにキャラがどこか安堵したみたいに頷いて、僕はスバルさん達へ挨拶だけして歩き出した。気のせいかな、キャラが僕の手を強く握っているように感じながら……

「さつきはすみませんでした。からかいのネタにされるなんて思わなくて……」

「いいのよ。悪いのはあれだけからかったスバル達なんだから」

二人きりで話す休憩室は少し寂しい。あれからキャロを部屋へ送り届け、僕はそのままここへ戻ってきた。ティアさんはそれから少しして現れ、スバルさん達への対応を話してくれた。結構ティアさんが怒っていると思っただけで、何度も何度も頭を下げていたらしい。

それにティアさんは、あまりあいつからかいをしないようにと釘を刺してくれたようで、もう二度と同じような事はないと言ってくれた。でも、ティアさんは別にそこまで怒ってなかったはずなのに、どうしてそこまで言っただろう。

「あの、ティアさん」

「ん？」

「どうしてそこまで？」

「今みたいにあんたが結構気にするからよ。ま、その事も含めてきつく言っておいた訳」

ティアさんはそう言って、軽く息を吐いた。僕が真面目で責任感

が強いだろうから、今回の事も必要以上に重く考えるんじゃないかって。そうティアさんは考えてくれた。だからスバルさん達へ、僕を巻き込んでからかう時はもう少し限度を考えろって、そう言うてくれたらしい。

僕はそんなティアさんの配慮に感謝すると同時にもう一度だけ謝った。今後はもう少しそういう事も考えて発言しないと。そう思ったからだ。そんな僕の思いを感じ取ったのか、ティアさんは小さく苦笑すると僕へ軽い口調でこう告げた。

「いって言うてるでしょ？ アタシはあんたのそういうところ、嫌いじゃないから。」

その時のティアさんは、どこかいつものティアさんだけと違いううに見えた。普段は頼りになる先輩。でも、今のティアさんはどこか優しいお姉さんみたいな感じがした。フェイトさんよりもドキドキするのは、やっぱり歳がそこまで離れてないからだろうか。

そんな事を考えていたからなのか、僕は少し自分でも分からない内に緊張してた。でも、ティアさんが言うてくれた事に返事をしないといけないなんて事を考えてもいた。だからだろう。あんな事を言ったのは。

「えっと……」

「どづしたのよっ。」

不思議そうに僕を見るティアさん。それに僕は少し大きめの声で答えてしまった。

僕も、ティアさんのそういう優しいところ好きです！

僕の言葉にティアさんは一瞬呆然。それでもすぐに気を取り直して、頬を指で搔きながら返事をしてくれた。

「あ、ありがと。というか、何か今の告白みたいだったわね」

「え？ ……あっ！？ いや、その」

「あゝ、ごめんごめん。からかうつもりじゃないのよ。ただ、少し意外だったからね。エリオから好きだなんて言われるなんて」

「……恥ずかしいです」

顔から火が出そうっていうのは、今みたいな状況を言うんだろかな。そんな事を考えながら、僕は顔を伏せた。まともにティアさんを見ていられない。確かに言われてみれば告白みたいだと思ったんだ。

でも、ティアさんはそんな俯く僕を見て小さく笑った後、仕方ないとはかりに傍へ近付いてきた。何をするんだろ。そう思った僕の肩にティアさんは手を静かに置いて、咳払いをした。

「エリオ、いい？ 一度しか言わないからよく聞きなさい」

「はい……」

「さっきの言葉、嬉しかったわ。ありがと」

顔を上げた僕の目に映ったのは、照れながらも柔らかい微笑みを浮かべるティアさんの顔。耳に聞こえてきたのは、今まで聞いた事ないぐらいの優しい声。それだけで僕の鼓動が高鳴る。顔がさつきとは違う熱さを持つ。

真っ赤になった僕の顔を見て、ティアさんはやや気恥ずかしそうに立ち上がると、明日の事を話そうと言って軽く手を叩いた。僕もそれに慌てるように頷き、明日の事について打ち合わせを始めた。

何時に出発するのか。どこへ行くのか。そういう事をティアさんの意見を参考にして決めていく。出来るだけ見た事のない場所へ行きたかったから、ティアさんへそういう要望を告げた。それにティアさんがならばと候補地を挙げてくれる。

そんな事を話し合って決めた僕は、ティアさんとまた明日と言いつつ部屋へと戻る。でも、正直未だに鼓動は早くなつたままだった。思い出すのは、ティアさんのあの言葉。初めて聞いた声。それがずっと僕の中で再生される。

嬉しかったのは僕の方です、ティアさん。いつも僕の相談や迷いを聞いてくれて……ありがとうございます。

足を止めて、ティアさん達の部屋がある方へ向かって小さく呟く。きつとこんな事を言ったら、またティアさんを困らせるだろうから。だから、ここで言いますね。そんな風に思いながら、僕は一人笑う。明日はどんな日になるだろうか。そんな事を思いながら……

風を裂いて走る。そんな表現がびつたりくる感覚を覚えながら、僕は必死にティアさんへ回した腕に力を込める。そんな僕をきつと笑っているんだらう。ティアさんはさつきから速度を出来るだけ上げている。

ストラーダを使って加速している時は自分で制御しているし、バ

リアジャケットがあるからそこまで大きな不安はない。でも、バイクはティアさんへ運転を委ねているし、着ているのは普通の服。そのため、思ったよりも恐怖感が強い。

「どうしたのよ、エリオ！ まだ八十キロも出してないわよ！」

「予想以上に風の抵抗とかが凄くて！ ちょっと萎縮してるんですけど！」

「情けない事言わないの！ 男でしょ！」

どこか楽しそうな声を出して、ティアさんはまたアクセルを開けていく。それに伴いバイクが加速していく。僕の体へ当たる風の勢いも当然増していく訳で……

「てい、ティアさん！？ スピード出しすぎですよっ！？」

「これぐらい序の口よ！ さ、飛ばすからしっかり掴まってなさいっ！」

完全に僕を怖がらせて遊んでる気がする。でも、いつもはしっかり者のティアさんが見せる子供みたいなところに、僕は少しだけ嬉しく思っていた。そんな時間がしばらく続き、僕らが辿り着いたのはクラナガンからバイクを走らせる事一時間半の場所。

観光地となっている小さな山だった。秋は紅葉が綺麗な事で知られ、春には梅が見られるらしい。どうも、この山は日本出身の人達が世話をしているらしく、だからその植物が多いのだと案内所の人は教えてくれた。

バイクを駐輪所へ置いて、僕とティアさんは山を登る事にした。

本当はここで少し休憩して、更に遠くへ行く予定だったんだけど、僕が頂上からの景色を見てみたいと発案したんだ。それには、さっきまでのバイクでの恐怖を少しでも忘れたかったのもある。

ティアさんは僕のそんな気持ちを知っているのか、どこか苦笑しながら山登りへ賛成してくれた。そもそもその目的はバイクの乗る事なら、多少の予定変更は構わないんだ。途中の売店で昼食を購入し、本格的に登山道を歩き出す。とはいえ、観光地だし、元々高い山じゃない。だから普段六課での厳しい訓練を受けている僕らには楽なものだった。

「綺麗ね」

「そうですね。梅って、白い花なんだ」

「みたいね……って、向こうは紅いわよ？」

「あ、ホントだ。紅白の花なんですわ……」

途中で咲き誇る梅の花を眺め、しばし足を止める僕達。もういくつかは散り始めていて所々葉になっているけど、それでも綺麗な眺めだった。僕もティアさんも風に乗ってヒラヒラと舞い散る花を見つめ、そのまま無言で立ち尽くした。

何だか、その光景が物悲しく見えた。でも、同時にこころも思った。また来年もこの梅は花を咲かせるんだろうって。それは、僕にも言える事だ。今は六課解散で別れるしかないとしても、いつかまた会える日が来る。花が散るとしても、また新しい花を咲かせればいいだけだつて。

「……ティアさん」

「何？」

「今度はみんなで来ましょう」

「……………そうね」

お互いに花から目を離さず、そう僕らは言い合った。ちらりと視線を動かせば、ティアさんは風に揺られる花びらを眺めて、どこか憂いを帯びた横顔をしていた。それがとても色っぽく見えて、僕はドキリとしたけど視線を動かす事が出来なかった。

そのまま僕は、ティアさんがその視線に気付くまでそうして無言で横顔を見つめ続けた……

「いい景色ね！」

「はいっ！ いい眺めです！」

頂上から見える景色は、とても心地良いものだった。春風を感じながら、僕とティアさんは眼前の光景に深呼吸。遥か遠くに見えるクラナガンの街並み。もし夜ならきつと凄く綺麗な夜景が見えるだろうな。

そう思っただけでティアさんへそう言うと、それに頷いて「夜に来るなら同性以外と来たいわ」なんて言って笑っていた。それを言った瞬間、ティアさんがスバルさんを思い出したんだろうと僕は悟り苦笑した。

少しの間景色を堪能し、僕らは買った昼食を食べる事にした。山頂に設けられたベンチへ座り、僕とティアさんは揃ってお弁当を開いた。中身は日本食だ。売店の人が言うには、幕の内弁当と言ったらいい。

ご飯が俵型になっていて、一口サイズでいくつも詰められている。おかずに卵焼きや鳥の照り焼きなど色々な物が入っている。正直僕はこれだけじゃ足りないけど、とりあえず山頂で食べたいと思ったからのお弁当だ。

「結構色々入ってるわね」

「ですね。目移りします」

「じゃ、食べましょうか」

「はい！」

僕がそう言っただけで箸を手にとると、ティアさんがどこか笑みを浮かべた。何か面白い事でもあったのかな。そう思って問いかけると、僕の声が嬉しそうにしてるからとの答えが返ってきた。お腹が空いてたからか、食事となったら途端に歳相応の反応をしたみたいだ。

でも、何故かティアさん相手ならそこまで気にならない。やっぱりティアさんがお姉さんみたいに思えるからだろうか。そんな事を考えながら、まずは卵焼きから。うん、ちょっと甘いけど美味しい。ティアさんは……あれ？ 少し表情が陰しい。

「どうしたんですか？」

「……この赤い奴、気をつけなさい。ちょっと癖があるから」

ティアさんが見せたのは、少しかじられた野菜のような物。それはみょうがと呼ばれる食べ物だと後で知った。僕はそれを知らず、差し出されたような状態のみょうがをつい無意識で興味本位からかじった。

僕は口に広がるピリリとした味に少し驚きながらも、意外と嫌いじゃないかもなんて思いながら咀嚼した。すると、ティアさんが僕を見てやや顔を赤くしている。それに僕は疑問符を浮かべた。

「……………どうしたんです？」

「あのねエリオ……………今、自分が何したのかわかってる？」

「えっと……………ティアさんの見せてくれた物を食べたんですけど？」

「……………どこから？」

「どこからって……………っ?!」

そこで僕は自分のした事を理解した。ティアさんの食べかけを口にした事を。ティアさんは、そんな僕の反応でさっきの行動が無意識だと気付いてくれたらしく、大きくため息を吐いて視線をこっちへ向けた。

そして、今みたいな事を決して女性には意図せずしない事を厳命された。する時は親しい仲か、そういう風になりたい相手への行動にしるとまで言われた。それに猛省しますと返すと、ティアさんは当然と言い切った。でも、その後ティアさんが何か呟いた気がした。

「………つたく、アタシに変な意識をさせんじやないわよ……………」

何となくだけど、僕はそれが聞こえなくて良かったと思った。ど

こかティアさんが顔を背けていたし、顔の赤みが増していた気がしたからだ。きつと怒ってる。そう思ったから、僕はつい居た堪れなくなつて立ち上がるとそこから走り出した。

「飲み物買つてきます！ ティアさんはそこで待つててくださいっ！」

後ろから僕へどこへ行くのか尋ねてくるティアさんへ、そう大声で告げる。ティアさんへのお詫びじゃないけど、何か売店まで戻つて甘い物も買つてこよう。物で許してもらおうなんて発想が子供だけど、それぐらいしか今の僕には浮かばないから。

そんな事を思い、売店目指して走る僕。でも、その脳裏にはティアさんの食べかけを食べた事実ばかりを思い出していた。おかげでふと気がつくと売店を通り過ぎそうだったから笑えない。そこで緑茶と花見団子っていう物を買つて山頂へと戻つた。

ティアさんへさっきのお詫びとして緑茶と団子を渡すと、やや苦笑しながら「アタシはスバルと同じ扱い？」と言いながら受け取ってくれた。どうやら許してくれたみたいだ。二人でベンチに座つたまま景色を眺めてお茶を飲む。食後にティアさんが団子を一本分けしてくれたので、それを噛み締めるように食べながら。

何かほつとしますね。

なあに年寄りみたいな事言つてんのよ。でも……ま、分からないでもないわ。

そんな会話をし、僕とティアさんは無言で夕暮れまでそうして座つていた。ただ景色を眺めるだけ。もう言葉はいらない。この光景を思い出として忘れないでいよう。僕は、そんな風に思いながら一

エリオとルーテシアが仲を深めたらしい

「ごめんね、無理に呼んだみたいで」

「気にしないでいいよ。僕も一度来たいって思ってたから」

僕の言葉に若干ルーが安堵した表情を見せた。今、僕はルーとメガ又さんが暮らす家にいる。ここにいる理由は、あのティアさんと出かけた後に休みとなったキャラが告げたルーからの伝言。

ルーちゃんが一度エリオ君と二人でお話したい事があるんだって。

それを受けて、僕はここへ来ていた。キャラはルーの希望を叶えるために僕だけを送り出してくれた。今頃はフェイトさんと二人でアルフに会いに行っているはずだ。そんな事を思い出し、僕はルーの淹れてくれた紅茶を飲む。

暦は六課解散が目前に迫った三月に入り、僕の周囲も解散後の事を話す人達ばかりとなっていた。だから休みもこれが最後だろう。そういう意味ではルーの申し出は丁度良かったとも言える。

でも、一体話って何だろう。正直見当がつかない。キャラもどこか困った顔で、それは教えてくれなかったと言ってたし、今は買い物へ行ったメガ又さんも微笑むだけで何も言ってくれなかった。

「で、ルー。話があるって聞いたんだけど？」

「う、うん。エリオの今後に関係するかもしれない事だから、一度意見を聞いてみたくて」

僕の今後に関する事。そう言っつてルーはどこか真剣な表情に変わる。僕はそれに疑問しか浮かばないけど、そんな顔を見て表情を引き締めない訳にはいかないと思っつて、ルーへなるべく鋭くなりすぎない程度に顔へ力を入れた。

その瞬間、ルーが僕の顔を見て小さく「あう」つて言っつた。それが少し可愛くて僕は笑う。多分思っつたよりも目つきが鋭くなっつたんだと思っつたから、丁度いいかなと思っつながらね。でも、すぐにお互いに表情を戻して見っつめ合う。

「あのね、私が嚴重リミッター処理されてるのは知っつてるよね」

「うん。それが？」

「それも含めての今の処置は、私が管理局へ協力するのを断っつたからなの。だから、もし協力するつて言っつたらもう少し処分が軽くなっつたはずだっつてお母さんが教えてくれた」

その瞬間、僕はルーの言っつたい事が分かつた。ルーは管理局へ協力するつて伝えて、少しでも早く僕らと一緒に過ごせるようになるつつもりだっつて。でも、僕はその言葉に意見を言っつ前にはっつきりさせておく事があっつた。

「ルー、まずはどうして君が局へ協力しないつて決めたのかを聞かせて」

「……やっつぱりエリオも聞っつくだね。ううん、聞っつてくれるんだね。ありがとう」

「待っつてルー。僕もつて事は……もしかして」

「うん、キャロにもしたの。でも、エリオには内緒にしてっお願いしたから」

そう言っつてルーは小さく舌を出して悪戯っぽく笑った。それに少しドキつとしたのは内緒。可愛いなんてものじゃなかったからだ。でも、ルーがどうしてそれを黙ってもらいたかったかは理解出来るから、僕も何か言う事は無かった。

やや自分のした事に照れているルーを見つめながら、僕は気にしてないからと言っつて先を促した。それを受けてルーが話してくれたのは、今の状況を受け入れた理由。

一つは怖かった。自分が操られたとはいえ、多くの物や人を傷つけるような事をしてしまった事が。そんな力を自分が持っている事が怖くなった。そうルーは言った。管理局に入っても、その力を制御出来るかが不安だった。それが理由の一つ。

もう一つはメガー又さん。局員になったらせつかく目覚めたお母さんと一緒にいられる時間が少なくなる。それが嫌だった。ルーはそう言っつて僕へ視線を向けた。

「これが私の処分を受け入れた理由」

「そっか。でも、ならどうして？」

「……お母さんは歩けるようになったら局員として復帰するって、そう教えてもらったから。今までと違って、後方に回って定時で終わるようになるって言っつてくれたけど、それでも厳しいかもしれないうってフェイトさんに聞いて教えてもらったんだ」

ルーはキャロを通じてフェイトさんへ連絡し、つい三日前にその

答えを聞いたらしい。理由は局の抱える人材不足。メガー又さんはブランクがあるとはいえ、あのゼスト隊の前線魔導師。しかも、かなり優秀な召喚魔導師だ。

つまり、フエイトさんは本人の希望が通ったとしても、中々定時ではないだろうって告げたらしい。僕もそれを聞いて少し不安になった。普通の局員とは違って、確かに後方なら時間が不規則になる事は少ない。でも、それでも絶対じゃない。何か事件が起きればそうもいかないからだ。

「それでお母さんが復帰するなら、私も局に協力して一緒に働ければいいなって」

「そうだね。それなら寂しくないだろうし、いいと思う。でも、それを僕やキャロに意見を聞く理由は？」

「えっと……大きくなったらお母さんと一緒じゃなくて、エリオやキャロのお手伝いしたいと思ったんだ」

ルーはそう言うと、僕へ上目遣いで「どうかな？」って問いかけた。それに僕は即答を避けた。少し考えさせて欲しいと返して、そのまま思考に没頭する。ルーの処置を受け入れた理由も、それを緩和したい理由もよく分かる。

あの事件に関与した理由がメガー又さんを起こすためだったルー。そのメガー又さんと一緒にいられる時間を考えての判断なら、それはルーにとっては変わらない行動だ。でも、今回はそれでもどこかそれだけじゃない印象を受ける。

そう、メガー又さんのためだけじゃない。今回のルーの考えには、僕やキャロの事が含まれているんだ。その理由を考え、僕はもしかしたらと思って確かめる事にした。

「ね、ルー。局に協力しようって決めたのは……僕らの事もあるの？」

「……………うん」

僕の問いかけにルーは凄く戸惑いながらもすっかり頷いてくれた。その表情がどこか照れているように見えたのが、正直僕には意外だった。ルーはこういう事でも感情を見せてくれない子だったから。でも、きつとメガー又さんと日々がルーへ良い変化を与えてくれているんだろうと思って、僕は嬉しくなった。

だから、僕はルーへ素直な気持ちを伝える事にした。

僕はどんな判断でもルーが決めた事を応援するよ。もし局員になるのなら、いつか同僚になれると嬉しいかな。

……………ありがとう。エリオもキャロと同じ事を言ってくれるんだね。分かった。私、お母さんと相談してみる。

そう言っつてルーは優しく微笑んだ。そんなルーに僕も微笑んで頷いた。そこからは、ルーが焼いたというクッキーを食べながらお互いの事を話す事になった。僕は六課解散後の事をルーにも話した。話した後、ルーがそれで手助けしたいって思つかもと思って、慌ててこれを意識しなくていいからとは言った。でも、もう少し遅かったかも。ルーは苦笑しながらそんな事はないって言ったけど、何となくそれは「そんな風に思うなら言わないで欲しい」って言うてるような気がしたんだ。

ちなみにルーの話はここへ来てからの日々。メガー又さんと一緒

に料理を作った事や、こちらに来てからガリユーと一緒に行った場所の事。特にそのガリユーと一緒に行った崖からの眺めは凄かったらしく、ルーがどこか嬉しそうに話していたのが印象的だった。

そこへ一度行ってみようかなと思うと、そんな僕の気持ちを察したのかルーが少し窺うように連れて行こうかと言ってくれた。その申し出が嬉しくて、僕は是非って返して立ち上がる。

ルーもそれに嬉しそうな表情を見せてくれた。そしてルーが軽いお出かけの支度を始めたので、僕はそれを外で待つ事にした。外はいい天気。目の覚めるような青空が広がっていた。それを眺めているだけで、何となく疲れが抜けていく気がしてくるから不思議だ。

そんな事を思いながら空を眺めていると、いきなり視界が塞がれた。でも、それが何かが分かるから動揺はしない。僕はきつと苦笑している。そして、それをやった相手は笑っているはずだ。

だ〜れだ？

僕の友達のルーかな？

……それじゃ正解にしたくないかも。

え？　じゃ……大事な友達のルーならどう？

うん、それなら及第点。

そう言っつてルーが僕の顔から手を離す。僕は急に明るくなった視界に若干の眩しさを感じたけど、すぐに後ろへ顔を動かした。ルーは僕に少しだけ楽しそうに笑いかけてくれていた。

それはキャラ口とは違う微笑み。キャラ口が優しい微笑みなら、ルーのは穏やかな微笑みかな。どちらも共通しているのは見ていると、

僕の心が温かくなるのと鼓動が少し高鳴る事。

少し熱さを感じる顔のまま、僕はルーと目的の場所へと向かう。その途中話題にするのは、ルーが聞きたいと言ってきた海上更生施設に残るナンバーズの事。とはいえ、僕が知るのは精々がスバルさんから聞くぐらいしかない。

それでも、ルーは楽しそうに聞いてくれた。アギトの事も多少だけど聞いた事を伝えると、ルーはとても嬉しそうに笑っていた。そう、アギトは今はシグナムさんを通じて少しずつ八神家と親しくなっているんだ。それを僕はシグナムさんから教えてもらっている。

久々に聞くアギトの様子にルーは小さく驚いたり、微かに苦笑したりと忙しい。やっぱりゼストさんと一緒にいた分、アギトへの思い入れは強いんだな。そう思いながら、僕は精一杯アギトの事を話す。

でも、その話題も延々と続くはずもない。だけど、その不安も徒労に終わった。辿り着いたんだ。その目当ての場所へ。その景色は確かに凄いものだった。

「……ここが」

「そう。ここだよ」

僕の視界一面に広がるのは、綺麗な緑の絨毯とそれを所々飾る白い刺繍。そんな表現を見るとルーがしばらく呆然となった。でも、やがて地小さく笑ったかと思うと、僕へ意外と詩的な表現するんだねって苦笑された。

僕としては頑張ってみた結果だったんだけど、どうやら予想した反応とは違った反応が返ってきた。心から感心はされないとは思ってなかった。でも、少しぐらいはそう思われると考えてたんだ。

でもルーの反応は、意外に思ったのは思ったけどいい意味ではない。むしろ軽く笑われたから。まあ、僕もらしくないって思いながら言っただからそれを甘んじて受け入れる事にした。

「やっぱり僕にはこういうのは似合わないね」

「ううん、似合わないんじゃないってびつくりした。エリオ、そういう事言わない人だって思ってたから」

地面に座って、崖下の景色を見ながら話す僕ら。僕らの少し手前には、持ってきた紅茶とルーお手製のクッキーがある。それを楽しみながら、僕は目の前の絶景を眺めた。今は青空だけど、夕日になっても綺麗だろうな。

そんな事を言ったら、ルーが頷いてこんな事を教えてくれた。ルーはもうここで夜を明かした事もあるんだって。星空の下で見るとまた雰囲気が違うみたいで、一度僕にも見せてあげたいって言われた。

そう話すルーはとても輝いて見えた。あのJS事件の頃に出会った時とは別人に見えるようになっていた。毎日が楽しい。ルーはそう良く口にした。朝起きてメガヤさんがある。それだけでルーは嬉しいんだらうな。

僕はそんな事を思いながら、ルーの話に相槌を打つ。笑顔を浮かべるルーと話しているせいか、僕も次第に笑顔になっていく。クッキーもすぐになくなって、僕らはそれをキツカケに戻る事にした。

そんな時、ルーが立ち上がった僕へこんな事を言ってきた。

「あの、ね……エリオにお願いがあるんだけど」

「何？」

「えっと……手、繋いでもいい？」

「手を？ いいけど、どうして？」

僕が不思議に思っただけ理由を聞くと、ルーは俯いてそれに答えてくれた。あの見送りの日、僕とキャロがずっと手を繋いでいたのが羨ましく思えた。そうルーは教えてくれたんだ。その理由に僕は小さく笑って、嬉しく思いながらそっと手を差し出す事にした。

言葉じゃなくて、行動で答えを教えよう。そんな風に思っただけ。きっとそれでルーは僕の気持ちも分かってくれるはず。そんな事を考えてもいた。ルーは差し出された手に気付いて、顔を上げた。その顔は少し照れていたみたいで、赤くなっていたけど。

エリオの手、思ったより大きいね。

そうかな？ 自分じゃ分からないから。

私は好きだよ。エリオの手。私を助けてくれた、守る手だから……

……ありがとう、ルー。

何となくだけど、その瞬間僕とルーは手だけじゃなく心も繋がった気がした。知らず笑みを浮かべたんだろう僕へ、ルーも微笑みを返してくれた。そのまま僕らは言葉も無く来た道に戻った。そんな僕らを迎えてくれたメガー又さんは、繋いでいる手を見てどこか微笑ましく笑ってくれた。

それにむず痒いものを感じて僕は照れ笑い。ルーはそんな僕に楽しそうな笑みを見せて、繋いでいる手に少しだけ力を込めた。それが僕へ照れないでと言ってるように感じられて、少し苦笑する。

この後、僕はメガー又さんとルーが作ってくれた昼食を食べて、その食欲に驚かれた。どうもキャロから聞いていたのと、スバルさんで覚悟はしていたらしいけど、僕の年齢と体格からやっぱり多少軽く見ていたらしい。

僕は若干恥ずかしさを感じるも、二人が遠慮しないでと言ってくれたのに甘えてそのまま食べ続けた。最後には二人共感心したように笑ってくれたから、僕としてもほっとした。

「また来てね、エリオ君」

「はい、いつになるか分かりませんが、必ず来ます」

夕日が顔を出した頃、僕はルーの家を後にする事にした。メガー又さんが笑みを浮かべて僕へ手を振ってくれた。それが本当に友達の家に遊びに来たみたいなきもちがして、少し嬉しく思いながら僕も手を振り返して笑みを見せる。

「エリオ、今度はあそこで泊まりだから。用意してきてね」

「る、ルー！？ それはちょっと気が早くないかな!？」

「クスツ、言ってみただけ」

ルーの言葉に僕は息を吐いて、メガー又さんはクスクスと笑っている。最後まで僕を翻弄してくれるルー。少し印象が変わり始めた感じはあるけど、それが嫌なものじゃないから性質が悪い。

どんどん明るくなっていくんだ。それを否定出来るはずがない。ルーがもつと明るくなってくれたら、それはそれで楽しいし嬉しいから。でも、少し僕への対応を考えてくれると嬉しいんだけどなあ。そう思つてルーへそれらしい事を告げると、思いもかけない言葉が返ってきた。

エリオ才相手だからそうしてるんだけど……？

その意味が少し分からなかったけど、多分僕だけの特別対応つて事だろうつていうのは分かった。それなら光栄に思つて受けるべきかな。それにルーもどこか楽しそうだし、僕自身そんなルーが嫌いじゃない。

じゃあ……僕はそれを嬉しく思う事にするね。

そう返すとルーがどことなく嬉しそうに頷いてくれた。僕もそんな反応に頷きを返す。ただ、そんな僕らを見つめるメガー又さんの笑みが、少しだけからかつてくる時のスバルさんみたいに見えたのだけが気になつたけど。

こうして僕は六課隊舎へ戻る。キャラ口からアルフやエイミィさんの様子を教えてもらいながら、僕らは夕食を食べる。でも何故かルーとの話をすると、キャラ口が少し不満そうな表情に変わった。

でも、理由が分からなかったからキャラ口へ聞いたんだけど、それにキャラ口が珍しく教えてくれなかった。自分で考えて。そんな風に突き放されたんだから。その言葉がその日の僕とキャラ口の会話の締め括り。

手を繋いだ事が駄目だったのかな？

寝る前に思っただのはそんな事。それ以外にキャロが不機嫌になる理由が思い当たらなかったんだ。僕が今まで手を繋いでいたのはキャロだけ。そこに今日からルーも加わった。それがキャロとしては自分だけだった事がそうじゃなくなった事が少し嫌だったのかもしれない。

そう結論付け、僕は明日キャロへ謝る事にした。そして、ルーと手を繋ぐ事を認めてもらおう。キャロの気持ちを考えれば、きっとそう言えば許してくれるだろうから。

そんな風に考えながら、僕は目を閉じた。もうすぐ六課の日々が終わる。その後待っている日々を考え、僕は寂しく思う。でも、終わりが無い事はない。そう思い直して、僕は改めて残りの時間を大切にしようと誓う。

ルーがもし局員になるのなら、いつかキャロと三人で同じ場所働いてみたいな……

そんな事を想像しながら僕は眠りに落ちた。その日見た夢は、大きく変わった僕とキャロにルーが揃って陸士制服を着て笑ってるものだった……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

ルーテシア編。これで次回六課解散です。その後は個別エンドですかね。

ユートの違い微笑ましい雰囲気に出ればいいなと思います。結婚
までいかないのであしからず。

エリオの六課での日々が終わりを迎えたらしい

体中を疲労が襲う。目の前にはポロポロとなったのはさん達隊長陣の姿。視線を周囲へ動かせば同じぐらいか、それ以上にポロポロのスバルさん達の姿がある。

今日は六課の解散式。運用期間を過ぎたため、僕らは今日を最後にそれぞれの道を歩き出す事になる。そして、二次会が始まるまでの時間を使って催された最後のイベントとも言える事が、僕ら四人がなのはさん達四人と全力で戦う模擬戦だった。

二十分以上にもなった僕らフォワード四人と隊長陣四人との激しい模擬戦は、予想通りなのはさん達の勝利で幕となった。スバルさんもティアさんも、勿論僕やキャラも善戦した。結局は力及ばず敗れ去ったけど。

それでも僕らには悔しさよりも満足感があつた。憧れた人達が本当に全力でぶつかってくれた。それを相手に自分の想像以上の戦いが出来た。それが何よりの収穫だったんだ。

「負けちゃいましたね」

「だねえ」

「ま、それでもいいじゃない」

「はい。満足です」

「キユク」

僕の言葉にスバルさんが笑顔を返す。それに続けとティアさんも

笑みを浮かべて、キャロとフリードも嬉しそうな声を出す。本当にもう疲れて動けないぐらいだけど、達成感にも似た感慨が僕の中にもある。

今横になって目を閉じたら気持ちよく眠れるんじゃないか。そんな風にも思うけど、それは出来ない。と思うと、スバルさんが本当に寝そうになったのかティアさんに怒られていた。あ、キャロも少しビツクリしてる。

「まったく、この一年でよくここまで成長したものだ」

そんな風に周囲を眺めていると、いつの間にかシグナムさんが傍に立っていた。その顔はどこか嬉しそうに見える。

「先生達が優秀でしたから」

「こいつめ、言うようにもなった」

僕の言葉にシグナムさんはそう笑って軽く額を押してきた。それがどことなく嬉しくて、でもこれももう最後かもしれないと思うと寂しくて、僕は複雑な気持ちを抱いた。なのはさんはティアさんへ、フェイトさんはキャロへ、ヴィータさんはスバルさんへ言葉を掛けている。

はやてさんとギンガさんはそんな光景を眺めて、優しい表情を浮かべていた。きっとこの状況を見て何か思う事があるんだろうな。そんな風に誰にも笑顔があった。そして同時に寂しさも。

これではばらく会えなくなる。そんな気持ちがあつた。そんな風に思っている。僕だけじゃないんだ。そう思っただけで思っている。そんな僕の頭にシグナムさんが手を置いてきた。

「そんな顔をするな。これが今生の別れと言う訳でもない」

「そう、ですね」

「またその気になれば会えるだろう。その時は、今日よりも楽しませてくれる事を期待しているぞ」

そう言っただけでシグナムさんが離れていく。その言葉が実にらしくて、僕は一人小さく苦笑する。きっとヴィータさんやシャマル先生辺りが聞いたら呆れるだろう内容だったからだ。

ふと気付けばなのはさん達が一箇所に集まっている。スバルさん達も手招きしているし、はやてさんやギンガさんまでいる。何をやるつもりなんだろうと思いつつも、僕もそこへ合流する。

「みんなで記念撮影しよか。今日の日を忘れないために」

そこにいた全員が集まったのを見て、はやてさんがそう切り出した。それに誰も反論する事無く頷いた。思い出は記憶に残るけど、形にも残したい。そんな気持ちがあるんだ。そう思っただけで僕は笑顔を浮かべてカメラを見つめた。

これが六課最後の大きな思い出。僕の根幹を作ってくれた大事な部隊での最後の日。とても大きな優しさで温かさに包まれていた時間の終わり。後に僕は思う。この六課は学校だった。文字通り局員になったばかりの僕にとって、機動六課は学校のような役割を果たしていたんだと、後から気付いた。

二次会に向かうために動き出すのはさん達。それを一番後ろから見つめ、僕は一旦足を止めて振り返る。桜が綺麗に咲き、風に乗って花びらが舞っていた。

絶対に……この日の日は忘れない。

誰にでもなくそう呟いて、僕は少しだけその景色を見つめた。明日からは新しい場所で新しい日々が始まる。これが六課で見る最後の景色だと、そう自分へ言い聞かせるように。

ただ無言で風に揺られる花びらを眺める。これがもっと凄いと花吹雪と言っらしいけど、それを見てみたいなと思うぐらい綺麗な眺めだ。すると、そんな僕の背中へ声を掛ける人達がいた。

「どうしたのエリオ？」

「何よ？ 何か気になる事でもあった？」

「もうフェイトさん達は行っちゃったよ？」

「キユク？」

スバルさん達だった。どうも僕が止まっているから気になって戻ってきてくれたらしい。それに嬉しく思いながらも、僕はただ「何でもありません」とだけ返して歩き出す。

初めはどこかちぐはぐだった僕達四人。それが今は立派なチームとなった。一人じゃまだまだかもしれないけど、四人揃えば大抵の事には負けない。そう断言出来る程に。

二次会楽しみだなあ。どんな料理があるのかな？

つたく、あんたは食べる事しか頭にないの？

すみません、僕も同じ事考えてました……

エリオ君とスバルさんはよく食べるもんね。

キョクル。

最後だけど、会話にはそんな雰囲気は微塵もない。いつもと変わらないやり取りを交わし、僕は先に行くのはさん達目指して歩く。それがまるでこれからの自分達を表してるみたいに思え、僕は静かに拳を握る。

いつか追いついてみせる。そして絶対超えていくんだ。それがあの人達への一番の恩返しになるはず。それと同時に、今度は僕らが教えてもらった事を誰かに伝えていこう。そう改めて僕は誓う。

そんな僕らを少し離れた場所からなのはさん達が見つめて笑ってる。あ、ヴィータさんは呆れてるみたいだ。でも、その根底にある気持ちはきつと一緒になんだろう。

「みんな、早くおいで〜」

「置いてくよ〜?」

なのはさんとフェイトさんが揃って笑みを浮かべて呼びかけている。わざとだろうけど、両手を口の前に当てているのが少し子供みたいに見えた。その横では、ヴィータさんとシグナムさんが僕らを見て何かを言い合っている。良く聞こえないけど、ヴィータさんは軽く文句を言ってる気がする。

「ったく、さっさとしろよな」

「そう言うな。あいつらも名残惜しいのだろう」

「そうかもしれないね。でも、これが最後じゃないですから」

「せやな。おーい、はよせんとご飯抜きやからな」

ギンガさんやシグナムさんへ答えたはやてさんは、僕らへ不敵な表情でそう告げた。その言葉に僕は慌てて顔を見合わせる。そして見事に声が揃った。

今行きますっ！

その返事になのはさん達が楽しそうに笑い出して歩き出す。それに置いてかれまいと僕らは走る。でも、僕達はみんな笑っている。それを見たのか、なのはさん達も笑っているみたいだ。どこまでも変わらない雰囲気。それがそこにはあった……

「今日から配属されましたエリオ・モンディアル二等陸士です！
よろしく願います！」

自然保護隊配属初日。僕はキャラの後を受けて、隊員全員へ元気良く声を出して挨拶を行った。ここから僕にとっての本格的な局員の日々になる。そう思ってたのが伝わったのか、誰もが笑みを見せて歓迎してくれた。

それが凄く嬉しくて、僕はもう一度頭を下げた。感謝と喜びをそこに込めて。その後は、キャラがお世話になってたミラさんとタントさんを紹介してもらって、二人から何かあったら頼ってくれてい

いからと言ってもらえた。

至らない部分ばかりだろうけど、精一杯頑張ろう。そう思いながら、僕の自然保護隊での日々はスタートした。見回りや動物達の観測などを始めとする仕事の数々は、今までと違う事ばかりで戸惑いも多かった。

それでも、キャロやミラさん達が教えてくれたり、時には実際あった失敗を聞かせてくれて色々と楽しい事もあった。キャロが前もって言っていた通り、デスクワークも六課とは毛色が違っていて、そこもまた勉強になった。

「どうかな？ 自然保護隊のお仕事は」

「うん、色々と驚いたり戸惑ったりする事ばかりだけど、確かに遣り甲斐はあるよ。これも大事な仕事だって思えるしね」

夜になって疲れ果てた僕を見たキャロが、どこか不安そうに尋ねてきたのでそう返した。六課の仕事がどちらかと言えば荒事方面主体だったせいも、少し違和感はあるけど、それでもこの仕事も十分遣り甲斐はある。

こういう仕事も影ながら誰かの幸せを守っているだろうから。それに密猟は許していいものじゃない。どんな生き物にだって生きる権利がある。それをただ楽しむために奪う事は絶対してはいけない事だ。

「そっか。エリオ君がそう思ってくれて良かったよ。六課とは違う事ばかりだから」

「仕方ないよ。六課はロストロギア専門の部隊。ここは自然保護を専門にする部隊。違う方が普通なんだから」

「それはそうだけど、エリオ君は六課が初めての場所だったから。だからいきなり違い過ぎる事ばかりで困ってないかなって思ってる」

「……ありがと、キャラ。でも大丈夫だよ。色々な場所を知りたいし、学びたい。それは僕自身が望んでいる事なんだからね」

キャラが僕の事を心配してくれたのを理解して、出来るだけそれに対する感謝を込めて言葉を返す。それをキャラも分かったみたいで、それに笑顔を返してくれた。明かりは月と星だけ。そんな中、僕とキャラは少しだけ話をして、翌日に備えて眠る事にした。

スプールの夜は暗い。それはまさに闇と表現するのが的確だった。人口の光はほとんどなく、それが届かない場所は何も見えないような暗闇。一度入ったら二度と出て来れないんじゃないかって、そう思うぐらいの黒だ。

その闇を一度だけ見つめ、僕は改めて新しい場所に来たんだと実感する。ミッドでは見る事の出来ない景色がそれを強く認識させてくれた。ここでの日々はどういうものになるんだろう。僕はここでどんな事を学び、覚え、成長していけるのだろう。

そんな事を考えながら僕は割り当てられた部屋へ向かう。当然ながら、部屋には僕の少ない私物と備え付けのベッドしかない。それも今は目新しく見えるけど、次第に日常となるんだ。そう考え、僕は小さく頷く。

ここでの日々も絶対に忘れられないようにしよう。

自分へ誓うように告げ、僕はベッドへ向かう。寝るための格好へ着替えてそこへ横になると、途端に強烈な眠気が襲ってきた。慣れぬ場所や慣れぬ仕事で思ったよりも疲れたみたいだ。

エリオがスバルを意識したらしい

「色々ありがとうございます、エリオ、キャラ」

「いえ、僕らもお役に立てたなら良かったです」

「でも、今度は普通にお休みとして過ごしたいですけど」

僕は今、キャラとスバルさんと一緒にミッドの転送ポートに来ていた。あれからもう三年近くが経った。僕は自然保護隊での日々にも慣れ、キャラとコンビで密猟者を取り締まったり、動物達や植物の保全などの仕事に励んでいた。

そんな時、スバルさんから届いた一通のメール。それが今の状況を作り出すキツカケだった。ティアさんが執務官としてミッドを訪れ、スバルさんの家で一時的に過ごす事になったから遊びに来ないか。それを受けて僕らは休暇をもらって久しぶりのミッドを訪れたんだ。

でも、楽しい再会とはならなかった。ティアさんが追いかけていた事件。通称マリアージュ事件は僕らを巻き込む形でミッドを襲い、ティアさんだけでなくスバルさんもその最前線で戦う事になってしまったからだ。

その事件も何とか解決し、僕らはスプールスへ帰る事となった。ティアさんとはあまり話す事は出来なかったけど、それでも久しぶりの再会はある六課での日々を思い出させてくれた。だからそれだけで僕とキャラは満足した。

「あはは、そうだね。私もそう願うよ」

「今度はスバルさんがスプールスへ来てください。案内しますから」

「大自然で過ごす時間はきつと疲れを癒してくれますよ」

僕の提案にキャラコが笑顔で続く。それを聞いてスバルさんは嬉しそうに是非って返してくれた。それで会話を終えて、僕とキャラコはスバルさんへ手を振ってその場を後にしようとして動き出す。

そんな僕へスバルさんから念話が入る。その内容に僕は思わず振り返る事になった。その内容。それは、僕の特別救助隊への異動要請だったのだから。

【司令が今回の事でエリオ達の事を気に入ってね。で、つい話しちゃったんだ】

【僕の夢、ですね】

【……うん。それで、もしよければいつでも歓迎するって伝えておいてくれて。ごめんね、何か迷わせちゃうみたいになって】

【いいですよ。むしろ、司令からのお誘いなんて光栄です。今すぐは無理ですけど、一度保護隊のみんなと相談してみます。返事はそれからでもいいですよね？】

【勿論だよ！ あ、私が連絡役をするから決まったら教えて】

僕の問いかけに力強く断言するスバルさん。その気持ちが嬉しくて、僕はつい頬を緩めてしまう。それをキャラコに気付かれて不思議そうに尋ねられたので、簡単に説明をする。

それを聞いてどこか寂しそうだけど、それでも嬉しそうな笑みをキャラコは返してくれた。僕の夢をキャラコは知ってる。だから僕の背

中を押してくれるんだ。その気持ちが嬉しくて笑みを返して感謝を伝える。と、その時スバルさんから最後の念話が入ってきた。

最後になんだけど……ホントにありがとう。エリオがマリアーヂュを相手してくれたおかげで消防隊の被害が出なかったから。

その事にお礼はいらないですよ。僕は局員として、そして人として当然の事をしただけです。スバルさんやティアさん達と一緒にですから。

僕の答えにスバルさんが一瞬声を失ったみたいに息を呑んだ。だって僕はそう心から思っていたんだ。きっとあの時、相手をしたのが僕じゃなくてスバルさんでもティアさんでもキャラでも同じ事をしたって。

あの六課での日々で得た力は誰かを守るためにある。それを知っているからこそ、絶対あの状況で戦わないなんて選択肢は選ばない。自分の持てる力を全て使って立ち向かうはずだって。

それに対するスバルさんの返事を待たずして、僕とキャラは転送魔法でスプールスへと戻る。でも、その瞬間僕にはスバルさんの嬉しそうな声が聞こえた気がした……

それから半年後、僕は再びミッドにいた。身につけているのは茶色の陸士制服じゃなくて銀色の制服。そう、特別救助隊の物だ。あの後自然保護隊のみんなと相談し、僕は夢を叶えてこいと言う隊のみんなの応援を受けてここへ転属となった。

スバルさんからヴォルツ司令へ伝えられた僕の決断。それに伴って、正式に要請された特別救助隊への異動を自然保護隊が受け入れた事。周囲の人達に支えられて僕は新しい職場へ来る事が出来たんだ。

「おー、中々似合ってるね」

「そうですか？　僕は正直違和感しかないんですけど……」

「大丈夫だって。私だって最初はそうだったんだからさ。すぐにエリオも慣れるよ」

僕の声に不安が混ざっていたんだろうか。同じ格好のスバルさんは軽い笑みを浮かべてそう言うてくれた。これから僕はスバルさんによる案内兼施設の説明を受ける事になっている。

寮生活となるのは初めてじゃないので不安はないけど、スバルさん曰く「休日は大抵潰れる事を覚悟した方がいい」らしいのでそこだけが怖い。レスキューは激務。それを理解しているからこそ、体調管理をしっかりとしないといけないと肝に銘じておく事にする。

「でもエリオ……また背が伸びたんじゃない？」

「そうですね。この分ならスバルさんを追い抜くのも遠くないですよ」

「あ、生意気な。まだまだ私は負けないから」

「僕だってそう簡単に離されるつもりはありません」

お互いに笑顔で言い合いながら僕らは歩く。スバルさんの話に耳

を傾けながら、僕は改めて思う事があった。それは、スバルさんがシルバーと呼ばれる災害救助の部隊でエースと呼ばれている理由。

誰よりも災害を憎み、それによる人的被害を最小限或いは皆無にしたい。そんな強い気持ちを人一倍抱いているからだ。そこには、スバルさん自身が災害によって救助者となつた経験があるからだろうな。

なのはさんに救われた時抱いた気持ち。それを胸にスバルさんは今日まで歩いている。自分のように災害で苦しんだり困ったりする人を助けたい。その信念は今も揺らぐ事無くスバルさんを支えているんだな。

「と、こんなところで大体終わりかな。訓練自体は六課の頃に少し教わった事の延長だと思ってくれていいよ」

「でも質・量共にかなり違うんですよ？」

「ははは……まあ、ね。でも、エリオなら大丈夫だって信じてるから」

「はい。信頼に応えられるよう頑張ります、ナカジマ防災士長」

「うむ、期待してるぞ……なんちゃって」

僕が敬礼しながら告げた言葉にスバルさんも冗談交じりに敬礼を返してくれた。でも、最後におどけるのがらしい。それに僕が笑うとスバルさんも照れくさそうに笑った。

これが僕の特別救助隊での初日にして最初の思い出。この後、スバルさんと共に参加した訓練が僕の思っていた以上に厳しかった事も思い出となると思わなかったけど……

「エリオはこの次をどうするの？」

「えっ？」

その日、訓練を終えての夕食時にスバルさんが突然そんな事を尋ねてきた。その問いかけの意味が一瞬分からず、僕は手にしたフォークを止める。この次。それが何を指しているのか。それを考え、僕は納得するように頷いた。

きっとこの特別救助隊の後の進路を聞いているんだ。僕の夢は地上の教導隊を作る事。そのためには、僕自身が色々な事を身をもって知っておきたい。だからスバルさんは僕がここで終わると思っていないんだろうな。

「エリオの夢は地上の教導隊を設立する事でしょ？ だったら、こっただけで終わる訳ないなって」

「そう、ですね。出来れば武装隊にも行こうかと思ってます。幸い、向こうにはシグナムさんやヴァイスさんという伝手がありますし」

「あ、成程。シグナムさんならエリオの先生みたいな事もしてだし、ヴァイスさんは面倒見いいもんね」

僕の挙げた名前にスバルさんは納得とばかりに手を打った。でも、僕としては武装隊で経験する部署を終わりにしようと思っている。そこで経験を積んだ後、二十歳を目安に部隊設立へ動き出したいん

だ。

そのためには最終的にもっと出世しないといけない。はやてさんみたいなキャリアじゃなくても、スバルさんのお父さんであるゲンヤさんのように部隊長まで上がった人もいる。僕はその道を行こうと思っっているから。

その事も意識して、スバルさんへそれらを簡単に話すと思われた。まさか自分の父親を例に出されるとは思っただけでなかつた。苦笑までしたぐらいだ。でも、どこか誇らしそうだったのは、スバルさんがゲンヤさんをどう思っているかを僕へ教えてくれた。

「何か照れるな。エリオがお父さんを目指すなんてね」

「ナカジマ三佐は凄い人だと僕は思います。魔導師じゃないにも関わらず、自分の努力で部隊長にまでなつたんですから。それがどれだけ厳しい道だったかは想像出来ませぬし」

「エリオ……」

「いつか、魔力の有る無しに関係なく、誰もが平等に扱われる管理局になるといいですよね」

「……………うん」

僕の噛み締める言葉にスバルさんは静かに頷いてくれた。その顔はとても綺麗で、僕は思わず魅入ってしまった。あの六課の頃とは違う雰囲気。あの頃のなのはさん達に近い歳となつたせいなのか、大人の雰囲気スバルさんは出していたからだ。

綺麗だなんて、そう思つた瞬間僕の胸が高鳴つた。同時に顔が熱を持つたみたいに熱くなる。不味い。そう思つて僕は慌てて食事を

再開した。そんな僕をスバルさんが少し意外そうな表情を浮かべて見つめていた。

それが余計恥ずかしく思えて、僕は顔を伏せるように食べ続けた。だから、スバルさんがすぐに微笑んで優しい表情へ変わった事に僕は気付く事は出来なかった……

「……眠れない」

何度目か分からない寝返りを打って、僕は戸惑いながら起き上がった。原因は一つ。それは目を閉じる度にさっきのスバルさんの顔を思い出すから。あの綺麗な表情。大人の女性然とした雰囲気。それが僕の鼓動を早くする。

「……もしかして、僕はスバルさんを意識してる？」

そう僕は自分へ問いかける。そこで思い出すのは六課での日々。あのシューティングアーツを教えてもらった頃、スバルさんに身長のことを言われる度に気にしていたのはそれが悔しかったから。そう今まで僕は思っていた。

でも、本当にそうだろうか。どこかでスバルさんに子供扱いされていた事が嫌だったんじゃないか。そんな風に今は思う。それだけじゃない。スバルさんとの思い出は思い出し始めると沢山あった。

初めての連携技を決めて共に喜んだ事。見かけによらず大食いの僕を見て言葉を失うティアさんやキャロと違って、笑顔で負けない

よと言ってくれた事。なのはさんとの訓練で二人の即興で組んだ作戦が成功して勝利した事。

そこで僕は気付いた。浮かべる思い出は、全部僕もスバルさんも笑顔だつて。辛い事も悲しい事もあつたはずなのに、思い出せるのは何故か笑顔ばかり。そして、それは全部僕へ向けられている時ばかりを思い出しているって。

「僕は……スバルさんが好き……？」

そう呟いた瞬間、それを肯定するように顔が熱くなった。決して馬鹿な事を言つたと思つて恥ずかしくなつた訳じゃない。思い出してしまつたんだ。あのスバルさんの笑顔を。

それで僕は大まかに理解した。自分はスバルさんを女性として意識しているって。今までは多分年上のお姉さんぐらいにしか思つてなかつた。でも、僕も十四になつて少し大人になつた。スバルさんはもっと大人になつていた。その事がキツカケでそういう意識が僕に芽生えたんじゃないか。

「……………とりあえず寝よう」

自分を納得させるような答えを出し、明日の事を考えて僕は再びベッドへ戻る。でも、自覚したらしたで次々と色々な想像が浮かんでくる。まだ付き合うどころか告白さえしていないのだ。

それも自分に都合のいいものしかないのだから笑うしかない。でも、本当にそうならいいなと思う時点で、僕はホントにスバルさんを意識しているんだつて改めて実感する。そんな風に馬鹿げた想像をしている間に僕は知らず寝ていた。

翌朝スバルさんと会つた時、僕はいつも通りに接する事を心掛けた。自分の気持ちに気付かれて、スバルさんに変な距離を取られた

くないと思っただからだ。

スバルさんはそんな人じゃないと思う。でも、どこかでそうなったら嫌だと思っ自分が出た。その可能性を捨て切れず、関係を進展させるなんて事を出来るはずもなく、僕は今まで通りの振る舞いを意識する。

そんな風に過ごしていると、昼食時にスバルさんから真剣な顔でこう言われた。

エリオ、何か私に隠してるでしょ。

その声は僕を責めるようなものじゃなく、むしろ心配しているものだった。その気持ちに僕は嬉しくなると同時に困惑するしかない。確かに隠している事はある。でも、それを言う事は出来ない。

いつかは言い出したいけど、今はまだ早い。まだ自分でもはつきりスバルさんが好きと自信を持って言える訳じゃない。なので、こう答える事にした。

「実は、気になる人が出来たんです」

「気になる人？」

「はい。その……異性として」

「おおっ！ エリオもそういう相手が出来たんだ。年頃だねえ」

「……みたいです」

ニヤニヤ笑うスバルさんを見て、僕は言い出したらどうなるんだろうと考えた。でも、考えるだけで実行出来るはずもない。そんな

風に考える僕へスバルさんは自分の事とも知らず、どんな相手かを聞き出してくる。

正直鏡を見てくださいと言いたかった。何せその相手はスバルさん自身なんだから。それでも僕は自分が知る限りのスバルさんの印象を答えていった。それを聞きながらふんふんと頷いているスバルさんを見て、僕は段々鼓動が早くなるのを感じていた。

いつ気付かれるかと思いつながら、それでもスバルさんの事を本人へ話していく。それでもスバルさんは気付く様子もなく、所々小首を傾げたりしながら「私に似てるね」と言っるのが精々だった。

それを言われる度に、僕は心臓が止まるんじゃないかって思うぐらいの反応をしていると知らないで。そんな本人へ本人の事を教えるという奇妙な事を終えた僕は、スバルさんへこう問いかけた。

スバルさん、何かアドバイスをもらえませんか？

その問いかけにスバルさんは呆気に取られた顔を見せた。どうも自分を頼るとは思っていなかったらしい。でも、僕としては一番頼りになるアドバイザーだ。何せ本人なんだから。

スバルさんはやや考え込んだ後、ならばとこう切り出した。まずは相手と仲良くなる事。つまり、相手と共通の趣味を持つといいだろうって。それに僕は成程と頷いた。

「じゃ、スバルさん。お願いがあるんですが」

「何？」

「僕にまたシューティングアーツを教えてくださいませんか？ その人、格闘技得意な人なんです」

「そういえばフロントアタッカーをしてるって言うってたっけ。いいよ。確かにエリオがそっちも出来るなら、組み手相手として近付けるもんね」

僕の提案に笑顔で頷くスバルさん。正直、その言っている事そのものを今実行しているんですと思うも、僕は何も言わずお礼を言っただけでその場を終える。何故かこの日の昼食はこの上なく美味しく感じた……

夜の闇の中、僕はスバルさんと軽い組み手をしていた。六課の頃に教わった感覚を思い出すのに少し時間はかかったけど、体に染み付いていたおかげで何とかだった。

スバルさんはそんな僕に軽く不満そうな顔で、ちゃんと反復練習をしないと駄目だって告げた。それには僕も何も言い返せず、素直にすみませんと頭を下げるしかない。

「くっ！ ……うん、あの頃よりも強くなってるね」

「そうですか？ 僕にはあまり分かりませんっ！」

「おっと！ へへっ、本当だよ。体も大きくなったし、あの頃とは違って力もある。私も油断してたら負けちゃうかも」

僕の右足での蹴りを同じく右足で相殺して、スバルさんは一旦距離を取った。その表情は嬉しそうに笑っている。でも、それがすぐに凜々しいものへ変わった。それがとても綺麗に見えて、僕は思わ

ず意識を奪われる。

その瞬間、スバルさんが僕の視界から消えた。それで僕も意識を戻してスバルさんを捜そうとするけど、既に手遅れだった。スバルさんは身を低くして僕の懐へ入り込んでいて、その拳が丁度腹部を捉えようとしていたから。

「はっ！」

「ぐっ！」

咄嗟に両腕で防ぎ、僕はスバルさんへ即座に右足でローキックを放つ。それを避ける事もせず、スバルさんはその腕で防御したままお返しとばかりに僕の左足を払った。

それが見事に僕の体勢を崩したところで、とどめのようにスバルさんの拳が再度動く。何とかそれを防ごうとするけど、今の僕の状態じゃそれは厳しい。一か八かと思って諦めずに反撃を試みるも、結局スバルさんには通用するはずもなく勝負は僕の負けで終わった。

「油断したね、エリオ」

「……はい」

「駄目だよ、試合の最中に他所事考えるなんて。それとも私に見とれてたとか？」

「そうですね。確かにスバルさんは美人ですから見とれてました」

「あはは。いやあ、お世辞でもそう言われると嬉しいねえ。あ、でもそれを言い訳に使っちゃ駄目だよ」

エリオとスバルが約束を果たしたらしい

特別救助隊に転属して二ヶ月経ったある日の事。僕はスバルさんと宿舎前で用意していたタオルで汗を拭いていた。そんないつも光景。でも、今日は時間が少し早い。僕がナイトシフトだからだ。そんな組み手終了時、急にスバルさんが僕へ不思議そうな声で問いかけてきた。

「ね、エリオ。一つ聞きたいんだけどさ」

「はい？」

何だろうと思いつつ、僕は何気ない事だろうと判断して軽い声で返事をした。すると、スバルさんは何かを言おうと口を開いて……あれ？ 急に口を閉じて戸惑い始めた。まるで聞こうとした内容をどう伝えようと迷うみたいに。

「どうしたんです？」

「えっと……どう聞けばいいんだろ。その、さ……エリオの好きな人ってどこの所属？」

「あ、今は……その……」

どうしよう。スバルさんの問いかけは僕には答え難いものだ。別に救助隊にスバルさん以外の女性がいない訳じゃない。だけど、以前挙げた特徴が当てはまるのはスバルさんぐらいしかいない。

だからここですとは言えない。スバルさんとの関係は六課の頃と比べれば確かに少し近付いたと思う。それでもまだ男女の関係に

なれるかは僕には不安しかない。

「もしかして……結構所属が変わる人？」

「えっと……どう言えばいいのか」

「あー、いいよ。はやてさんもそんな感じだったって聞いた事あるし。そういう人なんだね」

スバルさんはどこか苦笑気味にそう言って歩き出す。どこことなくだけど納得しているように見えた。でも、何故か少しだけ表情が困惑してるようにも見えた気がした。どうしてだろうと思っただけど聞く事は出来なかった。それが何かあまり触れていいような事じゃないと思っただから。

離れていくスバルさんの背中を眺めていると、僕はふとした事が引っ掛かった。あの話をしてから一週間ぐらいはスバルさんから相手について色々聞かれる事があった。でも、最近はどう聞かれる事も無いし話題にされる事もなくなった。話せる事がないっていうのもあるんだと思う。思っただけど……

「もしかして……スバルさんは僕が意識してる事に気付いてる？」

そう考えるけど、それらしいところは思い出せない。確かに僕はあの日以来スバルさんに男として見られるような自分を目指して色々やっているけどあまり効果がないし。最近、そういうのは意識させようとして出来るものじゃなく自然に意識してもらっものだと思い始めていた。

「エリオどうしたの？ 汗流さないの？」

「あつ、今行きまゝす！」

気がつけばスバルさんはもう宿舎の入口にいた。一人僕を置いていくんじゃなくて、そこからこちらへ呼びかけてくれるのがスバルさんの優しさ。それを嬉しく思つて僕は返事すると同時に走り出す。

少し組み手のために早起きしたせいか眠い気もするけど構わない。仕事をし始めればそんなものは吹き飛ぶだろうし。こうして僕はスバルさんと宿舎へと入る。それがある意味での日常が変化した時だと僕は知らないままに……

「……もしかしてエリオの好きな人って」

そう呟いて私はため息を吐く。あの後、汗を流した私はエリオへお休みと挨拶を交わして別れた。今は家路を歩いている途中。そこでふと思ひ出すのは特別救助隊へ来てからのエリオの事。実は最近どこことなくおかしいとは思つてたんだ。

エリオが組み手を教えて欲しいって言い出した理由。最初、それが好きな人へ近付くためだつて聞いた時は思わなかつたけど、続けていく内に気付いた。エリオは休みの日さえ私との組み手を絶やした事はない。それつて変じゃないかつて。

（普通はその人に会いに行くか、関ろうとするよね）

でも、そんな事をエリオがしてるなんて話を聞いた事はないし、

見た事もない。そう、私はそれを知ってる。他ならない”私自身”が。だってエリオとは自分の休み以外毎日会って話をしてるんだもん。

そこから考えれば、エリオの好きな相手が分かってくる。私に似てると思う特徴や性格の存在。近づくにはシューティングアーツが出来た方がいい。だからあんな事を聞いたんだけど、見事に私を見てしどろもどろになってたなあ。と、そこまで思い出して私はもう一度ため息。

どうしてすぐ気付かなかったんだろ。

そう呟いて私は歩いてきた道を振り返る。遠くに見える隊舎の明かり。今日はエリオ、ナイトシフトだっけ。それでも組み手をやりたいからって睡眠時間減らしたんだよね。

そこまでして私と一緒に居たいのかな？ どうして私なんか好きになったんだろ？ そんな事を考えて私は苦笑い。本人に確かめてもないのに決め付けるのはどうだろうって思ったんだ。

「でもまだ確定した訳じゃないよね。だけど……もしホントに私の事だとしたら……どうしたらいいんだろう？」

それに答える声は当然だけどない。私はそのまま空を見上げた。そこには綺麗な星空がある。イクスと見た空。今は静かに聖王教会の一室で眠っている私の大事な友達。その少女へ心の中で告げる。

どうしよっかイクス。私、もしかしたら年下の子に想われてるかもしれない。

言いながら私は気付く。それは少しだけ顔が緩んでいる事。誰かが自分の事を好きでいてくれる。それはどんな事であれ嬉しい事だ。

しかも、それがあのJ S事件を共に経験し、一年間苦楽を共にした相手となれば余計にそう感じるし。

それに最近のエリオは背も伸びたせいか、ちょっとカッコイイと思う時もない訳じゃない。六課でのコンビネーション訓練のおかげもあって、今は二人で災害現場を駆け抜ける事も増えてきたしね。

確かめてみようかな。でも、それで違ったら気まずいよね。そんな風に考えながら私は家路を歩く。やっぱり確信が持てるまでは変な事は考えないようにしよう。エリオの性格なら、好きな相手へ絶対自分から告白するだろうし。

そう結論を出して私は一人頷く。この時、私は意図的に考えないようにしてたんだと思う。エリオが想いを伝えてきたとしたら、私はどう答えるのかを……

今、僕はかなり緊張している。原因は一つ。スバルさんへある提案をするためだ。それはあの六課の時の約束。二人で食べ歩きをしようとのもの。次の休みが偶然合った事を利用して、そんな事を持ちかけようと思ったんだ。

「あの、スバルさん」

「ん？」

「今度の休み、一緒ですね」

「あー、そうそう。珍しいよね。私とエリオが休日一緒ってさ」

そう、珍しいんだ。前線で動く僕とスバルさん。だから結構休みはバラバラになる。何かあっても前線役に困らないためにだ。出来るだけ自然にと思いながら、僕はいよいよ本題へと入る。

「それで……ですね？　もしよければ僕と一緒に出かけませんか？」

「エリオと？」

「あ、あの、六課の頃に約束した事……覚えてますか？」

「えっと……あつ！　もしかして食べ歩きに行こうってやつ？」

「はいっ！　それです、それ！」

覚えててくれた。それが一番嬉しかった。そう思って僕が喜んでるとスバルさんが苦笑してた。はしゃぎすぎだぞって、そう少しだけお姉さん口調で注意される。内心で少しドキっとしたのは秘密。それでスバルさんの返事を待つ。受けてくれるといいんだけど。そう思いながらも表面上は出来るだけ平静を装うのを忘れない。そんな僕を見てスバルさんは少し考えていたけど、その表情がずっと曇っているのが気になる。

「実はさ、その日予定が……」

「そう、ですか……」

嫌な予感的中。スバルさんの口から返ってきたのは一番聞きたくなかった類の言葉。それになるべく落ち込みすぎないようにと思っ
て声を出したんだけど、やっぱり沈むのは避けられなかった。

肩を落とさないように気をつけながら、苦笑してスバルさんへ言葉を返そう。あまり気にしないでくださいって、そう言うために。でないとスバルさんが気に病んでしまいかもしれないし。

「ないんだよね」

「あまり気に……えっ？」

「てへっ、ごめんね。一回こういう引っ掛け言ってみたかったんだ」

舌を出して可愛く謝り、申し訳なさそうに話すスバルさん。僕はそれを見ながら冷静に状況を理解しようとしていた。つまり、スバルさんは予定がない。それは要するに暇って事で、僕の誘いを受けてくれるって事？

「じゃ、じゃあ……」

「うん。一緒に行こ！ 食べ歩き！」

笑顔で僕の聞いたかった答えを告げるスバルさん。僕も思わずそれに嬉しくなって大声で返事をしてしまっただけ苦笑された。こうして僕は遂にスバルさんとの初デートをする事になった。この日一日僕はずっと上機嫌で何をするにも上の空。早く休みが来ないかなと考える事しか出来なかったんだ。

遂に迎えたデート当日。僕は緊急呼び出しがない事を必死に願

ながら待ち合わせの場所へ来ていた。格好はヴァイスさんに助言をもらって決めた。意識してると思われない程度に決めた服装なんて条件のお願いを、ヴァイスさんは文句を言いつつ受けてくれた。

でも、その代金として僕のスバルさんへの気持ちを洗いざらい喋る事になったけど。それを聞いたヴァイスさんはからかいながらも最後には励ますように上手くいくといいなって言ってくれたのが凄く嬉しかった。

「そろそろ時間だけど、スバルさんはまだかな？」

「エリオ！」

スバルさんを探そうと周囲を見渡そうとして、急に後ろから声を掛けられた。それがスバルさんのものと分かって、僕は笑顔で振り返って 言葉を失った。

「どうかな？ ちょっとだけ大人らしい格好を試してみたんだけど」

そう言って笑うスバルさんは普段の動き易い格好じゃなかった。珍しくと言ったら失礼かもしれないけど、白いロングスカートに淡い水色のブラウスというもの。確かに落ち着いた感じを受ける。何よりも凄く綺麗だった。

その髪が風に流れるのを僕はただ見つめるしか出来ない。どうもスバルさんは僕が何も言わないのを好意的に受け取ってくれたようで、照れくさそうに笑って咳払いを一つ。

「あのさエリオ。多分いい意味での沈黙だとは思っただけど」

「は、はい」

「私も女だからさ……出来れば言葉にして欲しいかなあって思った
り」

「あつ……その、すみません！　あまりにも綺麗だったから……つい見とれてました」

「そっか。こうすれば美人に見えるんだ、私。ありがと、エリオ。結構自信ついたよ」

そう言うとスバルさんは僕を促すように歩き出した。その後を追うように僕も歩き、スバルさんの横へ並ぶ。そこで話すのは、当然だけどお店はどこにするかという事。以前もミッド湾岸部で食べ歩きをしようとした僕達。だから今度はあの時行けなかった所にしようとして決めて、二人でよさそうな場所を選ぶ事にした。

参考にするのは他の人から聞いた話や僕が手にしたグルメマップ。このために待ち合わせ前に買ってきたんだ。それを見ながら二人で意見を出し合う。一つのお店で多く食べるんじゃない、あちこちで色々な物を食べる事にし、まずは近場のお店からとなった。

その理由は多くのお店に行ってみたいからという事と、もう一つ。それはスバルさんの格好が原因。

「でもスバルさん。その格好で大食いはしないでくださいね」

「うっ……だ、駄目かなあ？」

「駄目とは言いませんけど、正直周囲の目が……」

「あー……確かに凄いだろっねえ。仕方ない。なら、沢山のお店を回ろう。それに二人前ぐらいならそこまで思われないよね？　ね？」

「大盛りじゃ意味ないですよ？」

「えーっ！ それぐらいはいいじゃん！」

「そんな事言われても……常識で考えてください」

「私にはそれが常識なのに……」

そんな風に会話しながら僕達は歩く。格好は普段と違うけど、こうして話しているとやっぱりスバルさんはスバルさんだ。それがどこか嬉しくて、でもどこか少し残念で。そんな事を思いながら僕はスバルさんと話す。

時折道行く人が僕とスバルさんを見て意外そうな表情を見せる。それに気付く度に今僕らがどう思われてるんだろうと気になる。同僚？ 友人？ 姉弟？ それとも……

「私達、どう思われてるのかな？」

「っ？！」

そんな時、スバルさんが周囲の視線を感じて何気なく呟いた言葉が僕の鼓動を速くする。まるで僕の考えを見抜かれたみたいで心音がうるさいくらいだ。

「私がこんな格好だからかなあ？ いつもみたいな格好だとそこまです感じないんだろうけどね」

そうやってあははと軽く笑うスバルさん。それに僕はそうかもしれませんねと返すのが精一杯だった。正直、恋人と思われてるかも

って言いたかった。それに対しての反応を見て、スバルさんが僕をどう思ってるかを推察したかったから。

でも、そんな余裕は僕にはない。すると、スバルさんが足を止めた。それに気付いて僕も足を止める。スバルさんは僕を黙って見つめて何かを納得するみたいに頷いた。

「それとエリオの格好がカッコイイのと成長したからだね。背が伸びたのは大きいなあ。もうすぐ完全に並ばれそうだもん」

「そうですね。並んだらすぐに追い越してみせます」

「……………うん、楽しみにしてる。前はまだ少し余裕があったけど、今はもうそうなる気がしないから」

何故か僕の答えに噛み締めるように頷いて、スバルさんはどこか嬉しそうに微笑んだ。優しく柔らかい笑顔。それに僕は思わず魅入る。そんな僕へスバルさんは静かに近付くとある方向を指差した。

「エリオ、あれ見て。一日限定百個だって」

「えっ……………?」

そこには二本の幟が立てられていて、一本はスバルさんの言った事が書いてあり、残り一本にもミッド文字で”激旨！ 海鮮饅頭！”と書いてあった。あ、スバルさんの目が輝いている。

「行くよ、エリオ！ 急がないと無くなっちゃっうー!」

「ちょ、ちよっとスバルさん!」

「すいませ〜んっ！ 海鮮饅頭二つくださ〜いっ！！」

僕が引き止める間も無く、スバルさんはスカートそのまま走り出す。念のためか転ばないように両手で裾を掴んでいるからその速度はいつもよりも遅いけど、それでも十分速い。

周囲がそんなスバルさんに視線を向ける中、僕はそんな行動理由が実にらしくて苦笑するしかない。こんな風に僕とスバルさんの食べ歩きは始まったのだった……

「あ、これ美味しいかも」

「僕の方も美味しいです。この辛さ、ちょっと癖になりそう」

「分かる分かる。そういうのって、たまに凄く食べたくなる時あるよね〜」

僕の手元にあるのは、真っ赤なスープに入った白い麺が入った小さな容器。スバルさんの方は白いスープに緑の麺が入った小さな容器。共に独特の料理を出す事で有名な店の店頭で売っている物だ。

饅頭を食べながら歩いて向かったお店は、時間もまだお昼前な事もありませんが買える事が出来た。スバルさんがどちらを選ぶかで迷っていたので、僕が残った一つを頼む事にし、早速とばかりに用意してあった店先のテーブルに座ってスープを飲んだ僕達の第一声がそれだった。

確かに辛いんだけどそれが嫌な辛さじゃない。舌に残らないんだ。

一瞬だけ痺れるような感覚を感じるけど、飲み込むと同時にそれが消える。そんな中にもちゃんと美味しいって思える旨味があるから凄い。

麺はそのスープが程よく絡んでいる。お米から作っている麺らしくて、ちよつと味とかが普通の物と違うのもいい。人によっては好き嫌いが別れる物だけど、僕は好きな部類に入るみたいだ。

「いやあ、私もこの辺りは結構詳しくなつたつもりだったけど、まだまだ知らない物があるんだね」

「仕方ないんじゃないですか？ このお店が出来たのつい最近らしいですし」

そう言つて僕は手にした容器を傍に置いてグルメマップを見せた。それを覗き込むスバルさん。口にフォークを咥えてるところがちよつと可愛いかも。そう思っているスバルさんの胸元が視界に入る。見ないようにしないといけないと思うけど、ここで急に目を閉じたり顔を逸らすのも少し変だし。そう、これは不自然さを感じさせないための行動だ。決して邪な気持ちじゃない。

そんな風に自分へ言い訳し、僕は出来るだけ視線をグルメマップへと向ける。でも、その視界の端にどうしてもスバルさんの胸元が入ってしまうのは仕方ないと思う事にした。

「……本当だ。じゃ、今度アルトに教えてあげよう」

「という事は自動的にギンガさんへも伝わりますね」

「あはは、そうだね。二人揃って食べに来たりするかも」

そう言つてスバルさんは食べるのを再開した。僕も食べ始めるんだけど、顔がやや熱いように感じるのは決して気のせいじゃない。スバルさんつて時々今みたいに無防備な時があるから困るんだよね。もう少し女性らしくなつて欲しいとも思うけど、中々そう言い出す事は出来ない。色々理由はあるけど、一番は僕が変に意識し過ぎてるだけだつて事がある。

「ね、エリオ。そつち少し頂戴」

「いいですよ。じゃ、僕もそつちもらつていいですか？」

「いいよ。じゃあ交換ね」

笑顔で容器を差し出してくるスバルさん。こういうのも別にそこまで問題になる行為じゃないのかもしれない。でも、どうしても僕には刺激が強い気がする。六課の頃は特に思わなかったけど、今は恋人みたいだなつて思つてしまう自分がいるからだ。

スバルさんがスープを飲んで少しだけ辛いつて顔をする。でも、すぐに笑みを浮かべた。

「これも美味しいね。元気出そう」

「こつちは……………落ち着く味です。頬が緩む感じがします」

「あー、そうかもね。どれどれ、麺はどんな感じかな？」

楽しそうに麺をフォークですくうスバルさん。そんな様子がどこか格好に合わず、僕は苦笑する。それに気付いてスバルさんがどうかしたと問いかけるけど、僕はそれに素直には答えない。

「いえ、全部食べられそうだなって思ったんです」

「そんな事しないよお。……ま、してもいいならするけどね」

その答えに僕は笑うしかない。スバルさんも楽しそうに笑う。こんな雰囲気は六課の頃もあった。でも、やっぱりどこか違う気がするのは僕だけなんだろうか。もしスバルさんも同じように感じてるといいなと思いつながら、僕も麺をすする。麺からは少しだけ野菜のものだろう苦味がした。

日も暮れ、辺りが夕日に染まる。その光を反射して海面がキラキラと輝いている。僕とスバルさんは丁度夕食をどうするか相談が終わった事もあり、無言で目の前の景色をベンチに座って眺めていた。

あの後もあちこち食べ歩きながら、折角の休みをただ食べるだけではなんだからと思った僕は、昼食時の混雑を少し外す事も兼ねて書店や服飾店を見て回る事を提案した。

それにスバルさんも同意してくれて、僕達は本当にデートらしい時間を過ごす事になった。スバルさんは、普段あまり書店に行かないと苦笑したり、服を僕に選ばせて反応を見て楽しんだりと色々あった。

そんな風に時間を過ごし、後は夕食を一緒に食べたなら今日は解散だ。不安だった緊急呼び出しもなく、それを僕が言うとスバルさんも同じ事を思っていたらしく、苦笑して無くて良かったと同意して

くれた。

「エリオ」

「はい？」

「まだ言うのは少し早いけど、今日は楽しかったよ」

「それは僕もです。凄く……楽しかったですから」

お互いに視線を前に向けたまま告げ合う僕達。そこからまたしばらく言葉はない。何となくだけど、僕だけじゃなくスバルさんもこの時間が終わる事が嫌だと思っっているような気がする。でも、それは当然なんだ。誰だって楽しい時間が続く方がいいに決まってる。

決して僕と二人でいたいと思ってる訳じゃない。そう、分かっている。それでも少しくらいそんな風に思ってもいいよね？ スバルさんが僕の事を少しだけでも異性として意識してくれてるって自惚れても。

静かに風が流れて、僕とスバルさんを撫でていく。微かな潮の香りを残して。

「……そろそろ行こうか」

「……はい」

スバルさんの声に応じて僕はベンチから立ち上がる。そして動き出すんだけど、何故かスバルさんがその場から動かない。どうしたんだろうと思って視線を動かすと、スバルさんはある場所を見つめている事に気付いた。

そこは六課があつた場所。僕とスバルさんが出会つた場所。忘れられない時間を過ごした場所。今はもう無いそれを思い出しているんだろうか。スバルさんは何も言わずにそこを見つめていた。

「もうあれから四年以上経つたんだね」

「そうですね。解散から数えてもそれぐらいになります」

「……今の私をあの頃の私が見たらどう思つかな？」

スバルさんはそう言いながら僕へ振り向いた。その表情はどこか憂いを秘めているようにも見えて、その儂さに僕は一瞬だけ声を失う。でも、すぐに気を取り直して思つた事を告げた。

「きつと安心すると思います」

「安心？」

「はい。変わつて欲しいところは変わつていて、変わつて欲しくないところは変わつていないから」

「変わつて欲しいところと変わつて欲しくないところ……か」

僕の言葉にスバルさんはそう呟くと、もう一度だけ六課のあつた場所を見て頷いた。それがまるで昔の自分へ頷いているように見えたのは、きつと気のせいじゃないはず。だって、その後僕へ振り向いてくれたスバルさんはとても嬉しそうな笑顔だったから。

「エリオ、ありがとう。今の言葉、凄く嬉しかったよ」

「スバルさん……」

「えへへ、何か照れくさい感じになっちゃったね」

夕焼けの中、スバルさんが笑顔を浮かべている。そしてその髪が風になびいた。それが実に絵になっていて、僕は思わず見惚れて、スバルさんにかかわれてこの雰囲気が終わった。そんな風にどこか雰囲気が作り切れないところが実に僕らしいと思う。本当に苦笑するしかないよ。

僕がやや情けないと感じて歩く後ろをスバルさんがゆっくりついてくる。だからだろうな。僕には聞こえなかった。スバルさんが何か呟いた言葉は。

変わって欲しいところと欲しくないところ、か……。エリオ、そんな風に私の事見てたんだね。

そして、夕食を食べ終えた頃には辺りは完全に夜の闇に包まれていた。僕はスバルさんを送り届けるため、その家まで同行する事にした。スバルさんはそこまでしなくても言ったけど、これは男としての当然の役目ですと言うと苦笑しながら納得してくれた。

僕がそんな事を言い出したのには理由がある。それはスバルさんの状態から分かってもらえると思う。足取りは少しフラフラしているし、目は今にも眠りそうな感じで、とどめに顔が赤いときている。

「エリオは真面目だねえ。少しぐらい飲めばいいのに……」

「スバルさんが飲んだんです。僕まで酔ってたらもしもの時大変ですから」

そう、スバルさんがお酒を飲んだから。しかも強めのカクテルだったらしく、それを結構飲んだせいか普段なら笑わないような事で笑うし、大胆になったのか僕の手をしっかりと掴んでいる事からもそれが分かる。

「それはそうだけども……」

「だから、今度があれば僕だけが飲ませてもらいますね。それでいいんです」

僕がそう言うときスバルさんがキョトンとした顔をする。そして僕の言った言葉の意味を理解したのか、楽しそうに笑い出した。じゃあまた休みを合わせないとなんて言いながら、スバルさんは僕の手をしっかりと握る。

その温もりに僕はさっきから心臓の鼓動が早鐘のように響いていた。隣には笑顔のスバルさん。気分は本当なら最高だけど、これがお酒のおかげだという事も理解している。なので正直複雑な部分もあるんだ。

次はどこへ行くのかなんて言うてくれるスバルさんに僕は相槌を返し、心から願う。いつかこれがお酒の力を借りなくても過ごせるようにと。きっとスバルさんはこの道での出来事を覚えていられないだろうと思って。

「ね、エリオ」

「はい、何ですか？」

だから気付けなかった。スバルさんがどうしてそんなお酒を飲んだのか。真面目なスバルさんが休みとはいえ、一番危ない時間となる夜に酔うような事をしたのかを。

エリオの好きな人って……もしかして私だったりする？

その問いかけに僕は酔っ払ってるからだろうと思った。だからこそどこか冗談のつもりで答えた。

そうですね。僕はスバルさんが好きです。

その言葉をすんなり言えたのは、きっとスバルさんが覚えてないだろうと考えてたからだ。でも、この時スバルさんの顔を見れなかったのは恥ずかしさもあつたんだと思う。

「……ホントにい？」

「本当です。こんな嘔吐いてどうするんですか？」

「ん〜……酔っ払ってるからって、私をからかって反応を見るためとかあ？」

「しませんよ。僕にはそんな行動取れません」

「そっかあ……………じゃ、エリオは本当に私が好きなんだね？」

「何度も言わせないください。これでも恥ずかしいんです」

「あはは、ごめん。もう聞かないから許してよ〜」

そう言つてスバルさんが鼻歌混じりに歩き出す。本当に酔つ払つてるよ。そう思つて僕は苦笑するしかない。この後、僕はスバルさんを部屋の前まで送り届け、宿舎まで戻る事になつただけ……少しだけ気になる事があつた。

でもスバルさん、あんなに飲んだのに意外としつかり受け答えしてた気がする……

その瞬間、ある予想が僕の中に生まれる。でもそんな事はないはずと僕は自分を納得させた。顔は赤かつたし、足取りだつて怪しかつたじゃないか。受け答えはしてたけど、きつとはつきり覚えてないはず。酔つ払つてもそういう事が出来る人はいるつていうし。

そんな風に強引に自分を安心させて僕は歩く。実は僕はある事を忘れていたんだ。スバルさんの体の作りは少し僕と違つて。そのせいで次の日から僕達の関係がおかしくなるとは思いもしなかつた。スバルさんが僕との会話をしつかり記憶していたなんて……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

スバルルート二話目。次回でスバルは終わる予定。その後はキャラルートです。

なのはエンドであつたヴィータとの話はないのかと気になっている方がいるようですが、現在は考えていません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032u/>

なのはに恋愛要素があったら？

2011年11月3日08時16分発行